

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

慣用句の産出と理解に関わる諸要因

—日本語学習者と日本語母語話者の比較を通じて—

陳 雯

2018 年度

第1章 序論.....	1
1.1 研究の背景と目的.....	1
1.1.1 研究背景.....	1
1.1.2 本論文の目的.....	4
1.2 各章の概要と本論文の構成.....	6
第2章 先行研究の概観と本論文の位置付け.....	10
2.1 慣用句の定義.....	10
2.1.1 日本語慣用句.....	10
2.1.2 中国語慣用句.....	12
2.1.3 本論文における慣用句の定義.....	14
2.2 慣用句の認知処理に影響する諸要因.....	15
2.2.1 透明度と構成性.....	15
2.2.1.1 透明度.....	15
2.2.1.2 構成性.....	17
2.2.1.3 透明度と構成性の関係.....	19
2.2.2 親密度.....	21
2.2.3 予測性.....	22
2.2.4 字義性.....	23
2.3 L1 慣用句の認知処理.....	24
2.3.1 児童を含めた発達研究.....	24
2.3.2 L1 成人を対象とする研究.....	25
2.3.3 Superlemma Model.....	28
2.4 L2 慣用句の認知処理.....	30
2.4.1 L2 慣用句の認知処理に影響する要因.....	30
2.4.2 L1・L2 慣用句の認知処理の比較.....	33
2.5 問題提起と本論文の位置付け.....	34
第3章 L1 慣用句と L2 慣用句の類似度判断基準について	
一 驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係を中心に 一.....	39

3.1	はじめに.....	39
3.2	背景と目的.....	39
3.2.1	Irujo (1993) と Laufer (2000) における類似度の分類.....	39
3.2.2	慣用句の対照研究.....	42
3.2.3	本章の目的.....	43
3.3	研究方法.....	43
3.3.1	分析対象.....	43
3.3.2	分析方法.....	44
3.4	驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係.....	45
3.4.1	共通の意味.....	45
3.4.2	<プラス評価>と<マイナス評価>における対応関係.....	46
3.4.3	<内面性>と<外面性>における対応関係.....	49
3.4.4	<表出性>における対応関係.....	51
3.5	考察.....	53
3.6	まとめと今後の課題.....	55
第4章 慣用句の透明度判断における親密度の影響		
— 母語話者と学習者の比較から —.....		
4.1	はじめに.....	56
4.2	先行研究と本章の仮説.....	56
4.2.1	Nippold & Rudzinski (1993) と Nippold & Taylor (2002) .....	56
4.2.2	Keysar & Bly (1995) .....	58
4.2.3	本章の目的と仮説.....	59
4.3	研究方法.....	60
4.3.1	調査協力者.....	60
4.3.2	調査材料.....	61
4.3.2.1	慣用句の選出.....	61
4.3.2.2	意味の定義.....	61
4.3.2.3	アンケート.....	62
4.3.3	調査手順.....	63

4.4	結果 .....	64
4.5	考察 .....	66
4.6	まとめと今後の課題.....	69
第5章 第二言語慣用句の産出に影響する要因について		
— 類似度・親密度・透明度を中心に — .....		
		71
5.1	背景と目的.....	71
5.2	先行研究とその問題点.....	72
5.3	実験1 .....	78
5.3.1	本実験の目的と仮説.....	78
5.3.2	協力者 .....	80
5.3.3	調査材料 .....	80
5.3.3.1	慣用句 .....	80
5.3.3.2	産出テスト .....	82
5.3.3.3	親密度調査 .....	84
5.3.4	手順 .....	84
5.3.5	結果 .....	85
5.3.6	考察 .....	89
5.4	実験2 .....	91
5.4.1	本実験の目的と仮説.....	91
5.4.2	協力者 .....	94
5.4.3	調査材料 .....	94
5.4.3.1	慣用句 .....	94
5.4.3.2	産出テスト .....	94
5.4.3.3	親密度調査 .....	95
5.4.3.4	透明度調査 .....	96
5.4.4	手順 .....	96
5.4.5	結果 .....	97
5.4.6	考察 .....	101
5.5	総合考察.....	102

5.6	まとめと今後の課題.....	107
第6章 L1・L2 慣用句の理解に影響する要因について		
	－ 親密度・透明度を中心に －.....	109
6.1	はじめに.....	109
6.2	慣用句の理解に関する研究.....	109
6.2.1	L1 慣用句.....	109
6.2.2	L2 慣用句.....	110
6.2.3	問題点.....	111
6.3	目的と仮説.....	113
6.4	研究方法.....	117
6.4.1	事前調査.....	118
6.4.1.1	親密度調査.....	118
6.4.1.2	透明度調査.....	119
6.4.1.3	動詞の使用頻度と表現の長さ.....	120
6.4.1.4	予測性調査.....	121
6.4.1.5	字義性調査.....	122
6.4.1.6	動詞の反応時間.....	123
6.4.1.7	ペアとなる一般表現の親密度.....	124
6.4.1.8	事前解析.....	124
6.4.2	本実験.....	126
6.4.2.1	協力者.....	126
6.4.2.2	項目.....	126
6.4.2.3	デザイン.....	126
6.4.2.4	手順.....	127
6.5	結果.....	128
6.5.1	データの確認.....	128
6.5.2	日本語母語話者の解析.....	130
6.5.2.1	解析方法に関する検討.....	130
6.5.2.2	慣用句の解析.....	136

6.5.3 日本語学習者の解析.....	137
6.6 考察.....	138
6.7 まとめと今後の課題.....	147
第7章 本論文のまとめと今後の課題.....	148
7.1 本論文のまとめ.....	148
7.2 本論文の意義と位置付け.....	156
7.3 今後の課題.....	157
参考文献.....	160
【付録Ⅰ 第4章—調査の説明文】.....	167
【付録Ⅱ 第4章—調査の項目】.....	168
【付録Ⅲ 第4章の結果—学習者と母語話者による親密度判断及び透明度判断の平均】.....	183
【付録Ⅳ 第5章—実験1における日中慣用句の分類】.....	185
【付録Ⅴ 第5章—実験1に使用した説明文】.....	186
【付録Ⅵ 第5章—実験2に使用した説明文】.....	187
【付録Ⅶ 第6章—事前調査の説明文】.....	189
【付録Ⅷ 第6章—本実験に使用された項目】.....	193
【付録Ⅸ 第6章—本実験に使用された説明文と実験中の画面表示】.....	197
【各章と既発表論文, 学会発表との関係】.....	206

# 第1章 序論

## 1.1 研究の背景と目的

### 1.1.1 研究背景

慣用句とは、「二つ以上の単語が一続きに、または相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表す」連語表現である（宮地 1985:62）。例えば、「足を引っ張る」という表現の文字通りの意味は「人の下肢を自分のほうへ引き寄せる」であるが、全体としては「人の邪魔をする」という慣用的な意味を表す。慣用句は個々の構成要素の意味から句全体の意味を推測しにくいという点において特徴的であるため、心内辞書（*mental lexicon*）における慣用句の構造がどのようなになっているのか、話者が慣用句を理解・産出する際の慣用句の認知処理過程がどのような要因によって影響されるのか、といった問題は研究者の興味を引いている。

第一言語（以下 L1）慣用句の認知処理をめぐって、これまで様々な議論が行われてきた。最初の研究として、Bobrow & Bell（1973）は *Idiom List Hypothesis* を提案し、慣用句は心内辞書において一般語彙とは別に、特別なリストに記録されていると主張した。この研究によれば、L1 慣用句の理解過程において、文字通りの意味が先に活性化され、文字通りの意味解釈が失敗した場合、慣用句リストが活性化され、慣用句としての意味が抽出されるという。その後、Swinney & Cutler（1979）は *Lexical Representation Hypothesis* を提案し、慣用句表現は、一般語彙と同様に心的辞書に記録されており、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味は同時に活性化されるが、慣用的意味は直接抽出されるため、構成語の意味を構成するというプロセスが必要である文字通りの意味より、理解が速いと主張した。しかし、以上の先行研究と異なり、Gibbs（1980）は *Direct Access Hypothesis* を提案し、L1 慣用句の理解過程において、慣用的意味が文字通りの意味より先に活性化されるために、慣用的意味の抽出は文字通りの意味より速いと主張した。

以上の先行研究は全ての慣用句を非構成的（*nondecomposable*）だと捉え、慣用句と構成的な処理過程を経る一般表現とを区別し、慣用句の認知処理は非構成的な過程を経るとしていた。しかし、Gibbs（1987）、Gibbs & Nayak（1989）は慣用句を構成する語彙の意味とその慣用句の慣用的意味の間の関連性の観点から、慣用句は全て非構成的とは限らないことを指摘し、慣用句の認知処理は慣用句の構成性（*compositionality* : 慣用句の構成語の意味と慣用的意味の間の関連性）または透明度（*transparency* :

慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性を指し、構成性と類似する)<sup>1</sup>に影響されると主張した。Gibbs 他 (1989) は慣用句の構成性が慣用句の認知処理に影響すると述べ、*Idiom Decomposition Hypothesis* を提案した。この研究によると、構成的構成性の高い慣用句 (*pop the question* : プロポーズする) は構成語の意味が句全体の慣用的意味の抽出を促進させるため、一般表現 (*ask the question*) よりも理解が速いのに対し、非構成的構成性の低い慣用句 (*kick the bucket* : 死ぬ) は構成語の意味が全体の比喩的意味と衝突するため、一般表現 (*fill the bucket*) よりも理解が遅いという。一方、Cacciari & Tabossi (1988)、Tabossi 他 (2009) は *Configuration Hypothesis* を提案しており、慣用句の認知処理は構成性ではなく、慣用句の予測性 (*predictability* : 慣用句形式を最後まで見ていない話者がその未完成の慣用句を完成する確率) と親密度 (*familiarity* : 慣用句の馴染み深さ) に影響されると主張した。*Configuration Hypothesis* において、予測性の高い慣用句 (*in seventh heaven* : 幸福状態に成る) は予測性の低い慣用句 (*go to the devil* : 命令形で「くたばれ!」を表す) より意味の抽出が速く、親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より意味の抽出が速い。Titone & Connine (1994a)、Titone & Connine (1999) は *Configuration Hypothesis* を基に、*Hybrid Model* という L1 慣用句の認知モデルを提案し、慣用句の理解過程において、個々の構成語の意味から句全体の意味を合成するという構成的処理と、心内辞書から慣用的な意味を直接抽出するという非構成的処理の両方が行われていると主張した。更に、Cutting & Bock (1997) は慣用句の産出過程において、慣用的意味の活性化と同時に、慣用句の文字通りの意味も活性化されることを明らかにし、慣用句の認知過程において構成語の意味が活性化されることを検証した。

以上の先行研究を踏まえ、Sprenger 他 (2006) は L1 慣用句の産出過程を中心に実験を行った。実験の結果を踏まえ、Sprenger 他 (2006) は Cutting & Bock (1997) で用いられたモデルを *Hybrid Model* とし、*Hybrid Model* に修正を加えることによって、最終的に *Superlemma Model* という L1 慣用句の認知モデルを提案した。Sprenger 他 (2006) が提案した心内辞書における L1 慣用句の構造及び認知過程は以下の図 1-1 の通りである。*Superlemma Model* では、慣用句を構成する一般語彙がレマ (lemmas) という階層に記録されていると同時に、慣用句 (*hit the road*) はスーパーレマとしてレマ階層に記録されており、一般語彙また慣用句と対応する意味は概念 (concepts) という階層に記録されていると仮定されている。その後、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2009) といった研究の結果も *Superlemma Model* を支持し、このモデルは慣用句研究に注目されるようになってきた。*Superlemma Model* に関す

---

<sup>1</sup> 透明度と構成性は慣用句の構成語彙の意味と慣用的意味の間の関連性を表すという点において類似していると考えられるため、本論文では慣用句の認知処理における両者の効果が類似すると考える。具体的な議論は第 2 章の 2.2.1 (p15) を参照されたい。



る詳細な説明は 2.3.3 (p28) を参照されたい。

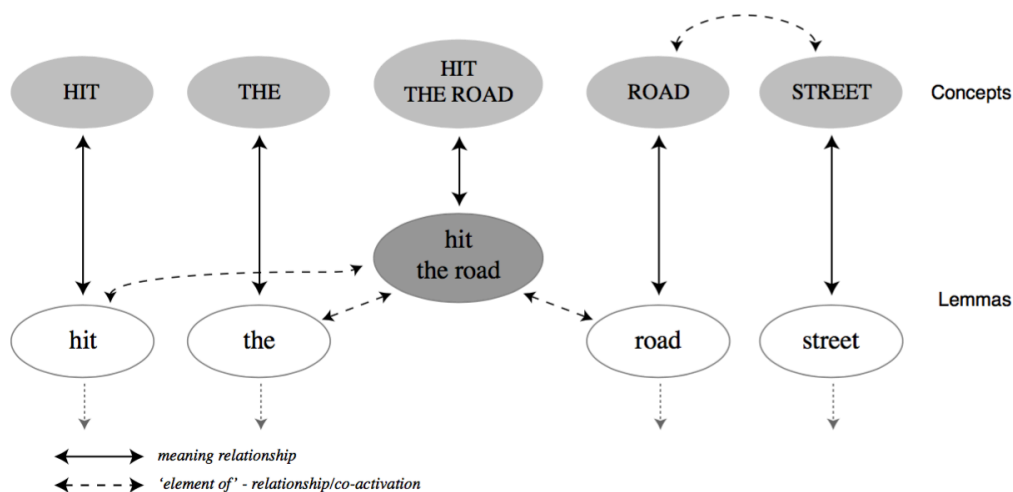


図 1-1 Sprenger 他 (2006:176) による L1 慣用句の認知モデル

一方、上に述べた L1 慣用句に関する先行研究は、慣用句は一般表現より処理のスピードが速いという点において一致した結果が見られたのに対して、第二言語（以下 L2）慣用句に関する研究は一致した結果を示さなかった。Conklin & Schmitt (2008) の結果によると、母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の理解は一般表現より速かった。この結果と異なり、Sivanova-Chanturia 他 (2011) では、学習者の場合、慣用句の慣用的意味は文字通りの意味、また一般表現と比べ、最も読み時間が遅かった。

L2 慣用句の認知処理にはより多くの要因が絡み合い、L1 慣用句と比べ、より複雑であると指摘されている (Cooper 1999, Schmitt & Underwood 2004)。L2 慣用句の理解・産出に影響する要因の 1 つとして、L1 慣用句との類似度が注目されてきた。Kellerman (1977) によると、慣用句が表す意味は文字通りの意味ではなく、全体として慣用的な意味が発生するため、慣用句は学習者の認知過程において心理的有標性が高く、L1 慣用句と対応する L2 慣用句は転移が起こりにくい。それに対して、Irujo (1986)、Irujo (1993)、Laufer (2000)、Cooper (1999) といった研究では L1 慣用句の転移が見られた。Irujo (1993)、Laufer (2000) の結果によると、L2 学習者にとって L1 慣用句と完全に一致する L2 慣用句は最も産出されやすく、L1 と部分的に類似する慣用句や L1 と類似しない L2 慣用句は産出する際の難易度が上がった。また、L1 慣用句との類似度以外に、Ishida (2009)、Aljabri (2013) は、透明度という要因が L2 慣用句の理解に影響し、透明度の高い L2 慣用句は透明度の低い L2 慣用句より意味解釈しやすいという一致した結果を得た。なお、Aljabri (2013) において、親密度の要因も L2 慣用句の理解過程に影響し、親密度の高い L2 慣用句は、親密度の低い L2 慣用句より意味解釈しやすいことが明らか

になった。

### 1.1.2 本論文の目的

これまでの慣用句研究の流れを見ると、親密度や構成性といった要因がどのように L1 慣用句の認知処理に影響を与えるかが注目されてきたことが分かる。先行研究より、心内辞書における L1 慣用句の構造及び認知過程の一部は Superlemma Model というモデルによって明確になった。一方、L2 慣用句に影響する要因として L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度、親密度が議論されてきたが、心内辞書における L1 慣用句の構造を用いて L2 慣用句の認知処理を説明できるか否かは未だに明らかでない。以上を踏まえ、心内辞書における L1・L2 慣用句の構造をより明確にし、慣用句の認知処理モデルを更に解明するにはまだ以下の 3 つの課題が残っていると考えられる。

1 つ目に、Sprenger 他 (2006) は L1 慣用句の産出過程を検証し、Superlemma Model を提案したが、このモデルを用いて L2 慣用句の産出を説明することができるかについては議論する必要がある。Irujo (1993)、Laufer (2000) は L2 慣用句の産出を中心に実験を行い、母語話者と比べ L2 学習者は慣用句の産出が少ないことを指摘し、学習者の産出に L1 慣用句の転移が見られ、L2 慣用句の産出が少ない理由は学習者が難易度の高い慣用句を回避していることにあると主張した。しかし、この 2 つの研究には、L2 慣用句の産出と L2 慣用句の心内構造、また L2 慣用句の処理モデルとどのような関連があるかについての議論が欠けている。もし L2 慣用句の心内構造と L1 慣用句と類似するのであれば、L2 慣用句の産出は Superlemma Model によって説明でき、L1 慣用句の認知処理に影響を与える親密度も L2 慣用句の産出に影響すると考えられる。

2 つ目に、慣用句の理解過程について実験を行い、Superlemma Model を検証する必要がある。言語表現の認知処理は、話者が心内辞書にアクセスすることによって表現の形式・意味を処理することを指し、理解過程（読む/聞く）と産出過程（話す/書く）両方を含む。心内辞書において、表現の理解・産出に関わる語彙（レマ）とそれと対応する意味（概念）は共通しているため、理解・産出は同一のモデルによって解釈できると考えられる (Roelofs 2003)。しかし、Sprenger 他 (2006) は産出を対象としか実験を行っていないため、L1・L2 慣用句の理解過程が Superlemma Model によって説明されるか否かについて実験を行い、検証する必要がある。その際に、慣用句の理解を中心とする Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) といった先行研究の結果と比較して考察を行う必要がある。もし慣用句の理解・産出は同一の認知モデルによって解釈できる場合、慣用句の産出に影響する要因も理解過程に影響を及ぼすと考えられる。

3つ目に、慣用句の意味的特徴が慣用句の認知過程に影響するか否かに関して課題が残っている。慣用句を一般表現と区別する際の最も重要な特徴は意味的特徴である。慣用句の場合、文字通りの意味と慣用的意味が異なり、個々の構成語の意味から直接表現全体が表す慣用的意味を推測することは容易でない。この特徴は慣用句の透明度と構成性と深く関連していると考えられる (Nunberg 他 1994)。しかし、これまで、慣用句の透明度と構成性がどのように慣用句の認知処理に影響するかについて、先行研究間で結果は一致していない。Gibbs 他 (1989) は、構成的慣用句の理解は速く、非構成的慣用句の理解は遅いと主張している。それに対し、Tabossi 他 (2009) は慣用句の認知処理の速さは構成性ではなく親密度と予測性によって説明でき、親密度の高い慣用句または予測性の高い慣用句は一般表現より意味抽出が速いと述べている。一方、Sprenger 他 (2006) によると、構成性の効果は実験項目によって異なるため、Superlemma Model において慣用句の構成性がどのように影響するかは不明確であるという。L2 慣用句に関して、Irujo (1993) では透明度が L2 慣用句の産出に影響を与えなかったという結果となったのに対し、Ishida (2009)、Aljabri (2013) では透明度が L2 慣用句の理解に影響したという結果となっている。よって、これまでの慣用句研究によって、慣用句の認知処理における構成性及び透明度の効果が既に解明されたとは言えない。慣用句研究において、慣用句の意味的特徴と深く関連する構成性、もしくは透明度がどのように慣用句の心内構造に反映され、慣用句の認知処理に影響するかを解明することは、未だに1つ重要な課題として残されている。

本論文では透明度と構成性が類似すると捉えるため、その中の1つ、透明度のみを対象とするが、構成性に関する先行研究の結果も透明度の効果を考察する際の重要な参考となると考える。以上を踏まえ、本論文は以下の3つの課題を設定し、L1・L2 慣用句の認知処理に影響する要因を明らかにすることによって、心内辞書における慣用句の構造をより明確にし、慣用句の認知モデルを更に一般化することを目的とした。

- ① Irujo (1993)、Laufer (2000) を基に、L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度、親密度を中心に、L2 慣用句の産出に影響を与える要因を明らかにする。更に、L2 慣用句の産出過程が Superlemma Model によって説明されるか否かについて検討し、類似度・透明度・親密度の要因が L2 慣用句の産出過程に影響を及ぼす場合、それぞれが産出モデルのどの部分に影響するかについて考察する。
- ② 慣用句の透明度、親密度を中心に、L1・L2 慣用句の理解に影響を与える要因を明らかにする。また、透明度・親密度の要因が L1・L2 慣用句の理解過程に影響を及ぼす場合、それぞれが Superlemma Model のどの部分に影響するかについて考察し、慣用句の産出過程と比較することによって、理解・産出は同一の認知モデルによって解釈できるか否かを明らかにする。
- ③ 慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにすることによって、一般表現と区別する慣用句

の意味的性質がどのように慣用句の心内構造に反映され、どのように慣用句の認知モデルに影響を及ぼすかを明確にする。

## 1.2 各章の概要と本論文の構成

第1章では、研究の背景と目的について述べ、論文の構成を示した。

第2章では、慣用句の定義について論じた後に、慣用句の認知処理に関わると指摘された透明度、構成性、親密度、字義性といった性質について説明した。それから、心理言語学の観点から行われてきた様々な慣用句研究を概観し、まずはL1慣用句の理解と産出に関する先行研究をまとめ、その次、L2慣用句の理解と産出に関する先行研究をまとめた。最後に、これまでの先行研究を踏まえ、慣用句の認知モデルをより一般化するには次の3つの課題が残っていることを指摘し、本研究の問題設定と位置付けを明確にした：①L2慣用句の産出に影響を与える要因を明らかにし、L2慣用句の産出過程がL1慣用句の認知モデルによって説明されるか否かについて考察する、②L1・L2慣用句の理解に影響を与える要因を明らかにし、慣用句の認知モデルについて更に検証する、③慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにする。

第3章では、課題①の検証のために、第5章の実験1で扱うL1慣用句とL2慣用句の類似度について議論を行った。その議論を通し、Irujo (1993)、Laufer (2000)における類似度の判断基準について再検討する必要があることを指摘し、辞書において同義とされている日中慣用句が文脈において意味的に対応するか否かについて考察した。文脈における慣用句の対応関係を明らかにするために、対照分析の手法を用いて、日本語母語話者15名と中国語母語話者10名を対象に、日中慣用句がそれぞれどのような文脈で使用されるかを調査した。結果として、辞書において同義とされていた日中慣用句はプラス評価・マイナス評価、外面性・内面性及び表出性といった側面において対応関係の相違が見られ、驚きを表す日中慣用句は完全に「意味的に一致」でないことが明らかになった。本章の結果に基づき、第5章ではL1慣用句とL2慣用句の類似度を判断する際に、辞書における慣用句の定義ではなく、各実験文脈における慣用句の意味的対応関係を類似度の意味的基準とする必要があると主張した。

第4章では、慣用句の透明度判断は話者の親密度によって影響されることを指摘し、第5章と第6章において透明度の効果を明らかにする(課題①②③)ために親密度の要因を同時に扱う必要があることを述べた。本章では日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、親密度及び透明度にバリエーションのある45個の日本語慣用句を用いて親密度調査と透明度調査を行った。透明度判断に影響を与える要因を明らかにするために、母語と親密度を要因として累積混合線形モデルを構築し、分析を行った。そ

の結果、母語話者が学習者かにかかわらず、ある慣用句の親密度が上がることによって、その慣用句に対する透明度判断も高くなることと、学習者グループにおける親密度の効果は母語話者より顕著であることが明らかとなった。更に、学習者と母語話者の相違について考察を行ったところ、両者は慣用句の慣用的意味を意図的に分析しようとするか否かにおいて違いがあると考えられることから、学習者グループにおいて親密度の効果がより顕著である理由は、留学経験のない学習者は慣用句の意味を記憶するために、意図的に慣用句の意味を分析しようとするにありと指摘した。

第5章では、Irujo (1993) と Laufer (2000) を基に、2つの産出実験を行うことによって、L2 慣用句の産出を L1 と比較し、L2 慣用句の産出過程に影響を与える要因について考察した(課題①③)。実験1では類似度と親密度に焦点を当て、選択テストを用いた。実験2では透明度と親密度を要因とし、文完成テストを行った。実験1の結果より、1) 学習者と母語話者の慣用句の産出率に有意な差が見られなかったこと、2) L1 慣用句との類似度は学習者の産出に影響を与えなかったこと、3) 慣用句の親密度は学習者の慣用句産出に影響を与え、親密度が高くなると L2 慣用句の産出率も高くなったこと、以上の3点が明らかになった。実験2において、1) 学習者は母語話者より慣用句の産出が少なかったこと、2) 慣用句の親密度は学習者の慣用句産出に影響を与え、親密度が高くなると慣用句の産出率も高くなったこと、3) 慣用句の透明度は学習者の産出に影響し、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より産出されやすかったこと、以上の3点が分かった。以上の結果に基づいて、Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model を用いて L2 慣用句の産出過程を考察した。最終的に、L2 慣用句の産出過程に透明度が影響を及ぼしたという結果を踏まえ、心内辞書において、慣用句を構成する語彙の概念と慣用句の概念の間にリンクが存在していることを指摘し、透明度の効果を加えることによって Superlemma Model を拡大することを提案した。

第6章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解を対象とする自然さ判断タスクを行った。母語話者と学習者の反応時間を比較することによって、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度及び透明度の効果을明らかにし、第5章で提案した慣用句の心内構造に基づいて、慣用句の理解モデルを考察した(課題②③)。本実験に使用する日本語慣用句を選出するために、まず1130個の日本語動詞慣用句を対象に親密度調査を行い、その後、日本語母語話者によって親密度が高いと判断された300個の慣用句を対象に透明度調査、予測性調査を行った。以上の調査の結果に続いて、48個の慣用句を対象に字義性調査を行うことによって、最終的実験に使用する32個の日本語慣用句を選出した。解析の際に、まず Tabossi 他 (2009) と同様の方法を用いて親密度と透明度の効果を検証した。その結果、従来の方法では、本実験に参加した協力者の透明度判断が測定されていないという問題があることが分かった。次に、一般表現を除き、慣用句のみを対象に解析を行った結果、

①母語話者の場合、Tabossi 他（2009）と異なり、慣用句の親密度のほかにも、透明度の効果も有意であり、親密度の高い慣用句は反応時間が速く、透明度の高い慣用句も反応時間が速かったこと、②学習者の場合、親密度の効果のみが検証され、親密度が上がることによって、学習者の反応時間が速くなったこと、これらの2点が明らかになった。最後に、L1 の場合は第5章で提案した慣用句の心内構造に基づいた慣用句の理解モデルが検証され、L2 の場合は今後の課題として透明度について更に研究を行う必要があると主張した。

第7章では、本論文の結果をまとめた上で本論文の意義と今後の課題、展望について述べた。

本論文の構成は図1-2の通りである。

第1章 研究の背景と目的

第2章 先行研究と本研究の位置付け

第3章

目的：L1 と L2 慣用句の類似度を判断する際の意味基準について検討する。(課題①)

結果：類似度という要因を判断する際の意味基準は、文脈の影響を考慮しなければならないことが判明された。

この結果を踏まえ、第5章では、実際に使用した実験文の文脈における日中慣用句の対応関係を類似度の判断基準とした。

第4章

目的：慣用句の透明度判断が親密度に影響されることを明らかにする。(課題①、②、③)

結果：学習者か母語話者かにかかわらず、透明度判断は親密度判断が上がるにつれ高くなった。なお、学習者は母語話者より透明度を高く判断した。

この結果を踏まえ、第5章と第6章では、実験参加者の学習者と母語話者に透明度調査と親密度調査を行い、透明度の効果を明らかにするには親密度の要因を同時に扱う必要があることが明らかとなった。



第5章

目的：L1 との類似度・親密度・透明度がL2 慣用句の産出過程に与える影響を明らかにし、慣用句の産出モデルについて考察する。(課題①と③)

結果：L1 慣用句との類似度は上級第二言語学習者の産出率に影響を与えなかった。一方、親密度と透明度はL2 慣用句の産出過程に影響した。透明度の効果が有意であったため、Superlemma Model に新しいリンクを入れることを提案した。



第6章

目的：親密度・透明度が慣用句の理解過程に与える影響を明らかにし、第5章で提案した慣用句の心内構造に基づいた慣用句の理解モデルについて考察する。(課題②と③)

結果：親密度はL1・L2 慣用句の理解過程に影響を与えた。L1において透明度の効果は検証されたが、L2において透明度の効果は有意でなかった。

第7章 まとめと今後の課題

図1-2 本論文の構成

## 第2章 先行研究の概観と本論文の位置付け

本章では、慣用句の定義について論じた後に、慣用句の認知処理に関わると指摘された透明度、構成性、親密度、予測性、字義性といった性質について説明した。その後、心理言語学の観点から行われてきた様々な慣用句研究を概観し、まずは L1 慣用句の理解と産出に関する先行研究をまとめ、その次、L2 慣用句の理解と産出に関する先行研究をまとめた。最後に、本論文の問題設定と位置づけを明確にした。

### 2.1 慣用句の定義

従来の言語研究における慣用句の定義は定まっておらず、研究者によって慣用句とされる表現の範囲が異なる。本節では先行研究における慣用句の定義について概観した上で、本論文で扱う慣用句の定義と範囲を明確にした。

#### 2.1.1 日本語慣用句

宮地 (1985:62) は日本語慣用句を「二つ以上の単語が一続きに、または相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表すものを指す」と定義している。国広 (1985:7) は日本語慣用句を「二語 (以上) の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ないもの」と定義している。また、慣用句の特徴として、格言・ことわざと異なり、歴史的・社会的価値観を持たないことも指摘されている。伊藤 (1997:254) は、「慣用句の特徴として 1.イディオム性、2.安定性、3.再生産性の 3つが挙げられる」と主張している。イディオム性とは、慣用句を形成している構成要素の意味と慣用句全体の表す意味との間に、なんら直接的関連性が見られないという、慣用句の意味的特徴である。イディオム性については、程度の高い慣用句 (馬の骨) もあれば比較的低い慣用句 (手を汚す) も認められ、非常に幅のある特徴と言える (伊藤 1997, 1999)。安定性とは、慣用句を構成している要素間の関係は固定しており、慣用句の構成要素をほかの構成要素と置き換えたり、また構成要素の語順を入れ替えたりすることはできないという、慣用句の統語構造上の特徴のことを指す。また、再生産性とは、慣用句は 1つの語彙と同様に統一体として繰り返し用いられるという、慣用句の語彙的特徴を意味する。以上



の先行研究より、慣用句は単語の連結体でありながら、一般表現より固定性が高いと考えられる。更に、石田（2000, 2004）は動詞慣用句を対象に、統語的操作を用いて、慣用句の形式的・統語的・意味的固定性は絶対的なものではなく、固定性の度合いの高いもの（頭にくる）から低いもの（手を打つ）までであることを指摘した。

日本語慣用句の範囲に関して、宮地（1985）は、以下の図 2-1 のように分類できると主張している。一般連語句とは、2 語（以上）が、意味関係の許す限り、自由に結合してできる句をいう。成句は慣用句と格言・ことわざに分けられ、ことわざ・格言は歴史的・社会的に安定した価値観を持つ成句のことを指す。また、慣用句には連語的慣用句と比喩的慣用句が存在しており、連語的慣用句とは、その結合に制約があつて、慣用が固定的であるうえ、比喩的慣用句ほどには全体として派生的な意味を持たない句のことをいい（汗をかく）、比喩的慣用句とは全体として比喩的意味を派生している句をいう（油を売る）。また、慣用句には連語的慣用句と比喩的慣用句との両方の意味を持つものがあることも指摘されている。例えば、「腰を抜かす」には 2 つの意味がある：1 つ目は連語的慣用句として、「腰の力がなくなって足が立たないようになる」という意味を表し、2 つ目は比喩的慣用句として「びっくり仰天する様子」の意味を表す（宮地 1985:64）。宮地が指摘するように、一般連語句と連語的慣用句、また連語的慣用句と比喩的慣用句はそれぞれの特徴を持っているが、境界線は明確ではない。

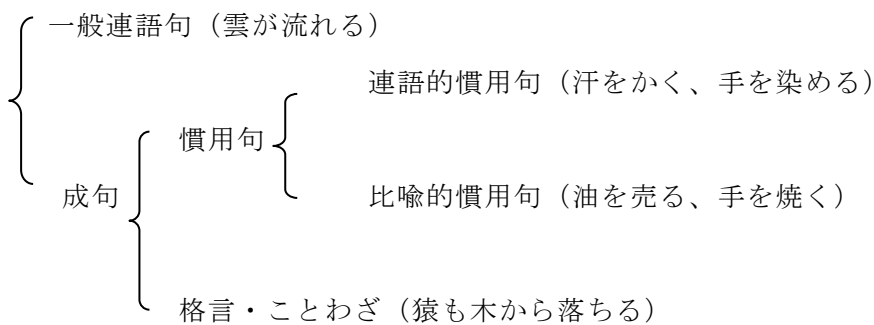


図 2-1 宮地（1985:63）における句の分類<sup>2</sup>

宮地（1985）は派生的な意味を有するか否かを基準に、慣用句を連語的慣用句と比喩的慣用句と分類しているのに対し、国広（1985）は慣用的意味と文字通りの意味の関係に基づき、慣用句を意味の観点から、1) 構成語の意味が不透明の場合、2) 比喩的意味が発達

<sup>2</sup> 括弧の例は宮地（1985）に挙げられているそれぞれの分類に当てはまる例である。

した場合、3) 文化が関係する場合という 3 つの種類に大別している。また、構成語の意味が不透明の慣用句には 2 種類がある。具体的には、「間に合う」のような、構成語の普通の意味と慣用句における意味との関係が比喩ともいえず、どのような関係になるか不透明なもの、「あっけに取られる」のような、構成語の一部がその慣用句以外では用いられなくなり、一般の人々にとって意味も不明で、慣用句全体の意味しか分からないものがある。更に、比喩の意味が発達した慣用句には次の 3 つの種類がある：「足を洗う」のような、文字通りの意味と比喩の意味が共に存在するもの、「手を染める」のような、文字通りの意味がほぼ使用されず、比喩の意味だけがあるものと、「肝に銘じる」のような、文字通りの意味が成立し得ず、比喩的な意味として使われないもの。最後に、文化が関係する慣用句も 3 種類に分けられ、「あごを出す」のような、文化的に決まっている動作・表情が表す比喩的な意味で使われる場合、「白羽の矢をたてる」のような、故事に基づく比喩の場合と、「十日の菊」のような、風習に基づく比喩の場合に分類されている。

宮地（1985）と国広（1985）を比較してみると、派生的意味、もしくは比喩の意味の定義は研究者によって異なることが分かる。例えば、宮地（1985）において、「手を染める」は派生的な意味を有しないため、連語的慣用句とされているが、国広（1985）において、「手を染める」は比喩的な意味を表すとされている。

### 2.1.2 中国語慣用句

本論文は主に日本語慣用句を対象に調査を行ったが、後の第 3 章及び第 5 章において日中慣用句の意味的対応関係についても論じている。従って、本節では第 3 章及び第 5 章に先立ち、中国語慣用句の定義に関する説明を述べた。

先に述べた日本語慣用句と類似する特徴を持つ中国語表現として「慣用語」という概念が存在する。しかし、「慣用語」のほかに、「成語」「諺語」「歇後語」といった「慣用句」と類似する特徴を持ち、「慣用語」と混同しやすい概念も存在する。

従来の研究において、慣用語は 3 文字からなるものが比較的多く、表意二層性を有し、表層意味（個々の語の意味の組み合わせ）と深層意味（慣用句としての意味解釈）両方を持つ表現であるとされている（馬・高 1982）。「穿小鞋」「马后炮」のような表現は一般的

に慣用語と見なされる<sup>3</sup>。慣用語の意味的特徴に関して、孫（1989）は、慣用語と成語は共通の特徴を多く持っており、両方とも描写性を有する上、表層意味のほかに深層意味を持ち、単独で文<sup>4</sup>になれないという共通の特徴があると述べている。ただし、慣用語は口語的特徴が顕著で、構造からみれば成語ほど固定していないという点において区別される。

「成語」の特徴と定義に関して、孫（1989）や李（2002）は、「成語」は表層意味と深層意味を有し、4文字からなるものが大多数で、その中にも2×2の構造を持ち、リズム性の高いものが多いと述べている。慣用語と成語の中に、同一事象を表すものもある。例えば、「怒り」を表現する場合、慣用語として“脸红脖子粗（顔 赤い 首 太い）”が挙げられ、成語として“怒发冲冠（怒る 髪 突っ込む 帽子）”が挙げられる<sup>5</sup>。成語“怒发冲冠”は慣用語“脸红脖子粗”と比べ、より構造上の固定性が高く、文語的である。“脸红脖子粗”を使用する際に、副詞を挿入し、“脸又红脖子又粗（顔も赤く、首も太い）”のように表現することができるが、“怒发冲冠”は副詞の挿入が認められない。

「諺語」は日本語の「ことわざ」に近く、文の構造を持ち、話者の主観的態度を表すため「表述性」を有すると考えられる。「歇後語」は一見「諺語」に近いが、必ず前項と後項からなり、また後項は必ず前項の説明でなければならないという点において「諺語」と区別されると考えられる。

図 2-2 が示しているように、中国語の慣用表現において、「慣用語」「成語」「諺語」は隣接しており、中には分類しにくい項目も存在する（図 2-2 の縞模様の部分）。

---

<sup>3</sup> 「穿小鞋」：表層意味は小さい靴を履くことである。深層意味は意地悪をし、人に責任を押し付けることである。

「马后炮」：表層意味は馬の後ろの鉄砲である。深層意味は後の祭りである。

<sup>4</sup> 文は主語またはアスペクト成分を必要とする。

<sup>5</sup> 「脸红脖子粗」：表層意味は顔が赤く、首が太いことを表す。深層意味は非常に怒っている様子を表す。  
「怒发冲冠」：表層意味は怒って髪の毛が帽子に突っ込むことを表す。深層意味は非常に怒っている様子を表す。

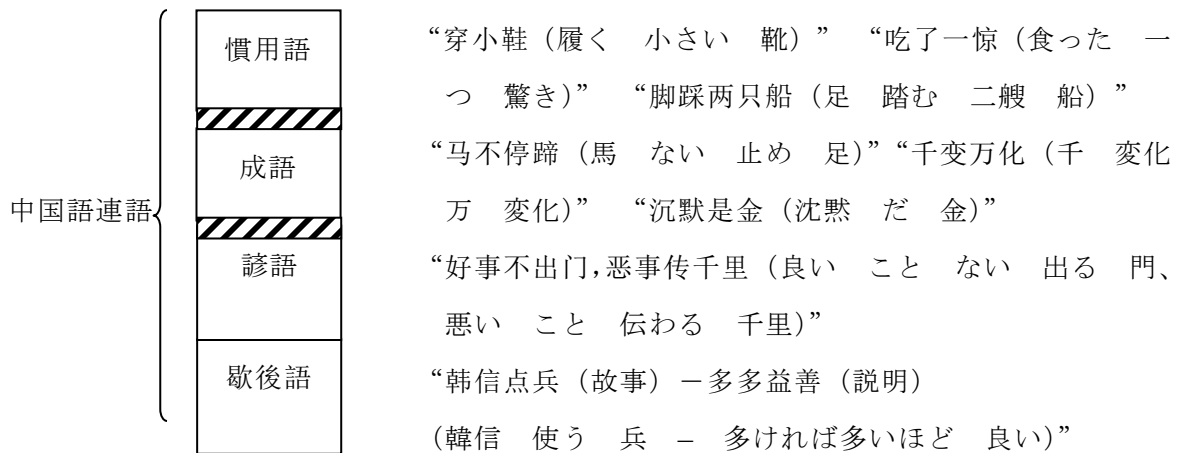


図 2-2 中国語慣用表現の分類<sup>6</sup>

### 2.1.3 本論文における慣用句の定義

以上より、日本語における慣用句と中国語における「成語」や「慣用語」は構成要素の結びつきが比較的固く、まとまった意味を表すという点において共通している。孫（1989）のいう「慣用語」と「成語」の表層意味と深層意味は、国広（1985）における慣用句の文字通りの意味と比喩的意味と対応していると考えられる。慣用句の特徴として、個々の構成要素が表す文字通りの意味に加えてそれとは別の意味を表すという点が挙げられる。日本語の場合、慣用句は派生的な意味を有し（宮地 1985）、比喩的な意味を表す（国広 1985）とされている。中国語の場合、「慣用語」と「成語」は深層意味を表すことができる（孫 1989）とされている。ただし、派生的な意味や比喩的な意味の基準に関しては先行研究によって異なる場合があり、派生的な意味の定義自体が明確でない点が問題となる場合がある。例えば、宮地（1982）において、「手を染める」は連語的慣用句とされ、はっきりし

<sup>6</sup> 「吃了一惊」：表層意味は1つの驚きを食うことを表す。深層意味は驚くという感情を表す。  
「脚踩两只船」：表層意味は足が2艘の船を踏むということを表す。深層意味は二股をかけることである。  
「马不停蹄」：表層意味は馬が足を止めないことを表す。深層意味は一時も休めずに先を急ぐことである。  
「千变万化」：表層意味は千の変化と万の変化である。深層意味は変化が多いことである。  
「沉默是金」：表層意味は沈黙がお金であるという意味を表す。深層意味は口に出して言わない方が良いという意味を表す。  
「好事不出门, 恶事传千里」：悪いことはよく人に知られてしまうということを表す。  
「韩信点兵—多多益善」：前半は韓信が兵を使うという故事であり、後半はその故事によって示された多ければ多いほど良いという意味を表す。

た比喩的な意味を有しないとされているが、国広（1985）においては「手を染める」は比喩的な意味を有するとされている。また、慣用句は、文字通りの意味と慣用的意味の間に、高い関連性を示すもの（手を汚す）もあれば、両者の間に関連性がないもの（馬の骨）もある（伊藤 1999）。文字通りの意味と慣用句的な意味の間に関連性が見られない場合、両者の間の距離は遠く、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味を区別することは簡単である。それに対して、文字通りの意味と慣用的意味の間に高い関連性が見られる場合、両者の間の距離が近く、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味を区別するのは難しく、研究者によって慣用句として見なすか否かの判断が異なる場合もあると考えられる。

以上を踏まえ、本論文では、宮地（1985）、国広（1985）を参考に、慣用句を「単語の二つ以上の連結体であって、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ない表現である」と定義する。

## 2.2 慣用句の認知処理に影響する諸要因

### 2.2.1 透明度と構成性

慣用句研究において、慣用句を定義する際の基準は研究者によって異なるが、Nunberg 他（1994）は、慣用句を一般表現と区別する際の最も重要な特徴は意味的特徴であると指摘している。慣用句の意味的特徴は、文字通りの意味と慣用的意味が異なり、個々の構成語の意味から直接表現全体が表す慣用的意味を推測することができないことである。この特徴は慣用句の透明度と構成性と深く関連しているため、慣用句の認知処理に関する研究において透明度と構成性の要因は最もよく議論されている。

#### 2.2.1.1 透明度

英語慣用句に関する先行研究において、透明度は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の関連性のことであり、文字通りの意味と慣用的意味の関連性が高い慣用句は透明度が高く、文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が低い慣用句は透明度が低い（Gibbs 1987, Nippold & Rudzinski 1993, Keysar & Bly 1995）。例えば、英語慣用句 *go by the book* は「本の指示に従う」という文字通りの意味を表すが、慣用句として使用される文脈においては「ルールと規則に従う」の意味を表す。この慣用句は文字通りの意味と慣用的意味と

密接な関係を持っているため透明度が高いと判断される。一方で、keep one's shirt on は「シャツを着続ける」という文字通りの意味を表し、慣用句として使用される際は「冷静なままで過激な反応をしない」という慣用的意味を表す。文字通りの意味と慣用的意味の間は関係を持たないため、keep one's shirt on は透明度が低いと判断される (Nippold & Taylor 2002)。

以下の図 2-3 は英語慣用句 go by the book と keep one's shirt on を例に、透明度の概念を図示したものである (筆者が作成した)。前者と比べ、後者の文字通りの意味と慣用的意味の間の距離が遠く、文字通りの意味と慣用的意味の関連性がより低い。

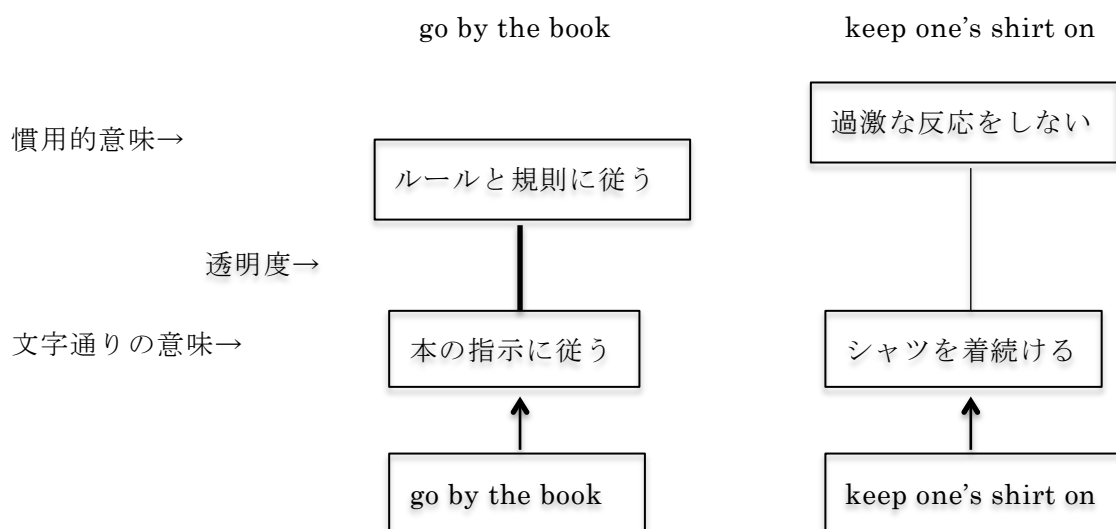


図 2-3 go by the book/ keep one's shirt on の透明度判断の基準

透明度の判断方法について、Nippold & Taylor (2002) は以下のように、英語慣用句 put one's foot down の文字通りの意味と慣用的意味を提示した上で、英語母語話者に慣用句の透明度を判断してもらった。

Put one's foot down:

Literal meaning: to place one's foot on the ground

(文字通りの意味：足を地面につける)

Nonliteral meaning: to insist on something and not change one's mind

(慣用的意味：意見を曲げない強い姿勢を示す)

The meanings of this idiom are: 1 = closely related 2 = somewhat related 3 = not related

(この慣用句の 2 つの意味は：1=強く関連している；2=やや関連している；3=関連していない)

Nippold & Taylor (2002:387) <sup>7</sup>

Nippold & Taylor (2002) に基づくと、複数の言語使用者の判断結果を平均した後の値が透明度の指標となり、値の低い慣用句は透明度が高いとされ、値の高い慣用句は透明度が低いとされる。

### 2.2.1.2 構成性

また、透明度と類似する概念として、構成性という概念があるが、構成性は慣用句を構成する個々の構成要素が持つ意味と慣用句全体としての意味との間に関連性があるか否かによって判断される (Gibbs & Nayak 1989, Titone & Connine 1994b)。例えば、英語慣用句 *pop the question* は慣用句として「プロポーズする」という意味を表すが、この慣用句を構成する名詞と動詞それぞれの意味が「プロポーズする」という慣用的意味の一部と関連しているため、慣用句の理解に役立つと考えられる。具体的に言うと、動詞 *pop* の意味は「プロポーズする」という意味に含まれる「突然聞く」という動作の意味と関連し、名詞 *question* は「プロポーズする際の質問」と関連していると考えることができる。よって、*pop the question* は構成性が高く、構成的慣用句と判断される。一方、*kick the bucket* は慣用句として「死ぬ」という意味を表すが、この意味は慣用句を構成する名詞 *bucket* と動詞 *kick* の意味と関連性が見られないため、構成性が低く、非構成的慣用句と判断される (Gibbs & Nayak 1989)。

透明度を対象とする研究は段階性を表すリッカート尺度を使用して透明度を判断することが一般的であるが (Gibbs & Nayak 1989, Nippold & Rudzinski 1993, Keysar & Bly 1995)、構成性を対象とする研究はリッカート尺度を使用して構成性を判断するものもあれば (Gibbs & Nayak 1989, Tabossi 他 2009, Cieśllicka 2013)、カテゴリ分類の方法を用いるものもある (Gibbs & Nayak 1989, Gibbs 他 1989, Titone & Connine 1994b)。

---

<sup>7</sup> 括弧の中の日本語は筆者が訳したものである。

Tabossi 他 (2009) <sup>8</sup>は以下のように構成性判断を行っている。

The instructions required them to determine to what extent the components of each expression singularly contributed to the figurative meaning of the expression as expressed in the paraphrase. For this judgment, they had to use a 7-point scale, where 1 was *not at all similar* and 7 *very similar*.

(説明文では、個々の表現の構成語が単独でどの程度意識された慣用句の比喩的意味に寄与しているかを判断するように指示した。協力者は判断する際に、1 (全然類似しない) から 7 (非常に類似する) までの 7 段階のリッカート尺度を使用した。)

Tabossi 他 (2009:531) <sup>9</sup>

Tabossi 他 (2009) は複数の言語使用者の判断の平均値を取り、値の高い慣用句は構成性が高いと判断され、値の低い慣用句は構成性が低いと判断される。また、Titone & Connine (1994b) は Gibbs & Nayak (1989) の実験 1 を参考に、カテゴリ分類の方法を用いて、以下のように構成性を判断している<sup>10</sup>。

First, you must sort all the idioms into two categories: idioms whose individual components contribute to their overall figurative meanings (decomposable idioms) and idioms whose individual words do not make such a contribution (nondecomposable idioms). An example of a decomposable idiom would be "*save your skin*." Because the word *save* relates to the overall idiom meaning (*to protect or save yourself*), this idiom would be called decomposable. An example of a nondecomposable idiom would be "*chew the fat*." This idiom means *to converse about everyday matters* and would be called nondecomposable because the individual word meanings do not directly relate to the overall meaning of the idiom. The literal meanings of each idiom are alongside in parentheses.

---

<sup>8</sup> 本論文の第 6 章は Tabossi 他 (2009) と比較しているため、ここでは Tabossi 他 (2009) を例に挙げる。

<sup>9</sup> 括弧の中の日本語は筆者が訳したものである。

<sup>10</sup> Titone & Connine (1994b) は、Gibbs & Nayak (1989) における構成性判断の説明文をそのまま使用していると述べている。Gibbs & Nayak (1989) においては構成性判断の説明文が明示されていないため、ここでは Titone & Connine (1994b) を引用することにする。



After this initial sort was completed, subjects were asked to divide the list of decomposable idioms into one group of idioms whose meaning is either literally or metaphorically related to the figurative meaning.

(まず、あなたは全ての慣用句を2つのグループに分けなければならない。個々の構成語が単独で慣用句全体の比喩的意味に寄与している場合は構成的慣用句であり、個々の構成語が単独で慣用句全体の比喩的意味に寄与していない場合は非構成的慣用句である。構成的慣用句の例として *save your skin* が挙げられる。単語 *save* (救う) が慣用句全体の意味 (自分を救う) と関連しているため構成的と判断される。非構成的慣用句の例として *chew the fat* が挙げられる。おしゃべりをするという意味を表すこの慣用句が非構成的と判断されるのは、個々の構成語の意味は慣用句全体の意味と直接に関連していないためである。個々の慣用句の文字通りの意味は括弧の中で提示している。

最初の分類が終わった後に、協力者は構成的と判断された慣用句を、構成語の意味が字義的に慣用句全体の意味と関連するか、隠喩的に慣用句全体の意味と関連するかによって更に2つのグループに分類する。)

Titone & Connine (1994b:256) <sup>11</sup>

### 2.2.1.3 透明度と構成性の関係

構成性は個々の構成語の指す意味に重点を置くため、句全体が表す文字通りの意味を判断基準とする透明度と全く同じ概念とは言えない。ただし、透明度を判断する際の文字通りの意味に、構成語の意味も含まれるため、透明度は構成性と類似していると考えられる。なお、実際に判断を行う際に、協力者は直感によって文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性、または構成語の意味と慣用的意味の間の関連性について判断するため、透明度判断と構成性判断の結果が類似することも十分考えられる。慣用句の認知処理に関わる先行研究では研究者が透明度と構成性のそれぞれを対象としているが、両者の違いは未だに明確にされていないのが現状と言わざるをえない。Abel (2003) によると、両者は理論上完

---

<sup>11</sup> 括弧の中の日本語は筆者が訳したものである。

全に一致しないが、言語使用者が判断を行う際は区別しにくいという。また、Gibbs & Nayak (1989) は 86 個の慣用句を対象に、協力者に透明度判断と構成性判断を行ってもらい、両者の相関について分析を行った。結果、透明度判断と構成性判断にやや強い相関があることが分かった ( $r=.56^*$ )。更に、Cieślicka (2013) は 40 個の慣用句を対象に、話者に 7 段階の透明度判断 (1: 非透明的; 7: 透明的) と構成性判断 (1: 非構成的; 7: 構成的) を行ってもらった結果、両者が重なっていることが分かった。40 個の中に、構成的 (平均=5.6) と判断された 20 個の慣用句は透明度が高く (平均=4.77)、非構成的 (平均=1.5) と判断された 20 個の慣用句は透明度が低かった (平均=1.5)。

一方、日本語慣用句に関する研究においては、管見の限り透明度や構成性という用語は一般に使用されていないが、伊藤 (1999) は慣用句の意味的特徴としてイディオム性という用語を使用している。伊藤 (1999) で述べているイディオム性は慣用句の文字通りの意味と慣用句全体の意味の関連性を指し、この点においてイディオム性は透明度という概念に類似していると考えられる。イディオム性に関して伊藤 (1999) は以下のように例を挙げている。

「馬の骨」のような、「家柄、生まれ育ちなど素性のわからない者」という慣用句全体の意味と慣用句の構成要素として用いられている「馬」や「骨」の意味との間に、何らかの連想関係の認められないような慣用句は、イディオム性が高い。一方、「手を汚す」のような、構成要素本来の意味と慣用句的な意味との間に関連性を認めることができるような慣用句はイディオム性が低い。

伊藤 (1999:186)

伊藤 (1997) や伊藤 (1999) で述べているイディオム性は一般言語学の立場から捉える概念であり、慣用句の文字通りの意味と慣用句全体の表す意味の関連性を言語的な意味関係、文化的・社会的背景から探ることに焦点を当てている。一方で、透明度は心理言語学の視点から捉える概念であり、慣用句に関する言語学的専門知識を持たない一般人がある慣用句の表す文字通りの意味と慣用的意味を考える際に、両者の間の関連性をどの程度感じるかによって判断するものである。心理言語学の実験は、透明度判断を複数の言語使用者に行ってもらい、結果を数値化することが一般的である。伊藤 (1997) によると、イディオム性を判断際の一人一人の判断は、主観的な要因に影響され恣意的になってしまう可

能性があり、客観的な基準を立てるのが困難であるという。心理言語学の実験においても、透明度の判断に個人差が見られ、言語使用者によって慣用句の透明度と構成性の判断は必ずしも一致するとは限らない (Gibbs 1987, Titone & Connine 1994b)。

以上を踏まえ、構成性は構成語の意味と慣用句の慣用的意味の間の関連性を表す一方、透明度は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性を表すが、慣用句の文字通りの意味に構成語の意味が含まれているため、透明度と構成性を類似する概念として捉えることができる。本論文は、透明度と構成性が慣用句の認知処理に類似する影響を与えると考え、両者を同時に扱うのではなく、その中の1つである透明度を中心に研究を行う。本論文は心理言語学の手法を用いて実験を行うため、慣用句に関する言語学的専門知識を持たない一般人が慣用句の文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性をどのように捉えているかに着目し、慣用句の透明度を「言語使用者によって判断される慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性」と定義する。

### 2.2.2 親密度

親密度 (familiarity) は1人の言語使用者がある表現に接触する頻度、またはその人がある表現をどの程度知っているかを表す概念である。Titone & Connine (1994b) は171個の英語慣用句の親密度を調べるために、英語母語話者を対象に2つの調査を行った。1つ目の調査において、慣用句をどれぐらいの頻度で見たり聞いたり使用したりするかを7段階評価 (1:一回もない; 7:よく接触する) で協力者に判断してもらった。2つ目の調査において、慣用句の意味をどの程度知っているかを7段階評価 (1:意味を知らない; 7:よく知っている) で協力者に判断してもらった。その結果、2つの調査の結果の間に強い相関があったため ( $r=.91^*$ )、この研究は親密度の判断の指標を表現の接触頻度、またはどの程度表現の意味を知っているかのどちらかにできると主張した。

ところが、親密度と近い概念に使用頻度 (frequency) という用語を用いる研究もある。使用頻度はある表現がどの程度1つの言語に現れるかを示すのに対し、親密度は1人の言語使用者がある慣用句に接触する頻度のことを指すため、両者は全く同じ概念ではない。ただし、使用頻度の高い表現は頻度の低い表現より親密度が高いと考えられるため、この2つの概念は対立的なものではなく、関連していると思われる (Liu 2008: 77-78)。

親密度は単語の認知処理の速さに影響するだけでなく、慣用句の認知処理にも影響する

と指摘されている。Schweigert (1986) は慣用句を文字通りの意味が読み取られる文脈と慣用句としての意味が読み取られる文脈において読み時間実験を行い、親密度の高い慣用句の読み時間が親密度の低い慣用句より有意に速かったという結果を示し、親密度は慣用句の理解過程を促進する重要な要因として捉えるべきだと述べた。この結果は、単語を対象とした Lewellen 他 (1993) の結果とも一致した。つまり、慣用句は単語と同様に、親密度が上がるにつれ、慣用句としての意味の抽出が速くなると考えられる。

本論文では Titone & Connine (1994b)、Nippold & Rudzinski (1993) を参考に、慣用句の親密度を「一人の言語使用者がある慣用句を見たり、聞いたり、また使用したりする頻度」と定義する。

### 2.2.3 予測性

Cacciari & Tabossi (1988) は慣用句に予測性の高いものと予測性の低いものがあり、慣用句の予測性は慣用句の認知処理に影響を及ぼす重要な要因であると指摘している。予測性とは、慣用句の形式を最後まで見ていない言語使用者がその未完成の慣用句を完成させる確率のことである (Titone & Connine 1994b:252)。例えば、英語母語話者に以下の 2 つの文を提示し、最後の空欄を完成してもらう場合、例 (a) において殆どの母語話者は慣用句 *in seventh heaven* を想起し、*heaven* を記入するのに対し、例 (b) において *go to the devil* を想起する母語話者が少なく、*devil* を記入する母語話者が少ない。よって、英語慣用句 *in seventh heaven* は *go to the devil* と比べ予測性が高いと考えられる。

(a) After the excellent performance, the tennis player was in seventh\_\_\_\_\_.

(b) He told him to go to the\_\_\_\_\_.

Cacciari & Tabossi (1988:671-675)

Cacciari & Tabossi (1988) と Titone & Connine (1994a) はプライミング実験を行い、慣用句が含まれている文を音声で流し、協力者に音声を聞かせながら、(1) 慣用句の慣用的意味と関連する単語 (*happy*)、(2) 最後の単語 (例えば、*in seventh heaven* の中の *heaven*) の文字通りの意味と関連する単語 (*saint*)、(3) 慣用句また構成語のいずれとも意味的に関連のない単語 (*umbrella*)、といった 3 種類の単語を見せ、(1) ~ (3) の単語を対象に

語彙性判断 (lexical decision) を行ってもらった。その結果、予測性が (1) と (2) の反応時間に影響し、予測性の高い慣用句は予測性の低い慣用句と比べ、慣用的意味も文字通りの意味もより速く抽出されることが分かった。

#### 2.2.4 字義性

字義性とは、慣用句の文字通りの意味が合理的であるか否かのことである。例えば、英語慣用句 *kick the bucket* は「死ぬ」という慣用的意味のほかに、「バケツを蹴る」という文字通りの意味を表すことができる。一方で、*stew in one's own juices* は慣用句として「自業自得で苦しむ」の意味を表すが、文字通りの意味「自分のジュースを煮る」は英語として不自然である (Titone & Connine 1994b)。Titone & Connine (1994a) は Cacciari & Tabossi (1988) を参考にプライミング実験を行い、慣用句が含まれている文を音声で流し、協力者に音声を聞かせながら、3 種類の単語を対象に語彙性判断を行ってもらった。この研究は、予測性という要因のほかに、字義性にも着目し、字義性も慣用句の理解過程に影響するということを主張している。

Titone & Connine (1994a) によると、予測性の高い、かつ文字通りの意味が合理的でない慣用句の場合、協力者は最後まで慣用句を聞かなくても慣用句を予測でき、慣用句が想起された時点で文字通りの意味が脳内で拒絶され、慣用句の音声最後まで流れた瞬間は慣用句的意味しか抽出されないという。それに対して、予測性の高い、かつ文字通りの意味が合理的である慣用句の場合、文字通りの意味は慣用的意味と同時に活性化され、慣用句の音声最後まで流れると文字通りの意味も慣用的意味も抽出される。一方、予測性の低い、かつ文字通りの意味が合理的でない慣用句の場合、協力者は最後まで慣用句を聞かないと文字通りの意味が自然である否かが分からないため、慣用句の音声最後まで流れた瞬間において文字通りの意味と慣用的意味の両方が活性化されるが、その直後に文字通りの意味が拒絶され、慣用句的意味しか抽出されない。それに対して、予測性の低い、かつ文字通りの意味が合理的である慣用句の場合、文字通りの意味と慣用的意味と同時に活性化され、慣用句の音声流れた後でも、文字通りの意味と慣用的意味の両方が残る。

## 2.3 L1 慣用句の認知処理

### 2.3.1 児童を含めた発達研究

Gibbs (1991) は幼稚園児と小学生を対象に調査を行い、文脈あり・文脈なしの2つの条件において慣用句を音声で提示し、子供が正しく慣用句を理解できるかを考察した。その結果、幼稚園児と小学1年生の場合、構成性の低い慣用句より構成性の高い慣用句の方が理解しやすかった。それに対して、小学生3年生と4年生は構成性の高低にかかわらず、文脈ありの条件において慣用句を正しく理解できるが、文脈なしの条件においては構成性の高い慣用句のほうが理解しやすかった。この研究は、子供にとって慣用句表現を理解することは困難であるが、慣用句的意味を理解する能力は年齢の増長によって上達し、文脈情報も慣用句の意味理解に役立つことを明らかにした。

Nippold & Rudzinski (1993) は慣用句の親密度と透明度に着目し、小学生、中学生、高校生と大学生を対象に2つの実験を行った。実験1では高校生と大学生を対象に、親密度調査と透明度調査を行うことによって、大学生は高校生より慣用句の親密度をより高く判断し、透明度をより低く判断することを明らかにした。実験2では小学生、中学生と高校生を対象に、慣用句が含まれている段落を読ませた後に、慣用句の意味を解釈してもらった。結果、年齢の増長につれ、協力者の成績が良くなることと、親密度の高い慣用句と透明度の高い慣用句は低いものより解釈しやすいことが分かった。この研究は接触の観点から、子供は年齢の増長につれ慣用句の接触機会 (exposure) が増えると同時に、慣用句を解釈する能力も高くなると主張した。

Levorato & Cacciari (1995) は小学2年生と小学4年生の子供を対象に、慣用句が含まれているストーリーを聞かせた後に、回想、選択、パラフレーズ及び文完成といった4つのタスクを行い、慣用句表現がどのように理解・産出されるかについて考察を行った。結果として、2年生は慣用句の文字通りの意味に頼るのが多いのに対し、4年生は慣用句の慣用的意味が良く理解できた。ただし、参加者の年齢にかかわらず、いずれのグループも慣用句の産出より、理解タスクの方がより良くできた。この研究において、子供の年齢の増長につれ、慣用句の慣用的意味を理解する能力が上達する一方、慣用句の産出能力はいつも理解能力に劣っていることが明らかになった。

以上の3つの研究から分かるように、児童と成人の慣用句の理解能力には差がある。児童の場合、慣用句の文字通りの意味を理解するのは容易であるが、慣用句的意味を理解す

るのは困難である。文脈情報は児童の慣用句理解に役立ち、構成性の高い慣用句と親密度の高い慣用句は児童にとって理解しやすい。

### 2.3.2 L1 成人を対象とする研究

L1 成人の慣用句認知処理について、様々な研究が行われてきた。以下では、Idiom List Hypothesis (Bobrow & Bell 1973)、Lexical Representation Hypothesis (Swinney & Cutler 1979)、Direct Access Hypothesis (Gibbs 1980)、Idiom Decomposition Hypothesis (Gibbs 他 1989)、Configuration Hypothesis (Cacciari & Tabossi 1988)、Hybrid Model (Titone & Connine 1999)、Superlemma Model (Sprenger 他 2006) といった仮説とモデルを提案した研究を紹介する。

Bobrow & Bell (1973) において、協力者は2つのグループに分かれ、1つのグループは、慣用句を含まず、文字通りの意味しか表さない4つの文を読んだ後に、5つ目の文に含まれる慣用句の意味解釈を選ぶ。もう1つのグループは、慣用句が含まれている4つの文を読んだ後に、5つ目の文に含まれる慣用句の意味解釈を選ぶ。いずれのグループにおいても、5つ目の文は意味的に中立的であり、文中に含まれている慣用句は文字通りの意味解釈と慣用的意味解釈の両方が可能である。結果から、1つ目のグループは5つ目の文に提示されている慣用句の文字通りの意味を選択する傾向があり、2つ目のグループは5つ目の文に提示されている慣用句の慣用的意味を選択する傾向があることが分かった。この結果に基づいて、Bobrow & Bell (1973) は Idiom List Hypothesis を提案し、慣用句は心内辞書において一般語彙とは別に、特別なリストに記録されていると主張した。

Swinney & Cutler (1979) は句分類タスク (Phrase Classification Task) を用いて、パソコンのスクリーンに提示されている英語動詞句が自然であるか否かを母語話者に○か×で判断してもらい、協力者の反応時間を測定した。その結果、慣用句 (*break the ice*) の反応時間はペアの一般表現 (*break the cup*) より速いことが分かった。また、慣用句の統語的固定性 (syntactic frozenness) の度合いの高低にかかわらず、すべての慣用句はペアの一般表現より処理のスピードが速い結果が示された。この研究は、Lexical Representation Hypothesis を提案した。Lexical Representation Hypothesis では、慣用句の意味は1つのまとまりとして心内辞書から直接抽出されるため、この過程は個々の語彙の意味から句全体の意味を構成するという文字通りの意味の理解より速いと考えられて

いる。

Gibbs (1980) は文字通りの意味と慣用的意味の両方を表すことができる慣用句を使用し、2つのグループに分かれた協力者に、対象となる慣用句が含まれている2種類の文脈のいずれかを読んでもらった。1つのグループが読む文脈において、慣用句は文字通りの意味しか読み取れず、もう1つのグループが読む文脈において、慣用句は慣用的意味しか読み取れない。その結果、慣用的文脈を読んだ協力者と比べ、文字通りの意味を表す文脈を読んだ協力者は文の読み時間が長かった。この研究は **Direct Access Hypothesis** を提案し、L1 慣用句の理解過程において、慣用的意味は文字通りの意味に先立って活性化され、文脈において慣用的意味が不適切である場合のみ、文字通りの意味が活性化されると主張した。**Direct Access Hypothesis** においては、慣用的意味の抽出は文字通りの意味の抽出より速いと考えられている。

その後、Gibbs 他 (1989) は慣用句の構成性の度合いが L1 慣用句の処理に影響することを指摘し、**Idiom Decomposition Hypothesis** を提案した。Gibbs 他 (1989) は Swinney & Cutler (1979) と同様の句分類タスクを用い、慣用句の構成性の度合いという要因を加えて反応時間を分析した。結果として、非構成的慣用句の反応時間は構成的慣用句より速いという予測に反して、非構成的慣用句は構成的慣用句より処理のスピードが遅い結果が示された。更に、非構成的慣用句 (*kick the bucket*) はペアとなる一般表現 (*fill the bucket*) より反応時間が遅いものに対して、構成的慣用句 (*pop the question*) の反応時間はペアとなる一般表現 (*ask the question*) より速いことが分かった。**Idiom Decomposition Hypothesis** において、構成的慣用句の反応時間が速いのは、構成語の意味が慣用句全体としての意味と関連しており、慣用的意味の抽出を促すためであるとされる。それに対して、非構成的慣用句における構成語の意味は句全体の意味と完全に関連しないため、慣用的意味の抽出が遅いと考えられている。

加え、Cacciari & Tabossi (1988) は 2.2.3 節で述べたようにプライミング実験を行い、予測性が慣用句の意味抽出に影響し、予測性の高い慣用句は予測性の低い慣用句と比べ、慣用的意味も文字通りの意味もより速く抽出されることを明らかにした。この研究によって、**Configuration Hypothesis** が提案された。更に、Tabossi 他 (2009) はイタリア語にある非構成的慣用句、構成的慣用句、文字通りの意味しか持たない高頻度の固定表現 *clichés* (イタリア語: *allacciare le cinture*—英語: *fasten the belts*) といった3種類の表現を対象に実験を行った。実験の際に、パソコンのスクリーンで各表現を提示し、協力者に表現



の意味が自然であるか否かを○か×で判断してもらった。結果、Lexical Representation Hypothesis と Idiom Decomposition Hypothesis のどちらの予測とも異なり、非構成的慣用句、構成的慣用句及び clichés のいずれもペアとなる一般表現より速く、表現の種類による反応時間の差が示されなかった。この研究は、Configuration Hypothesis を支持し、慣用句の理解が速い理由は、慣用句の親密度が一般表現より高いことにあると主張した。

また、Titone & Connine (1999) は眼球運動の実験を行い、非構成的慣用句と構成的慣用句を対象に、それぞれの慣用句が含まれている英文を協力者に読ませ、慣用句の読み速度を測定した。その結果、非構成的慣用句の場合、文脈が慣用句の後に来る条件における読み速度と比べ、文脈が慣用句より先に来る条件における読み速度のほうが遅かった。一方、構成的慣用句の場合、2つの条件の間に有意な差が見られなかった。その理由は以下のように説明されている。非構成慣用句は文字通りの意味と慣用的意味の間に関連がないため、文脈の意味と統合する際に2つの意味（文字通りの意味と慣用的意味）が競争し、慣用句の認知処理に負担がかかるのに対し、構成的慣用句は文字通りの意味と慣用的意味が関連しているため、慣用句の認知処理に負担がかからない。Titone & Connine (1999) は Hybrid Model というモデルを提案し、慣用句の理解過程において、個々の構成語の意味から句全体の意味を合成するという構成的処理と、心内辞書から慣用的な意味を直接抽出するという非構成的処理が両方行われていると主張した。

Hybrid Model を踏まえ、Sprenger 他 (2006) は産出を中心に、プライミングの手法を用いて3つの産出実験を行った。実験対象となる慣用句は全部で16個である。1つ目の実験において、対象となる慣用句はそれぞれ主語（人名）がついた文に含まれており、協力者には事前に全ての文を記憶することが求められた。そして、産出タスクの際に、協力者は慣用句（例：*viel buiten de boot*。文字通りの意味：船から落ちる；慣用的意味：排除される）に含まれる名詞（*boot*：船）、または慣用句と関連しない単語（*kat*：猫）の音声を聞きながら、パソコンのスクリーンに提示されたヒント（慣用句を誘導する人名）によってできるだけ早く声を出して慣用句を言うように指示された。結果として、慣用句の構成語である名詞の音声はプライミングの効果を示し、慣用句の産出を促進させた。2つ目の実験において、協力者は慣用句の構成語（*boot*：船）の意味に関連する（*auto*：車）、または構成語の発音と音韻的に類似する単語（*boon*：豆）の音声を聞きながら、パソコンのスクリーンに提示された文脈を基に慣用句を産出した。その結果、意味的刺激と音韻的刺激はいずれもプライミングの効果を示し、慣用句の産出を促進させることが分かった。

3 つ目の実験は慣用句を完成するタスクと単語の発声タスクをスイッチングすることによって、慣用句の産出において、構成語の文字通りの意味も同時に活性化することを明らかにした。Sprenger 他 (2006) は Cutting & Bock (1997) に用いられたモデルを Hybrid Model とし、Hybrid Model に修正を入れることによって、L1 慣用句の認知処理を反映する最新のモデルとして Superlemma Model (図 2-4) という L1 慣用句の認知モデルを提案した。その後、Libben & Titone (2008)、Tabossi 他 (2009) といった研究の結果も Superlemma Model を支持し、このモデルは慣用句研究において注目されるようになってきた。図 2-4 には慣用句の心内構造、そして心内構造に基づいた慣用句の産出・理解モデルが含まれている。次節では Superlemma Model における慣用句の心内構造、産出・理解過程について具体的に説明する。

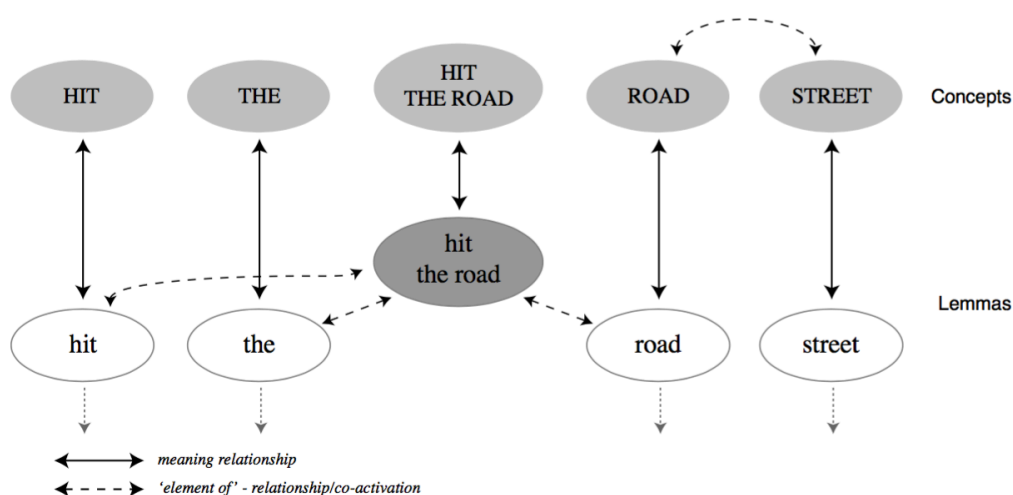


図 2-4 Sprenger 他 (2006:176) による L1 慣用句の認知モデル

### 2.3.3 Superlemma Model

図 2-4 のモデルについて説明する前に、まず一般語彙の心内構造について簡単に説明しておきたい。Roelofs (1993)、Roelofs 他 (1996) は、語彙の心内構造にはレマ (lemmas) と概念 (concepts) という 2 つの階層が含まれ、レマ階層には語彙とそれに関連する統語情報が記録されており、概念階層にはその語彙の意味が記録されていると述べている。レマと概念はそれぞれ対応しているため、心内辞書において、語彙のレマと概念が繋がっていると考えられる。英単語 road を例にすれば、レマ階層において、road という単語の形

式のほかに、road は名詞であり、複数形の場合は最後に s がつく、といった単語に関連する統語情報が記録されている。また、road という形式と対応する概念 ROAD、つまり road が表す「道路」という意味は概念階層に記録されている。一般語彙の認知処理の際、概念階層が活性化されなければ、語彙の意味を理解することができず、レマ階層が活性化されなければ、語彙形式を抽出することができない。

図 2-4 における Superlemma Model は、慣用句の心内構造に基づいた認知過程を示していると考えられる。慣用句の心内構造に関して、Sprengrer 他 (2006) は、慣用句を構成する一般語彙がレマに記録されていると同時に、慣用句は 2 つ以上の語彙から構成されている点において一般語彙と異なり、レマにおいてスーパーレマとして記録されており、慣用句の意味は一般語彙と同様に、まとまった概念として概念という階層に記録されていると主張している。図 2-4 を見ると、hit the road という慣用句に関して、構成要素 hit、the、road の形式はそれぞれレマに記録されており、hit the road は全体でスーパーレマとしてレマに記録されている。スーパーレマは一般のレマによって構成されている。それから、hit、the、road それぞれが表す意味、HIT (打つ)、THE (その)、ROAD (道路) が概念階層に記録されていると同時に、hit the road が表す意味 HIT THE ROAD (出掛ける) もまとめて概念階層に記録されている。更に、構成語が表す ROAD (道路) という概念と STREET (通り) という一般名詞が表す概念が類似しているため、概念階層において両者はリンクされており、一方が活性化された場合、もう一方も同時に活性化される。

慣用句の認知過程に関して、Sprengrer 他 (2006) は、言語の認知モデルに 2 つ逆方向のプロセスが含まれると主張している。具体的に述べると、1 つはトップダウン (概念階層からレマ階層へ) のプロセスであり、言語の産出モデルを表し、もう 1 つはボトムアップ (レマ階層から概念階層へ) のプロセスであり、理解モデルを表す。産出過程において、概念階層における HIT THE ROAD (出掛ける) の概念の活性化が一番高くなった場合、この概念が選択され、それからレマ階層における hit the road というスーパーレマの活性化が可能となる。更に、hit the road が活性化されたことによって、このスーパーレマを構成する hit、the、road それぞれのレマの活性化が可能となり、最終的に hit the road という慣用句を産出することができる。一方、理解過程では産出過程と逆方向を取るといふ。

ただし、このモデルにも問題点が残っている。Sprengrer 他 (2006) において、構成性の効果は実験項目や刺激音の与えられたタイミングによって有意な場合もあれば有意でない場合もあるため、慣用句の認知過程が構成性に影響されるか否かは今後の課題として残

されている。つまり、図 2-4 のモデルにおいて、構成性の高い慣用句と構成性の低い慣用句に違いがなく、認知過程において構成語の概念 (HIT/ROAD) の活性化は慣用句の慣用的概念 (HIT THE ROAD) の活性化と関係がない。よって、本論文の対象となる透明度という要因がどのように慣用句の認知過程に影響を与えるかもこのモデルによって説明することができない。

## 2.4 L2 慣用句の認知処理

### 2.4.1 L2 慣用句の認知処理に影響する要因

Kellerman (1977) は学習者が母語の表現を言語普遍的なもの (Language-neutral) と言語特有的なもの (Language-specific) に分け、異なるストラテジーを使用するのかを調べるために実験を行った。実験ではオランダ人英語学習者を対象に、慣用句が含まれている英語の文を協力者に読ませ、文法的に正しいかどうかを判断してもらった後に、間違いと判断する場合にはその部分に下線を引いてもらった。その結果、学習者が母語での慣用句をそのまま英語に転用することを警戒するケースが観察された。学習者は全体として慣用句を言語特有なものと考え、L1 と対応する L2 慣用句を拒否する傾向を示した。Kellerman (1982) は更に L1 語彙の転移可能性について実験を行い、オランダ人英語学習者を対象に、L2 動詞 (*break*) が用いられている複数の英語の文を協力者に読ませ、L2 動詞の用法に対する容認度判断を行ってもらった。その結果、L2 動詞の容認度は用法によって異なり、多義性を持つ L1 動詞 (*breken*) の様々な用法の中に、転移しやすいものと転移しにくいものがあることが分かった。Kellerman (1982) によると、L1 動詞の用法は中核的な用法から離れるほど有標性が高くなり、有標性の高い用法は転移が起こりにくい。Kellerman (1983) は L1 の転移が起こる条件について更に実験を行い、L1 の転移は①目標言語と母語の距離、②L1 項目の心理的典型性 (心理的有標性) に影響されると主張した。Kellerman (1983) によれば、目標言語と母語の隔たりが小さい場合、L1 の転移が起こりやすく、目標言語と母語の隔たりが大きい場合、L1 の転移が起こりにくい。また、学習者がある L1 項目を典型的 (無標) だと認識する場合、その項目は転移しやすく、学習者がある L1 項目を非典型的 (有標) だと認識する場合、その項目は転移しにくい。心理的有標性理論によれば、オランダ人英語学習者において、ある英語慣用句と形式的・意味的に類似するオランダ語慣用句が存在する場合でさえ L1 の転移が生じない理由は、慣

用句は全体として慣用的意味が発生し、個々の構成語が表す意味は語彙の中核の意味ではないため、周辺的で有標であると判断され、転移の対象から外されるためである。つまり、慣用句は学習者の認知過程において心理的有標性が高いため転移が起こりにくいと考えられる。しかし、Kellerman の一連の研究は容認度判断の結果に基づいて考察しており、学習者が実際に L2 を理解・産出する際に、L1 が転移されるか否かについては調査していない。

Irujo (1986) も L1 の転移に着目し、学習者は L1 の知識を用いて L2 慣用句を理解・産出するかについて研究を行った。この研究は、スペイン語を母語とする英語学習者を対象に、L1 慣用句との類似度 (L1 慣用句と完全に一致する/類似する/相違する) によって 3 つのグループに分けられた 45 個の慣用句を使用し、2 種類の理解テスト (意味の選択/定義の記述) と 2 種類の産出テスト (回想/翻訳) を行った。結果、理解テストにおいて、L1 と完全に一致する慣用句また L1 と類似する慣用句は同じように得点が高く、L1 と相違する慣用句は得点が有意に低かった。また、最も正解の多い慣用句は使用頻度が高く、かつ比較的透明度の高い慣用句であった。一方、産出テストにおいて、一致慣用句は類似慣用句と相違慣用句より得点が高く、類似する慣用句は L1 による負の転移が多く見られることが分かった。なお、L1 の知識を利用するか否かには個人差が見られ、言語能力の低い学習者は L1 に頼ることが多いのに対し、言語能力の高い学習者は L1 ではなく、L2 言語の知識を利用することが多いと指摘された。

Irujo (1986) に続き、Irujo (1993) と Laufer (2000) は L2 慣用句の産出を中心に研究を行った。Irujo (1993) はスペイン語を母語とする上級英語学習者を対象に、L1 慣用句との類似度 (Irujo 1986 と同様)・使用頻度・透明度の 3 つの要因に着目し、翻訳テストを用いて産出実験を行った。結果として、学習者の 3 分の 2 の解答に慣用句の使用が見られた。類似度の効果に関して、L1 と完全に一致する慣用句は一番産出されやすい結果となった。一方、L1 慣用句と類似する L2 慣用句は最も間違いやすく、L1 の負の影響を受けやすいことが分かった。更に、類似度と慣用句の産出は最も相関が高く、透明度と産出の間に相関の傾向が見られ、使用頻度は産出と相関関係を持たない結果が示された。Irujo (1993) は L2 慣用句の産出が少ない現象を回避の観点から捉え、母語話者と比べ L2 慣用句の産出が少ないのは、学習者が自信不足により、慣用句の使用を回避するためであると述べている。

Laufer (2000) は Irujo (1993) に使用された形式・意味の 2 つの基準に加え、慣用句

の分布を新たな基準として提示し、L1 表現との類似度 (L1 慣用句と完全に一致する / L1 慣用句と類似する / L1 慣用句と相違する / L1 慣用句が存在しない) によって、L2 慣用句を 4 つのグループに分類した。慣用句の分布とは、ある意味を表すために慣用句が存在するか否かのことである。L2 慣用句の意味と対応する L1 表現が文字通りの意味しか表さない場合、この表現は慣用句ではないため、慣用句が存在しないとされた。この研究はヘブライ語を母語とする英語学習者を対象に、文完成テストを用いて慣用句の産出実験を行った。結果として、一致慣用句と相違慣用句の産出率が最も高く、類似慣用句の産出率が最も低かった。L1 慣用句と L2 慣用句が類似する、また L2 慣用句と対応する L1 慣用句が存在しない場合、L2 慣用句の産出が少ないことから、Laufer (2000) はこの 2 種類の L2 慣用句は学習者にとって難易度が高く、学習者によって回避されると主張した。

また、Cooper (1999) と Ishida (2008b) は L2 慣用句の意味解釈に使用されるストラテジーに着目した。Cooper (1999) は英語学習者を対象に、発話思考法を用いて、学習者が慣用句の意味を解釈する際にどのようなストラテジーを使用するかについて考察した。実験において、慣用句は標準的な英語、インフォーマルとスラングの 3 種類に分かれ、1～2 文脈によって提示された。結果として、学習者は文脈の情報、L1 慣用句の知識などを利用して L2 慣用句を理解・解釈しようとするのが明らかになった。また、Ishida (2008b) は Cooper (1999) を参考に、日本人英語学習者を対象に発話思考法の手法を用いて実験を行った。この研究は文脈あり・なしの条件に差があるか否かに着目し、30 個の英語慣用句をそれぞれ文脈あり・なしの環境において提示した。30 個の慣用句の中に L1 と形式的・意味的に類似している慣用句 5 個と形式のみ類似している慣用句 3 個が含まれている。その結果、文脈ありの条件と比べ、「L1 を手掛かりに意味を推測する」というストラテジーの利用率は文脈なしの条件のほうが高かった。また、文脈ありの条件において、「文脈から意味を推測する」が一番利用率の高いストラテジーであることも分かった。

Ishida (2009) は日本語を母語とする英語学習者を対象に、慣用句の透明度と文脈の情報とどのように未知の慣用句の理解に影響するかについて調査を行った。この研究では透明度調査及び親密度調査の結果に基づいて、学習者にとって未知である可能性の高い 24 個の英語慣用句が選出された。その中には透明度の高い慣用句と低い慣用句が 12 個ずつ含まれていた。実験では、学習者はまず慣用句の親密度調査に参加し、その後、文脈あり・なしの 2 条件において慣用句を読んで理解し、意味解釈テスト、意味選択テスト、英語能力テストを行った。結果として、学習者の英語能力による得点の違いが見られず、解釈テ

ストと選択テストの結果が一致し、文脈あり・なしにかかわらず、透明度の高い慣用句は低い慣用句より理解・解釈しやすいことが分かった。なお、慣用句の種類に関係なく、文脈ありの条件における学習者の得点はより高かった。この研究によって、慣用句の透明度と文脈はそれぞれ学習者の理解に影響を与えるが、2つの要因は独立した効果を示すことが明らかとなった。

Aljabri (2013) は慣用句の親密度と透明度に着目し、アラビア語を母語とする大学1年生と4年生の英語学習者を対象に、親密度調査、透明度調査と理解テストを行った。この研究は理解テストにおいて、慣用句の慣用的意味を理解するのに相応しい文脈を使用し、学習者に英語の文を読ませた後に、4つの選択肢から慣用句が表す意味を選ばせた。その結果、4年生は1年生より慣用句の親密度を高く判断し、理解テストにおける成績も有意に高かった。一方、透明度判断において1年生と4年生の間に差は見られなかったが、1年生は透明度の低い慣用句より透明度の高い慣用句のほうが理解しやすいのに対し、4年生は透明度の低い慣用句と透明度の高い慣用句の両方がよく理解できた。

以上の先行研究ではL2慣用句を中心に、どのような要因がL2慣用句の理解と産出に影響するかについて検証が行われてきた。L1慣用句の転移に関しては先行研究の結果が一致しておらず、Kellerman (1977) はL1慣用句の転移が起こりにくいと主張した。それに対し、Irujo (1986)、Irujo (1993)、Laufer (2000) は、L2慣用句の産出過程においてL1慣用句の転移が見られ、L1慣用句との類似度が慣用句の産出に影響を与えると主張した。Ishida (2009) と Aljabri (2013) は類似度以外の要因に重点を置き、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解しやすいことを明らかにした。なお、Ishida (2009) において文脈情報は未知の慣用句の理解に役立つことが分かり、Aljabri (2013) において親密度と学習歴が慣用句の理解に影響することが分かった。

#### 2.4.2 L1・L2 慣用句の認知処理の比較

以下の研究は1) L1とL2慣用句の認知処理の異同、2) L2における慣用句と一般表現の認知処理の異同を明らかにすることを目的として調査を行った。

Schmitt & Underwood (2004) は英語慣用句、ことわざといった慣用表現を対象に自己ペースの読文実験を行った。結果として、学習者の読み時間は全体的に母語話者より遅く、母語話者は表現の長さに影響されないのに対し、学習者は長い表現における語彙の読

み時間が遅くなる傾向を示した。表現が長くなると、最後の語彙の読み時間が速くなるという仮説はいずれの協力者グループにおいても検証されなかった。母語話者と比べ、学習者の読み時間の分散が大きいことから、学習者の理解に影響を与える要因はより複雑であると推察された。

Conklin & Schmitt (2008) は Schmitt & Underwood (2004) に基づき、実験方法を一語一語による提示の仕方から一行一行による提示に変更し、慣用表現は一般表現より読み時間が速いという仮説を検証した。その結果、母語話者の場合、慣用句の読み時間（慣用句の意味と文字通りの意味の両方）はペアとなる一般表現より速いことが分かった。また、Schmitt & Underwood (2004) と異なり、学習者グループは母語話者グループと同じ結果を示した。つまり、この研究より、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句の認知処理は一般表現より速いことが示された。

以上の 2 つの研究の後続研究として、Siyanova-Chanturia 他 (2011) は眼球運動 (eye-tracking) を用いた読文実験を行うことによって、L1 と L2 における慣用句処理について再検討した。結果から、母語話者の場合、慣用句の読み時間（慣用的意味と文字通りの意味の両方）はペアとなる一般表現より速いことが分かった。一方、学習者の場合、慣用句（慣用的意味）の読み時間が最も遅かった。学習者の慣用句処理（慣用的意味）が遅い理由として、学習者の場合、心内辞書における慣用句の形式と慣用的意味との間のリンクは母語話者ほど強くないため、慣用句は 1 つのまとまりとして心内辞書に貯蔵されるのではなく、慣用句の意味抽出に際して分析する時間が必要である、ということが推測された。この結果は Conklin & Schmitt (2008) において示された、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句の処理は一般表現より速いという結果と一致しない。

また、Titone 他 (2015) は英語-フランス語のバイリンガルを対象に、慣用句が含まれた英語文が自然であるか否かを判断する速さを分析した。その結果、L1 と L2 の結果が類似し、慣用句の判断時間は一般表現より遅く、親密度と言語間の類似度が慣用句の処理に影響を与えることが分かった。

## 2.5 問題提起と本論文の位置付け

2.3 で見てきたように、心内辞書における L1 慣用句の構造の一部は Superlemma Model によって明確になった。また、親密度や予測性といった要因が L1 慣用句の認知処理を促



進させることは徐々に明らかになってきたが、透明度がどのように L1 慣用句の認知処理に影響するかは未だに不明である。一方、2.4 に取り上げた L2 慣用句に関する先行研究を見ると、L1 慣用句との類似度が L2 慣用句の産出に影響し、透明度と親密度が L2 慣用句の理解に影響を与えることは明らかになってきたが、心内辞書における L2 慣用句の構造と L1 慣用句の構造が類似するか否かについて、未だに疑問が残っている。

Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model は L1 慣用句の認知処理を反映する最新のモデルであり、Libben & Titone (2008) や Tabossi 他 (2009) といった研究の結果によって支持され、現在の慣用句研究において注目されている。そのため、L1・L2 慣用句の構造が類似するか否かを明らかにするには、まずこのモデルが L2 慣用句の産出過程をどの程度説明できるかについて議論する必要がある。従って、このモデルに影響を与えると考えられる要因が、L2 慣用句の産出過程にどのような影響を与えるかについて考察する必要がある。Irujo (1993)、Laufer (2000) は L2 慣用句の産出を中心に実験を行い、母語話者と比べ L2 学習者による慣用句の産出が少ないことを指摘し、L2 慣用句の産出が少ない理由は学習者が難易度の高い慣用句を回避していることにあると主張した。しかし、この 2 つの研究において、L2 慣用句の産出と L2 慣用句の心内構造、L2 慣用句の処理モデルとどのような関連があるかについては議論が欠けている。もし L2 慣用句の構造と L1 慣用句と類似するのであれば、L2 慣用句の産出は Superlemma Model によって説明できると考えられる。この場合、Irujo (1993)、Laufer (2000) において検討された L1 慣用句との類似度のほかに、L1 慣用句の認知処理に影響する親密度も L2 慣用句の産出過程に影響を与えると予測できる。

また、慣用句の認知処理モデルをより一般化するには、L2 慣用句の産出に影響を与える要因が L2 慣用句の理解にも同様の影響を及ぼすかを明らかにしなければならない。加え、L2 慣用句の理解のみならず、L1・L2 慣用句の理解過程を比較し、L1・L2 慣用句の理解モデルに影響する要因が類似するか否かについて考察する必要がある。2.4.2 で取り上げた先行研究は L1・L2 慣用句の理解過程を比較しているが、結果において一致しないところが多かった。その理由として 2 つ考えられる。1 つ目に、慣用句の理解過程に影響すると指摘されている慣用句の親密度、予測性、字義性といった性質は、L1・L2 を比較している先行研究において統一されていない。2 つ目に、2.4.2 に挙げた先行研究はいずれも文脈を使用しており、文脈の理解しやすさが L2 慣用句の理解に大きな影響を与えた可能性があると考えられる。

更に、これまで、慣用句の意味的特徴と深く関連する透明度、または構成性がどのように慣用句の認知処理に影響するかについて、先行研究の結果は一致していない。本論文では透明度と構成性が類似すると捉えるため、その中の1つである透明度のみを対象とするが、構成性に関する先行研究も透明度の効果を考察する際の参考となるため、透明度に関する先行研究のみではなく、構成性に関する先行研究の結果についても検討する必要がある。L1 慣用句に関して、*Idiom Decomposition Hypothesis* によれば、構成的慣用句の理解が速く、非構成性慣用句の理解が遅い。それに対して、*Configuration Hypothesis* によると、慣用句の認知処理の速さは構成性ではなく、親密度と予測性によって説明できる。一方、*Sprenger* 他 (2006) によると、構成性の効果は実験項目によって異なるため、慣用句の認知処理において構成性がどのように影響するかは不明確となっているという。先行研究間の結果の相違に関して、2つの理由が考えられる。1つ目は、それぞれの研究が使用した慣用句項目は親密度、予測性、字義性といった性質において統一されていないことである。例えば、*Gibbs* 他 (1989) は慣用句の予測性と字義性を統一しておらず、*Sprenger* 他 (2006) は慣用句の親密度と予測性を統一していない。2つ目は、それぞれの研究は文脈を使用するか否かによって異なることである。*Gibbs* 他 (1989)、*Tabossi* 他 (2009) は文脈を使用していないのに対し、*Gibbs* (1980)、*Cacciari & Tabossi* (1988)、*Titone & Connine* (1999) は文脈を使用している。L2 慣用句に関して、*Irujo* (1993) では透明度が L2 慣用句の産出に影響を与えないという結果が出ているのに対し、*Ishida* (2009)、*Aljabri* (2013) では透明度が L2 慣用句の理解に影響するという結果となっている。その相違を考える際に、*Irujo* (1993) において透明度調査の対象に問題があった可能性がある<sup>12</sup>。以上をまとめると、慣用句の認知処理における透明度の効果について更なる研究が必要であり、*Superlemma Model* をより一般化するには、透明度がどのように認知モデルに影響するかを解明する必要がある。

なお、慣用句の認知処理における透明度の効果を明らかにする前に、1つ考えなければならぬことがある。*Gibbs* (1987) と伊藤 (1997) が指摘しているように、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高いか低いかの判断について、言語使用者の間に個人差が見られる。この個人差が偶然なものなのか、それとも慣用句の性質によるものなのかについて検討する必要がある。もし透明度判断の個人差は何らかの要因によって影響される場合、その要因も慣用句の認知処理に影響すると考えなければならない。

---

<sup>12</sup> この点に関しては第4章と第5章の議論を参照されたい。

以上を踏まえ、本論文は以下の 3 つの課題を設定し、L1・L2 慣用句の認知処理に影響する要因を明らかにすることによって、心内辞書における慣用句の構造をより明確にし、心内構造に基づいた慣用句の認知モデルを更に一般化することを目的とした。

- ① Irujo (1993)、Laufer (2000) を基に、L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度、親密度を中心に、L2 慣用句の産出に影響を与える要因を明らかにする。更に、L2 慣用句の産出過程が Superlemma Model によって説明されるか否かについて検討し、類似度・透明度・親密度の要因が L2 慣用句の産出過程に影響を及ぼす場合、それぞれが産出モデルのどの部分に影響するかについて考察する。
- ② 慣用句の透明度、親密度を中心に、L1・L2 慣用句の理解に影響を与える要因を明らかにする。また、透明度・親密度の要因が L2 慣用句の理解過程に影響を及ぼす場合、それぞれが理解モデルのどの部分に影響するかについて考察し、慣用句の産出過程と比較することによって、理解・産出は同一の認知モデルによって解釈できるか否かを明らかにする。
- ③ 慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにすることによって、一般表現と区別する慣用句の意味的性質がどのように慣用句の心内構造に反映され、どのように慣用句の認知モデルに影響を及ぼすかを明確にする。

慣用句の認知過程は複雑であり、透明度、構成性、親密度、予測性、字義性といった要因に影響されるが、本論文では透明度、親密度、L1 と L2 慣用句の類似度を中心に研究を行った。透明度に着目する理由は、透明度が慣用句の意味的特徴を反映するものであり、慣用句研究の中で最も重要とされてきた要因の 1 つのためである。また、透明度の効果を明らかにするには、親密度の要因を同時に扱う必要がある（第 4 章の結果）。更に、Kellerman (1977) は L2 慣用句の認知処理において L1 慣用句の転移が起こりにくいと主張しているのに対して、Irujo (1986)、Irujo (1993)、Laufer (2000) は、L2 慣用句の産出過程において L1 慣用句との類似度が慣用句の産出に影響を与えると主張しているため、L2 慣用句の産出過程において L1 慣用句の転移が起こるか否かについて更なる検討が必要とされる。よって、本論文は第 5 章において L1 と L2 慣用句の類似度という要因を扱うことにした。

第 3 章では、課題①のために、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する際の意味的基準について再検討する必要があることを指摘し、驚きを表す日中慣用句を中心に、対照分

析の手法を用いて、辞書において同義とされている日中慣用句が文脈において意味的に対応するか否かについて考察を行った。

第 4 章では、慣用句の透明度判断は協力者の親密度判断によって影響されることを指摘し、第 5 章と第 6 章において透明度の効果を明らかにするには親密度の要因を同時に扱う必要があると主張した。

第 5 章では、Irujo (1993)、Laufer (2000) を基に、2 つの産出実験を行うことによって、L2 慣用句の産出を L1 慣用句と比較し、L2 慣用句の産出過程に影響を与える要因を明らかにするとともに、Superlemma Model を用いて L2 慣用句の産出過程について考察した。

第 6 章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解を対象とする自然さ判断タスクを行い、母語話者と学習者の反応時間を比較することによって、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度と透明度の効果を明らかにし、L1・L2 慣用句の理解モデルについて考察した。

第 7 章では、本論文の結果をまとめた上で本論文の意義について述べ、今後の課題と展望について述べた。

### 第3章 L1 慣用句と L2 慣用句の類似度判断基準について

#### — 驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係を中心に —

#### 3.1 はじめに

本論文の課題①を達成するために、第5章では Irujo (1993) と Laufer (2000) を基に、L1 慣用句との類似度、親密度、透明度といった3つの要因がどのようにL2 慣用句の産出過程に影響するかについて検討する。しかし、Irujo (1993) と Laufer (2000) において L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する際に、「意味的に一致する」と判断する基準が不明確である。そのため、本章では L1 慣用句と L2 慣用句の類似度の判断の意味的基準を明らかにすることを目的に調査を行った。

#### 3.2 背景と目的

##### 3.2.1 Irujo (1993) と Laufer (2000) における類似度の分類

Irujo (1993) は Irujo (1986) に使用された慣用句と同じものを実験に用いた。対象となる慣用句は全部で45個であり、L1 と L2 慣用句の形式・意味上の類似度に基づいて3つのグループに分けられた(一致慣用句15個、類似慣用句15個、相違慣用句15個)。意味的に対応するか否かについては、事前調査で23名のスペイン語母語話者と30名の英語母語話者にそれぞれの母語で慣用句の定義を書いてもらい、それを基準にした。Irujo (1993) における慣用句の分類は表3-1の通りである。

表3-1 Irujo (1986) における類似度の分類

類似度	形式(構成語)	意味
1 一致慣用句	○	○
2 類似慣用句	△	○
3 相違慣用句	×	○

以下では、各種類の慣用句の例を示す。

1 一致慣用句：英語慣用句 point of view (直訳：視野のポイント；慣用的意味：視点)

この慣用句はスペイン語慣用句 punto de vista (直訳：視野のポイント；慣用的意味：視点) と形

式的にも意味的にも一致すると判断されている。

2 類似慣用句：英語慣用句 *to lend a hand*（直訳：1 つの手を貸す；慣用的意味：人を助ける）

この慣用句はスペイン語慣用句  *echar una mano*（直訳：1 つの手を投げる；慣用的意味：人を助ける）と同じ構成語である「手」を持つため、形式的に類似し、意味的に一致すると判断される。

3 相違慣用句：英語慣用句 *to pull his leg*（直訳：足を引く；慣用的意味：人をからかう）

この慣用句はスペイン語慣用句  *tomarle el pelo*（直訳：髪の毛を取る；慣用的意味：人をからかう）と形式的に異なり、意味的に一致すると判断されている。

Laufer (2000) はヘブライ語を母語とする英語学習者を対象に、ヘブライ語表現との類似度によって英語慣用句を4つのグループに分類した。類似度を定義する際に、この研究は Irujo (1993) の基準に加え、分布という新たな基準を加えた。慣用句の分布とは、ある概念を表すために慣用句が存在するか否かのことを指す。L2 慣用句の意味と対応する L1 表現が文字通りの意味しか表さない場合、L2 慣用句と対応する L1 慣用句は存在しないと判定された。よって、グループ4において、英語慣用句と意味的に対応するヘブライ語表現は慣用句ではなく、一般表現である。Laufer (2000) において L1 慣用句と L2 慣用句が意味的に対応するか否かを判断する基準は明確に示されていない。この研究における慣用句の分類は表 3-2 の通りである。

表 3-2 Laufer (2000) における類似度の分類

類似度	分布(対象となる英語慣用句に対応するヘブライ慣用句が存在するか否か)	形式	意味
1 一致慣用句	○	○	○
2 類似慣用句	○	△	○
3 相違慣用句	○	×	○
4 一般表現	×	×	○

以下では、各種類の慣用句の例を示す。

1 一致慣用句： 英語慣用句 lay the cards on the table

(直訳：机の上にカードを置く；慣用的意味：自分の持っている技術や抱いている計画などの大事な情報を明かすこと)

この慣用句と同じ慣用的意味を表すヘブライ語表現 *lasim et ha-klafim al ha-shulxan* は慣用句であり、lay the cards on the table と同じ文字通りの意味を表し、形式的に完全に一致するとされている。

2 類似慣用句： 英語慣用句 miss the boat

(直訳：船を見逃す；慣用的意味：機会を見逃す)

この慣用句と同じ慣用的意味を表すヘブライ語表現は、文字通りの意味で「電車を見逃す」を表し、miss the boat とは形式上部分的に類似する慣用句である。

3 相違慣用句： 英語慣用句 take someone for a ride

(直訳：人を連れてドライブに行く；慣用的意味：人を欺く)

この慣用句と同じ慣用的意味を表すヘブライ語は、文字通りの意味で「誰かのために働く」を表し、take someone for a ride と形式上完全に一致しない慣用句である。

4 一般表現： it's not my cup of tea

(直訳：私のカップのお茶ではない；慣用的意味：私の好みではない)

この慣用句と同じ意味を表すヘブライ語表現は慣用句ではなく、文字通りの意味しか持たない。

Irujo (1993) と Laufer (2000) はいずれも意味的側面を L1・L2 慣用句の類似度を定義する際の重要な基準としているが、この意味的基準の判断には問題が残っていると考えられる。Laufer (2000) では L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する意味的基準は明確に示されていない。Irujo (1993) は英語母語話者とスペイン語母語話者にそれぞれの母語で書かせた慣用句の定義を基準としているが、2つの言語で書かれた定義が一致することを、L1・L2 慣用句が意味的に一致することと見做して良いか否かという点において問題がある。次節では慣用句の対照研究を取り上げる。それらの研究結果を見ると、辞書において定義が一致すると判断される L1・L2 慣用句でも、意味的に一致しない可能性があることが分かる。

### 3.2.2 慣用句の対照研究

Dobrovolskij & Piirainen (2005:65-78) は英語、ドイツ語とロシア語慣用句を対象に、L1 慣用句と L2 慣用句が一致するか否かを判断する際には、意味的・統語的・語用的といった3つの基準から分析する必要があると主張し、母語話者の直感によって意味が類似すると判断される L1 と L2 慣用句は上述の3つの側面において対応しない場合もあると述べた。L1 と L2 慣用句を比較する際に、意味的に類似する慣用句は実際の意味とイメージが異なる場合があり、慣用句の統語構造はそれぞれの言語の統語構造の異同によって異なる場合があり、慣用句の用法は文体・使用頻度・文化的要素・発話機能において異なる場合がある、といったことが主張された。

Ishida (2008a) は日英における怒りを表す慣用句(「頭にくる」「see red」など)に関して、同じ<怒り>という意味分野に属する日本語と英語の慣用句は、実は「怒り」という感情の生起の異なる局面に焦点が当たっており、それぞれ異なった意味特徴を持つことを指摘した。対象となる日英慣用句は置き換えテストによって<<anger (怒り)>>という共通の意味特徴を持っている確認がされた上で、共起テスト・置き換えテストによって<continuative (継続性)><stative (状態性)><continuative / stative (継続性/状態性)><instantaneous (瞬間性)><time before realization (実現までの時間)><gradual realization (段階的な実現)>< other-oriented (他者対象)><expressive (表出性)>といった意味特徴において区別されると主張された。つまり、「頭にくる」と「see red」のような、怒りを表す慣用句は従来の研究のように、簡単に意味的に一致すると考えてはいけなく考えられる。

また、戴 (2012) は日本語対訳版のある中国語小説を資料として、辞書において同義とされている日本語の「笑壺に入る」と中国語の“眉开眼笑”(眉 開く 目 笑う)と“喜笑颜开”(喜ぶ 笑う 顔 開く)を対象に意味分析を行い、“眉开眼笑”“喜笑颜开”は「うれしい」という意味が中心で、必ずしも「笑壺に入る」が持つ「思い通りになったり得意になったりして思わず笑みを浮かべること」の意味を表すわけではないということを主張した。ただし、戴 (2012) は中国語慣用句の意味分析に重点を置き、日本語慣用句の「笑壺に入る」に関しては辞書における意味解釈に頼り、詳しい意味分析は行わなかった。

以上の研究から、同じ事象を表す慣用句は意味的に類似する部分があるが、異なるふるまいをする場合もあることが示された。よって、辞書において定義が一致すると判断される L1・L2 慣用句でも、意味的に一致しない可能性がある。そこで、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する際に、意味的に一致するか否かの判断基準について再検討する必要があると考えられる。



### 3.2.3 本章の目的

以上より、Irujo (1993) と Laufer (2000) における類似度を判断する際の意味的基準に問題があることが分かった。つまり、L1 慣用句と L2 慣用句は基本の意味が一致しても、全ての場面において意味が一致するわけではないことが示唆される。従って、意味的対応関係の判断基準を見直した上で、表 3-1 と表 3-2 の分類について再検討する必要がある。

本章では、対照分析の手法を用いて、驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係を分析することによって、辞書において定義が一致すると判断される L1 と L2 慣用句は意味的に対応しているか否かについて検討し、L1・L2 慣用句の類似度を判断する際の意味的基準を明らかにすることを目的とした。

## 3.3 研究方法

### 3.3.1 分析対象

本章の調査では、表 3-3 に示した日本語と中国語慣用句の辞書を参考に、定義が一致すると判断される驚きの意味を表す日中慣用句を 3 ペア抽出した。分析対象となる慣用句のリストは以下の表 3-4 に示す。

表 3-3 慣用句選出の際に使用した日中慣用句辞書

日本語	中国語
『慣用句の意味と用法』—常用慣用句一覧	《分类成语词典》
『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』	《汉语成语大词典》
『成語林』	《中国成语大辞典》
	《中国惯用语大辞典》

表 3-4 本章の対象となる日中慣用句

	日本語	中国語
驚きを表す慣用句	呆気にとられる	呆若木鸡 (呆れる ように 木 鶏)
	開いた口が塞がらない	目瞪口呆 (目 大きく開く 口 呆れる)
	舌を巻く	瞠目结舌 (大きく開く 目 結ぶ 舌)

表 3-4 に示した日中慣用句の定義は以下の通りである。

呆気にとられる：意外なことに会って驚き呆れる。

呆若木鸡：形容因惊异而发愣的样子。(驚いたりしてぼかんとする様子)

開いた口が塞がらない：驚き呆れてしまい、何もものを言うことができないこと。

目瞪口呆：形容吃惊地说不出话来。(驚きでものを言うことができない)

舌を巻く：ひどく驚く。

瞠目结舌：形容十分吃惊的样子。(驚いた様子)

この 3 ペアの日中慣用句は定義が一致しているため、Irujo (1986) と Laufer (2000) と同じ基準にすれば、表 3-5 のように分類することができる。

表 3-5 Irujo (1986) と Laufer (2000) に基づいた分類

	形式	意味
呆気にとられる／呆若木鸡	△	○
舌を巻く／瞠目结舌	△	○
開いた口が塞がらない／目瞪口呆	△	○

### 3.3.2 分析方法

石田 (2003b) は、驚きを表す日本語慣用句は<プラス評価/マイナス評価><内面性/外面性><表出性>という意味特徴において区別されると主張している。もし 3.3.1 に選出された日中慣用句が完全に意味的に一致するのであれば、以上の 3 つの意味特徴においても一致すると考えられる。従って、本章では石田 (2003a,b)、Ishida (2008a) における慣用句の意味を分析する方法を参考に、3 ペアの日中慣用句が<プラス評価/マイナス評価><内面性/外面性><表出性>という意味特徴において一致するか否かについて分析を行った。分析の手順は以下の通りであった。

まず、選出された日中慣用句を同じ文脈において置き換えテストを行った。慣用句の置き換えが可能な場合は共通の意味を有すると考えられる。

次に、コーパス（BCCWJ と CCL）において日中慣用句それぞれが使用されている文脈を観察し、＜プラス評価/マイナス評価＞＜内面性/外面性＞＜表出性＞における意味的対応関係を検証するのに適切な文脈を抽出した。

コーパスから抽出された文脈と先行研究における例文を利用して、日本語と中国語が対応している例文を作成した<sup>13</sup>。作成した例文における慣用句の容認性判断を 15 人の日本語母語話者と 10 人の中国語母語話者（筆者を含む）に判断してもらった。

最後に、母語話者の判断の結果に基づいて日本語と中国語慣用句の意味的対応関係を明確にした。

### 3.4 驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係

#### 3.4.1 共通の意味

まず、分析対象の慣用句は以下の文脈(1)a と(1)b において置き換えテストを行う。

(1)a 突然目の前に巨大なロボットが現れて、私は一瞬、驚いた/舌を卷いた/呆気にとられた/開いた口が塞がらなかった。

(1)b 眼前突然出现一个巨大的机器人，在那一刹那我受了惊吓（驚いた）/呆若木鸡/目瞪口呆/瞠目结舌。

[突然目の前に巨大なロボットが現れて、私は一瞬、驚いた。]<sup>14</sup>

(1)a の場合、日本語慣用句は感情動詞の「驚く」と置き換えることができ、(1)b の場合、中国語慣用句は“受了惊吓（驚く）”と置き換えることができる。(1)a と(1)b の文脈を見れば、これらの表現は何か予測しなかったことに対して驚きの感情を表す。言い換えれば、これらの慣用句は「予測しなかった」という前提で、あるもの・ことにびっくりしたという共通の意味を表し、「驚き」の事象を表すことができるため、それぞれの定義が類似している。

しかし、以上の慣用句は全ての場面において一致するとは簡単に言えず、(1)a と(1)b の文脈においても、それぞれの慣用句が表すニュアンスに違いが生じているため、驚きの事象と言っても意味的完全に一致するか否かは不明確である。以下では石田（2003b）の結果を基に、これらの慣用句は＜プラス評価

<sup>13</sup> テストに用いられた例文には、先行研究から引用したもの、筆者が作ったものとコーパスの例文に基づいて筆者が一部に手を加えたものが含まれている。

<sup>14</sup> [ ] の日本語訳は筆者が訳したものである。日本語訳は例文の文脈を説明することが目的で、分析対象の中国語慣用句を翻訳せず、一概して「驚く」の意味で示す。

/マイナス評価><内面性/外面性><表出性>という意味特徴において対応するか否かについて分析し、それぞれの対応関係について見ていく。

### 3.4.2 <プラス評価>と<マイナス評価>における対応関係

驚きを表す日本語表現は以下のような違いが見られる。

- (2)a 太郎のコンチェルトの演奏はほとんど完璧だったから花子は驚いていた/舌を巻いていたわよ。  
(2)b 太郎のコンチェルトの演奏は間違いだらけだったから花子は驚いていた\*舌を巻いていた<sup>15</sup>わよ。

石田 (2003b) から引用

(2)a の文脈において「驚く」と「舌を巻く」の両方が用いられるのに対し、(2)b の文脈においては「舌を巻く」が用いられない。その理由として、石田 (2003b) は「舌を巻く/目を見張る/驚く」の3語は<プラス評価><マイナス評価>の意味特徴によって区別されると主張している。石田 (2003b) によると、「舌を巻く」は<+プラス評価>の意味特徴を持つため、「間違いだらけ」が表すマイナス意味と矛盾して共起できないのに対し、プラス評価を表す「完璧」と共起することができる。それに対し、「目を見張る」はプラス意味の文脈とマイナス意味の文脈と両方共起できる。そのため、<プラス評価><マイナス評価>の意味特徴においてニュートラルとされ、<±プラス評価>と<±マイナス評価><sup>16</sup>を持つと考えられる。

以下では(3)a～(6)b の例文を用いて、プラス評価及びマイナス評価の意味特徴を中心に日中慣用句の対応関係を見ていく。

- (3)a 工事後の第三ビルは大きく変わった。人々はこの派手な建物をみて、「すごい！」と舌を巻いた  
呆気にとられた\*開いた口が塞がらなかった<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> 石田 (2003b) において、\*は言えない表現を示す。

<sup>16</sup> 石田 (2003a,b) において、<+意味特徴>は当該意味特徴を有することとされ、<-意味特徴>は当該意味特徴を有しないこととされている。また、<±意味特徴>の場合は当該意味特徴を表す場合と表さない場合両方あることを指し、ニュートラルであることを表す。

<sup>17</sup> 本章における例文判断の記号は\* ? ?? 無 の4つに分かれる。

\*は言えないことを示す。

?は母語話者の判断に揺れがあった場合で、言えると判断した母語話者が言えないと判断した母語話者より多いことを示す。

- (3)b 改修后的第三大楼变了许多，所有人看到别具一格巧夺天工的大楼外观后都瞠目结舌/\*呆若木鸡/目瞪口呆。

[工事後の第三ビルは大きく変わった。人々はこの派手な建物を見て驚いた。]

- (4)a 中村は彼女の勤勉さに舌を巻いた/呆気にとられた/\*開いた口が塞がらなかった。

- (4)b 中村看到她认真学习的样子后瞠目结舌/\*呆若木鸡/目瞪口呆。

[中村は彼女の真面目な姿を見て驚いた。]

例文(3)a と(4)a で示された「派手」「勤勉さ」はプラス意味を表すため、良い刺激から引き起こされた「驚き」の文脈と考えられる。「開いた口が塞がらない」はこの 2 つの文脈において共起しにくいいため、プラス意味を表すことができず、マイナス評価しか表さないと考えられる。一方、(3)a と(4)a と対応している中国語の例文(3)b と(4)b における“别具一格（独特の風格がある）”“巧夺天工（人工の技が天然の美を越えている）”“认真（真面目である）”はプラス意味を表し、良い刺激によって驚きが生じた文脈と考えられる。“呆若木鸡”は(3)b と(4)b において使えないのはプラス意味の文脈と共起できず、<マイナス評価>しか表さないためであると考えられる。

- (5)a 丈夫そうだった第三ビルは地震でさんざんな姿になった。人々は今すぐ倒れそうな建物をみて \*舌を巻いた/呆気にとられた/開いた口が塞がらなかった。

- (5)b 原本坚实牢固的第三大楼因地震而变得四处裂缝摇摇欲坠，大家看到后瞠目结舌/呆若木鸡/目瞪口呆。

[丈夫そうだった第三ビルが地震のせいで輝だらけで倒れそうになった。みんなはそれを見て驚いた。]

- (6)a 中村は登場人物の不気味さに\*舌を巻いた/呆気にとられた/開いた口が塞がらなかった。

- (6)b 中村被书中的登场人物那可怕的样子吓得瞠目结舌/呆若木鸡/目瞪口呆。

[中村は登場人物の不気味さに驚いた。]

また、日本語の例文(5)a と(6)a で示された「さんざん」「倒れそうな」「不気味さ」はマイナス意味を表し、悪い刺激から引き起こされた「驚き」の文脈と考えられる。「舌を巻く」は(5)a と(6)a の文脈と共

---

す。

??は母語話者の判断に揺れがあった場合で、言えないと判断した母語話者が言えると判断した母語話者より多いことを示す。

記号無の場合は母語話者に揺れがなく、普通に言えることを示す。

起できないのは専ら<プラス評価>を表すためだと考えられる。これは石田 (2003b) の結果と一致している。中国語例文(5)b と(6)b において、“摇摇欲坠 (落ちそうな様子)” “可怕 (怖い)” はマイナス意味を表し、悪い刺激を示す。“呆若木鸡/目瞪口呆”は(5)b と(6)b の例文において許容度が高いことから、いずれも<マイナス評価>を表すことができると考えられる。

中国語慣用句“瞠目结舌”の場合、母語話者に揺れが見られ、10 人の中で2 人の母語話者は<プラス評価>しか表さないと判断した。しかし、残りの8 人の母語話者の判断またコーパスのデータ (例文(7)a と(7)b) を見れば、“瞠目结舌”は「乱れ」「高すぎる物価」「賄賂」といったマイナス意味を表す単語と共起することもできるため、プラス評価またはマイナス評価の意味においてはニュートラルであると考えられる。

(7)a 她所取得的好成绩令人瞠目结舌。

[人々は彼女のいい成績に驚いた。]

(7)b 他的丑陋人格更是让人瞠目结舌。

[人々は彼の醜い人格に驚いた。]

以上をまとめると、日本語慣用句「呆気にとられる」と中国語慣用句“目瞪口呆/瞠目结舌”はプラス評価・マイナス評価の両方を表せるのに対し、「開いた口が塞がらない」と“呆若木鸡”はマイナス評価しか表せず、「舌を巻く」はプラス評価しか表せない。よって、<プラス評価><マイナス評価>の意味特徴における日中慣用句の対応関係を表 3-6 にまとめることができる。

表 3-6 <プラス評価><マイナス評価>の意味特徴における日中慣用句の対応関係

	プラス評価	マイナス評価
呆気にとられる／呆若木鸡	×	○
舌を巻く／瞠目结舌	○	×
開いた口が塞がらない／目瞪口呆	×	○

「呆気にとられる」と“呆若木鸡”はマイナス意味を表す文脈において意味的に対応し、プラス意味を表す文脈においては意味的に対応しない。「開いた口が塞がらない」と“目瞪口呆”も同様に、マイナス意味を表す文脈において意味的に対応し、プラス意味を表す文脈においては意味的に対応しない。一方、「舌を巻く」と“瞠目结舌”の場合、プラス意味の文脈においては対応しているが、マイナス意味

の文脈では対応関係を持たない。

### 3.4.3 <内面性>と<外面性>における対応関係

<プラス評価>と<マイナス評価>のほかに、石田（2003b）は「舌を巻く」と「目を見張る」を<内面性>と<外面性>という意味特徴で区別した。

- (8)a この計画が立てられてからの、優子の変貌には目を見張るものがあった。
- (8)b \*この計画が立てられてからの、優子の変貌には舌を巻くものがあった。
- (9)a 太郎は花子の博識に舌を巻いた。
- (9)b \*太郎は花子の博識に目を見張った。

石田（2003b）から引用

石田（2003b）において、「目を見張る」は「博識」「暗算能力」など、内的性質を表すものと共起しにくく、目に見えるもの、つまり物事の外面的な性質や様子に対して驚くのに対し、「舌を巻く」は目に見えない能力、事物の内的性質に対して驚く。石田（2003b）はこのような意味特徴を<内面性><外面性>として設定した。驚きの原因は視覚的・体感的変化を引き起こす外部要因である場合は外面的要因として考えられ、目にも見えなく身体でも感じられない内部要因である場合は内的要因として考えられる。

以下では<内面性><外面性>の意味特徴を中心に日中慣用句の意味的対応関係について分析した。3.4.2で明らかになったように、日中慣用句は<プラス評価><マイナス評価>において区別されるため、次の分析ではまずプラス評価を表す例(10)a～(11)bの4つの例文について見ていく。なお、この4つの例文ではプラス評価を表すことができない「開いた口が塞がらない」と“呆若木鸡”を分析対象としなかった。また、例(12)a～(13)bの4つの例文について見ていくが、この4つの例文においてはマイナス評価を表すことができない「舌を巻く」を対象としなかった。

- (10)a 近年、この町は早いスピードで発展していたため、とても綺麗になった。久しぶりに帰ってきた中村は町の変貌に\*舌を巻いた呆気にとられた。

(10)b 近年来这座城市发展得十分迅速，越变越美丽。时隔多年才回来探亲的小王看到城市的巨变后目瞪口呆/目结舌。

[近年、この町は早いスピードで発展していたため、とても綺麗になった。久しぶりに帰ってきた王さんは町の様子を見て驚いた。]

(11)a 太郎は花子の博識に舌を巻いた\*呆気にとられた。

(11)b 小王的博学多识令同学们目瞪口呆/瞠目结舌。

[学生たちは王さんの博識に驚いた。]

「舌を巻く」は例文(10)aにおいて「変貌」という外面的性質を表すものと共起しにくく、例(11)aにおいて「博識」のような内的能力・性質を表す文脈と共起しやすい。それに対して、「呆気にとられる」は例文(10)aにおいて「変貌」と共起でき、例(11)aにおいて「博識」と共起できない。従って、日本語慣用句「舌を巻く」は人間の作用・能力を重視し、驚きの原因・刺激を内的に動機づけて認識することを表すため、<内面性>しか表さないと考えられる。この結果は、石田 (2003b) と一致している。一方、「呆気にとられる」は事物の外面的性質に注目し、刺激を外的に動機付け、視覚的・体感的変化として捉えるため、人の能力・性質を表す文脈と共起しにくく、<外面性>のみを表す。

中国語の場合、「目瞪口呆/瞠目结舌」は例文(10)bにおいて“城市的巨变 (町の巨大な変貌)”と共起できるだけでなく、例文(11)bにおいて“博学多识 (博識)”とも共起できる。この2つの中国語慣用句は<内面性>と<外面性>の両方を表すことができる。

(12)a 彼女は突然出てきた新キャラの物騒な姿に呆気にとられた/開いた口が塞がらなかった。

(12)b 看到新登场人物那吓人的外貌后，她瞠目结舌/呆若木鸡/目瞪口呆。

[突然出てきた新キャラの物騒な姿を見た後に、彼女は驚いた。]

(13)a 彼の不気味な考え方に花子は??呆気にとられた/開いた口が塞がらなかった。

(13)b 知道他那恐怖的想法后，小王呆若木鸡/目瞪口呆/瞠目结舌。

[彼の不気味な考え方が分かった後に、王さんは驚いた。]

また、例文(12)aと(13)aを比較してみると、「呆気にとられる」は内面性を表す「考え方」と比べ、外面的性質を表す「キャラクターの姿」のほうが共起しやすい。それに対し、「開いた口が塞がらない」は例文(12)aと(13)aの両方において使用できる。中国語の場合、「呆若木鸡/目瞪口呆/瞠目结舌」は例文(12)bと(13)bにおいて、“吓人的外貌 (物騒な姿)”と“想法 (考え方)”の両方と共起ができるため、こ



の3つの中国語慣用句は<プラス評価><マイナス評価>によっては区別されるが、<内面性><外面性>においては区別されないことが明らかになった。

以上をまとめると、日本語慣用句に関して、「開いた口が塞がらない」のみは<外面性>と<内面性>の両方を表すことができる。「呆氣にとられる」は<外面性>しか表さないのに対し、「舌を巻く」は<内面性>しか表さない。一方、中国語慣用句については、<内面性>と<外面性>においては区別されず、両方の意味を表すことができる。よって、<内面性><外面性>の意味特徴における日中慣用句の対応関係を表3-7にまとめることができる。「呆氣にとられる」と“呆若木鸡”は外面性を表す文脈において意味的に対応し、内面性を表す文脈においては意味的に対応しない。「舌を巻く」と“瞠目结舌”は逆に、内面性を表す文脈において意味的に対応し、外面性を表す文脈においては意味的に対応しない。一方、「開いた口が塞がらない」と“目瞪口呆”の場合、<内面性>と<外面性>を表す両方の文脈において対応関係を持つ。

表3-7 <内面性><外面性>の意味特徴における日中慣用句の対応関係

	内面性	外面性
呆氣にとられる／呆若木鸡	×	○
舌を巻く／瞠目结舌	○	×
開いた口が塞がらない／目瞪口呆	○	○

#### 3.4.4 <表出性>における対応関係

石田 (2003b) において、「目を見張る」は表情・動作を表すと主張されている。

(14) 璽子は不意に振り返って、暗い目を瞳ると... (『ベライ』238)

(15) 「なんで？」

とモト子さんはどんぐり眼をみはって、それでも口のほうは休みなく食べていた。(『サンデー毎日』1980.11.30, 宮地1982:225から引用)

石田 (2003b) から引用

例文(14)と(15)に関して、石田 (2003b) は「暗い」と「どんぐり」といった連体修飾語が「目」にかかっているため、この「目」は身体部位の意味を表していると解釈されると述べている。この場合、「目

を見張る」は「目を大きく開く」という人間が驚いた時によく見られる表情から驚きの意味が生じたと考えられる。そして驚きを表す際に「目」と「見張る」の文字通りの意味がまだ少し残っていると考えられる。従って、「目を見張る」は「驚き」の感情を表情・動作の変化から捉えていると考えられる。石田（2003b）はこのような意味特徴を<表出性>として設定した。以下では、「...が、表には出さなかった」という文脈を用いて置き換えテストを行い、日中慣用句の<表出性>について分析を行った。もし驚きの感情が表出されている場合、慣用句はこの文脈においては共起しにくいと考えられる。

(16a) あの時、彼は（驚きで）舌を巻いた/開いた口が塞がらなかった/呆気にとられたが、表には出さなかった。

(16b) 他那时虽然\*目瞪口呆/\*瞠目结舌/\*呆若木鸡，但表面上看起来没有任何变化。

[あの時彼は驚いたが、表から見て何の変化もなかった。]

例文(16a)と(16b)において、前半は「驚いた」という事実を描写し、後半は「その驚きを心の中に留め、表情・動作といった状態変化として見せなかった」ことを表す。結果として、日本語慣用句「舌を巻く/開いた口が塞がらない/呆気にとられる」はどちらも(16a)において共起できるのに対し、中国語慣用句“目瞪口呆/瞠目结舌/呆若木鸡”はいずれも(16b)において許容されないことが分かった。つまり、本章の対象となる3つの中国語慣用句の意味に表情・動作変化が含まれ、驚きの感情を人の表の変化として捉えているため、“表面上看起来没有任何变化（表から見て何の変化もなかった）”ことは考えられず、文の意味に矛盾が生じてしまう。

以上をまとめると、日本語慣用句「舌を巻く/開いた口が塞がらない/呆気にとられる」は全て心理状態を表し、<表出性>を持たないのに対し、中国語慣用句“目瞪口呆/瞠目结舌/呆若木鸡”はいずれも<表出性>を持っている。よって、<表出性>の意味特徴における日中慣用句の対応関係を表3-8にまとめることができる。日中慣用句の3ペアはこの意味特徴において対応関係を持たない。

表3-8 <表出性>の意味特徴における日中慣用句の対応関係

	表出性
呆気にとられる／呆若木鸡	×
舌を巻く／瞠目结舌	×
開いた口が塞がらない／目瞪口呆	×

### 3.5 考察

3.4 の分析結果をまとめると表 3-9 の通りである。表 3-9 から分かるように、定義上一致するそれぞれの日中慣用句のペアは、〈プラス評価〉/〈マイナス評価〉、〈外面性〉/〈内面性〉、〈表出性〉といった側面において対応関係が異なる。

表 3-9 本章の分析に基づいた日中慣用句の意味的対応関係

	形式	プラス評価	マイナス評価	内面性	外面性	表出性
呆気にとられる／呆若木鸡	△	×	○	×	○	×
舌を巻く／瞠目结舌	△	○	×	○	×	×
開いた口が塞がらない／目 瞪口呆	△	×	○	○	○	×

表 3-9 から見れば、驚きを表す日中慣用句は刺激をプラスにとらえるかまたはマイナスにとらえるかという評価の作用において対応関係が異なり、日本語慣用句「舌を巻く」はプラスの意味しか表せないため、「瞠目结舌」とプラス評価の文脈においては対応するが、マイナス評価の文脈においては対応しない。それに対して、「開いた口が塞がらない」はマイナスの意味しか表さないため、マイナス評価の文脈においては「目瞪口呆」と対応するが、プラス評価の文脈においては対応しない。一方、「呆気にとられる」はプラスの意味もマイナスの意味も表せるが、ペアとなる中国語慣用句“呆若木鸡”はマイナス意味しか表さないため、プラス評価の文脈においては対応関係を持たない。

表 3-5 で示したように、Irujo (1993) における類似度の分類基準を採用する場合、「呆気にとられる」と対応する“呆若木鸡”は形式的に類似し、意味的に一致すると判断される。しかし、もし(17)a の文脈を実験に使用すると、(17)b における中国語慣用句とは対応関係を持たないため、日中慣用句が意味的一致するとは言えなくなる。

(17)a 工事後の第三ビルは大きく変わった。人々はこの派手な建物をみて、「すごい！」と呆気にとられた。

(17)b 改修后的第三大楼变了许多，所有人看到别具一格巧夺天工的大楼外观后都\*呆若木鸡。

(3)a と(3)b の再掲

このように、事前に分類された L1・L2 慣用句の類似度と、実際の実験文脈における L1・L2 慣用句の類似度が異なると、学習者の産出過程における類似度の効果を明確にすることができない。また、3ペアの日中慣用句は<内面性>と<外面性>の意味特徴において対応関係が異なる。「呆氣にとられる」と「呆若木鸡」は外面性を表す文脈において意味的に対応するが、内面性を表す文脈においては意味的に対応しない。「舌を巻く」と“瞠目结舌”は逆に、内面性を表す文脈において意味的に対応し、外面性を文脈においては意味的に対応しない。一方、「開いた口が塞がらない」と“目瞪口呆”の場合、<内面性>と<外面性>を表す両方の文脈において対応関係を持つ。

更に、日本語慣用句「舌を巻く/開いた口が塞がらない/呆氣にとられる」は<表出性>を持たないのに対し、中国語慣用句“目瞪口呆/瞠目结舌/呆若木鸡”はいずれも<表出性>を持っているため、以下の例(18)a においては「舌を巻く」と“瞠目结舌”は対応関係を持たない。Irujo (1993) における類似度の分類基準を採用する場合、「舌を巻く」と対応する“瞠目结舌”は形式的に類似し、意味的に一致すると判断される。しかし、もし(18)a の文脈を実験に使用すると、(18)b において“瞠目结舌”は内心の変化のみを示す文脈の意味と共起しにくいいため、実際の産出過程では、学習者はこの文脈において“瞠目结舌”ではなく、“惊叹(驚き嘆く)”“咋舌(舌を噛む)”といった中国語表現を想起する可能性がある。このように、実験文脈によって L1・L2 慣用句の類似度が異なる場合があり、学習者の産出過程における類似度の効果を明確にするには、類似度判断の意味的基準を慣用句の定義ではなく、実際に使用される文脈における L1・L2 慣用句の意味的対応関係を基準とする必要があると考えられる。

(18)a 武蔵は左手の木刀で、胤舜の最初の突きを横に払い弾き、飛び込もうと図ったが、果たせなかった。胤舜の槍操作に、内心で舌を巻き、呻いた。

(18)b 武蔵用左手的木刀，试图把胤舜一开始的突刺横扫到一旁，然后飞身入内，但是结果还是失败了。胤舜的枪法令他不禁在内心\*瞠目结舌，呻吟了起来。

[武蔵は左手の木刀を使用して、胤舜の最初の突きを横に払い弾き、飛び込もうと図ったが、失敗した。胤舜の槍操作に、彼は内心で驚き、呻いた。]

本章で分析を行った 3 つの側面以外に、驚きを表す日中慣用句が全て対応しているとは限らない。例えば、語用論的な面において、中国語慣用句“目瞪口呆”と“瞠目结舌”は表現の硬さが異なり、前者はより口語的とされ、後者のほうはより文語的な表現とされている。ただし、本章の目的は全ての日中慣用句を区別することではなく、L1・L2 慣用句の類似度を判断する際の意味的基準を明らかにすることであるため、具体的な分析はここで割愛する。

### 3.6 まとめと今後の課題

本章では、対照分析の手法を用いて、驚きを表す 3 ペアの日中慣用句の意味的対応関係を分析することによって、辞書において定義が一致すると判断される L1 と L2 慣用句は異なる意味特徴を持つため、文脈によって対応しない場合もあることを明らかにした。更に、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する際は文脈における慣用句の意味的対応関係に基づく必要があると主張した。

本章の結果から、第 5 章において産出実験を行う際に、Irujo (1993)、Laufer (2000) と同様に、L1・L2 慣用句の類似度の判断基準を慣用句の定義にすると、定義が一致する L1・L2 慣用句でも実験に使用する文脈において意味的に対応しない可能性があることが示唆された。従って、第 5 章では Irujo (1993)、Laufer (2000) における「意味的に一致する」の判断基準に修正を入れ、慣用句の定義ではなく、「実験文脈において意味的に対応する」を類似度判断の意味的基準とした。そして、実験の前に、日本語母語話者と中国語母語話者を対象に、実験文脈において L1・L2 慣用句が意味的に対応するか否かについて判断してもらうこととした。

## 第4章 慣用句の透明度判断における親密度の影響

### ー 母語話者と学習者の比較から ー

#### 4.1 はじめに

本論文の2.5 (p34) に述べたように、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高いか低いかの判断について、言語使用者の間に個人差が見られる。この個人差は偶然なものなのか、それとも慣用句の性質によるものなのかについて検討する必要がある。もし透明度判断<sup>18</sup>の個人差が何らかの要因によって影響される場合、その要因も慣用句の認知処理に影響すると考えなければならない。従って、慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにするには (課題①②③)、まず透明度判断に影響する要因を明らかにする必要がある。

本章では、Nippold & Rudzinski (1993)、Keysar & Bly (1995)、Nippold & Taylor (2002) の結果を比較し、慣用句の透明度判断は親密度によって影響されるという予測を立てた。予測を検証するために、本章の実験では日本語慣用句を用いて、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断及び親密度判断を行ってもらった。本章は、慣用句の透明度判断における親密度の効果を明らかにし、更に母語話者と学習者の相違を明らかにすることを目的とした。

#### 4.2 先行研究と本章の仮説

##### 4.2.1 Nippold & Rudzinski (1993) と Nippold & Taylor (2002)

Nippold & Rudzinski (1993) は英語慣用句の親密度と透明度を調査するために実験を行った。この研究は英語母語話者である高校生と大学生 20 人ずつを対象に、100 個の英語慣用句について 5 段階の親密度判断タスク (1= *I have heard or read it many times before*; 5= *I have never heard or read it before*)、及び 3 段階の透明度判断タスク (1= *literal meaning and idiomatic meaning are closely related*; 3= *literal meaning and idiomatic meaning are not related*) を行った。両グループにおいて 2 つのタスクの平均を比較した結果、高校生のグループに比べ、大学生のグループは慣用句に対する親密度が高いことと、透明度が低いと判断されていることが分かった。大学生グループによる透明度判断が低かった理由として、Nippold & Rudzinski (1993) は年齢の増長につれ、大学生の慣用句の知識が深くなり、

---

<sup>18</sup> 透明度の概念に関しては 2.2.1 を参照されたい。

なおかつ脳内で慣用句の表現形式と慣用句の意味の間のリンクも一段と固定されているため、文字通りの意味へのアクセスがしにくくなったと考察している。

一方、Nippold & Taylor (2002) は透明度判断における年齢の影響を明らかにするために、Nippold & Rudzinski (1993) と同様の方法を用いて小学生 50 人と高校生 50 人を対象に、20 個の英語慣用句について 5 段階の親密度判断タスク及び 3 段階の透明度判断タスクを行った。両グループにおいてこの 2 つのタスクの平均を比較した結果、高校生グループの親密度は小学生グループと比べ有意に高かったが、透明度判断において 2 つのグループの間に有意な差は見られなかった。なお、両グループともに、親密度判断タスクと透明度判断タスクの結果の間に相関関係が見られなかった。Nippold & Rudzinski (1993) において、年齢の増長につれて（高校生と大学生の比較から）慣用句の透明度判断が低くなるという結果が示されたのに対して、Nippold & Taylor (2002) においては年齢の増長（小学生と高校生の比較から）による透明度判断の差は見られなかった。後者はその理由を明らかにするために、今後は小学生、高校生と大学生の比較を通して考察するべきであると述べている。

以上の 2 つの研究には慣用句の選出、タスクのデザインに一貫性が見られ、本論文にとって大いに参考になるが、結果が一致しない部分があるため、透明度判断に影響を与える要因が明らかにされたとは言えない。Nippold & Rudzinski (1993) において、年齢の増長につれ慣用句の透明度判断が低くなる結論づけられたが、この研究は透明度と親密度を別々に比較しており、両者の相関関係については分析されていない。一方、Nippold & Taylor (2002) は親密度と透明度の相関について分析したが、両者の間に相関が見られず、年齢の増長による透明度判断の差が見られないという結果となった。Nippold & Rudzinski (1993) と結果が一致しない理由について、Nippold & Taylor (2002) は明確に述べておらず、透明度判断に影響する要因を更に検証する必要があるという課題を残した。

Nippold & Taylor (2002) において親密度と透明度の相関が見られなかった理由として、以下のことが考えられる。Nippold & Taylor (2002:386) において、抽出された 20 個の慣用句は子供にとって親密度にバリエーションがあると予測されると述べられているが、項目ごとに計算された親密度判断の平均点から見れば、予測通りに小学生グループは、20 個の慣用句に対して親密度を高く判断しているものもあれば低く判断しているものもある。それに対し、高校生グループにおける親密度の平均点は全ての項目において 3 以下であったため、慣用句の親密度にバリエーションが少ない。従って、親密度判断タスクと透明度判断タスクの結果の間に相関関係が見られなかったのは、慣用句の親密度に偏りが大きかったためではないかと考えられる。

#### 4.2.2 Keysar & Bly (1995)

Keysar & Bly (1995) は慣用句の透明度判断において学習の効果があることを明らかにするために実験を行った。この研究は、まずバイアスのかかる文脈によって、親密度の低い 12 個の英語慣用句<sup>19</sup> (*to have someone dead to rights*) の本来の意味 (*to catch someone in the act, unquestionably guilty*)、またはそれと反対になる意味 (*to convict someone in spite of unquestionable innocence*) のいずれかを 60 人の大学生 (英語母語話者) に学習させた。その後、協力者を、何も文を作らない群、学習した 2 個の慣用句を用いて 1 回文を作る群、2 回文を作る群の 3 つのグループに分けた。次に、協力者に個々の慣用句の本来の意味とそれと反対の意味の両方を提示し、それぞれの意味と慣用句の文字通りの意味との程度関連しているかについて調査を行った。結果、学習した意味のタイプ (本来の意味かそれと反対の意味か) にかかわらず、協力者は学習しなかった意味と比べ、自分が学習した意味と慣用句の文字通りの意味の間の関連性、すなわち、透明度がより高いと判定していることが分かった。また、実験中の使用頻度が上がるにつれ、学習しなかった意味の透明度が有意に減る一方、学習した意味の透明度は使用頻度によって変わらないことも分かった。

この研究において、学習した意味の透明度が高く判断されている理由として、慣用句の意味を学習する際に、協力者は文字通りの意味と慣用句全体の意味の関連性について考え、その過程において両者の間の関連性が見出され、よって透明度が高く判断されることが考えられている。また、ある慣用句の使用頻度が上がるにつれ、その慣用句が持つ慣用的な意味がより定着していき、それと反対になる意味と文字通りの意味との間のリンクが薄くなり、透明度判断は低くなっていくことが考察された。

ただし、この実験に使用された慣用句は全部で 12 個である。使用頻度の要因を検討する際、3 グループの協力者はそれぞれ、何も文を作成しなかったか、または本来の意味、またはそれと反対になる意味を用いて 1 回、または 2 回文を作成した。しかし、3 グループに用いられた慣用句の数は各グループ僅か 2 個であるという問題がある。よって、透明度判断における使用頻度の影響について更に検証する余地があると考えられる。更に、実験で設定された 0~2 回の使用頻度は日常生活における慣用句の使用頻度と比べると非常に低いため、言語話者にとって慣用句の親密度が透明度の判断に影響するか否かを探るためには使用頻度のより高いものも考慮する必要がある。この実験の結果から、協力者はある慣用句の意味を学習すれば、脳内でその意味と文字通りの意味との関連性が定着するが、学習した意味の反対の意味と文字通りの意味の関連性は徐々に薄くなっていくのに対し、学習した意味の透明度の変化の過

---

<sup>19</sup> 実験対象となった慣用句は英語慣用句辞典や 19 世紀の英小説に見られるが、現代英語話者にとっては親密度の低いものである。この実験では協力者が慣用句の本来の意味を知らないことを前提としている。



程はより遅い可能性があると考えられる。もしそうであれば、使用頻度を増やすことによって学習した意味の透明度の変化も見られるかもしれない。

### 4.2.3 本章の目的と仮説

本章は、透明度判断における親密度の効果について考察した。本章の目的は、日本語慣用句を用いて、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断タスク及び親密度判断タスクを行うことによって、慣用句の透明度判断において親密度の影響があるか否かについて検討することであった。本章の仮説は以下の通りであった。

- ① 母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の親密度は慣用句の透明度判断に影響を与える。
- ② 学習者は母語話者より慣用句の透明度を高く判断する傾向がある。

4.2.1 と 4.2.2 で述べた先行研究の結果は完全に一致しているわけではないが、Nippold & Rudzinski (1993) と Keysar & Bly (1995) は、慣用句の透明度判断の個人差について、何らかの要因に影響されている可能性があるとは指摘した。Nippold & Rudzinski (1993) は透明度における年齢の効果について検討し、大学生のほうは高校生より年齢が大きいため、慣用句の接触頻度も高校生より高く、よって、大学生と高校生の透明度判断に差が見られると主張した。一方、Keysar & Bly (1995) は慣用句の意味を学習する経験が透明度判断に影響を与えると主張した。

以上の先行研究から、協力者の年齢といい、学習経験といい、いずれも慣用句の接触頻度と関連していることが分かる。よって、慣用句の透明度判断に影響を与える最も重要な要因は、慣用句の親密度であると考えることが可能である。そこで、本章では透明度判断に親密度が影響するという仮説①を立て、実験を行った。

また、L1 慣用句と L2 慣用句を比較するために、透明度判断における母語話者と学習者の異同についても考える必要がある。管見の限り、L1・L2 慣用句の透明度を比較している研究が殆どない。一方、透明度と類似する概念である構成性<sup>20</sup>を対象に L1 と L2 慣用句を比較している研究として Abel (2003) が挙げられる。透明度は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性を指す概念であり、構成性は慣用句の構成語の意味と慣用的意味の間の関連性を示す概念である。本論文において、慣用句の文字通

---

<sup>20</sup> 構成性の概念、また構成性と透明度の相違に関する議論は 2.2.1 (p15) を参照されたい。

りの意味は構成語の意味を含んでいるため、透明度判断は構成性判断と類似すると考えられる。Abel (2003) は一方のグループの英語学習者に、190 個の動詞英語慣用句に対して構成性判断と親密判断 (7 段階) を行わせた。もう一方のグループの英語学習者には、130 個の英語慣用句 (動詞慣用句に限らない) に対して構成性判断と親密度判断 (7 段階) を行わせた。その結果、母語話者と比べ (Titone & Connine 1994b の結果と比べ)、学習者は慣用句の構成性を高く判断する傾向があり、母語話者か学習者かにかかわらず、構成性の高い慣用句は親密度も高いことが分かった。この研究に基づくと、学習者が慣用句の構成性を高く判断する理由として以下のことが考えられる：学習者にとって慣用句の使用頻度が低いいため慣用句を分析して理解する必要がある。そのため、慣用句が 1 つのまとまりとしてできておらず、構成性が高く判断されると考えられる。本章では、透明度に関しても Abel (2003) と類似する結果が出ると予測し、学習者は母語話者より慣用句の透明度を高く判断するという仮説②を立てた。

## 4.3 研究方法

### 4.3.1 調査協力者

本章では成人日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者を対象に比較を行った。Nippold & Rudzinski (1993) によると、母語話者の場合、年齢による経験の差は慣用句の親密度判断に影響を及ぼすとされている。そのため、本章は母語話者グループの協力者を選出する際に、年齢に幅があることを考慮に入れた。一方、L2 学習者は母語話者と異なり、短期間において大量の語彙を意図的に学習していると考えられることから、本章では学習者のグループにおいて年齢の幅よりも学習期間の長短、及び言語能力の高低のほうが親密度に影響すると予想された。

上述のことを踏まえ、親密度に幅が出るように、本調査は日本語母語話者 47 人 (19~48 歳, 平均年齢=34) 及び中国語を母語とする日本語学習者 46 人 (19~25 歳, 平均年齢=21 歳) を集めた。日本語母語話者はウェブ上の調査依頼サイト **Lancers**<sup>21</sup> を通して集めた。協力者の属性は、大学生、社会人、フリーター及び主婦であった。中国人日本語学習者については、中国の大学に在籍する教員を通して募集した。その協力者たちには、ウェブ上の調査依頼サイト問巻星 (**wen juan xing**)<sup>22</sup> でアンケートに解答してもらった<sup>23</sup>。中級学習者は 2 年間日本語を勉強しており、全員 N1 未取得であった。上級学習者は 3

<sup>21</sup> ウェブサイトは <http://www.lancers.jp> である。

<sup>22</sup> ウェブサイトは <http://www.sojump.com> である。

<sup>23</sup> 小比田・宮本 (2014) では、**Lancers** をサンプルモデルとして、同じ質問紙を **Lancers** と紙 (大学生) の両方で実施した結果、両者に差異が検出されず、クラウドソーシングサイトでのアンケート実施が、結果に対して特別な影響を持たないことが示唆された。

年間以上日本語学習経験があり、全員 N1 を取得していた。母語話者と学習者は両方ともウェブ上のサイトを通してアンケートの内容を見て解答した。

### 4.3.2 調査材料

#### 4.3.2.1 慣用句の選出

本章は『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』（2010）及び『慣用句・故事ことわざ・四字熟語 使いさばき辞典』（2014）の2冊から「舌が肥える/耳に入る/腹が立つ/目を通す/…<sup>24</sup>」などの45個の日本語慣用句を選出した。慣用句の選出の際に①学習者の第一言語である中国語に類似する表現がないこと、②慣用句の透明度については、透明度の高いものから低いものまでバリエーションがあること（透明度の高いと低い慣用句が半分ずつ）、③母語話者と学習者の両方にとって慣用句の親密度も高いものから低いものまでバリエーションがあること（親密度の高いと低い慣用句が半分ずつ）、以上の3つのことを考慮に入れた。

#### 4.3.2.2 意味の定義

協力者に慣用句の透明度について判断させる際に、慣用句の文字通りの意味及び全体の意味を提示する必要があったため、まずは3.3.1で選出した45個の慣用句それぞれの文字通りの意味と慣用句的な意味を定義した。慣用句の文字通りの意味は個々の構成要素の意味を組み合わせたものと考えられるため、『明鏡国語辞典 第2版』（2010）を参考に、個々の構成要素を辞典において調べ、それぞれの見出しから1番目に載っている意味を抽出した上で文字通りの意味を使用した<sup>25</sup>。例えば、「腕を振るう」の文字通りの意味を定義する際に、「腕」の文字通りの意味「人間の肩から手首までの部分」と、「振るう」の文字通りの意味「振り動かす」という2つの意味を抽出し、2つの構成要素の意味によって「人間の肩から手首までの部分を振り動かす」という文字通りの意味を定義した<sup>26</sup>。一方、慣用句的な意味に関しては

---

<sup>24</sup> 慣用句の定義について、本章は単語の二つ以上の連結体であって、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ない表現のことを言うが、「力を尽くす」のような、「力」の文字通りの意味がそのまま慣用句の意味として残っていると思われる表現もある。ただし、「力を尽くす」は慣用句として「精一杯の努力をする」というまとまった意味を持つため、本章の定義を満たしていると考えられる。

<sup>25</sup> Grant & Bauer (2004) は辞書における語彙の定義に基づいて慣用句の構成要素の文字通りの意味を定義した。

<sup>26</sup> 「腕」という単語には「能力・技術」の派生的意味もあるが、本論文は透明度を中心に研究を行うため、単語の意味の中の一番基本的なものを文字通りの意味として捉える。一方、構成性について研究する場合は、単語の派生的意味を考慮する必要があると考えられる。構成性は文字通りの意味ではなく、構成語の意味とその単語が慣用句の慣用的意味の中で担っている意味の間の関連性によって判断される。構成性を判断する際に、協力者は構成語「腕」と「振るう」の意味とそれぞれ

4.3.2.1 に述べた 2 冊の慣用句辞典から、学習者にとって理解しやすいと判断したほうを定義に用いた。更に、45 個の慣用句の中に学習者にとって親密度の低いものもあるゆえ、慣用句全体の意味をよりよく協力者に理解させるために、全部の慣用句に対して例文を提示することにした。慣用句の例文も 4.3.2.1 に述べた 2 冊の慣用句辞典から理解しやすいと判断したほうを用いた。実際にアンケートで提示した意味及び例文の具体例を 4.3.2.3 (p63) に示す。

### 4.3.2.3 アンケート

本章は Nippold & Rudzinski (1993)、Ishida (2009) 及び Aljabri (2013) を参考にアンケート調査を行った。アンケートは説明文とタスクから構成される。タスクにおいて、慣用句の文字通りの意味、全体としての意味及び例文を提示した後に、透明度判断と親密度判断<sup>27</sup>を順番に協力者に行わせた。調査に使用した説明文は付録 I (p167) を参照されたい。タスクの例を図 4-1 に示す。

協力者に透明度と親密度の概念を理解させるために、説明文ではそれぞれの概念について具体的に説明し、判断の基準を述べた。また、タスクの部分において、全ての協力者は 45 個の慣用句を同じ順番で見ながら判断を行った。アンケートの形式に関して、透明度判断タスクと親密度判断タスクを別々に実施しなかったのは、この 2 つのタスクに対して、同一の協力者の判断が必要であったためである。Lancers では 1 回のアンケートで 1 つのタスクしか公開できず、タスクに参加する協力者を制限することが難しかったため、2 つのタスクを別々にする場合、協力者を同一人に制限することができなくなる、という問題点があった。透明度判断と親密度判断の尺度に関しては、L2 学習者と母語話者の親密度判断に差があることが予測される。そのため、親密度判断において母語話者と学習者の違いがより正確に反映できるように、本章では 7 段階のスケールを用いた。更に、本章では L2 学習者のグループにおいて、親密度が上がることによって透明度判断も変わるということを考慮し、実験による親密度の影響が避けられるように、透明度判断タスクを親密度判断タスクの前に行った。全ての項目に関しては付録 II を参照されたい (p168)。

---

が「技術を発揮する」という慣用的意味の中で担っている意味との間の関連性に基づいて判断する。この場合、「腕」の意味は慣用的意味に含まれる「技術」の意味と関連すると考えられる。よって、今後は慣用句の認知処理における透明度と構成性の効果を比較し、両者の相違を明らかにする必要がある。

<sup>27</sup> 本論文は母語話者と学習者にとって既知である慣用句を対象としたため、慣用句を構成する単語も協力者にとって既知であると判断した。よって、実験協力者が慣用句の構成語をどの程度知っているか、また構成語の親密度がどれくらいあるかについては調査しなかった。ただし、第 5 章と第 6 章の議論に基づいて考えると、慣用句の心内構造には構成語のレマと概念も含まれているため、構成語の親密度が慣用句の認知処理に影響する可能性も十分考えられる。今後は慣用句全体の親密度だけではなく、慣用句を構成する単語それぞれの親密度を測定し、慣用句の認知処理に影響を与える要因について更に考察する必要があると考えられる。

(1) 腕を振るう

文字通りの意味：  
肘と手首の間を振り動かす。

慣用句としての意味：  
身につけた能力や技術を存分に発揮する。

例文：  
大勢の来客に母は喜々として料理の腕を振るった。

「腕を振るう」の文字通りの意味と慣用句としての意味の間の関連性はどれぐらいあると思われますか。

1	2	3	4	5
関連性が非常に低い				関連性が非常に高い

本調査を受ける前に、この表現を見た/聞いたことがありますか。

1	2	3	4	5	6	7
一度も見つた/聞いたことがない						よく見る/聞く

図 4-1 アンケートの例

### 4.3.3 調査手順

本章のアンケート調査は全てウェブサイト上で実施した。協力者のうち、日本語母語話者は日本語サイト Lancers を通してアンケートに解答してもらい、学習者には中国語サイト问卷星 (wen juan xing) を通して解答してもらった<sup>28</sup>。学習者に調査の内容をよく理解してもらうために、学習者のための説明文とアンケートにおける質問の部分には協力者の第一言語である中国語を用いた。アンケートにおいて、まずは説明文をスクリーンに提示し、その後タスクを実施してもらった。

<sup>28</sup> 母語話者の協力者には一定の謝金を支払い、学習者には日本語授業の一環として調査に参加してもらった。

## 4.4 結果

表 4-1 と表 4-2 は学習者と母語話者による透明度判断及び親密度判断の結果を簡単にまとめたものである。対象となった各慣用句項目のデータは付録Ⅲ (p183) を参照されたい。

表 4-1 透明度判断の結果

	人数	透明度			
		最小値	最大値	平均	標準偏差
日本語母語話者	47	1.40	4.43	2.73	0.78
日本語学習者	46	1.74	4.22	3.21	0.71

透明度判断について、学習者グループにおける 45 個の慣用句の透明度平均は 3.21 (SD=0.71) であり、透明度が一番低いと判断されたもの (1.74) は「泡を食う」と「焼き餅を焼く」で、透明度が一番高いと判断されたもの (4.22) は「力を入れる」であった。母語話者グループにおいては、全ての慣用句の透明度平均は 2.73 (SD=0.78) であり、透明度が一番低いと判断された (1.40) のは「焼き餅を焼く」で、透明度が一番高いと判断された (4.43) のは「横になる」であった。

表 4-2 親密度判断の結果

	人数	親密度			
		最小値	最大値	平均	標準偏差
日本語母語話者	47	2.26	6.81	5.68	1.00
日本語学習者	46	1.83	5.98	3.81	1.16

一方、親密度判断について、学習者グループの平均は 3.81 (SD=1.16) であり、親密度の一番低いもの (1.83) は「膝が笑う」で、親密度の一番高いもの (5.98) は「身につける」であった。母語話者グループの親密度平均は 5.68 (SD=1.00) で、親密度の一番低いもの (2.26) は「尻が長い」で、親密度の一番高いもの (6.81) は「気をつける」であった。母語話者グループに関して、45 個の慣用句に対する親密判断は選出時の予測より高かったが、親密度が低いものもあった。更に、母語話者の親密度は全体的に学習者より高いことも示された。全体的に見れば、学習者と母語話者による透明度判断と親密度判断の平均に差があるが、両グループにおける標準偏差は近いいため、選出された慣用句項目は母語話者

と学習者を比較するために適切であると考えられる。なお、本章で用いた 45 個の慣用句は学習者か母語話者かにかかわらず、透明度及び親密度にバリエーションのあるものと言える。

続いて、透明度判断における母語話者と学習者の差、また親密度の影響を明らかにするために、以下では累積ロジット混合モデルという統計手法を用いて解析を行った (Christensen 2015, Zheng 2014)。累積ロジット混合モデルを使用した理由は、分散分析や混合線形モデルと異なり、この分析手法は段階的なカテゴリデータにおける各段階の間の差が均等であることを前提としないためであった (Baayen 2008)<sup>29</sup>。本章では 5 段階評価の透明度判断を従属変数としており、スケールにおける各段階の間の差は必ずしも均等であるとは限らないと考えられた。従って、累積ロジット混合モデルを使用する必要があると考えられた。更に、累積ロジット混合モデルはランダム要因を入れることによって、協力者の個人差と項目間の差が配慮されるため、妥当性が高いと言える (Baayen 他 2008)。解析する際に、母語、親密度<sup>30</sup>及び母語と親密度の交互作用を固定効果とし、協力者と慣用句項目をランダム要因とした。また、透明度を従属変数にし、母語というカテゴリ要因に日本語母語話者 (=日) と中国人日本語学習者 (=中) の 2 水準を入れた。解析には統計ソフト R ver-3.3.0 (R Core Team 2016) を使用し、パッケージ ordinal (ver- 2015.6.28) の clmm 関数及び anova 関数を用いた。後退的選択法 (backward selection) を使用することによって以下のモデルが最尤であることが分かり、考察に用いた。解析モデルにおいて、従属変数は透明度判断の値であり、独立変数は母語 (中/日) と親密度である。

```
model <- clmm( transparency ~ first language * familiarity + (1+familiarity | subj) + (1+first language * familiarity | item), data )
```

透明度 ~ 母語 \* 親密度 + ランダム要因、データ (93 人)

表 4-3 は解析のモデルにおいて推定された固定効果の回帰係数及び p 値をまとめたものである。母語及び親密度の主効果は両方有意であり、母語\*親密度の交互作用も有意であった。1 行目にある母語=中の主効果が示すように、母語話者と比べ、学習者の透明度判断はより高かった ( $\beta=1.62$ )。3 行目にある親密度は母語話者の場合を表し、ある慣用句に対して、母語話者の親密度が 1 点上がると、透明度判断において高い数値が選択される傾向があった ( $\beta=0.25$ )。更に、3 行目の交互作用 ( $\beta=0.18$ ) が示

<sup>29</sup> 本章の内容は陳 (2016) の内容とほぼ対応しているが、陳 (2016) は解析の際に混合線形モデルを使用し、本章は累積ロジット混合モデルを使用した。5 段階評価の調査結果を分析する際に、混合線形モデルを使用する先行研究と累積ロジット混合モデルを使用する先行研究は両方見られるが、累積ロジット混合モデルの方がより適切であるという指摘がある (Baayen 2008)。本章は解析方法を変更したが、結果は陳 (2016) と一致している。

<sup>30</sup> 親密度はセンターリングした。

すように、学習者の場合、親密度が高くなるにつれ、透明度判断も高くなる上、この変化は日本語母語話者の場合よりも顕著であった ( $\beta=0.25+0.18=0.43$ )。

表 4-3 累積ロジット混合モデルによる分析結果

従属変数 = 透明度 (93人)					
変数名	回帰係数	標準誤差	z 値	p 値	
母語=中	1.62	0.24	6.65	<.001	***
親密度	0.25	0.06	4.47	<.001	***
母語中*親密度	0.18	0.06	2.94	<.01	**

p<.001 ‘\*\*\*’, p<.01 ‘\*\*’, p<.05 ‘\*’

## 4.5 考察

表 4-3 の結果から分かるように、日本語母語話者か日本語学習者かにかかわらず、慣用句の透明度判断はその慣用句に対する親密度に影響され、協力者の親密度が高くなるほど透明度判断も高くなった。従って、仮説①は検証されたと考えられる。

Keysar & Bly (1995) は 0~2 回の使用頻度を要因として、実験で学習した慣用句の使用頻度とその慣用句の意味の透明度、またそれと反対になる意味の透明度の関連性について分析を行った。その結果、使用頻度が高くなると後者は低くなるのに対し、前者は使用頻度の影響を受けなかった。この実験で用いられた慣用句は現代の英語母語話者にとって知らないものであったため、使用頻度を増やすことによって慣用句的な意味の処理を協力者の脳内で繰り返させる方法が用いられたと考えられる。しかし、日常生活で接触する慣用句に関しては、使用する時だけでなく、見たり聞いたりする際にも慣用句の意味を脳内で処理しなければならない。そして、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句を見たり聞いたりする頻度は使用する頻度よりも高いと思われる。本章の対象とした慣用句には見聞きする頻度が高いものもあるため、使用頻度だけでなく、親密度<sup>31</sup>という概念を用いて実験を行った。そして、予測通りに、親密度が高くなれば透明度判断も高くなることが明らかとなった。

透明度は慣用句の文字通りの意味と全体の意味を知っている人から見て、両者の間にどの程度の関連性があるかを表す概念である。従って、仮説①を「ある慣用句に接触する機会が増えると、その慣

<sup>31</sup> アンケートでは慣用句を見たり聞いたりする頻度を基準にしているが、慣用句を使用する際(書く/話す)もその慣用句を見たり聞いたりしていると考え、慣用句の親密度を定義する際は使用することも含め、「ある表現に遭遇する頻度」とした。



用句の文字通りの意味と全体の意味の間に高い関連性を見だしやすくなる」と解釈できる。慣用句には文字通りの意味から全体の意味を推測しにくいという特徴があるため、言語使用者が未知の慣用句に接触すると、文字通りの意味から全体の意味を理解しようとすることに困難を抱えると思われる。そのため、慣用句の意味を1つの語彙と同様に覚えなければならない。しかし、言語使用者はその慣用的な意味を覚えた後に、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味について考え、両者を関連づけることができる (Keysar & Bly 1995)。更に、今回の結果が示すように、慣用句の文字通りの意味とその慣用的な意味を関連づけるプロセスが繰り返されれば、2つの意味の関連性は次第に高まり、慣用句の透明度判断も高くなると考えられる。言い換えれば、ある言語使用者が慣用句に接触すると、その慣用句の文字通りの意味と全体の意味について分析し、両者の間の関連性を見出そうとするプロセスを経験するため、親密度が上がるにつれ、次第に透明度も高く感じるのである。

Nippold & Rudzinski (1993) は、高校生に比べて大学生が慣用句の透明度を低く判断する理由は、大学生は慣用句の意味を一層知っていることから、脳内での慣用句の表現形式と慣用句の意味の結びつきがより定着されており、文字通りの意味へアクセスしにくくなるためであると述べている。しかし、透明度と親密度の相関について分析を行っていないという点において再検討する余地があると考えられる。また、Nippold & Taylor (2002) において、親密度判断タスクと透明度判断タスクの結果の間に相関関係が見られなかったのは、慣用句の親密度に偏りが大きかったためではないかと考えられる。

次に、母語の主効果が示すように、日本語学習者は日本語母語話者より慣用句の透明度を高く判断していた。従って、仮説②も検証されたと言えよう。更に、母語と親密度の交互作用が有意であったことから、透明度判断における親密度の影響は学習者のほうが母語話者より顕著であったことが分かる。

母語話者と学習者の間の相違は、習得過程の違いによる可能性がある。具体的には、学習者グループにおいて、今回の調査に参加した協力者は全員日本への留学経験がない人であるため、日常生活で日本語に触れる機会が少なく、主に教室の中や、限られた環境の中でしか日本語を見聞きせず、十分に慣用句を使用することができなかつたと考えられる。なお、協力者は全員日本語を専攻とする学習者であり、普段から日本語の知識に関するテストや課題が課され、日本語表現に触れる際にそれらを正しく理解し、使用できることを目的に日本語を学んでいた。このような学習者は慣用句を覚えるために、意図的に慣用句の意味を分析しようとしていた可能性がある。それに対し、日本語母語話者グループは19歳以上の大学生か成人であり、日常生活で常に日本語でコミュニケーションをとっている。母語話者は学習者のような強い学習意識はなく、短期間で日本語表現を覚えるという目的も持ってい

たわけではないため、慣用句の意味を分析しようとする意識は学習者ほどではなかったと考えられる。

Schmitt (2000:120) によると、語彙の習得には2つのアプローチがある：1つは学習したい語彙の情報に集中し、努力することによって短い間で語彙を習得するというアプローチであり、もう1つは日常のコミュニケーションにおいて現れる語彙が繰り返され、時間が経つにつれて徐々に身につくというアプローチである。前者は意図的なものであり、後者は偶発的なものである。更に、語彙を意図的に学習する際に、意味情報はより注目され、理解過程においてより深く処理される。慣用句は1つの語彙と同じように全体で慣用句的な意味を表すため、慣用句の学習は語彙学習と共通していると考えられる。

まとめると、学習者は母語話者と比べ、慣用句を覚えるために、意図的に慣用句の意味について分析し、文字通りの意味との関連性を見出そうとする可能性が考えられる。従って、学習者は母語話者より透明度を高く判断する。更に、学習者は慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の関連を深く処理しているのに対し、母語話者は慣用句の意味を意図的に分析しようとするのが少なく、学習者ほど深層処理をしていない。よって、慣用句に接触するたびに、学習者は母語話者より慣用句の意味を脳内で深く処理していると考えられる。そのため、透明度判断における親密度の効果は母語話者より学習者のほうがより顕著である。ただし、学習者か母語話者かにかかわらず、個人の学習スタイルの違いによって、日常でよく日本語に接触する学習者もいれば、日本語慣用句に興味があつて、慣用句の意味を分析しようとする母語話者もいる可能性がある。

以下の図4-2は透明度判断における親密度の効果を図示したものである。慣用句「手を貸す」の場合、慣用的意味は「他人を手伝う」であり、本論文における文字通りの意味は構成語の文字通りの意味を結合させた後の「上肢を他人に使わせる」である。親密度は、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性に影響を与える。親密度が高くなると、文字通りの意味と慣用的意味の間の距離が短くなり、リンクが強くなる。なお、母語話者と比べ、学習者の場合、親密度の効果はより顕著である。

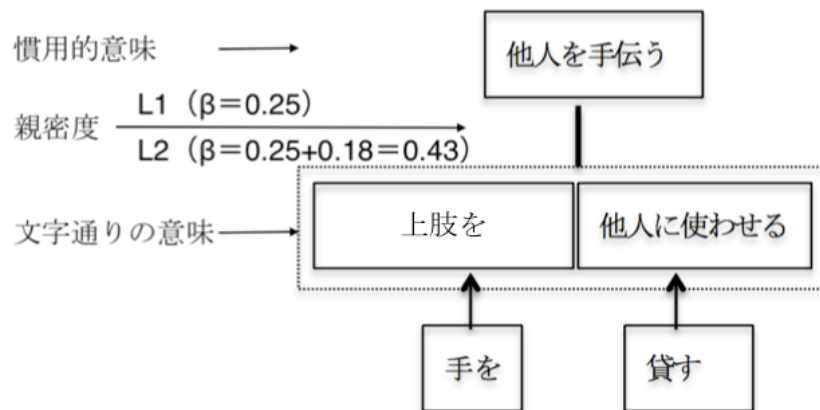


図 4-2 透明度判断における親密度の効果

最後に、本章の結果から、慣用句の透明度判断に見られる個人差は偶然なものではなく、慣用句の親密度によって影響されることが示唆された。従って、慣用句の認知処理における透明度の効果を明らかにするには、親密度の影響を考慮に入れなければならない。慣用句の親密度は言語使用者の経験と密接な関係があり、実験においてすべての慣用句の親密度を統一することは困難である。そのため、透明度を要因とする場合、親密度を同時に扱う必要があると考えられる。第 5 章と第 6 章において慣用句の産出と理解に関わる実験を行う際に、親密度の要因を除いて透明度の要因のみについて分析すると、要因の効果が現れたとしても、それが透明度によるものなのか、それとも親密度によるものなのかが分からない。親密度と透明度両方の要因を解析に入れることによって、要因の効果が現れた場合、その中の透明度と親密度それぞれの効果について考察することができる。本章の結果を踏まえ、第 5 章と第 6 章では実験に参加した協力者本人に慣用句の透明度と親密度を判断してもらい、透明度とともに、親密度の要因を解析に入れることによって、慣用句の認知処理におけるそれぞれの要因の効果を明らかにした。

#### 4.6 まとめと今後の課題

本章では、日本語母語話者と中国人日本語学習者を対象に、日本語慣用句に対する透明度判断タスク及び親密度判断タスクを行うことによって、慣用句の透明度判断において親密度の影響があるか否かについて検討し、①母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の親密度は慣用句の透明度判断に影響を与える、②学習者は母語話者より慣用句の透明度を高く判断する傾向がある、という 2 つの仮説を検証した。本章の結果から、慣用句の透明度判断における個人差は親密度に影響されることが示唆され、第 5 章と第 6 章において透明度と同時に親密度の要因を実験で扱う必要性が示された。

第3章と本章を踏まえ、第5章と第6章ではL1・L2慣用句の認知処理を中心に実験を行い、慣用句の認知モデルを用いて議論を行った。第5章では、Irujo (1993)、Laufer (2000) を基に、2つの産出実験を行うことによって、学習者と母語話者の慣用句産出率を比較し、Superlemma Model に基づいてL2慣用句の産出過程を考察した。第6章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解を対象とする自然さ判断タスクを行い、L1・L2慣用句の理解過程における親密度及び透明度の効果を明らかにし、慣用句の理解モデルについて考察した。

## 第5章 第二言語慣用句の産出に影響する要因について

### － 類似度・親密度・透明度を中心に －

#### 5.1 背景と目的

第3章ではL1とL2慣用句の類似度を判断する際の基準について検討を行い、第4章では慣用句の透明度に対する判断に影響する要因について議論してきた。本章では、第3章と第4章の議論を踏まえ、類似度、透明度、親密度といった要因がどのようにL2慣用句の産出過程に影響を与えるかについて研究を行い、Sprengrer 他 (2006) によって提案された Superlemma Model がL2慣用句の産出過程にも適合するか否かについて考察を行った。

L2慣用句の産出に焦点を当てた先行研究は主に Irujo (1993) と Laufer (2000) が挙げられる。この2つの研究は英語慣用句を対象に、母語話者なら慣用句が産出されやすい文脈を用いて、L2学習者は同じ文脈においてどの程度慣用句が産出できるかを分析し、学習者の回避という視点から考察を行った。これらの研究結果から、言語間の要因、つまりL1慣用句との類似度がL2慣用句の産出に影響することが明らかになった。しかし、これら2つの研究において、L2慣用句の産出とL2慣用句の心内構造、L2慣用句の処理モデルにどのような関連があるかについては議論が欠けている。また、言語間の要因だけでなく、言語内の要因も学習者の産出に影響を及ぼすと考えられるため (Kamimoto 他 1992, Liao & Fukuya 2004)、言語内の要因を含めてL2慣用句の産出に影響する要因を考察し、Superlemma Model と比較した上で、心内辞書におけるL2慣用句の構造を明らかにする必要がある。

そこで、本章では Irujo (1993) と Laufer (2000) を踏まえ、学習者にとって既知の日本語慣用句を対象に、母語話者なら慣用句が産出されやすい文脈を用い、母語話者の産出と学習者の慣用句産出率を比較することによって、L1慣用句との類似度、慣用句の透明度及び親密度それぞれがL2慣用句の産出過程に与える効果を検証した。また、L2慣用句の心内構造について検討し、L2慣用句の産出モデルについて考察を行った<sup>32</sup>。

---

<sup>32</sup> 本章の実験1は陳 (2015) の内容と対応しているが、陳 (2015) は回避を中心に議論を行っている。本章は慣用句の認知モデルを用いて学習者の産出について議論し、L2慣用句の産出率が低い理由は回避のみではないと考察している。本章の解析結果は陳 (2015) と一致している。

## 5.2 先行研究とその問題点

本章では慣用句の産出過程における L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度及び親密度の効果を明らかにすることが目的であるため、はじめにそれぞれの要因に関わる先行研究を紹介することにした。

Kellerman (1977) は L2 学習者が L1 を使用する際に、母語での用法をそのまま転用することを拒絶することがあると述べている。Kellerman (1982) は L1 語彙の転移可能性について更に研究を行い、L1 動詞の用法の有標性が高くなると転移が起こりにくいことを明らかにした。Kellerman (1983) は L1 の転移が①目標言語と母語の距離、②L1 項目の心理的典型性（心理的有標性）によって影響されると主張した。Kellerman の心理的有標性理論によると、慣用句は全体として慣用的意味が発生し、個々の構成語が表す意味は語彙の中核の意味ではないため、周縁的で有標であると判断され、転移の対象から外される。つまり、L1 慣用句は学習者の認知過程において転移しにくいと考えられる。ただし、Kellerman の一連の研究は容認度判断の結果に基づいて考察しており、学習者が実際に L2 を理解・産出する際に、L1 が転移されるか否かについては調査していない。

一方、Kellerman (1977)、Kellerman (1983) と異なり、Irujo (1993) と Laufer (2000) では、L1 慣用句の転移が見られた。具体的には、L1 慣用句との類似度が高くなると、言語間の転移が起こりやすい結果が示された。Irujo (1993) と Laufer (2000) は両方とも L1 慣用句との類似度は L2 慣用句の産出に影響すると考察しているが、類似度のみに着目した Laufer (2000) と異なり、Irujo (1993) は慣用句の使用頻度・透明度・L1 慣用句との類似度といった 3 つの要因から分析を行っている。3.2.1 では類似度の分類基準について検討する際に Irujo (1993)、Laufer (2000) を簡単に紹介したが、以下ではこの 2 つの研究について具体的に見ていく。

Irujo (1993) はスペイン語を母語とする上級英語学習者 12 人を対象に、L1 慣用句との類似度・使用頻度・透明度の 3 つの要因に着目し、翻訳テストを用いて L2 慣用句の産出実験を行った。英語慣用句はスペイン語慣用句との類似度によって 3 つのグループに分けられた<sup>33</sup>。グループ 1 は両言語の慣用句の表面形式が完全に一致するもの、グループ 2 は表面形式が部分的に類似しているもの、グループ 3 は表面形式が全く異なるものであった。グループ 1 の例として英語慣用句の *point of view* が挙げられ、スペイン語慣用句の *punto de vista* (*point of view*) と完全に一致するとされている。グループ 2 に挙げられた *to lend a hand* は、スペイン語慣用句 *echar una mano* (*to give a hand*) と部分的に類似している。グループ 3 の例に *to pull his leg* があり、スペイン語表現の *tomarle el pelo* (*to take to him the hair*) と

<sup>33</sup> Irujo (1993) において使用された慣用句項目と実験文は Irujo (1986) と同じものである (Irujo 1993: 208)。分類の詳細に関しては 3.2.1 (p39) を参照されたい。

異なる形式を持っている。翻訳テストでは母語話者が産出した慣用句が含まれているスペイン語の段落を英語に訳すテストであった。結果として、学習者の3分の2の解答に慣用句の使用が見られ、予測よりL2慣用句の産出率が高かった。類似度の効果に関して、グループ1の慣用句の産出率はグループ2とグループ3より高いため<sup>34</sup>、L1と完全に一致する慣用句が一番産出されやすいことが明らかとなった。一方、グループ2の慣用句が一番間違いやすく、L1の負の影響を受けやすいことが分かった。更に、類似度と慣用句の産出は最も相関が高く、透明度と産出の間に相関の傾向が見られ、使用頻度は産出と相関関係を持たないという結果が示された。

Laufer (2000) はヘブライ語を母語とする英語学習者56人を対象に、ヘブライ語慣用句との類似度の視点から英語慣用句を4つのグループ<sup>35</sup>に分類し、文完成テストと慣用句知識テストを行った。慣用句のグループ分けに関して、Laufer (2000) は Irujo (1993) と同様に表面形式と慣用句の意味を基準に用いた上で、慣用句の分布を新たな基準として提示した。慣用句の分布とは、ある概念を表すために慣用句が存在するか否かのことである。そのため、Irujo (1993) における3つのグループのほかにも、もう1つのグループが追加され、英語慣用句が表す意味と同義であるヘブライ語慣用句が存在しない場合、それらの英語慣用句はグループ4とされた。具体的に言うと、英語慣用句 *lay the cards on the table* はヘブライ語慣用句の *lasim et ha-klafim al ha-shulxan* と形式的に完全一致するため、グループ1と分類され、*miss the boat* はヘブライ語において *miss the train* と表現されるため、グループ2に分類された。グループ3に含まれている英語慣用句の *to take someone for a ride* はヘブライ語で表現すると *to work on someone* という異なる形式になり、グループ4の英語慣用句 *it's not my cup of tea* と対応するヘブライ語表現は文字通りの意味しか持たない。文完成テストにおける各グループの慣用句の使用率をみると、 $(1=3)>4>2$  という結果が得られた。言い換えれば、グループ1とグループ3の慣用句はグループ4とグループ2の慣用句より有意に多く産出され、グループ4の慣用句はグループ2の慣用句より有意に多く産出されることが分かった。

Kellerman (1977) におけるL1慣用句の転移が起こりにくいという結果に対して、Irujo (1993) と Laufer (2000) ではL1慣用句の転移が見られた。それらの結果が異なる理由について、Irujo (1993) と Laufer (2000) の実験に共通の問題点があることが考えられる。まず、Irujo (1993) は翻訳テストを用い、Laufer (2000) は文完成テストを用いたが、いずれもテストの際に実験対象となるL2慣用句と同義であるL1慣用句を示したという点において妥当性が欠けていると考えられる。これは、テストに

<sup>34</sup> この結果に関して、統計的手法が用いられていないため、グループ1とグループ2・グループ3の間に有意差があるか否かについては語られていない。

<sup>35</sup> Laufer (2000) において使用された慣用句項目の分類の詳細は3.2.1 (p39) を参照されたい。

において L2 を産出する際に、協力者は自然に母語を参照し、場合によって L1 慣用句を直接 L2 に翻訳した可能性もあり、L1 の影響を受けやすいと考えられるためである。次に、それぞれの実験では英語母語話者の産出データが収集されていない。慣用句と同じ意味を表す他の表現形式も存在するため、学習者の産出と母語話者の産出を比較した上での考察が必要である。また、Irujo (1993) において慣用句の知識がテストされていない。言い換えれば、実験で用いられた英語慣用句が協力者にとって既知のものであるか否かが検証されていない。上級学習者とはいえ、必ずしも全ての慣用句を事前から知っていたとは限らない。未知の慣用句の産出は不可能である。この点に関して、Laufer (2000) は慣用句知識テストを行ったが、単に英語慣用句を翻訳するというテスト方法で知識を確認するのは不十分と考えられる。これは、文完成テストにおいて協力者は同じ意味を表すヘブライ語慣用句を既に見ているためである。更に、第 3 章において議論したように、L2 慣用句と L1 慣用句を「意味的に一致する」と判断する際の基準に問題があると考えられる。

それから、慣用句の産出が言語内の要因によって影響されるか否かについて更に実験を行う必要がある。英語句動詞 (phrasal verb) の産出に関する研究 Liao & Fukuya (2004) は句動詞のタイプ (比喩的な意味を持つか否か) ・学習者の言語能力 (上級/中級) ・テスト種類 (選択/翻訳/回想) の 3 つの要因から考察を行った。その結果、上級学習者も中級学習者も比喩的な意味を持つ句動詞 (例: *go off*—爆発する) と比べ、文字通りの意味を表す句動詞 (例: *go away*—離れる) を多く産出していることが分かった。この研究において、文字通りの意味を表す句動詞は比喩的な意味を持つ句動詞より透明度が高いと捉えられているため、透明度の低さは句動詞の産出に影響する要因の 1 つとして考えられる。

また、Irujo (1993) において、慣用句の透明度を調査する際は母語話者を対象に、ある慣用句の意味を知らないと仮定してもらい、その慣用句の慣用的意味を推測できるか否かについて、5 段階評価 (1: 推測できない; 5: 推測できる) で判断してもらった。Irujo (1993) が扱っている透明度は母語話者の判断に基づいているが、本論の第 4 章の実験結果から分かるように、学習者と母語話者は必ずしも慣用句の透明度に対して同じ判断を行うわけではなく、話者の透明度判断は慣用句の親密度に影響される。従って、母語話者だけでなく、協力者それぞれがどのように慣用句の透明度を判断するかを調査する必要がある。また、透明度の効果を考察するために親密度の効果も考慮しなければならない。更に、Irujo (1993) は事前に母語話者を対象に、慣用句の使用頻度を 5 段階評価 (1: 使ったことがない; 5 良く使う) で測定し、その結果を用いて学習者の慣用句産出との相関関係について分析した。しかし、使用頻度は L2 慣用句の産出と相関関係を持たない結果となった。第 4 章の結果から分かるように、母語話者はある慣用句を頻繁に使用しているとしても、学習者は同様の頻度でその慣用句を使用しているとは限らないため、母語話者の使用頻度よりも、L2 学習者が実際にどの程度の頻度で慣用句形式に接触している



か、すなわち L2 慣用句の親密度について考察する必要があると考えられる。

最後に、Irujo (1993)、Laufer (2000) は母語話者より学習者の慣用句産出が少ないのは回避が原因であると主張しているが、同じ文脈において学習者が慣用句を産出しない理由は回避のみではないと考えられる。慣用句の産出過程を考察する際に、心内辞書にある慣用句がどのような構造を持っているのか、また心内辞書から慣用句が産出される際にどのようなプロセスを経るのかについて考えなければならない。更に、慣用句の産出に影響を与える要因があれば、それぞれは産出過程のどの部分に影響するかについて考察する必要もある。Sprenger 他 (2006) は母語話者を対象に慣用句の産出実験を行い、図 5-1 のように L1 慣用句の認知モデル Superlemma Model を提案した。このモデルは L1 慣用句 hit the road の心内構造に基づいた慣用句の産出過程 (概念からレマへ) と理解過程 (レマから概念へ) を示していると考えられる<sup>36</sup>。Sprenger 他 (2006) は英語慣用句を対象としているため、図 5-1 のモデルは英語慣用句の認知モデルになるが、このモデルを参考に、日本語慣用句「腹が立つ」の心内構造を図 5-2 のように示すことができると考えられる<sup>37</sup>。

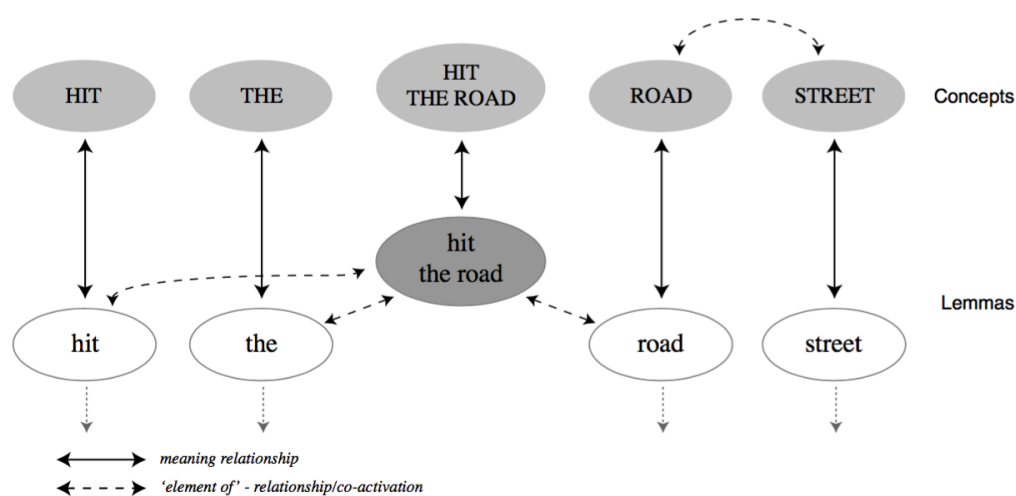
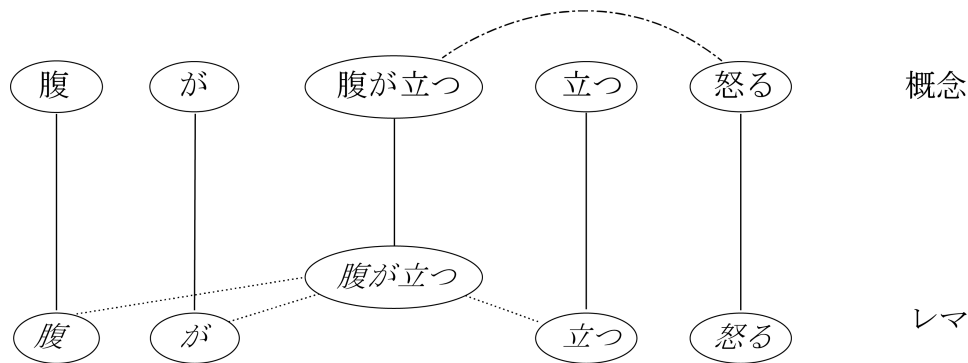


図 5-1 Sprenger 他 (2006:176) による L1 慣用句の認知モデル

<sup>36</sup> このモデルに関する詳細な説明は 2.3.3 (p28) を参照されたい。

<sup>37</sup> Sprenger 他 (2006) は意味的に類似する概念の間の関連を ROAD と STREET の間のリンクによって示しているが、本章は慣用句と、慣用句と意味的に類似する一般動詞を比較するため、意味的に類似する概念の間の関連を「腹が立つ」と「怒る」の間のリンクによって示した。



- : 意味の対応関係
- ..... : 構成する
- - - : 関連する概念

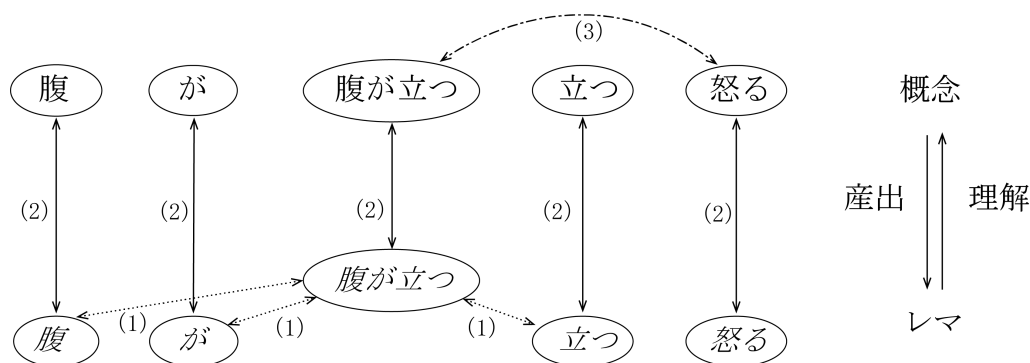
図 5-2 日本語慣用句「腹が立つ」と一般表現「怒る」の心内構造

図 5-2 が示しているように、「怒る」という一般動詞の心内構造にはレマと概念という 2 つの階層が含まれている。「怒る」という語彙に関する統語的情報はレマに記録されており、「怒る」が表す概念、つまり「怒る」の意味はレマではなく、概念階層に記録されている。「怒る<sup>38</sup>」のレマと概念は心内辞書において対応していると考えられる。「腹が立つ」という慣用句に関して、レマ階層において構成語「腹」と「立つ」のレマがそれぞれ記録されており、また、この 2 つの語彙から構成される「腹が立つ」というスーパーレマもレマ階層に記録されている。そして、「腹」と「立つ」それぞれのレマと対応している「腹（腹腔）」と「立つ（縦になる）」の意味が概念階層に記録されていると同時に、「腹が立つ」と対応している「腹が立つ（怒る）」という意味もまとめて概念階層に記録されている。更に、「腹が立つ」という慣用句が表す概念と「怒る」という一般動詞が表す概念が類似しているため、概念階層において一方が活性化された場合、もう一方も同時に活性化される。

図 5-2 で示した慣用句の心内構造に基づいて、慣用句「腹が立つ」と一般動詞「怒る」の認知モデルを図 5-3 (p77) のように示すことができる。図 5-3 では産出過程と理解過程の両方が表示されている。Sprenger 他 (2006) によると、産出過程の活性化はトップダウンのプロセスであり、「概念からレマへ」となる。よって、「腹が立つ」と「怒る」の産出過程において、まず概念階層が活性化され、その次にレマ階層が活性化されると考えられる。一般動詞の場合、言語使用者が「怒る」という概念を表そうとすると、概念階層における「怒る」の概念が高度に活性化され、その後、レマ階層における「怒る」が活

<sup>38</sup> 表記に関して、「怒る」が斜体になっている場合はレマであることを示し、「怒る」が斜体ではない場合は概念を表す。

活性化される。更に、「腹が立つ」は「怒る」と概念的に類似しているため、「怒る」という概念の活性化によって「腹が立つ」の概念も同時に活性化されると考えられる。「腹が立つ」の産出過程において、概念階層における「腹が立つ」の意味が高度に活性化され、その次に、レマ階層における「腹が立つ」のスーパーレマが活性化される。「腹が立つ」というスーパーレマの活性化によって、構成語「腹」と「立つ」のレマがそれぞれ活性化される。以上のプロセスを経て、「腹が立つ」、「腹」と「立つ」のそれぞれのレマが高度に活性化された後に、最終的に言語使用者は「腹が立つ」の形式を心内辞書から抽出することができ、「腹が立つ」という慣用句を産出することができる。更に、Sprenger 他 (2006) の実験 3 の結果が示すように、慣用句の産出において、構成語のレマの活性化と同時に、それと対応する意味も活性化される。そのため、「腹」と「立つ」のレマの活性化によってそれぞれと対応している概念も活性化される。なお、概念階層における「腹が立つ」と「怒る」が双方向になっているのは、「腹が立つ」と「怒る」のいずれの概念が活性化された場合、もう一方も同時に活性化されるためである。



- (1) <-----> 心内辞書における構成関係 / 活性化の方向性
- (2) <=====> 心内辞書におけるレマと概念の対応関係 / 活性化の方向性
- (3) <-----> 関連する概念 / 活性化の方向性

図 5-3 Superlemma Model に基づいた日本語慣用句「腹が立つ」と一般動詞「怒る」の認知モデル

以上を踏まえると、学習者による L2 慣用句の産出が少ない現象は、Irujo (1993)、Laufer (2000) が主張しているように、全て回避が原因であるとは考え難い。回避は、学習者が慣用句の使用に自信がないため、慣用句が産出できるにもかかわらず、他の代用形式を用いることである。そのため、回避が起こるためには、慣用句を産出することが可能であるという前提がある。ただし、図 5-3 のモデルによると、慣用句の産出は概念階層とレマ階層の両方が高度に活性化されてはじめて実現でき、レマ階層の活性化の度合いが低い場合はそもそも慣用句の産出ができない。本章では親密度、透明度が L2 慣用句の産出プロセスに影響を与えると予測する。この考えに基づくと、それらの要因の影響によって慣用句の

レマが活性化されなかったことが十分考えられる。このことを考慮すると、学習者が慣用句を産出しなかった理由に回避以外の要因がある可能性が浮上する。更に、慣用句の産出過程に影響を与える要因を考えると、もし類似度、親密度、透明度といった要因が慣用句の産出に影響を与えるのであれば、それぞれの要因は慣用句の認知モデルのどの部分に影響するかについて検討する必要がある。最後に、Sprenger 他 (2006) において、構成性の効果は実験項目や刺激音の与えられたタイミングによって有意な場合もあれば有意でない場合もあったため、図 5-3 のモデルにおいて構成語の概念の活性化が慣用句全体の概念の活性化に影響するか否かについて、課題が残されている。本章では、透明度という要因を扱うことによって、この課題について考察を行った。

上述の内容を踏まえ、本章は2つの実験（以下実験1、実験2）を行うことによって、L2 慣用句の産出における L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度、親密度といった3つの要因の効果を明らかにし、L2 慣用句の産出モデルについて考察を行った。慣用句項目を選出する際に、類似度、親密度、透明度といった要因を全て統一しようとしたところ、実験対象となれる慣用句の数が非常に限られてしまった。そのため、本章では実験1と実験2に分け、実験1では類似度と親密度に焦点を当て、実験2では透明度と親密度に焦点を当てた。

## 5.3 実験1

### 5.3.1 本実験の目的と仮説

実験1では母語話者なら慣用句が産出されやすい文脈を用い、母語話者と学習者を対象に選択式の産出テストを行った。実験では、テストにおける母語話者の慣用句産出率をベースとし、母語話者の産出と比較することによって、L2 慣用句の産出過程に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。実験1の仮説は以下の通りであった。

- ① 上級第二言語学習者と母語話者の産出には差が見られ、学習者の慣用句産出率は母語話者より低い。
- ② 学習者グループにおいて、類似度による産出の差が見られず、L1 慣用句との類似度は上級第二言語学習者の慣用句の産出に影響を与えない。
- ③ 学習者グループにおいて、親密度による産出の差が見られ、親密度は第二言語学習者の慣用句の産出に影響を与える。

Irujo (1993)、Laufer (2000) において L1 との類似度が慣用句の産出に影響を与えるという結果が見られたが、5.2 節で述べたように、類似度による産出の差は実験方法によって生じた差の可能性があると考えられる。つまり、Irujo (1993) において、L1 慣用句と部分的に類似する L2 慣用句が L1 の負の影響を一番受けやすかったのは、テストにおいて学習者が第一言語に書かれている慣用句を英語に直訳したためであると考えられる。Laufer (2000) の場合も同じ問題点があると考えられる。本章の実験 1 では、先行研究と異なり、選択式のテストを用い、産出テストにおいて L1 慣用句を提示しないことにした。こうすることで、実験中に協力者が L1 慣用句を直訳することが防がれ、産出過程において L1 慣用句の影響が出ないということが期待された。

また、Sprenger 他 (2006) は親密度がどのように図 5-1 (p75) のモデルに影響を与えるかについて直接触れていないが、Superlemma Model は Cacciari & Tabossi (1988) が提案した慣用句の認知モデルと類似していると主張した。更に、Cacciari & Tabossi (1988)、Tabossi 他 (2009) は、親密度が慣用句の認知処理に影響を与えると述べている。よって、親密度は図 5-4 が示しているように、Superlemma Model に影響を与えると予測される。本章では、L2 慣用句が L1 慣用句と同様の産出プロセスを経るため、L2 慣用句の産出は図 5-4 のモデルによって説明できると仮定し、慣用句の親密度は L2 慣用句の産出に影響を与えるという仮説を立てた。図 5-4 が示しているように、慣用句「腹が立つ」の産出の際に、概念階層における「腹が立つ」が先に活性化され、その次に、概念とレマを繋げているリンクを通してレマ階層における「腹が立つ」というスーパーレマが活性化される。この過程において、親密度は、概念階層とレマ階層の間のリンクに影響を与えることを通じて、慣用句の産出過程に影響を及ぼすと考えられる。

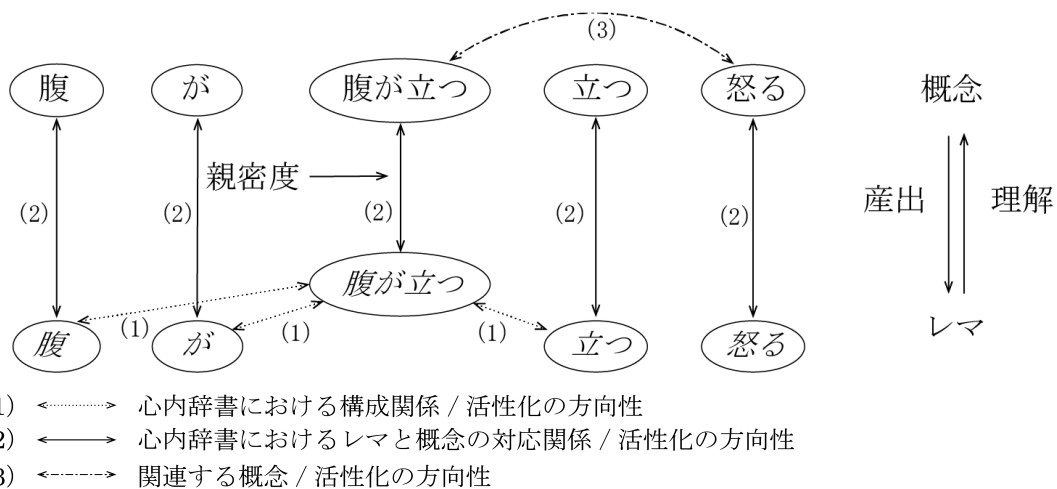


図 5-4 「腹が立つ」の産出過程における親密度の影響 (実験 1 の仮説)

最後に、Irujo (1993)、Laufer (2000) は、予測より学習者が慣用句を多く産出し、上級第二言語学習者は母語話者と同様に慣用句を産出することができると述べている。しかし、産出テストにおいて母語話者がどの程度慣用句を産出するかについて調査が行われていないため、テスト文脈において全ての母語話者が慣用句を産出するか否かが不明確であり、結果的に L1 と L2 を直接に比較することができなかつたという問題が残っている。図 5-4 に基づいて考えると、親密度が慣用句の産出に影響を与えるのであれば、学習者は母語話者より慣用句の親密度が低いと考えられるため、産出過程において母語話者より慣用句の産出がより困難であることが予測される。よって、本章では母語話者と学習者両方を対象に実験を行い、同じ文脈において学習者は母語話者より慣用句を少なく産出すると予測した。

### 5.3.2 協力者

日本語母語話者 22 名及び中国人上級日本語学習者 23 名が実験に参加した。日本語母語話者は 19 歳～27 歳の大学生・大学院生であった。中国人上級日本語学習者は 19～27 歳で、日本語能力試験 N1 (または旧 1 級) に合格し、留学経験のある (滞在時間 1 年以上) 大学生・大学院生であった。

### 5.3.3 調査材料

#### 5.3.3.1 慣用句

宮地 (1982) の『慣用句の意味と用法』に掲載されている「常用慣用句一覧」と三省堂 (2010) の『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典』から対象となる日本語慣用句を選出した。実験 1 では、表 5-1 (p81) が示すように、表現の分布・表面形式の対応関係・意味的対応関係の 3 つの基準に基づき、16 個の日本語慣用句を選出し、L1 との類似度によって、それぞれを 4 つのグループに分類した。それぞれのグループの特徴及びその中に含まれる日本語慣用句は以下の通りであった<sup>39</sup>。

グループ 1 実験文脈において日本語慣用句は中国語慣用句と形式的に対応し、意味的にも対応する。<sup>40</sup> (全力を尽くす/足を引っ張る/耳を傾ける/首を長くして待つ)

<sup>39</sup> 日本語慣用句と対応する中国語表現は付録 IV (p185) を参照されたい。

<sup>40</sup> 本章において形式的に対応するとは、L1・L2 慣用句が形式上一致するということであったが、中国語慣用句が対応する日本語慣用句の構成語を全て包含した上で余剰の部分がある場合も同形式として扱った。

例：耳を傾ける 側耳傾听 (傾ける 耳 聞く)

グループ2 実験文脈において、日本語慣用句は中国語慣用句と形式から見て部分的に類似し、意味的に対応する。(目に入る/気が短い/口を揃える/大目に見る)

グループ3 実験文脈において、日本語慣用句は中国語慣用句と形式的に異なり、意味的に対応する。(頭に来る/首にする/馬鹿にする/腹が立つ)

グループ4 実験文脈において日本語慣用句と意味的に対応する中国語慣用句は存在しない。言い換えれば、文脈において日本語慣用句と同じ意味を表現するために中国語は慣用句以外の形式を用いなければならない。(気に入る/気が変わる/口にする<sup>41</sup>/気にする)

表 5-1 中国語表現との対応関係による日本語慣用句の分類

	分布 (対象となる日本語慣用句と意味的に対応する中国語慣用句が存在するか否か)	表面形式の対応関係	実験文脈における意味的対応関係
類似度 1(4 個)	○	○	○
類似度 2(4 個)	○	△	○
類似度 3(4 個)	○	×	○
類似度 4(4 個)	×	×	○

Irujo (1993) において、L1 との類似度を判断する際の意味的基準は意味的に一致するか否かであるが、第 3 章で考察したように、辞書において同義と判断される L1・L2 慣用句でも文脈において対応しない場合がある。例えば、例文 (1) ab と (2) ab が示すように、グループ 1 と分類される日本語慣用句「首を長くして待つ」と中国語慣用句“翘首以待”は両方「期待しながら待つ」という意味を表すため辞書の定義を見ると一致しているが、文脈によって対応しない場合もある。例文(1)a と(1)b においては日中慣用句が対応しているが、例文(2)a と(2)b において日中慣用句は対応関係を持たない。

(1)a 彼らは、首を長くして、電子管開発部長の吉田進の帰りを待っていた。

江波戸哲夫 (2004) 『プレジデント』

(1)b 他们都对电子管开发部部长吉田进的回归翘首以待。

[彼らはみんな、首を長くして、電子管開発部長の吉田進の帰りを待っていた。]

<sup>41</sup> 「口にする」は「食べる」と「話す」という 2 つの意味を持つが、実験文脈においては「食べる」の意味を表す。

(2)a すでに父母は前日よりきていて、私のくるのをいまやおそしと首を長くして待っていた。

小林昌信(1993)『伝承・戦艦大和』

(2)b 我的父母前几日就已经到了，他们都在期盼/? 翘首以待我的到来。

[私の両親は前日より来ている、彼らは私の到着を期待して待っていた/? 首を長くして待っていた。]

(2)a と (2)b から分かるように、日本語では自分の到着に対して他者が期待して待っているという文脈で「首を長くして待つ」が使用できるのに対し、中国語では同じ文脈で“翘首以待”の容認度が落ちる。それに対して、(1)a と (1)b の文脈においては日本語と中国語の慣用句が対応している。第3章で述べたように、文脈を用いて実験を行う際に、文脈の影響を考えずに定義のみを類似度の判断基準とするのは妥当でないと考えられる。従って、本章では L1 慣用句との類似度を判断する際に、「実験文脈における意味的対応関係」を意味的基準とした。具体的には、実験 1 に使用する文脈において日中慣用句が対応する場合のみを意味的に一致すると判断した。第3章では L1・L2 慣用句の対応関係を明らかにするためにそれぞれの慣用句の意味特徴について分析を行ったが、本章では事前調査において各実験文脈における日中慣用句の対応関係を確認することに重点を置き、具体的な意味分析を行わなかった。

それぞれの日本語慣用句と中国語慣用句との形式的・意味的対応関係は 3 人の中国人上級日本語学習者（筆者を含む）と 1 人の日本人中国語学習者に確認してもらった。文脈における意味的対応関係に関して、以上のインフォーマント 4 人は実験文脈を読んだ後に、それぞれの日中慣用句が対応していると判断した。また、上級学習者が知っている可能性の高い慣用句のみを本実験で使用したかったため、事前調査として 5 人の中国人上級日本語学習者を対象に 4 段階評価の親密度テスト（1：一回も見た/聞いたことがない；4：よく見聞きする）を行った。結果として、16 個の慣用句それぞれの平均は 2 以上であったため、上級学習者にとって見聞きのある可能性が高いことが分かり、全て使用することにした。

### 5.3.3.2 産出テスト

実験 1 では L1 慣用句を提示せずに産出テストを行うことが必要と考えるため、以下のような選択形式の産出テストを用いた。協力者は文脈を読んだ上で、4 つの選択肢の中から 1 つを選んで文を完成しなければならなかった。その際に日本語表現が産出された。実験 1 に使用した説明文は付録 V（p186）を参照されたい。



(1) 非正規社員でも労働時間が同じなら社会保険は加入させなくてはならない。加入させなくていいのは、2ヶ月以上の雇用の見込みがない場合だけである。そう考えると、入社してからもう一ヶ月経った彼は、まだ社会保険に加入するように言われていないので、後一ヶ月以内に\_\_\_\_\_ 可能性がけっこう高い。

A 受けてもらう B 首にされる C やめさせられる D 頭に入る

選択肢の作成基準は以下の通りであった。

選択肢1：文脈に相応しい慣用句

選択肢2：文脈に相応しい慣用句でない表現

選択肢3：文脈に相応しくない慣用句（一部の構成要素は選択1と意味的に関連する）

選択肢4：文脈に相応しくない慣用句でない表現（一部の構成要素は選択肢2と意味的に関連する）

選択肢3と4は協力者に文脈の意味をよく理解してもらうために作ったダミーであり、各設問における選択肢の順番はランダムに決まった。

例(1)において、解答BとCは同じ意味を表し、いずれも文脈に相応しい解答と考えられるが、「やめさせられる」は文字通りの意味を表す一般的表現であるのに対し、「首にされる」は文字通りの意味を表さない慣用句表現である。解答AとDは意味的に間違っている解答である。協力者に「自分なら一番使いたい答えを一つのみ選んでください」と指示した。この文脈において、中国語慣用句“炒鱿鱼（文字通りの意味：イカを炒める）”は日本語慣用句「首にする」と意味的に対応している。

5.3.3.1で選出された16個の日本語慣用句をキーワードに、現代日本語書き言葉均衡コーパスBCCWJにおいて個々の慣用句が用いられている実験文を抽出し<sup>42</sup>、必要に応じて文脈に手を加えた上で16文の実験文を作った。更に、実験の目的が協力者に気づかれないように、ダミーとして日本語能力試験N1・N2の語彙リストから10語の動詞を選出し、慣用句の実験文と同じ方法でダミー一文とダミー文の選択肢を作った。テストに用いられた文の順番はランダムであった。それぞれの文脈と選択肢の妥当性は日本語母語話者3名に確認してもらった。

<sup>42</sup> コーパスから実験文を選出する際に、文脈の長さや難易度を日本語文章難易度判別システム <http://readability.net/> において調べ、文字数を95前後に統一でき、難易度が中級前半～上級前半と判断される文脈を適切だと判断した。

### 5.3.3.3 親密度調査

協力者が対象となる慣用句を知っているか否かを確認するために、産出テストの次に親密度調査を行った。(2)はその1例である。空欄のところに慣用句の意味を母語で簡単に説明するように指示した。親密度調査に用いた説明文は付録V (p186) を参照されたい。

(2) 「首にする」			
1	2	3	4
一回も聞いた/見たことがない			よく聞く/見る
「首にする」: _____			

### 5.3.4 手順

本実験は2014年12月～2015年1月の期間において、大学図書館にあるセミナー室内で実施した。協力者と筆者が1対1の環境において実験を行った場合もあれば、複数の協力者が同時に実験に参加する場合もあった。複数の協力者を対象にする際に、互いの影響を防ぐために、隣席に座らないように指示した。実験開始時に、筆者から協力者に対し最初に実験の流れについて説明し、その後、産出テストの説明を配って読んでもらった。説明が終わってから産出テストの用紙を配り、時間の制限をかけずに解答してもらった。産出テストが終わった後に、慣用句親密度調査の説明を配って説明し、それから解答用紙を与えて解答してもらった。最後に、協力者の第二言語の熟達度を確認するために個人情報確認シートに回答してもらった。学習者と母語話者を対象に行ったテストは同じ内容のものであるが、説明文の使用言語に関して、学習者には第一言語の中国語を用いて示した。以下の表5-2は実験手順をまとめたものである。

表5-2 実験1の手順

協力者	実験1
日本語母語話者/中国人上級日本語学習者	全体の説明→産出テストの説明→慣用句産出テスト→親密度調査の説明→親密度調査→個人情報確認シート

### 5.3.5 結果

結果分析に用いたデータは日本語母語話者 20 名と中国人上級日本語学習者 21 名のデータで、合計 41 名のデータであった<sup>43</sup>。

まず、各設問の採点について、選択肢 1 (慣用句) が解答として選ばれた場合、その解答に 1 をつけ、選択肢 2 (一般的表現) が選ばれた場合、0 をつけた。親密度調査の結果を分析する際に、4 段階自己評価において 1 が選ばれた慣用句を「未知」と判断し、当該の慣用句を解析する際に対象から外した<sup>44</sup>。2 以上が選ばれた場合、協力者に書いてもらった意味解釈を分析した。協力者が書いた全ての意味解釈を以下の 3 種類に分類した<sup>45</sup>。

種類 1 : 「辞書<sup>46</sup>に書いてある意味と完全に異なる」

例 : 「頭に来る」 : 注意到 (気がつく)

種類 2 : 「辞書に書いてある意味と完全には一致しないが、部分的に一致している」

例 : 「気が変わる」 : 性子变了 (気性が変わった)

種類 3 : 「辞書の意味と完全に一致する」

例 : 「腹が立つ」 : 生气 (怒る)

種類 1 に関してはその慣用句の意味を知らないと判断し、種類 2 と 3 の解答を慣用句の意味を知っていると判断した。従って、ある協力者が 4 段階評価において 2 を選んだとしても、意味解釈の際に種類 1 の解答を書いた場合は「未知」の解答と判断した。実験 1 における母語話者と学習者の親密度判断の結果を表 5-3 にまとめる。母語話者の親密度の平均は学習者より少し高いことが分かる。また、産出テストから得られた解答をそれぞれの解答と対応する慣用句の親密度を基に分類した結果を表 5-4 に示す。慣用句が未知の場合、その慣用句と対応する解答は表 5-4 に含まれない。表 5-4 の分布から分かるように、実験 1 の解析対象となる慣用句は全ての協力者にとって既知であるため、親密度の偏りが大きかった。

<sup>43</sup> 分析から外した協力者に関して、産出テストにおいて、日本語母語話者 1 人と中国人学習者 2 人がある設問を解答する際にダミーの選択肢を選んだため、当該設問において文脈を正しく理解できなかったと判断し、当該協力者の解答を全て採用しないことにした。もう 1 名の日本語母語話者は親密度テストにおいて解答漏れがあったため、慣用句知識に関しては確認できず、分析から外された。

<sup>44</sup> 例えば、ある協力者が「腹が立つ」の親密度を 1 と判断した場合、この協力者のデータから、「腹が立つ」を使用すると予測される文を解析の対象から排除した。

<sup>45</sup> この判断は筆者ともう 1 人の中国人日本語上級学習者によって行われた。

<sup>46</sup> 辞書として『デジタル大辞泉』(小学館)を使用した。

表 5-3 実験 1 の親密度判断の結果

	人数	親密度			
		最小値	最大値	平均	標準偏差
日本語母語話者	20	2.00	4.00	3.77	0.49
日本語学習者	21	1.00	4.00	3.56	0.68

表 5-4 産出における非慣用句及び慣用句の分布

	産出における非慣用句 (0) 及び慣用句 (1) の数 (%)			
	学習者 (21 人)		母語話者 (20 人)	
慣用句の親密度	0	1	0	1
2	29(8.8)	19(5.7)	4(1.3)	7(2.2)
3	21(6.3)	54(16.3)	10(3.1)	48(15.0)
4	39(11.8)	169(51.1)	53(16.6)	197(61.8)
合計	331(100)		319(100)	

次のステップで一般線形混合モデルを構築する際に、このような偏りは安定したモデルの構築を妨げると考えられ、今回は親密度 2 を 3 と合併することにした。この操作は、親密度 2 と 3 のデータにおいて親密度と類似度の交互作用が起きていないことが前提である。よって、親密度 2 と 3 の慣用句の解答における親密度と類似度の交互作用を確認するために、学習者の解答（親密度 2 と 3 のみ）を従属変数とし、親密度と類似度を独立変数とし、表 5-5 (p87) の事前解析を行った。結果、親密度と類似度の交互作用がないため、次の分析では親密度 2 を 3 と結合させ（親密度 2 のデータを親密度 3 とする）、最終的に親密度 3 と 4 を比較することにした。

```
model <- glmer (responses ~ familiarity * similarity + (1 | subject) + (1 | item)、 data = datach、
family="binomial")
```

(解答 ~ 親密度 \* 類似度 + ランダム要因, データ (親密度 2 と 3), 二項分布)

表 5-5 一般線形混合モデルの結果 (事前解析)

従属変数 = 解答 (21人)				
変数名	推定値	標準誤差	z 値	p 値
切片 (親密度=2)	-0.51	0.43	-1.18	.24
親密度 3	1.55	0.51	3.03	.002 **
類似度 2	0.49	0.86	0.57	.57
類似度 3	0.35	1.45	0.24	.81
類似度 4	0.88	0.88	1.00	.32
類似度 2*親密度 3	-0.06	1.08	-0.06	.96
類似度 3*親密度 3	0.35	1.72	0.20	.84
類似度 4*親密度 3	-0.78	1.18	-0.66	.51

p<.001 '\*\*\*'、p<.01 '\*\*'、p<.05 '\*'

以上を踏まえ、次では学習者と母語話者の慣用句産出に差があるか否か、L1 との類似度と親密度が L2 慣用句の産出に影響を与えるか否かを明らかにするため、表 5-6 の解析を行った。解析の際は類似度、親密度及び母語を独立変数とし、一般混合線形モデルによるロジスティック回帰分析を行った<sup>47</sup>。一般混合線形モデルのロジスティック回帰モデルを使用する理由には 2 つあった。1 つ目に、実験 1 の従属変数は二項分布 (0 か 1) に従うため、ロジスティック回帰モデルを用いて分析する必要があったためである。2 つ目に、混合モデルはランダム要因に入れることによって、協力者の個人差と項目間の差を配慮することができる点において妥当性が高いと考えられたためである。解析の際は統計ソフト R ver-3.3.0 の `glmer` (ver-1.1.12) 関数を使用し、後退的選択法 (backward selection) を用いて以下のモデルが最尤モデルであることが分かった。

```
model <- glmer (responses ~ familiarity * first language + similarity * first language + (1 | subject) + (1 | item), data = data, family="binomial")
```

(解答 ~ 親密度\*母語 + 類似度\*母語 + ランダム要因, データ (全部), 二項分布)

<sup>47</sup> 親密度と類似度はセンターリングした。

表 5-6 一般線形混合モデルによる実験 1 の結果

変数名	推定値	標準誤差	z 値	p 値	
切片(母語話者)	1.40	0.22	6.43	<.001	***
親密度	0.00	0.36	0.01	.99	
母語 (=学習者)	-0.44	0.25	-1.77	.08	
類似度 2	-0.11	0.49	-0.22	.83	
類似度 3	-0.23	0.49	-0.46	.64	
類似度 4	-0.24	0.48	-0.49	.62	
親密度*母語	1.31	0.47	2.81	.005	**
類似度 2*母語	0.55	0.55	1.01	.31	
類似度 3*母語	-0.08	0.56	-0.15	.88	
類似度 4*母語	0.23	0.55	0.42	.68	

p<.001 \*\*\*、 p<.01 \*\*、 p<.05 \*

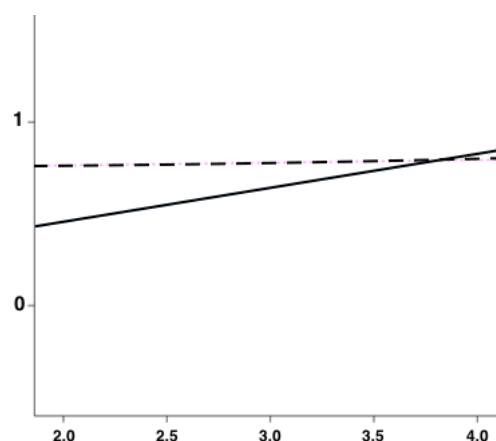


図 5-5 親密度が学習者（実線）と母語話者（点線）に与える影響  
横軸—親密度、 縦軸—解答

表 5-6 は本章の分析に使用したモデルから得られた固定効果の推定値及び p 値をまとめた結果である。切片は母語話者の水準を表している。2 行目と 4、5、6 行目はそれぞれ親密度及び類似度が母語話者に与える影響を示しているが、いずれも有意な結果ではなかった。3 行目の母語 (=学習者) は学習者と母語話者の差異を表している。推定値 ( $\beta = -0.44$ ) は負値であるため、母語話者と比べ、学習者には慣用

句を産出しない傾向が見られた。この結果は有意傾向として見られた ( $p=.08$ )。更に、親密度と母語の交互作用が有意であったため、母語話者と異なって、親密度は学習者に影響を与える ( $\beta=1.31$ ) ことが示された。親密度が上がることによって、学習者が慣用句を産出する可能性も高くなった。図 5-5 は親密度が母語話者と学習者の解答に与える影響を図示したものである。

### 5.3.6 考察

仮説①に関して、母語話者と比べ、学習者は全体的に慣用句の産出率が低い、この差は統計的に有意傾向しか見られなかった。表 5-3 (p86) を見ると、実験 1 において、学習者の親密度は母語話者より低かった。5.3.1 では、学習者は母語話者より慣用句の親密度が低いため、慣用句の産出はより困難であると述べた。ここで学習者と母語話者の解答の間に有意な差が見られなかった理由について考察した。1つの可能性として、実験 1 に用いた選択式のテストが L2 慣用句の産出の難易度を下げたことが考えられる。図 5-4 (p79) の認知モデルから、慣用句の産出において、レマ階層が活性化されることは不可欠であり、レマの活性化によって産出ができるようになることが仮定されている。自然産出の場合、学習者は慣用句の親密度が低いため、心内辞書における概念階層とレマ階層の間のリンクが弱く、レマ階層の活性化によって慣用句形式を抽出することが困難であると考えられる。一方、選択式テストにおいて、慣用句形式は選択肢として提示されているため、慣用句の選択肢を見ることによって学習者の心内辞書におけるレマとスーパーレマが活性化され、産出する際の難易度が低くなると思われる。よって、実験 1 では難易度の低い選択テストを使用したため、学習者が慣用句を選びやすかったと考えることができる。従って、実験 2 では、より自然産出に近い文完成テストを用いる必要があるという示唆が得られた。

仮説②に関しては、Irujo (1993) と Laufer (2000) の結果と異なり、本実験では類似度が学習者の産出率に影響を与えない結果に至った。先行研究において L1 の影響が見られたのは、実験中に L1 慣用句が提示されたことによって、学習者が L1 慣用句を L2 に直訳していたためであると考えられる。実験 1 は選択テストにおいて L1 慣用句を提示せず、テスト方法による L1 の影響を防いだ。その結果、上級第二言語学習者の産出過程において L1 慣用句の転移が起こっていないことが検証された。ただし、全ての L2 慣用句の産出において L1 慣用句が影響しないかという、そうでない可能性もある。Kellerman の心理的有標性理論によると、語彙の意味・用法が中核の意味・用法から離れる場合、その意味・用法は有標性が高いため、転移が起こりにくい。慣用句は全体として慣用的意味が生じるため、構成語の意味が語彙の中核の意味から離れ、周辺的な意味とされるが、全ての L1 慣用句は学習

者にとって有標だと認識されるわけではないと考えられる。例えば、中国語慣用句“炒鱿鱼（文字通りの意味：イカを炒める）”の場合、慣用句は全体として「仕事を辞めさせる」という慣用的意味を表すため、構成語“炒（炒める）”と“鱿鱼（イカ）”は本来の意味をなくし、語彙の中核的意味から離れる。それに対して、“竭尽全力（文字通りの意味：全ての力を使い切る）”の場合、構成語“竭尽（使い切る）”と“全力（全ての力）”の意味は語彙の中核的意味に近いと考えられる。以上の2つの慣用句を比較した場合、“炒鱿鱼”と比べ、“竭尽全力”のほうが転移されやすい可能性がある。よって、L1 慣用句が転移されるか否かについて、それぞれの慣用句が含んでいる語彙の意味・用法は協力者にとって有標であるかどうかについて更に調査を行う必要がある。慣用句における語彙の意味・用法が無標だと認識される場合は転移が起りやすく、慣用句における語彙の意味・用法が有標だと認識される場合は転移が起りにくいと考えられる。更に、“炒鱿鱼”と“竭尽全力”の例を考えると、構成語の意味・用法の心理的有標性は構成語の本来の意味と慣用句の慣用的意味の間の距離と関係しており、つまり、透明度と深く関わっていると考えられる。“炒鱿鱼”の場合、構成語の本来の意味を合成させた後の慣用句の文字通りの意味「イカを炒める」は慣用句の慣用的意味「仕事を辞めさせる」と関連性が低い透明度が低い。それとともに、“炒鱿鱼”において構成語“炒”と“鱿鱼”は本来の意味をなくしている。一方、“竭尽全力”の場合、文字通りの意味「全ての力を使い切る」は「一生懸命頑張る」という慣用的意味と関連性が高く、透明度が高いと考えられる。そして、“竭尽全力”において構成語“竭尽”と“全力”の意味は語彙の中核的意味に近い。上述したことを踏まえると、L2 慣用句の産出における L1・L2 慣用句の類似度の影響を明らかにするためには更に L1 慣用句の透明度という要因を入れる必要があると考えられる。だが、L1 慣用句の透明度、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度及び L2 慣用句の親密度を同時に要因として扱う場合、数多くの慣用句を使用する必要がある。しかし、学習者が知っている L2 慣用句は非常に限られているため、本章では透明度と類似度を同時に扱うことができず、両者の交互作用について考察することができなかった。

仮説③に関して、親密度は母語話者の産出に影響を与えないが、学習者の産出には正の影響を与えることが検証できた。Irujo (1993) では使用頻度と産出の間に相関が見られなかったが、この研究の分析に用いられた使用頻度は母語話者が判断したもので、学習者が慣用句をどの程度知っているかを表してはなかったと考えられる。親密度は、図 5-4 (p79) が示しているように、概念階層における慣用句の意味とレマ階層における慣用句のスーパーレマの間のリンクに影響を与えると考えられる。親密度が高くなると、そのリンクがより強く、概念階層の活性化からレマ階層が活性化されるまでの過程が促進され、慣用句が産出しやすくなる。一方、母語話者の産出に親密度が影響していない理由は 2 つ考えられる。1 つ目に、表 5-4 (p86) より、母語話者の場合、慣用句の親密度が 4 の解答は全ての解答の 80% 近



くを占めており、親密度の偏りが大きかったため、親密度の効果が見られなかった可能性がある。2つ目に、本章はL2 慣用句の産出が対象であり、母語話者の産出率をベースとして扱ったため、実験文脈は全て母語話者にとって一般表現より慣用句が産出されやすい文脈を使用した。全ての実験文において、母語話者の慣用句産出率は50%以上であった。よって、実験文脈の効果が大きかったため、産出の際に一般表現の概念の活性化程度が低く、結果的に心内辞書から一般表現を抽出するというプロセスが完成されなかった可能性がある。ただし、実験1の親密度調査の説明文では、慣用句を見たり、聞いたり、また使用したりすることがあるか否かが判断の際の基準であると述べているが、協力者が実際に判断する際に、「1：一回も見つ/聞いたことがない」、「4：よく見る/聞く」のラベルを見て判断を行うため、どの程度慣用句を使用しているかを考えずに判断している可能性は否定できない。本章は慣用句の産出過程について考察しており、学習者のアウトプットの経験はインプットの経験より重要であると考えられる。従って、実験2では親密度判断の際に、産出経験の有無を明記する必要があると考え、検証を行った。

## 5.4 実験2

### 5.4.1 本実験の目的と仮説

実験1では類似度と親密度の影響を検証したが、選択タスクが産出する際の難易度を下げたため、学習者と母語話者の差異は有意傾向しか見られなかった。実験2では、より自然産出に近い文完成タスクを用いることにした。学習者が知っている慣用句は限られているため、実験2では類似度、透明度、親密度といった要因を全て扱うことが困難であった。また、第4章に指摘したように、親密度は透明度判断に影響を与えるため、透明度を要因とする場合は親密度を同時に分析する必要がある。よって、実験2では透明度と親密度に着目し、L2 慣用句の産出における透明度と親密度の効果を検証することを目的に実験を行った。

実験2の仮説は以下の通りであった。

- ① 上級第二言語学習者と母語話者の慣用句産出には差が見られ、母語話者と比べ学習者の産出率が低い。
- ② 学習者グループにおいて、親密度の影響が見られ、親密度が高いほど慣用句の産出が多く見られる。
- ③ 学習者グループにおいて、透明度の影響が見られ、透明度が高いほど慣用句の産出が多く見られる。

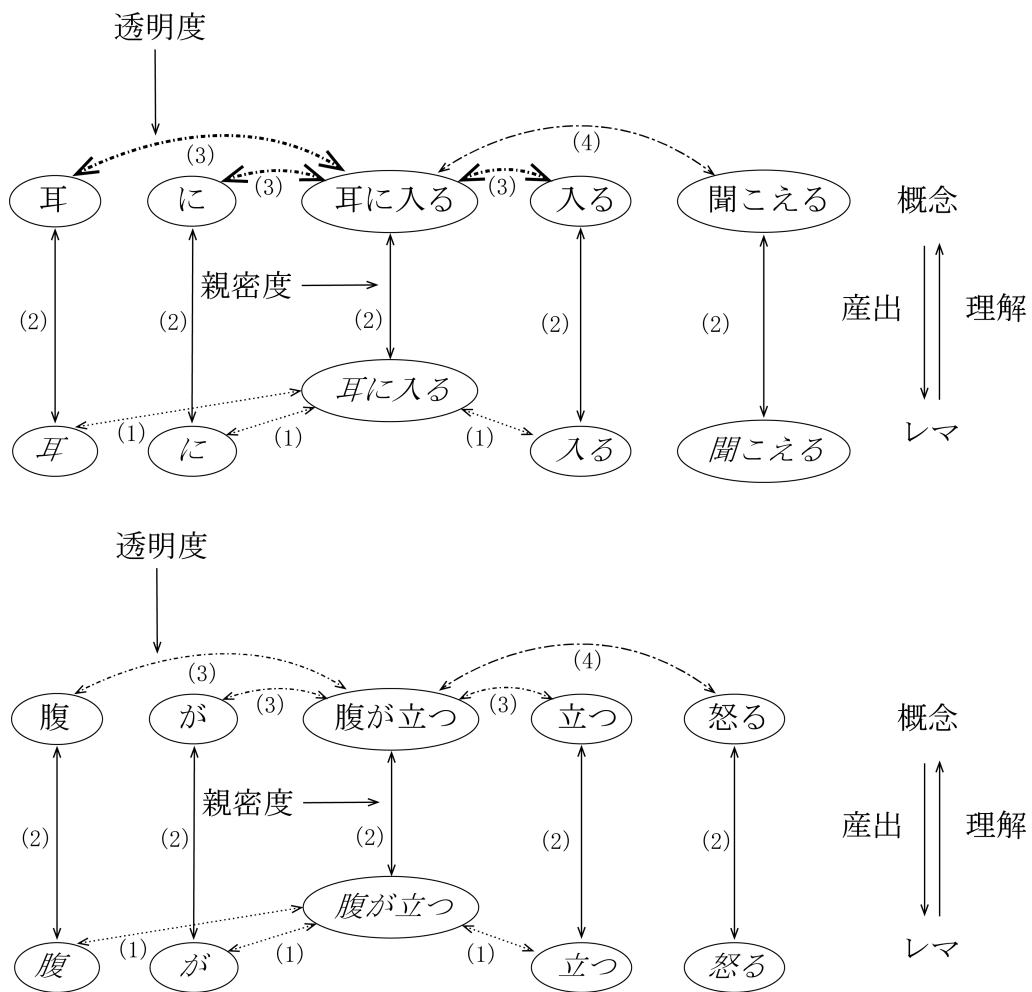
仮説①に関して、実験 1 では学習者と母語話者の産出率の差が有意傾向しか見られなかったが、実験 2 では自然産出に近い文完成タスクを用いることによって、学習者と母語話者の産出率における差がより顕著になると予測した。実験 1 の選択テストでは L2 慣用句が提示されているため、慣用句の視覚情報を得ることによって学習者の心内辞書におけるレマとスーパーレマが活性化され、産出する際の難易度が低くなったと考えられる。実験 2 においては、学習者は自然産出と同様に自ら慣用句の形式を想起して産出しなければならないため、心内辞書におけるレマとスーパーレマが活性化されない場合は慣用句を産出することができない。

仮説②に関して、実験 1 ではすでに親密度の効果が検証されているため、実験 2 においても親密度が有意に L2 慣用句の産出に影響すると予測した。また、実験 2 は実験 1 の親密度調査と異なり、判断する際の基準に産出経験の有無を加え、インプットの際の接触頻度とアウトプットの際の接触頻度両方を協力者に判断してもらうため、実験 2 における親密度の効果は更に顕著になると考えられた。

仮説③に関して、Sprengrer 他 (2006) は慣用句の認知処理における構成性の効果が不明であり、再検証する必要があると述べているため、Superlemma Model (図 5-3, p77) を用いて構成性と類似する透明度の効果を説明することができない。一方、英語句動詞 (phrasal verb) の産出に関する研究 Liao & Fukuya (2004) において、学習者は比喩的な意味を持つ句動詞と比べ、文字通りの意味を表す句動詞を多く産出していることが分かった。この研究において、文字通りの意味を表す句動詞は比喩的な意味を持つ句動詞より透明度が高いと捉えられているため、透明度が句動詞の産出に影響していると考えられる。よって、透明度が慣用句の産出過程に影響を及ぼす可能性も十分考えられる。実験 2 では、事前調査において慣用句の透明度を測定するのではなく、本実験に参加した協力者それぞれに透明度と親密度を判断してもらい、その結果を分析に用いることによって、L2 慣用句の産出過程における透明度の効果を明らかにすることができると予測した。もし透明度の慣用句の産出過程への影響が見られるのであれば、図 5-3 (p77) のモデルに足りない部分があるということが明らかにできると考えられた。

透明度がどのように慣用句の産出過程に影響するかを考える際に、本章では図 5-6 (p93) のようなモデルを仮定することができると仮説を立てた。2.2.1 (p15) ですでに述べた通り、透明度とは、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性を示す概念である。また、図 4-2 (p69) が示しているように、慣用句の文字通りの意味には構成語の本来の意味が含まれているため、文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高い場合、構成語の意味と慣用的意味の間の関連性も高いと考えられる。慣用句の心内構造を考えると、慣用句全体としての意味と構成語の意味はそれぞれ概念階層に記録されている。よって、図 5-6 のように、概念階層における慣用句の意味と構成語の意味の

間のリンクが存在することを仮定することができ、透明度はそのリンクに影響を与えることによって産出過程に影響を与えると予測された。「耳に入る」と「腹が立つ」を比較してみれば、前者は文字通りの意味と慣用的意味の関連性が高く、「耳」、「に」と「入る」それぞれの意味と「耳に入る」の慣用的意味の間のリンクが、「腹」、「が」と「立つ」それぞれの意味と「腹が立つ」の慣用的意味の間のリンクより強く、透明度は図 5-6 のリンク (3) に影響を与えることによって慣用句の産出過程を促進させると予測された。



- (1) <-----> 心内辞書における構成関係 / 活性化の方向性
- (2) <-----> 心内辞書におけるレマと概念の対応関係 / 活性化の方向性
- (3) <-----> 構成語の概念と慣用句概念の関連性 / 活性化の方向性
- (4) <-----> 関連する概念 / 活性化の方向性

図 5-6 慣用句「耳に入る」と「腹が立つ」の認知モデル (実験 2 の仮説)

## 5.4.2 協力者

日本語母語話者 20 名及び中国人日本語学習者 20 名が調査に参加した。日本語母語話者は全員大学生で、中国人日本語学習者は日本語能力試験 N1（または旧 1 級）に合格し、留学経験のある（滞在期間 2 ケ月以上）大学生・大学院生であった。

## 5.4.3 調査材料

### 5.4.3.1 慣用句

実験 2 では、学習者の L1 慣用句と類似しない L2 慣用句を用いた。対象となる慣用句は宮地（1982）の『慣用句の意味と用法』に掲載されている「常用慣用句一覧」と三省堂（2010）の『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典』から、第二言語学習者にとって親密度が高いと思われ、かつ透明度にバリエーションのある 30 個の慣用句を選出した。

### 5.4.3.2 産出テスト

産出テストの 1 例を以下に示した。

<p>(3) エネルギーの高い言葉というのは、なかなか言いにくいものだ。たとえば、「愛」という言葉の持つエネルギーがあまりにも高すぎるので、人々はそれを言うことが恥ずかしく、めったに言わなくなるのである。このようなエネルギーの高い言葉を _____ には、自分の人間性を高めていかなければならない。(speak)</p> <p>① _____      ② _____</p>
--

産出タスクとして文完成タスクを用いた。タスク文の最後に英語の訳<sup>48</sup>を提示したのは、文の意味が理解しやすくなるためであった<sup>49</sup>。先行研究の Irujo（1993）と Laufer（2000）は文の意味を提示するた

<sup>48</sup> 英語訳に関して、実験 2 は weblio 英和和英（オンライン）辞典から慣用句の英語解釈を抽出した。2 人の英語母語話者はそれぞれの文脈において、英語解釈が慣用句の意味と対応しているかどうかについて確認した。

<sup>49</sup> 事前調査において調べた結果、協力者にとってタスクに用いられる英語表現に知らない英単語があることが分かったため、その可能性が一番高いと思われる 3 つの英単語の日本語訳を別紙で提示した。(effort:努力する; satisfy:満足させる; fire:解雇する)

めに学習者の第一言語訳を示しているが、実験 2 では日本語母語話者も同じ文脈を読むため、日本語母語話者と中国人日本語学習者両方にとって意味の分かる英語をヒントとして提示した。また、空欄に 2 つ目の解答欄②を設けた理由は、最終的に産出した表現形式以外に協力者が回避した表現形式がある場合、それを観察できるためであった。説明文では、2 つ以上の表現を思いついた場合、自分なら使いたいものを①に、もう 1 つを②に書くように指示した。実験 2 に使用された説明文は付録 VI (p187) を参照されたい。

#### 5.4.3.3 親密度調査

産出タスクが終わった後に、親密度調査を行った。Nippold & Rudzinski (1993)、Aljabri (2013) といった先行研究は親密度を見聞きする頻度と捉えているが、実験 2 ではインプットにおける見聞きすることだけではなく、ある表現に対する馴染み深さをアウトプットの経験の有無に基づいて検討する必要があると考えた (Wesche & Paribakht 1996)。実験 1 における親密度の説明文は「慣用句を使ったりすること」も含んでいるが、判断を行う際は明確にインプットとアウトプットを分けなかった。実験 2 では、アウトプットの経験の有無が慣用句の産出に与える影響を探るために、親密度を未使用・使用の 2 段階に分け、見聞きすることがない段階から、何回も産出したことがある段階までの 6 段階評価を用いることにした。タスクの 1 例を (4) で示す。親密度調査の説明文は付録 VI (p187) を参照されたい。

(4) 「頭に来る」

- 1) 見た/聞いたことがない。
- 2) 見た/聞いたことがあるが、意味が分からない。
- 3) 一回見た/聞いたことがあって、意味が分かる。  
この表現の意味は\_\_\_\_\_
- 4) 何回も見た/聞いたことがあって、意味も分かりますが、自分で使ったことがない。この表現の意味は\_\_\_\_\_
- 5) 何回も見た/聞いたことがあって、意味も分かります。そして、一回自分で使ったことがある。  
この表現の意味は\_\_\_\_\_
- 6) 何回も見た/聞いたことがあって、意味も分かります。そして、何回も自分で使ったことがある。  
この表現の意味は\_\_\_\_\_

#### 5.4.3.4 透明度調査

透明度判断タスクにおいて、協力者は慣用句表現の文字通りの意味と慣用句全体としての意味に基づいて、両者の間の関連性について判断を行った（付録VI, p188）。文字通りの意味を定義する際に、『広辞林 第6版』（1983）と『明鏡国語辞典 第2版』（2010）を参照し、以上の2つの辞書における個々の構成要素の意味を調べ、1番目に現れている意味を参考にし、それぞれの構成語の意味を合わせた。慣用句としての意味と慣用句の例文は『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典』（2010）と『慣用句・故事ことわざ・四字熟語 使いさばき辞典』（2014）を参考に、2冊の辞書の中から学習者にとって理解しやすいと思われるほうを実験に用いた。透明度調査の1例を以下に示す。

(5) 頭に来る				
文字通りの意味：首より上の部分に近づくように動く。				
慣用句としての意味：この上なく不愉快で腹立たしく思う。				
例文：真夜中のいたずら電話は、全く頭に来るよ。				
「頭に来る」の文字通りの意味と慣用句としての意味の間の関連性はどれくらいあると思われますか。				
1	2	3	4	5
関連性が非常に低い			関連性が非常に高い	

#### 5.4.4 手順

本実験は2回に分かれて実施した。1回目は2015年10月下旬～2015年11月下旬の期間において実施し、2回目は2016年の1月に実施した。協力者と筆者が1対1の環境において実験を行った場合もあれば、複数の協力者が同時に実験に参加する場合もあった。複数の協力者を対象とする際に、お互いが影響を与えてしまうことを防ぐために、隣席に座らないように指示した。実験の手順は以下の通りであった。まず実験全体の流れについての説明を行った後、実験の第一段階である産出タスクを行った。協力者には産出テストの説明用紙を読ませ、読み終わったのを見計らって産出テストの用紙を配布し、時間の制限をかけずに解答させた。次に、実験の第二段階である親密度判断タスクを行った。協力者には同様に親密度調査の説明用紙を読ませ、その後解答用紙を与えて解答させた。第二段階が終わった後に、第三段階である透明度判断タスクを第二段階と同じ手順で実施した。最後に、協力者の情報確認シート

を回答させた。学習者と母語話者を対象に行ったテストは同じ内容のものであったが、学習者に見せた説明文、親密度調査と透明度調査における判断尺度のラベルは、第一言語である中国語を用いた。

表 5-7 実験 2 の手順

協力者	実験 2
日本語母語話者/中国人上級日本語学習者	全体の説明→産出テストの説明→慣用句産出テスト →親密度調査の説明→親密度調査→透明度調査の説明 →透明度調査→情報確認シート

#### 5.4.5 結果

産出タスクの解答欄①の採点について、慣用句以外の表現形式が用いられた場合は 0 と点をつけ、慣用句表現が産出された場合、類義表現を含め、1 と点をつけた<sup>50</sup>。母語話者の慣用句産出率が 50% を超えた 15 項目のみを分析に用いた。次に、親密度調査で 1 または 2 を選ばれた慣用句は未知だと判断し、その慣用句を使用すると予測される文の解答<sup>51</sup>を分析から外した。表 5-8 と表 5-9 はそれぞれ実験 2 における親密度判断、透明度判断の結果を示している。全体の平均を見ると、学習者は母語話者より慣用句の親密度が低く、透明度を高く判断している傾向があった。

表 5-8 実験 2 の親密度判断の結果

	人数	親密度			
		最小値	最大値	平均	標準偏差
日本語母語話者	20	2.00	6.00	5.03	1.27
日本語学習者	20	3.00	6.00	5.81	0.60

<sup>50</sup> 例えば、「怒る」を表す文脈において、「頭に来る」またはその類義表現である「腹が立つ」を用いた場合、いずれも 1 と点をつける。

<sup>51</sup> ある協力者が慣用句の親密度調査において 1 または 2 を選んだ場合、その慣用句を使用すると予測される文は分析の対象外となった。

表 5-9 実験 2 の透明度判断の結果

	人数	透明度			
		最小値	最大値	平均	標準偏差
日本語母語話者	20	1.00	5.00	3.57	1.17
日本語学習者	20	1.00	5.00	3.96	1.16

産出テストから得られた解答をそれぞれの解答と対応する慣用句の親密度を基に分類した結果を表 5-10 に示す。慣用句が未知の場合、その慣用句と対応する解答は表 5-10 に含まれない。

表 5-10 産出における非慣用句及び慣用句の分布

慣用句の親密度	産出における非慣用句 (0) 及び慣用句 (1) の数 (%)			
	学習者 (20 人)		母語話者 (20 人)	
	非慣用句	慣用句	非慣用句	慣用句
3	28(9.8)	3(1.0)	3(1.0)	1(0.3)
4	51(17.8)	8(2.8)	4(1.3)	9(3.0)
5	12(4.2)	11(3.8)	5(1.7)	11(3.7)
6	66(23.1)	107(37.4)	71(23.7)	195(65.2)
合計	286(100)		299(100)	

実験 1 と同様に、実験 2 の解析に使用した慣用句も全て協力者にとって既知であるため、親密度の偏りが大きかった。母語話者の場合、慣用句の親密度が 6 のデータは全部のデータの 90% 近くを占めており、学習者の場合、親密度が 6 のデータは全部のデータの 60% を占めていた。従って、実験 2 の分析では親密度 3、4 を 5 と合併する必要があった。この操作は、親密度 3、4 と 5 のデータにおいて親密度と透明度の交互作用が起きていないことが前提であった。よって、親密度と透明度の交互作用を確認するために、学習者の回答（親密度 3、4、5 のみ）を従属変数とし、親密度と透明度を独立変数とし、表 5-11 の事前解析を行った。その結果、親密度と透明度の交互作用がないことが分かったため、表 5-12 の分析では親密度 3、4 を 5 と合併し（親密度 3、4 のデータを親密度 5 とする）、最終的に親密度 5 と 6 を比較することにした。



```
model <- Responses ~ familiarity*transparency + (1|subject) + (1|item) , data=data,
family="binomial"
```

解答 ~ 親密度\*透明度 + ランダム要因, データ (親密度 3、4、5), 二項分布

表 5-11 一般線形混合モデルの結果 (事前解析)

従属変数 = 解答 (20人)					
変数名	推定値	標準誤差	z 値	p 値	
切片 (親密度=3)	-1.53	0.35	-4.36	<0.001	***
親密度 4	0.43	0.84	0.52	0.61	
親密度 5	2.30	0.88	2.62	0.01	**
透明度	0.04	0.25	0.16	0.86	
透明度*親密度 4	0.57	0.58	0.98	0.33	
透明度*親密度 5	0.52	0.65	0.80	0.42	

p<.001 '\*\*\*', p<.01 '\*\*', p<.05 '\*'

以上を踏まえ、学習者と母語話者の慣用句産出に差があるか否か、親密度と透明度が L2 慣用句の産出 (回答) に影響するか否かを明らかにするために、表 5-12 の解析を行った。解析する際に、透明度、親密度及び母語を独立変数とし、それから透明度と母語の交互作用、親密度と母語の交互作用を統計モデルに入れた<sup>52</sup>。実験 1 と同様に、従属変数は二項分布 (0 か 1) に従うため、一般線形混合モデルによるロジスティック分析を使用する必要があるがあった。解析の際は統計ソフト R ver-3.3.0 の `glmer` (ver-1.1.12) 関数を使用し、後退的選択法 (backward selection) を用いて以下のモデルが最尤モデルであることが分かった。

```
model <- glmer (responses ~ familiarity * first language + transparency * first language + (1
| subject) + (1 | item), data = data, family="binomial")
```

解答 ~ 親密度\*母語 + 透明度\*母語 + ランダム要因, データ (全部), 二項分布

<sup>52</sup> 透明度はセンターリングした。

表 5-12 一般線形混合モデルによる実験 2 の結果

従属変数 = 解答 (40人)					
変数名	推定値	標準誤差	z 値	p 値	
切片 (母語話者)	0.77	0.24	3.26	.001	**
親密度	0.40	0.30	1.33	.18	
透明度	-0.02	0.13	-0.16	.87	
母語 (=学習者)	-1.39	0.27	-5.14	<.001	***
親密度*母語	1.00	0.37	2.74	.006	**
透明度*母語	0.55	0.19	2.91	.004	**

p<.001 '\*\*\*'、p<.01 '\*\*'、p<.05 '\*'

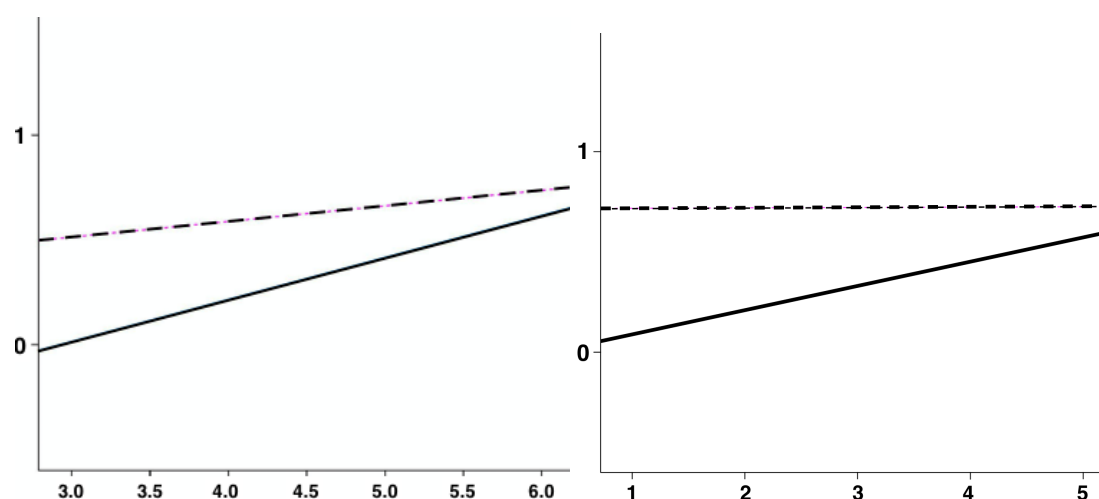


図 5-7 親密度 (左)、透明度 (右) が学習者 (実線) 及び母語話者 (点線) に与える影響

左：横軸—親密度、縦軸—解答；右：横軸—透明度、縦軸—解答

表 5-12 はモデルから得られた固定効果の推定値及び p 値をまとめた結果である。切片は母語話者の水準を表している。2 行目と 3 行目はそれぞれ親密度及び透明度が母語話者に与える影響を示しているが、いずれも有意な結果ではなかった。4 行目の母語 (=学習者) は学習者と母語話者の差異を表している。この差異は実験 1 より大きく、 $p<.001$  で有意であった。推定値 ( $\beta=-1.39$ ) は負値であるため、母語話者と比べ、学習者は慣用句を少なく産出していることが分かる。更に、親密度と母語の交互作用は有意であったため、母語話者と異なって、親密度は学習者に影響を与える ( $\beta=0.40+1.00=1.40$ ) ことが示された。また、親密度が上がるにつれ、学習者が慣用句を産出する可能性も高くなることが明らかと

なった。透明度と母語の交互作用も有意であり、学習者の産出は慣用句の透明度に影響されることが分かった ( $\beta = -0.02 + 0.55 = 0.53$ )。透明度が上がることによって、学習者が慣用句を産出する可能性も高くなることが示された<sup>53</sup>。図 5-7 は親密度と透明度の影響を表している。

解答欄②に関して、母語話者の解答が見られなかった。学習者の場合、空欄②に記入した協力者は数名しかいなかった。その中で慣用句の産出は少なかった。1名の協力者のみが「面倒を見る」の形式を数回書き直した後に、その慣用句表現を解答欄②に移動させ、直接慣用句の回避を示した。

#### 5.4.6 考察

仮説①に関して、仮説通りに、上級学習者と母語話者の間に有意な差が見られ、学習者は文完成タスクにおいて、母語話者より慣用句の産出が少ないことが分かった。実験 1 の結果と比較すると、上級学習者は選択テストにおいて慣用句を選ぶことができて、自分で文を作成する際に自ら慣用句を心内辞書から抽出して産出するのが難しいと考えられる。つまり、実験 1 において、対象となる慣用句は選択肢として提示されているため、学習者が慣用句の視覚情報を得たことによって、心内辞書における慣用句のスーパーレマの活性化が容易であった。それに対して、実験 2 において、心内辞書におけるスーパーレマの活性化は図 5-6 が (p93) 示しているように、「腹が立つ」の概念と「腹が立つ」のスーパーレマを連結しているリンク (2) を通して実現され、学習者の場合、慣用句の親密度が母語話者より低い場合、リンク (2) も母語話者より弱いと考えられ、スーパーレマの活性化がより困難である。

仮説②に関して、親密度の効果が再検証できたと言えよう。更に、表 5-10 (p98) で示しているように、親密度が 3、4 の慣用句の場合、学習者は産出を避ける傾向をしているのに対し、親密度が 6 に上がると、解答の中の慣用句は非慣用句より多くなり、親密度が 6 の慣用句は産出されやすい傾向が見られた。一方、実験 1 と同様に、母語話者の場合、親密度は慣用句の産出率に影響を与えない結果となった。その理由として 2 つの可能性が考えられる。1 つ目に、表 5-10 が示しているように、母語話者の場合、慣用句の親密度が 6 の解答は全ての解答の 90% 近くを占めており、親密度の偏りが大きいことにより、親密度の効果が見られなかった可能性がある。2 つ目に、実験 1 と同様に、実験 2 は母語話者の産出率をベースとして扱っているため、実験文脈は全て母語話者にとって一般表現より

<sup>53</sup> 親密度と透明度の要因の間に多重共線性が発生しているか否かを確認するために、多重共線性が発生していることを判断する指標である VIF (Variance Inflation Factor) 値を算出した。その結果、親密度と透明度の VIF 値は 2 以下であることが分かった (親密度=1.18 ; 透明度=1.13)、表 5-12 の解析では親密度と透明度の要因の間に多重共線性が発生していないことが分かった。

慣用句が産出されやすい文脈を使用した。解析の対象となった全ての実験文において、母語話者の慣用句産出率は50%以上であった。実験文脈の効果が大きかったことにより、産出の際に一般表現を心内辞書から抽出するプロセスが完成されなかった。

仮説③に関して、透明度と母語の交互作用が示しているように、透明度が上がるにつれ、学習者は慣用句を産出しやすくなる。この結果は、Liao & Fukuya (2004) の句動詞の結果と類似し、比喩的意味を持つ表現の文字通りの意味とその表現の全体としての意味の間の関連性は、学習者の産出プロセスを促進させると考えられる。一方、透明度は母語話者の産出率に影響を与えなかった。その理由は、親密度の効果が見られなかったことについて述べた2つ目の理由と同様である。つまり、母語話者の場合、実験2の解析に使用した文脈において、一般表現より慣用句がより適切であるため、産出の際に慣用句の概念の活性化度合いがより高かったと考えられる。

## 5.5 総合考察

本節では、図5-8 (p103) に示した認知モデルを用いて、L2 慣用句の産出過程について考察を行う。

(6) この間、ニューヨークで地下鉄に乗っていると英語だけでなく、スペイン語、中国語、イタリア語、ヒンディー語、日本語と数えたらきりがなくいろいろな国の言葉が①\_\_\_\_\_②\_\_\_\_\_てくる。しかもそれは特に珍しいわけでもなく、地下鉄に限らず様々な場所で見かける日常的な光景です。(happen to hear)

(6) は実験2の文完成タスクの1例である。(6)において、空欄の部分に「偶然に何かの音が聞こえる」という意味を表すために、適切な表現として「耳に入る」または「聞こえる」が考えられる。産出過程において、「偶然に何かの音が聞こえる」という概念を表そうとすると、学習者の心内辞書が活性化され、概念階層における「耳に入る」と「聞こえる」のいずれかの意味が活性化され、それからもう一方の意味がリンク(4)によって活性化される。また、「耳に入る」と「聞こえる」の意味が同時に活性化される可能性もある。その後、概念とレマを連結しているリンク(2)が次第に活性化され、レマ階層における「耳に入る」のスーパーレマ、また「聞こえる」のレマが活性化される。「耳に入る」のスーパーレマが高度に活性化されたことによって、構成語の「耳」と「入る」のレマ、そして格助詞「に」のレマが更にリンク(1)を通して活性化される。慣用句の場合、レマ階層におけるスーパーレマと構成語のレマが活性化されることによって、その慣用句の形式が最終的に心内辞書から抽出される。

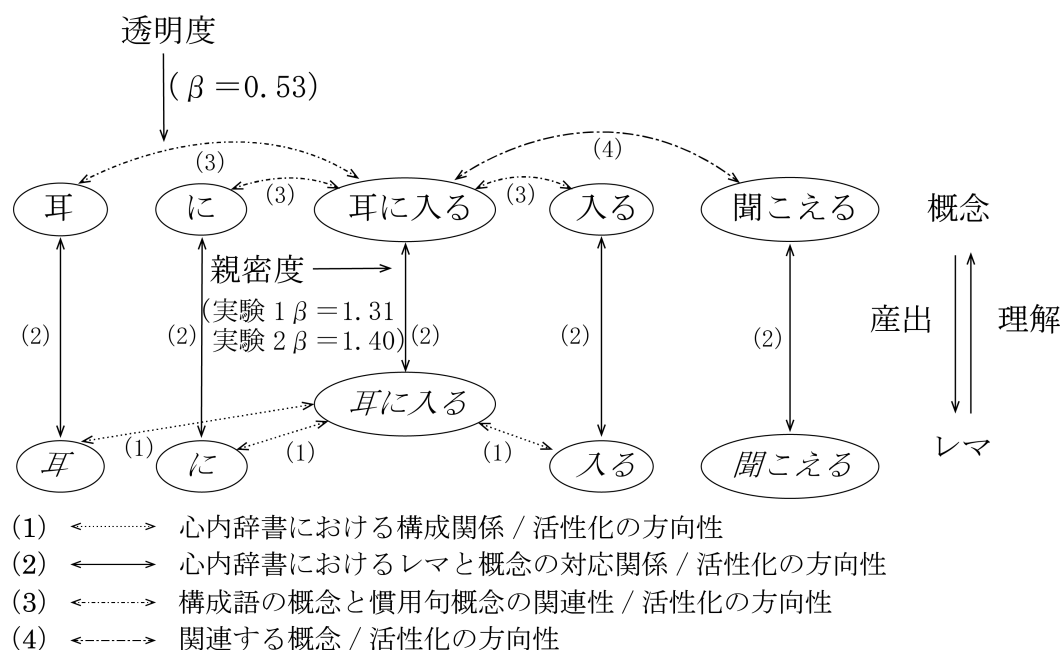


図 5-8 L2 慣用句「耳に入る」と一般動詞「聞こえる」の認知モデル

一般動詞の場合、動詞のレマが活性化され次第、その動詞が心内辞書から抽出される。ただし、心内辞書から「耳に入る」と「聞こえる」の両方を同時に抽出したのであれば、学習者は同時に思いつたこの 2 つの表現のいずれかを空欄②に記入しなければならない。しかし、実験②の結果を見れば、空欄②に記入している学習者は少なかった。つまり、「耳に入る」と「聞こえる」の片方の活性化度合いがより高く、先に心内辞書により抽出されたと考えられる。レマ階層における「耳に入る」のスーパーレマと「耳」、「に」、「入る」の一般レマの活性化度合いがより高い場合は「耳に入る」が産出され、「聞こえる」のレマの活性化度合いがより高い場合は「聞こえる」が産出される。

母語話者より学習者の慣用句産出が少ない理由は 2 つ考えられる。1 つ目に、母語話者の場合、多くの文脈に関して心内辞書における慣用句の概念が高度に活性化され、慣用句が先に抽出された。それに対して、学習者の場合、母語話者と比べ、一般語彙の概念がより高度に活性化されたことが多いため、慣用句でない表現の産出が多かった。2 つ目に、刘 (2015) は、母語話者と比べ、第二言語産出における概念と語彙の間のリンクは比較的弱いと指摘している。このことを考えると、学習者は産出の際に、慣用句の概念の活性化度合いが高くても、リンク (2) を通してスーパーレマまで辿り着くことができない可能性がある。つまり、慣用句の概念が活性化されても、スーパーレマの活性化が遅いことにより、逆に一般語彙のレマが先に活性化され、最終的に慣用句でないほうが先に抽出された。よって、学習者は

最終的に慣用句の産出が少なくなり、慣用句でない表現の産出が母語話者より多かったと考えられる。

一方、慣用句と慣用句でない表現を同時に産出し、慣用句でない表現を空欄①に記入した学習者に関して、慣用句を最終的に使用しなかった理由として以下の2点が考えられる。1つ目に、学習者は産出の際に慣用句の形式及び他の表現形式を同時に抽出できたが、慣用句より他の形式のほうが文脈に相応しいと思ったため、慣用句の使用を放棄した。2つ目に、Irujo (1993) と Laufer (2000) が主張しているように、慣用句は学習者によって回避される可能性がある。例えば、実験2において、ある学習者は「面倒をみる」を産出しようとしたが、その形式を数回書き直した後に、空欄①(解答)から空欄②(候補)に移させた。この場合、学習者は慣用句「面倒をみる」と慣用句でない表現「助ける」を同時に想起したにもかかわらず、意識して慣用句を使用しないことにした。Irujo (1993: 205) は、学習者は慣用句が文字通りの意味を表していないことを知っているため、正しく使用できないことを恐れ、産出においてL2慣用句の使用を回避することがあると指摘している。この2つの理由の違いに関して、前者はポジティブな考えであるのに対し、後者はネガティブな考えである。

また、L2慣用句の産出過程に影響を与える要因について次のように考察した。まず、L1の転移に関して、実験1の結果から、類似度は上級学習者の慣用句産出に影響を与えないことが分かった。この結果に関して2つのことが考えられる。1つ目は、Kellerman (1977)、Kellerman (1983) が指摘しているように、母語の転移に心理的有標性が関わって作用し、語彙の持つ意味に転移できるものと転移できないものがある。L1から語の核となる意味は転移可能であるのに対して、慣用句は2つ以上の語彙によって構成される表現であるが、全体として慣用的意味が発生するため、構成語の核となる意味を無くし、周辺的で有標であると判断され、転移の対象から外される。2つ目は、Irujo (1986) が述べているように、初級、中級学習者と比べ、上級学習者は産出過程においてL1の知識よりも、L2の知識を使用する。つまり、上級学習者はL1を介して慣用句を産出するのではなく、L2言語内の知識を用いて産出するため、第二言語学習者のレベルが上級に達した場合、L1が産出率に与える影響はなくなる。ただし、5.3.6にも述べたように、L1慣用句にも透明度の高いものと低いものがあり、透明度の高い慣用句は構成語の意味が語の核となる意味に近いため、より転移が起りやすい可能性がある。この点に関しては本論文の今後の課題としたい。

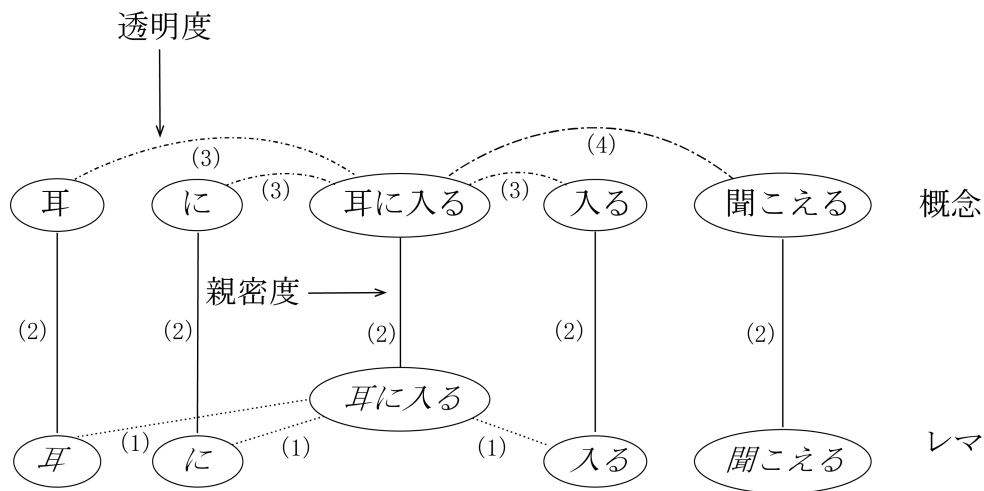
一方、親密度の効果に関して、実験1と実験2の結果が一致しており、親密度は産出に影響を与えると言える。親密度が高くなれば、学習者は慣用句を産出しやすくなった。更に、表5-10 (p98) の分布が表しているように、慣用句の親密度が4以下で、つまり「産出経験がない」学習者は慣用句を使用しない傾向があったのに対し、親密度が6であり、つまり「何回か産出したことがある」になると、傾向が逆転して、学習者は慣用句を多く使用した。逆転は、「慣用句を使用したことがあるか否か」によって

起きた。この結果は、インプット段階の親密度とアウトプット段階の親密度を分けて考える必要性を示した。2.3.3 (p28) で述べたように、理解と産出の過程は逆方向のものであり、学習者は慣用句を理解することができても産出の段階で慣用句を正確に抽出することができないこともある。図 5-8 (p103) のモデルからみれば、慣用句の親密度は心内辞書における慣用句の概念と慣用句のスーパーレマの間のリンク (2) に影響を与えると考えられる。具体的に言うと、「耳に入る」の親密度が上がることによって、「耳に入る」の意味と「耳に入る」のスーパーレマの間のリンクが強くなり、産出過程においてレマ階層の活性化が促進される。よって、「耳に入る」が産出されやすくなる。また、Irujo (1993) と Laufer (2000) が指摘しているように、学習者は慣用句の使用に自信がないため慣用句を回避する。もし回避によって L2 慣用句の産出が少ないのであれば、慣用句の親密度を上げることによって、学習者の心理上の負担を減らすこともでき、産出時の自信を高めることができると考えられる。

最後に、透明度の効果に関して、実験 2 の結果から、透明度は学習者の産出に影響を与えることが明らかとなった。透明度が高くなれば、学習者は慣用句を産出しやすかった。5.4.1 で述べたように、Sprengrer 他 (2006) において、慣用句の認知処理における構成性の効果は不明であった。従って、構成性と類似する慣用句の透明度の効果も図 5-3 (p77) のモデルによって説明できない。本章では、L2 慣用句の産出過程に透明度が影響していることを明らかにしたことによって、心内辞書における慣用句の概念と慣用句を構成する語彙の概念の間にリンク (3) が存在することを示唆した。本章は、図 5-8 のように、Superlemma Model にリンク (3) を入れる必要があると提案したい。図 5-8 の新しいモデルは、図 5-9 に示した慣用句の心内構造に基づくものである。リンク (3) はレマ階層における「耳に入る」のスーパーレマと直接連結されていないが、構成要素の「耳」、「に」、「入る」の意味の活性化に影響することによって慣用句の産出を促進させる。

具体的に言えば、「耳に入る」の産出過程において、概念階層における「耳に入る」の概念が高度に活性化された後に、「耳に入る」のスーパーレマがリンク (2) を通して活性化されるだけでなく、リンク (3) を通して「耳」、「に」と「入る」それぞれの概念も活性化される。それから、「耳」の概念とレマを連結しているリンク (2) を通して、レマ階層における「耳」が次第に活性化される。「に」と「入る」に関しても同様のことが言える。それとともに、「耳に入る」のスーパーレマはリンク (1) によって「耳」、「に」と「入る」のレマと連結されているため、レマ階層における「耳」、「に」と「入る」のレマの活性化はリンク (2) とリンク (1) の両方の作用によるものと考えられる。図 5-6 (p93) に示した「耳に入る」と「腹が立つ」を比較してみれば、実験 2 における前者の透明度判断の平均は 4.85 であり、後者は 2.8 である。つまり、前者は文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高く、構成語の意味と慣用的意味の間の関連性も後者より高いと考えられる。よって、心内辞書における「耳」、「に」

と「入る」それぞれの概念と「耳に入る」の慣用的概念の間のリンク (3) は、「腹」、「が」と「立つ」それぞれの概念と「腹が立つ」の慣用的概念の間のリンク (3) より強く、透明度はリンク (3) に影響を与えることによって「耳に入る」の産出過程を促進させると考えられる。



- (1) ..... 心内辞書における構成関係
- (2) —— 心内辞書におけるレマと概念の対応関係
- (3) ..... 構成語の概念と慣用句概念の関連性
- (4) ..... 関連する概念

図 5-9 L2 の心内辞書における慣用句「耳に入る」と一般動詞「聞こえる」の構造

また、回避について、Hulstijn & Marchena (1989) は、比喩性の高い句動詞が低いものより回避されやすいのは、慣用的特徴が顕著なためであると指摘している。Hulstijn & Marchena (1989) は、比喩性の高い句動詞が低いものより回避されやすいのは、慣用的特徴が顕著であるためと指摘している。学習者はこのような表現を特別な形式として認識し、産出するにあたって躊躇が生じ、簡単には使用することができず、最終的にその形式を回避する。慣用句についても同じことが考えられる。透明度の低い慣用句（例：頭に来る）は文字通りの意味と慣用句の意味の間の相違が大きいため、慣用句としての特徴は透明度の高い慣用句（例：力を入れる）より顕著である。従って、L2 慣用句の産出に回避が起きた場合、その理由として、学習者は透明度の低い慣用句を日本語に存在する特別な表現として認識し、自信を持って使用することができないことが考えられる。

以上では慣用句の産出過程における透明度と親密度それぞれの効果について考察したが、透明度の効果が親密度によって変わるか否かを探る必要も出てきた。従って、以下では学習者の回答を従属変数とし、親密度と透明度を独立変数とし、透明度と親密度の交互作用を明らかにするために事後解析を行っ



た。表 5-13 において親密度と透明度の交互作用が有意でなかったことから、慣用句の透明度が高いか低いかにかかわらず、親密度が高くなるほど、慣用句の産出率が高くなることと、慣用句の親密度が高いか低いかにかかわらず、透明度が高くなるほど、慣用句の産出率が高くなることが明らかになった。

```
model <- Responses ~ familiarity * transparency + (1|subject) + (1|item), datach,
family="binomial"
```

解答 ~ 親密度\*透明度 + ランダム要因, データ (学習者), 二項分布

表 5-13 一般線形混合モデルの結果 (事後解析)

従属変数 = 解答 (21人)					
変数名	推定値	標準誤差	z 値	p 値	変数名
切片	-0.50	0.18	-2.79	0.005	**
親密度	1.30	0.23	5.66	<0.001	***
透明度	0.44	0.15	2.95	0.003	**
親密度*透明度	0.30	0.20	1.49	0.14	

p<.001 \*\*\*, p<.01 \*\*, p<.05 \*\*

## 5.6 まとめと今後の課題

本章は学習者にとって既知の日本語慣用句を対象に、母語話者なら慣用句を産出しやすい文脈を用い、母語話者の産出と比較することによって、L1 慣用句との類似度、慣用句の透明度及び親密度それぞれが L2 慣用句の産出過程に与える効果を明らかにした。その結果、1) 全体的な産出率から見れば、上級第二言語学習者は母語話者より慣用句の産出が少ないこと、2) L1 との類似度は上級学習者の産出に影響を与えないこと、3) 慣用句の親密度と透明度は両方とも学習者の産出過程を促進させ、親密度の高い慣用句、また透明度の高い慣用句は低い慣用句より産出されやすいこと、以上の3点が明らかとなった。

それから、本章の総合考察では、Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model を用いて L2 慣用句の産出過程について議論を行った。その結果、学習者の慣用句産出率が母語話者より低いことと、慣用句の親密度が L2 慣用句の産出過程を促進させることは Superlemma Model によって説明できる一方、慣用句の透明度が L2 慣用句の産出過程を促進させることは Superlemma Model によって説明でき

なかった。透明度の効果を説明するには、本章は図 5-8 (p103) と図 5-9 (p106) のように、Superlemma Model にリンク (3) を加えることが必要であると考え。よって、本章は、慣用句を構成する語彙の概念と慣用句の概念の間にリンクが存在していることを主張し、L2 心内辞書における慣用句の構造を図 5-9 のように示し、L2 慣用句の認知モデルを図 5-8 のように表すことができた。

次章では、本章で提案した慣用句の心内構造及びそれに基づいた慣用句の認知モデルを検証するために、認知処理のもう 1 つの側面、理解という側面から議論を行い、慣用句の透明度及び親密度がどのように L2 慣用句の理解過程に影響するかを検証した。更に、図 5-9 が L1 慣用句の理解過程を反映できるか否か、特にリンク (3) が L1 慣用句の認知モデルにも存在するか否かを検証するために、次章では慣用句の透明度と親密度がどのように L1 慣用句の理解過程に影響するかを明らかにし、L1・L2 慣用句の認知処理を比較した。本章と次章の結果を照合させることによって、心内辞書における慣用句の構造をより一般化することが期待された。

## 第6章 L1・L2 慣用句の理解に影響する要因について

### － 親密度・透明度を中心に －

#### 6.1 はじめに

本章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解の速さを測定する自然さ判断タスクを行い、母語話者と学習者の反応時間を比較することによって、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度及び透明度の効果を明らかにし、第5章で提案した慣用句の心内構造に基づいて慣用句の理解モデルについて考察した。

#### 6.2 慣用句の理解に関する研究

Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) は構成性を中心に研究を行い、本論文は透明度を中心に研究を行った。しかし、2.2.1.3 (p19) で述べたように、透明度は慣用句の認知過程において構成性と類似する影響を与えると考えられたため、透明度の効果を明らかにするにはこの3つ研究の結果と比較して考察することが必要であった。

##### 6.2.1 L1 慣用句

Swinney & Cutler (1979) は句分類タスク (Phrase Classification Task) を用いて、パソコンのスクリーンに提示された英語表現が自然であるか否かを母語話者に判断してもらい、協力者の反応時間を分析した。その結果、慣用句 (*break the ice*) の反応時間はペアとなる一般表現 (*break the cup*) より速いことが分かった。また、慣用句の統語的固定性 (*frozenness*) の度合いの高低にかかわらず、全ての慣用句はペアとなる一般表現より処理のスピードが速いという結果が示された。この研究の結果は、Lexical Representation Hypothesis を支持している。Lexical Representation Hypothesis では、慣用句的意味は心内辞書から直接抽出されるため、この過程は個々の語彙の意味に基づいて句全体の意味を構成するという文字通りの意味の理解より速いとされている。

その後、Gibbs 他 (1989) は慣用句の構成性の度合いが L1 慣用句の理解に影響することを指摘し、Idiom Decomposition Hypothesis を提案した。Gibbs 他 (1989) は Swinney & Cutler (1979) と同様の句分類タスクを用い、慣用句の構成性の度合いを要因に加えて反応時間を分析した。その結果、非構

成的慣用句 (*kick the bucket*) の反応時間は構成的慣用句 (*pop the question*) より速いという予測に反して、非構成的慣用句は構成的慣用句より処理のスピードが遅いという結果が示された。更に、非構成的慣用句はペアとなる一般表現 (*fill the bucket*) より反応時間が遅いのに対して、構成的慣用句の反応時間はペアとなる一般表現 (*ask the question*) より速いことが分かった。Idiom Decomposition Hypothesis では、構成的慣用句の意味処理が速いのは、構成語の意味が慣用句全体としての意味と関連しており、慣用句的意味の抽出を促すためであると考えられている。それに対して、非構成的慣用句における構成語の意味は句全体の意味と完全に関連しないため、慣用句的意味の抽出が遅くなるとされる。

3つ目に、Tabossi他 (2009) はイタリア語にある非構成的慣用句 (*Andare a monte*—文字通りの意味：山へ行く；慣用的意味：失敗する)、構成的慣用句 (*Prendere la porta*—文字通りの意味：ドアを持つ；慣用的意味：離れる) 及び文字通りの意味しか持たない固定表現 clichés (*Allacciare le cinture*：ベルトを締める) といった3種類の表現を対象に、母語話者に各表現はイタリア語として自然であるか否かを判断してもらった。その結果、Lexical Representation Hypothesis と Idiom Decomposition Hypothesis のどちらの予測とも異なり、非構成的慣用句、構成的慣用句及び clichés のいずれもペアとなる一般表現より理解が速く、表現の種類 (構成性の度合い) による違いが示されなかった。この研究は Configuration Hypothesis を支持し、L1 慣用句の理解が速いのは、一般表現より慣用句の親密度が高いためである、と主張した。

## 6.2.2 L2 慣用句

Schmitt & Underwood (2004) は慣用表現 (例：*put all your eggs in one basket*—全てを失う危険を冒す) を対象に自己ペースの読文実験を行った。その結果、学習者の読み時間は全体的に母語話者より遅く、母語話者は表現の長さに影響されないのに対し、学習者は長い表現における語彙の読み時間が遅くなる傾向を示した。また、表現が長くなると、その表現にある最後の単語の読み時間が速くなるという仮説はいずれの協力者グループにおいても検証されなかった。母語話者と比べ、学習者の読み時間の分散が大きいことから、学習者の理解に影響を与える要因はより複雑であることが推察された。

Conklin & Schmitt (2008) は Schmitt & Underwood (2004) に基づき、実験方法を一語一語による提示の仕方から一行一行による提示に変更し、慣用表現は一般表現より読み時間が速いという仮説を検証しようとした。その結果、Schmitt & Underwood (2004) と異なり、学習者グループは母語話者グループと同じ結果を示した。母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の読み時間 (慣用句読みと文字

通り読みの両方) はペアとなる一般表現より速いことが分かった。また、慣用句意味を表す文脈における慣用句の読み時間と文字通りの意味を表す文脈における慣用句の読み時間の間に差がなかった。この研究は、L1 と L2 の慣用句の認知処理は一般表現より速いと主張している。

以上の 2 つの研究の後続研究として、Siyanova-Chanturia 他 (2011) は眼球運動 (eye-tracking) を用いた読文実験を行うことによって、L1 と L2 慣用句の認知処理について再検討した。その結果、母語話者の場合、慣用句の読み時間 (慣用句読みと文字通り読みの両方) はペアとなる一般表現より速いことが分かった。また、慣用的意味を表す文脈における慣用句の読み時間と文字通りの意味を表す文脈における慣用句の読み時間の間に差がなかった。一方、学習者の場合、慣用句の読み時間 (慣用句読みと文字通り読みの両方) はペアとなる一般表現より速いが、慣用的意味を表す文脈での慣用句の読み時間は文字通りの意味を表す文脈での慣用句の読み時間より遅かった。学習者の慣用句 (慣用的) 処理が遅い理由として、慣用句の形式と慣用句の意味との間のリンクは母語話者ほど強くないため、慣用句を 1 つのまとまりとして心内辞書に貯蔵するのではなく、分析する時間が必要となる、ということが推測された。なお、この結果は Conklin & Schmitt (2008) で示された、母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の処理は一般表現より速いという結果と一致しない。

### 6.2.3 問題点

まず、第一言語の場合、先行研究は「慣用句は一般表現より処理のスピードが速い」という点において一致した結果が見られたが、慣用句の構成性が慣用句の理解に影響を与えるか否かについて結果が一致しなかった。Swinney & Cutler (1979) では構成性の効果は不明確であり、Gibbs 他 (1989) では、構成的慣用句の理解が速く、非構成的慣用句の理解が遅いと述べられている。一方、Tabossi 他 (2009) では、慣用句の理解の速さは構成性ではなく、親密度によって説明でき、L1 慣用句の理解が速いのは、一般表現より慣用句の親密度が高いためであるとされている。以上の先行研究において構成性に関する結果が一致していないため、構成性と類似する透明度がどのように理解過程に影響を与えるかも不明確のままである。

本章では Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009)、この 3 つの研究を基に実験を行った。そのため、まずは、これらの研究間で異なる結果が示された理由について考えた。Titone & Connine (1994b) は、慣用句の親密度、構成性、字義性と予測性といった要因が慣用句の理解に影響すると指摘しており、Tabossi 他 (2009) は慣用句の長さ、頻度、慣用句に含まれる動詞の反応時間といった要因が慣用句の理解に影響すると指摘している。そのため、実験に用いる慣用句とペアの一般表

現を作成する際は以上の要因を統一する必要があった。しかし、6.2.1 に挙げた先行研究が用いた慣用句と一般表現のペアの性質は全て統一されているわけではない。表 6-1 は L1 慣用句を対象とした 3 つの先行研究において用いられた慣用句とペアの一般表現のまとめである。表 6-1 から分かるように、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989) において、慣用句とペアの一般表現の予測性と動詞の反応時間は統一されていない。この 2 つ以外にも、前者は親密度と字義性において統一が欠けており、後者は単語の頻度を統一しているか否かが明確ではないという問題点がある。この 2 つの先行研究と比べ、Tabossi 他 (2009) は慣用句とペアの一般表現の条件を整えていると言えるが、予測性は事前に統一されておらず、事後解析の共変量として取り上げられている。

表 6-1 先行研究において使用された慣用句とそのペアとなる一般表現の性質上の統一性

	Swinney & Cutler 1979		Gibbs 他 1989		Tabossi 他 2009	
	慣用句	一般表現	慣用句	一般表現	慣用句	一般表現
親密度	×	×	○	×	○	○
構成性	○	/	○	/	○	/
単語の長さ	○	○	○	○	○	○
単語の頻度	○	○	×	×	○	○
字義性	×	×	△ <sup>54</sup>	△	○	○
予測性	×	×	×	×	△	△
動詞反応時間	×	×	×	×	○	○

L2 慣用句の先行研究に関しては、L1 慣用句を対象とした先行研究で扱われた親密度、構成性、予測性といった諸要因、かつ使用される文脈を統一していない点において問題があると考えられる。特に Schmitt & Underwood (2004) と Conklin & Schmitt (2008) は長い文脈を使用しているため、研究結果が一致しない理由に、文脈の読みやすさや文脈からの予測性が慣用句の読み時間に影響を与えたこと、また L2 学習者は母語話者と比べ読解の能力が劣っており、より影響されやすかったことがあると十分考えられる。本論文では、L1 慣用句に関する 3 つの研究の結果と比較するためには、L1 の研究と同様の手法を用い、文脈の影響が入らない場合の L2 慣用句の理解を考察する必要があると考えた。文脈の

<sup>54</sup> Gibbs 他 (1989) において字義性の条件をどの程度統一しているかは明確に述べられていないため、△とした。  
 ...it was not the case that some words in normally decomposable idioms could be taken literally (e.g., rack your brains), while all words in nondecomposable idioms must be taken nonliterally (e.g., speak your mind).  
 Gibbs 他 (1989 : 580)

影響が生じない実験手法を用いて L1 と L2 慣用句の理解を比較する理由は 2 つあった。1 つ目は、慣用句の認知処理モデルを明らかにするには、まず文脈の影響がない、心内辞書における慣用句そのものがどのように理解されているかを究明する必要がある。2 つ目は、L2 学習者は第二言語能力が限られているため、文脈があると理解過程に影響を与える要素（文脈の理解しやすさ、単語の難易度など）が増え、それらを統一することが困難であった。

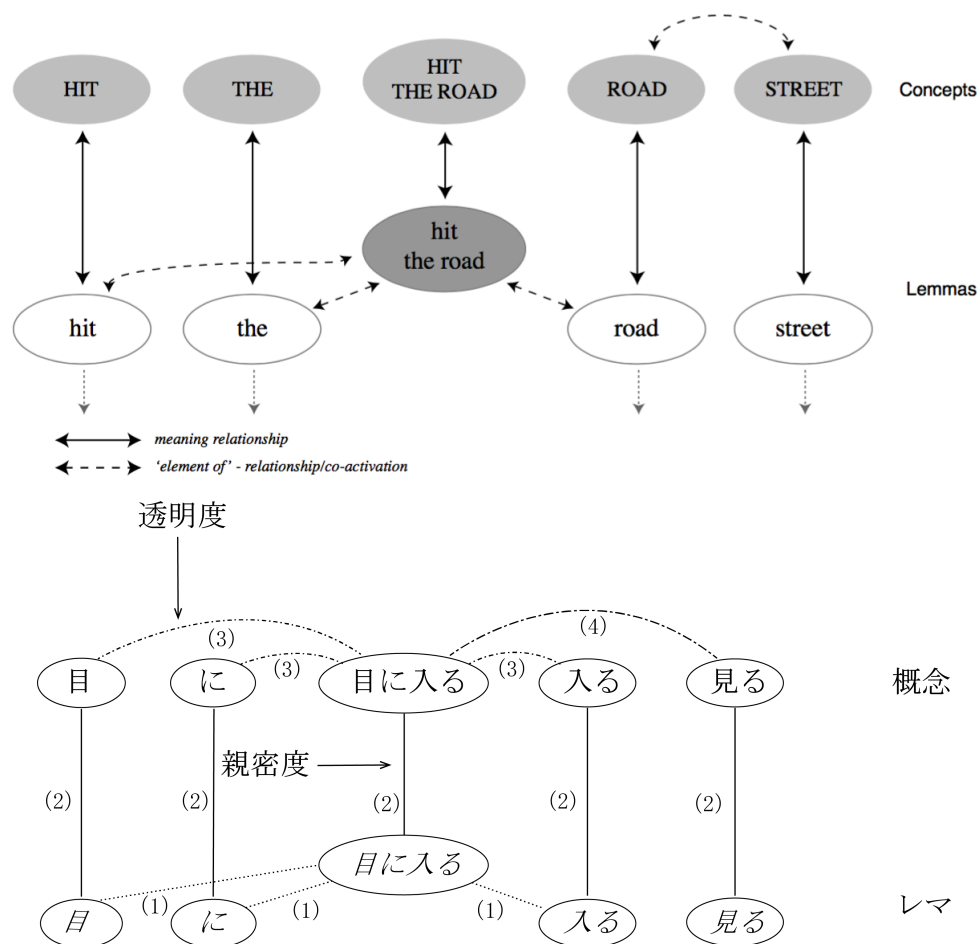
最後に、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) は事前調査で得た親密度と構成性判断の結果を反応時間の実験の分析に用いている点に問題があると考えられる。第 4 章の結果が示したように、慣用句の透明度判断には個人差があり、その個人差は偶然なものではなく、言語使用者がどの程度慣用句に接触しているかによって影響されるのである。そして、2.2.1 (p15) で述べたように、構成性は透明度と類似する概念であり、構成性判断の結果は透明度判断の結果とも類似するため、構成性判断も慣用句の親密度に影響される可能性がある。よって、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) の結果が異なる原因は、反応時間の実験に参加した協力者グループを対象に親密度、構成性について調査を行わなかったことにあると考えられた。本論文では、実験に参加する学習者グループと母語話者グループの協力者それぞれを対象に慣用句の親密度と透明度判断を行ってもらい、その結果を解析に用いる必要があると考える。

### 6.3 目的と仮説

本章では慣用句の透明度と親密度に着目し、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、慣用句の理解速度を測定する自然さ判断タスクを行った。実験を通して L1 と L2 慣用句の理解に影響を与える要因を明らかにすることによって、第 5 章に提案した慣用句の心内構造を検証し、慣用句の理解モデルについて考察した。本章で扱う要因に関して、第 5 章では L1 慣用句との類似度についても検討したが、類似度の要因を考慮すると、L2 学習者を対象に使用できる慣用句が非常に限られてしまった。そのため、本章では透明度と親密度の要因のみを扱い、類似度は今後の課題とした。本章の仮説は以下の通りであった。

- ① 母語話者の場合、親密度と透明度が反応時間に影響する。親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より理解が速く、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解が速い。親密度と透明度の間に交互作用はない。
- ② 学習者の場合、全体的に母語話者より反応時間が遅いが、L1 と L2 慣用句の心内構造が共通していると考えられるため、親密度と透明度は反応時間に影響する。親密度の高い慣用句は親密度の

低い慣用句より理解が速く、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解が速い。親密度と透明度の間に交互作用はない。



- (1) ..... 心内辞書における構成関係
- (2) —— 心内辞書におけるレマと概念の対応関係
- (3) ..... 構成語の概念と慣用句概念の関連性
- (4) - - - - 関連する概念

図6-1 上：Sprengrer 他（2006:176）による慣用句 hit the road の認知モデル

下：第5章に提案した慣用句「目に入る」の心内構造

Gibbs 他（1989）、Tabossi 他（2009）において構成性に関する結果が一致していないため、構成性と類似する透明度がどのように理解過程に影響を与えるかも不明確のままであった。また、第5章で見てきたように、Sprengrer 他（2006）が提案した Superlemma Model では透明度の効果を解釈することが



できなかった。図 6-1 (上) が示すように、Superlemma Model では慣用句を構成する語彙の概念 (HIT/ROAD) の活性化と慣用句の概念 (HIT THE ROAD) の活性化との間に関係がないため、このモデルにおいて透明度は慣用句の理解に影響を与えないと考えられる。一方、第 5 章において、L2 学習者の場合、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より産出しやすかったことから、慣用句を構成する単語の文字通りの意味と慣用句全体としての慣用的意味の間の関連性が慣用句の認知処理に影響することが示唆された。この結果に基づいて、心内辞書における慣用句の構造を図 6-1 (下) のように、概念階層における慣用句の構成語の概念「目 (視覚器官)」、「入る (中へ移る)」と慣用句の概念「目に入る (視野に入る)」の間にリンクが存在すると仮定した。図 6-1 (下) におけるリンク (3) は「目」、「に」、「入る」の概念と慣用句「目に入る」の概念の間の関連を示し、透明度はリンク (3) の強さに影響を与え、透明度の低い慣用句「腹が立つ」と比べ、透明度の高い慣用句「目に入る」の構造におけるリンク (3) はより強いため、「目に入る」の認知処理はより速いと考えられた。

親密度に関して、Lewellen 他 (1993) が行った単語を対象とする反応時間実験の結果が示すように、親密度が高くなると、単語の意味理解が速くなる。なお、Schweigert (1986) は慣用句を文字通りの意味が読み取られる文脈と慣用句としての意味が読み取られる文脈で提示して読み時間テストを行い、親密度の高い慣用句の読み時間が親密度の低い慣用句より有意に速かった結果を示した。この結果から、Schweigert (1986) は親密度を慣用句の理解を促進させる重要な要因として捉えるべきだと述べた。Libben & Titone (2008) は慣用句を対象に 4 つの実験を行い、親密度、構成性、字義性及び動詞頻度といった要因の関係と効果を調べたが、その中に親密度の要因のみが調査方法にかかわらず、全てのタスクにおいて一貫して有意な結果を示した。

第 5 章において、親密度が慣用句の産出過程を促進させるということが明らかになった。親密度がどのように慣用句の認知過程に影響を与えるかについて、本論文では、図 6-1 (下) が示しているように、慣用句「目に入る」の親密度は、概念階層における「目に入る」の概念とレマ階層における「目に入る」のレマを繋げているリンク (2) に影響することによって、慣用句の認知過程を促進させると考えた。「目に入る」の接触頻度が増えるにつれ、リンク (2) がより強くなり、認知過程におけるリンク (2) の活性化が促進される。従って、本章では、慣用句の理解速度を測定する自然さ判断タスクにおいて、慣用句の親密度が高くなると慣用句の理解のスピードも速くなるという仮説を立てた。親密度と透明度の交互作用に関して、第 5 章では両者の交互作用が見られなかったため、本章も理解過程において親密度と透明度の間に交互作用がないと予測された。

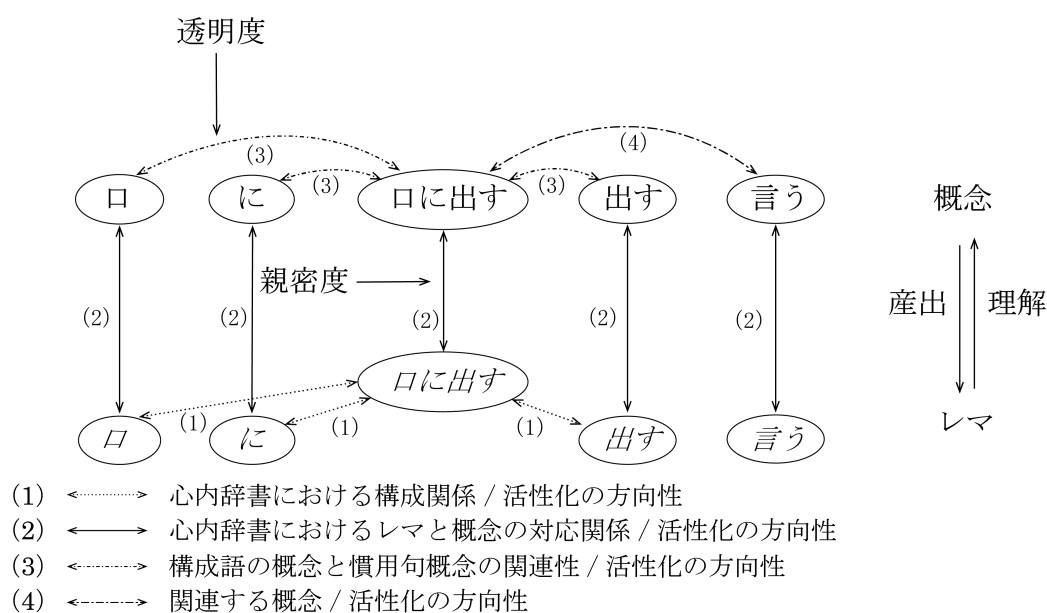


図 6-2 慣用句「口に出す」と一般動詞「言う」の認知モデル (仮)

第 5 章で提案したモデルは産出実験の結果に基づいたものであるが、心内辞書において、表現の理解・産出に関わる語彙のレマとそれに対応する概念は共通していると考えられる。そのため、理解か産出かにかかわらず、慣用句の心内構造を図 6-1 (下) のように仮定した。Sprenger 他 (2006) よれば、慣用句の認知モデルは慣用句の心内構造に基づき、理解と産出は逆方向を取る。よって、理解過程の活性化はボトムアップのプロセスであり、「レマから概念へ」となる。本章は図 6-1 (下) の構造に基づく慣用句の認知過程を図 6-2 に示すことができると予測する。産出過程は概念階層が最初に活性化され、その次にレマ階層が活性化される。それに対し、理解過程は逆のプロセスを経て、目を通して慣用句の視覚情報を得る、または耳を通して慣用句の音声情報を得ることによって、レマ階層が先に活性化され、その後概念階層が活性化し、慣用句の意味が抽出される。具体的に言えば、日常会話の中で「口に出す」を聞いた、または読んだ際に「口に出す」を知覚した瞬間から、この慣用句の意味が言語使用者の心内辞書から抽出されるまで、レマ階層において「口」、「に」と「出す」が先に活性化され、その後にリンク (1) を通じてスーパーレマの「口に出す」が活性化される。レマ階層における語彙・慣用句の活性化はまた概念階層を活性化させ、リンク (2) を通じて「口」、「に」と「出す」の意味、そして「口に出す」の意味を活性化させる。その際に、「口」と「出す」の文字通りの意味と「口に出す」の慣用的意味の間の関連性は、リンク (3) を通じて「口に出す」の慣用的意味の活性化を促進させる。慣用句「口に出す」の概念の活性化の度合いが高くなると、最終的に、慣用句の意味が心内辞書より抽出され、言語使用者が慣用句の意味を理解する。

一方、一般表現の理解過程は図 6-3 に示しているように、「口に入れる」はスーパーレマとして記録されておらず、言語使用者が「口に入れる」という一般表現を理解する際に、レマ階層において「口」、「に」と「入れる」が先に活性化され、その後に、レマ階層と概念階層の間のリンクを通じて「口」、「に」と「入れる」それぞれの意味が活性化される。慣用句と異なり、概念階層において「口に入れる」というまとまった概念も記録されていないため、「口に入れる」の理解過程においては意味合成のプロセスが更に追加されると考えられる。

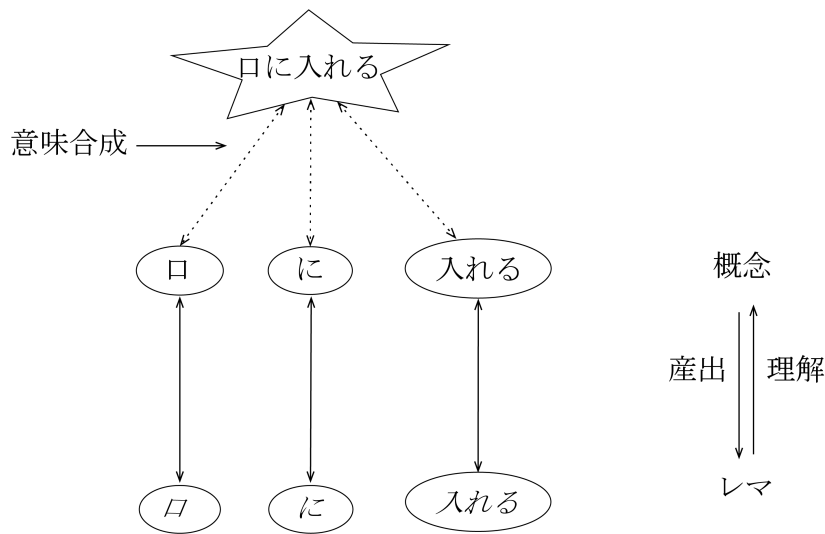


図 6-3 一般表現「口に入れる」の認知モデル

## 6.4 研究方法

6.2.3 で述べたように、慣用句の理解には複数の要因が影響するため、親密度と透明度の要因を明らかにするにはそれ以外の要因を統一する必要がある。Titone & Connine (1994b) は、慣用句の字義性と予測性が慣用句の理解に影響すると指摘しており、Tabossi 他 (2009) は慣用句の長さ、動詞の頻度、動詞の反応時間といった要因も慣用句の理解に影響すると指摘している。従って、本実験に使用する項目を選出するために、まずは事前調査でそれらの要因について調べる必要がある。本章では Tabossi 他 (2009) で行われた事前調査の手順を参考に、日本語慣用句の親密度、透明度、予測性、字義性、動詞の頻度と反応時間、慣用句の長さといった要因について調べた。Tabossi 他 (2009) を参考にする理由は 2 つあった。1 つ目に、表 6-1 から分かるように、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989) と比べ、Tabossi 他 (2009) における実験項目の性質が一番整っている。2 つ目に、本章の結果を Tabossi

他（2009）と直接比較するためには同じ手順を踏まえ、事前調査によって実験項目を選出する必要があった。

本章ではまず事前調査において慣用句の親密度、透明度、予測性、字義性、長さ、動詞の頻度と反応時間といった要因について調べた。次に、事前調査の結果に基づいて本実験に使用するペアとある慣用句と一般表現を選出し、本実験を行った。

## 6.4.1 事前調査

### 6.4.1.1 親密度調査

本章の本実験は母語話者と学習者両方を対象としたため、比較的親密度の高い慣用句を本実験に使用する必要があった。よって、親密度調査において親密度が高いと判断される 300 個の慣用句を選出した。

まず、『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』（2010）から動詞慣用句を 1140 個抽出した<sup>55</sup>。全ての慣用句をランダムに 30 リストに振り分けた後に、ダミー慣用句 5 個（首を伸ばす/花が落ちる/足を汚す/ろうそくを燃やす/古着を着る<sup>56</sup>）を作成し、各リストに入れた。ダミー慣用句は形式的に動詞慣用句と類似し、自由な語結合としての意味・用法はあるが、本来なら文字通りの意味しか表すことができず、慣用的意味を持たない。それらの表現をダミー慣用句として使用する際に、それぞれに慣用的な意味を付与し、偽作の慣用句として扱った。例えば、「花が落ちる」は元々文字通りの意味しか表さないが、ダミー慣用句として示す際は「人に恋をするたとえ」という偽造の意味を示す。つまり、ダミー慣用句は文字通りの意味は理解可能であるが、慣用句として日本語に存在しない。協力者が指示通りに（付録Ⅶ）表現の形式のみではなく、慣用句としての意味も合わせて読んだ上で判断するのであれば、ダミー慣用句の親密度は低いと思われた。

親密度調査は 2017 年 4 月～6 月の期間において行った。ウェブ上の調査依頼サイト Lancers を通じて 280 人の日本語母語話者<sup>57</sup>を募集し、各慣用句に対して 7 段階評価（1：一度も見た/聞いたことがない；

---

<sup>55</sup> 協力者が 1 回の参加につき、同じ語彙が含まれる慣用句を 2 回以上見ないように、同じ語彙が含まれる慣用句の数が多いう場合は（例えば、「手」/「気」を含む慣用句）数を減らすために、ランダムにリストから排除した。

<sup>56</sup> 偽作の 5 個のダミー慣用句とそれぞれに与えた慣用的意味は以下の通りであった。

首を伸ばす：自慢する様子。

花が落ちる：人に恋をするたとえ。

足を汚す：悪いことをする。

ろうそくを燃やす：精いっぱい何かをする。

古着を着る：一度行った行為を再び行う。

<sup>57</sup> 協力者の募集は 2 回に分けて行ったが、1 回目の協力者に対しては母語を訪ねていないが、プロフィールの情報を確認した上、全員日本語母語話者と想定される。2 回目の協力者は全員「あなたの母語は？」という項目に「日本語」と答えた。

7:よく見聞きする)を行ってもらった。協力者は説明文(付録VII, p189)と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入った。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示されていた。協力者は1つの慣用句項目に対して、慣用的意味を読んだ後に、1~7の選択肢から1つだけを選んでチェックを入れ、スクロールで次の項目へ進んだ。サイトの性質上、協力者の参加を制限することは不可能であったため、複数のリストに参加した協力者もいれば、1つのリストにしか参加しなかった協力者もいた。

結果、5個のダミー慣用句の親密度の平均を計算したところ、「足を汚す」が1番高く評価され(平均=3.11)、「首を伸ばす」は2番目に高かった(平均=2.78)。残った3つの親密度は平均が2以下であった(花が落ちる=1.60、古着を着る=1.68、ろうそくを燃やす=1.80)。「足を汚す」の平均が高かった理由として、日本語には「手を汚す」「足を洗う」のような、形式的に類似する慣用句が存在することが考えられる。更に、「悪いことをする」という偽作の慣用的意味は「手を汚す」「足を洗う」が表す慣用的意味にも関連するため、協力者は間違えて判断しやすい。このことから、「足を汚す」は既存の日本語慣用句と類似度が高いため、ダミーとして相応しくないと考え、判断基準から外した。以上を踏まえ、次では残った4つのダミー項目をデータ採用時の判断基準として使用し、ダミー慣用句に対して、いずれかの親密度を3以上と判断した場合、当該協力者は親密度を判断する際に慣用的意味を読んでいない可能性が高く、その協力者のデータを採用しないことにした。

#### 6.4.1.2 透明度調査

Tabossi 他(2009)は慣用句の構成性について考察しているため、事前調査において慣用句の構成性について調べ、構成性の高い慣用句と構成性の低い慣用句を選出したが、本章では透明度について考察するため、事前調査において透明度調査を行った。透明度調査の結果に基づいて慣用句を選定し、最終的に本実験に使用する慣用句には透明度の高いものと低いものの両方が入っていることを保証した。

透明度調査の際は、先に行った親密度調査において、母語話者によって親密度が一番高いと判断された上位300個の慣用句をランダムに20リストに振り分け、Lancersを通して500人の日本語母語話者を募集し、個々の慣用句の透明度について判断してもらった。調査は2017年7月~9月の期間において行った。

協力者は説明文(付録VII, p190)と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入った。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示された。協力者は1つの慣用句項目に対して、文字通りの意味と全体としての意味を読んだ後に、1~7の選択肢(1:関連性が非常に低い;

7: 関連性が非常に高い) から1つだけを選んでチェックを入れ、スクロールで次の項目へ進んだ。

調査の際に、全ての慣用句に対して、文字通りの意味と慣用句としての意味を提示した。慣用句の文字通りの意味の作成は第5章の実験②と同じ手法を用い、『明鏡国語辞典 第2版』(2010)に記載されている慣用句の個々の構成語の意味を抽出した後に、2つの意味を結合させた。例えば、「頭にくる」の文字通りの意味は、「頭」の意味「頭部」と、「くる」の意味「近づく」を結合させた後の「頭部に近づく」である。慣用句の慣用句的意味は『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』(2010)から抽出した。更に、データ採用時の判断基準とする、透明度が低いと思われるダミー慣用句(偽造)5個<sup>58</sup>を各リストに追加し、慣用句の親密度に偏りがないように、親密度調査において親密度の低い慣用句10個を各リストに加えた。1リストに参加する協力者1人は全部で30個の項目を見て7段階の透明度評価を行った。集計する際に、5個のダミーに対して、いずれかの透明度を3以上と判断した場合、当該協力者のデータを採用しないことにした。また、親密度調査と異なり、全てのリストにおいて、半分の15個が、親密度の低い慣用句とダミー慣用句であり、これは各リストにおいて共通である。よって、1人の協力者が複数のリストに参加している場合、最初に参加したリストの結果のみを採用し、その後に解答したリストのデータを採用しないことにした。

#### 6.4.1.3 動詞の使用頻度と表現の長さ

項目作成の際に、慣用句とそれとペアになる一般表現は同一の名詞を用いたが、使用される動詞は異なった。この場合、自然さ判断タスクにおいて、動詞の使用頻度も慣用句の理解速度に影響するため(Tabossi 他 2009)、本章ではNINJAL-LWP for TWCにおいて、慣用句と一般表現に使用されている動詞の使用頻度を調べた。調査する際に、対象となる動詞(例:「被る」)をキーワードの欄に入力し、その動詞の見出しに表示された頻度(例:「被る」の頻度は22640)を動詞の使用頻度として、6.4.1.8の解析に使用した。また、表現の長さも反応時間に影響すると指摘されているが(Tabossi 他 2009)、日本語の場合、音韻的長さ(モーラ数)と形態的長さ(文字数)が異なる。水野・松井(2014)では、日本語母語者は漢字表記語の処理に際して、音韻情報にあまり依存しないと述べているため、以下の解析では形態的長さ(文字数)を表現の長さとして捉えた。

---

<sup>58</sup> 英語慣用句の研究(Titone & Connine 1994b, Ishida 2009)の結果を参考に、英語にある親密度の低い、かつ透明度の低い慣用句を5個選出し、それらに類似する偽造の日本語慣用句「油を嘔む(話す、愚痴をこぼす)/風を撃つ(むだ話をする、あてもなくしゃべる)/つるべを蹴る(死ぬ、往生する、命を失う)/町を塗る(底抜けに大騒ぎをする、盛り場を回る)/馬車から落ちる(やめたことを再びやり始める)」を作成した。

#### 6.4.1.4 予測性調査

2.2.3 で述べたように、予測性とは、慣用句形式を最後まで見ていない話者がその未完成の慣用句を完成する確率のことである (Titone & Connine 1994b:252)。Cacciari & Tabossi (1988)、Titone & Connine (1994a) において、慣用句形式の予測性が慣用句の理解に影響を与えることが明らかになった。Tabossi 他 (2009) は事前調査において慣用句の予測性を統一することができなかったが、考察の際に予測性の影響を考慮する必要があると述べ、事後解析において予測性の影響について分析した。本章では、慣用句の性質を可能な限り統一したかったため、事前調査において個々の慣用句の予測性について調べ、調査の結果から本実験に使用する慣用句と、それとペアになる一般表現を選出した。

予測性調査は、先に行われた親密度調査において、母語話者によって親密度が一番高いと判断された上位 300 個の慣用句を対象とした。それらの慣用句をランダムに 10 リストに振り分け、Lancers を通して 300 人の日本語母語話者を募集した。調査は 2017 年 11 月～12 月の期間において行った。

調査の際に、「慣用句の最初の名詞+助詞」を提示し、その続きの表現を協力者に予測してもらった。例えば、「首を切る」という慣用句の予測性を調査する場合、最初の名詞「首」とそれに続く助詞「を」を、「首を\_\_\_\_\_」のように提示し、表現の続きを協力者に予測してもらった。この例に関して、協力者は空欄の部分に「切る」「ひねる」「突っ込む」「長くする」といった表現を書いた。それぞれの表現の出現率を計算した後に、「切る」という動詞の出現率を「首を切る」という慣用句の予測性とし、「ひねる」という動詞の出現率を「首をひねる」という一般表現の予測性とした。予測性の調査方法に関しては Titone & Connine (1994b) を参考にした。そして、慣用句が調査対象となっていることを隠すために、調査の際はフィラーとして、各リストに慣用句を構成しない「名詞+助詞」15 個を加えた<sup>59</sup>。

協力者は説明文 (付録 VII, p191) と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入った。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示された。協力者は 1 つの慣用句項目に対し、提示された日本語文字列を見た後に、キーボードを使用して続きの日本語表現を入力し、スクロールで次の項目へ進んだ。

調査の結果を集計する際に、空欄の部分に現れた全ての表現を記録し、それぞれの出現率を計算した。動詞が異なる活用形で産出され、または表現の表記が異なる場合、最終的には全ての形式をまとめて計

<sup>59</sup> フィラーとして「肘を/歯を/髪を/車に/汗が/病気が/仕事を/注意を/雨が/値段が/椅子に/電話で/恋に/本気で/指で」を使用した。フィラーに関して、調査が行われた後に、「注意を\_\_\_\_\_」と「歯を\_\_\_\_\_」の場合、「注意を払う」と「歯を食いしばる」も本論文における慣用句の定義に当てはまることに気づいたが、それ以外の 13 個のものは慣用句を構成しないため、フィラーは全体的に調査の際に協力者が慣用句を想起する確率を下げることができ、慣用句が調査対象となっていることを隠すという目的に適うと言える。よって、予測性調査の結果は信頼できると考えられる。

算に入れた。例えば、「手が\_\_\_\_\_」という項目に関して、「あく/空く/空いた/空いている」が1回ずつ出現した場合、まとめて「あく」が4回出現したと計算した。回答の中に表現が不自然なものがある場合（例：羽目を\_\_\_\_\_休める）、当該協力者のデータを採用しないことにした。

予測性調査の結果に基づいて、親密度が一番高いと判断された上位300個の慣用句の中から、予測性の高い慣用句を除いた。例えば、「骨を\_\_\_\_\_」に関して、空欄の部分に「折る」という動詞の出現率は76%であった。この場合、「骨を折る」という慣用句の予測性が高く、それとペアになることができる一般表現「骨を拾う」の動詞「拾う」の出現率は1%しかないため、慣用句より予測性ははるかに低かった。本実験に使用する慣用句と一般表現を予測性において統一する必要があるため、「骨を折る」のような、予測性の高い慣用句は本実験の項目として不適切であった。一方、「血が\_\_\_\_\_」の場合、「騒ぐ」という動詞の出現率は15%であり、「止まる」という動詞の出現率は12%であるため、「血が騒ぐ」という慣用句と、「血が止まる」という一般表現は予測性において性質が類似し、更に表現の長さ（文字数）においても類似するため、「血が騒ぐ（慣用句）/血が止まる（一般表現）」のペアを本実験の項目として適切だと判断した。

以上を踏まえ、最終的に予測性と長さ（文字数）が類似する48ペアの慣用句と一般表現を本実験の予備項目として選出した。

#### 6.4.1.5 字義性調査

2.2.4に述べたように、慣用句の字義性、つまり慣用句の文字通りの意味が合理的であるか否かも慣用句の認知処理に影響を与えるため、本実験に使用する慣用句を字義性において統一する必要がある。よって、予測性調査が終わった後に、Tabossi 他（2009）と同様に慣用句の字義性調査を行った。予測性調査の結果に基づいて選出した48個の慣用句をランダムに2リストに分け、フィラーとして各リストに文字通りの意味が合理的である18個の慣用句（「手を上げる/油を売る/頭を振る/尻尾を掴む」）を加えた。フィラーを入れたのは、筆者の事前判断から見ると対象となる48の慣用句には文字通りの意味が合理的であったものが少なかったためである。フィラーの中の半分は親密度が上位300個の慣用句の中から選出し、もう半分はそれ以外の慣用句の中から選出した。

調査は2017年12月～2018年1月の期間において、Lancersを通して行った。協力者は説明文（付録VII, p192）と同意書を読んだ後に、「作業開始」のボタンをクリックし、作業画面に入った。調査項目はウェブページの上部から下部へ順番に表示された。字義性調査の方法はTabossi 他（2009）を参考し、協力者に慣用句とその慣用句が表す慣用的意味を提示し、対象となる慣用句に慣用的意味以外の意味が



あるか否か、つまり自然な文字通りの意味があるか否かについて判断してもらった。例えば、「足を運ぶ」の場合、慣用句と慣用句が表す慣用的意味「何かの目的で、わざわざそこまで出掛ける」を提示した後に、協力者に「この表現には文字通りの意味があると思いますか」について「はい」か「いいえ」を選択してもらった。更に、協力者の判断を確認するために、「はい/いいえ」の選択が終わった後に空欄を設けた。「いいえ」を選択した場合は空欄に「無」と記入し、「はい」を選択した場合は空欄にその慣用句が表す文字通りの意味を記入するように指示した。例えば、「棚に上げる」という慣用句に関して、ある協力者は「はい」を選択し、空欄に「荷物などを棚の上に上げる」と書いた。

調査の結果に基づき、90%の項目に対して慣用句的意味以外の意味を持っていると判断した協力者 2 人、また「はい」と判断した後に空欄に「無い」と答えた協力者 1 人のデータは採用しないことにした。48 個の慣用句のうち、33 個の慣用句は全ての協力者が「文字通りの意味がない」と判断したため、それらの慣用句には自然な文字通りの意味を持たないと判断した。

#### 6.4.1.6 動詞の反応時間

Tabossi 他 (2009) は慣用句と一般表現に含まれている動詞の反応時間も慣用句の認知処理に影響すると指摘し、事前調査において動詞の反応時間を調べた。よって、本章は Tabossi 他 (2009) と同様に慣用句と一般表現に含まれている動詞の反応時間について調べた。6.4.1.4 の結果に基づいて選出した 33 個の慣用句のうち、「顔」は 3 回出現したため、「顔」という名詞が入っている慣用句の中から「顔に出る」を排除し、またそれとペアになる一般表現もともに排除した。残った 32 ペアの慣用句と一般表現を対象に動詞の反応時間を調べるために、Tabossi 他 (2009) と同様に語彙性判断タスク (lexical decision) を用いた。語彙性判断タスクの際に、協力者に動詞を提示し、その動詞が日本語の動詞として自然である否かについて、「はい (○)」か「いいえ (×)」で判断してもらい、判断の反応時間を測定した。慣用句に含まれている動詞と一般表現に含まれている動詞に重なりがあったため、最終的に語彙性判断タスクに使用した項目は 64 個の動詞 (32×2) ではなく、58 個の動詞であった。更に、フィラーとして 58 個日本語動詞でない疑似動詞 (例:「提じる/較く」) を入れたため、全部で 116 個の動詞が語彙性判断タスクの対象となった。調査は 2018 年 2 月に行い、9 人の日本語母語話者が調査に参加し、正解した項目の反応時間の平均を 6.4.1.8 の解析の際に用いた。

#### 6.4.1.7 ペアとなる一般表現の親密度

Tabossi 他 (2009) は、本実験に使用される一般表現の親密度も表現の認知処理に影響すると指摘し、事前調査において一般表現の親密度を調べた。本章では Tabossi 他 (2009) を参考に、6.4.1.3 に選出した 48 個の予備慣用句 (例: 血が騒ぐ) とペアになる一般表現 (例: 血が止まる) を 2 リストに分け、Lancers を通して親密度調査を行った。筆者の事前判断からすると、対象となる一般表現に親密度の低いものが少なかったため、調査対象の親密度のバリエーションを増やす目的で、6.4.1.1 において親密度が低いと判断された慣用句 10 個 (丙丁に付す/車軸を流す/筆を染める…) をリストに入れた。また、調査対象中の慣用句の数のバランスを取るために、親密度の高い慣用句 10 個 (「機嫌を取る/面倒を見る/腹が立つ…」) もリストに加えた。全部で 50 人の日本語母語話者が調査に参加し、各リストに参加した人数は 25 人であった。1 人の協力者は全部で 44 個の項目について親密度を判断した。調査は 2017 年 12 月～2018 年 1 月の期間において行った。本実験に使用した 32 個の一般表現は付録Ⅷ (p193) を参照されたい。

#### 6.4.1.8 事前解析

事前調査によって選出された慣用句は透明度の幅があるものであり、32 個の慣用句の透明度の中央値を基準に、全ての慣用句を、透明度低 (平均=3.60、標準偏差=0.81) ・高 (平均=5.51、標準偏差=0.56) の 2 グループに分類することができた。親密度、予測性、長さ、動詞頻度、動詞の反応時間の観点で完全に一致する慣用句と一般表現のペアを選出することは非常に困難であるため、Tabossi 他 (2009) は事前解析において慣用句と一般表現の間の差を分析し、その差は構成性によるものではないことを確認した。よって、本章では Tabossi 他 (2009) と同様に、事前調査に基づいて選出した 32 ペアの慣用句と一般表現を対象に事前解析を行った。以下では、慣用句と一般表現の親密度、予測性、長さ、動詞頻度、動詞の反応時間の間の差を分析対象とし、それぞれの差は慣用句の透明度によるものであるか否かを分析した。字義性に関して、選出された 32 個の慣用句は全て自然な文字通りの意味を持たないため、字義性は以下の解析の対象としなかった。

事前解析は以下のように線形モデルを用いた。以下の線形モデルにおいて、従属変数は慣用句の親密度/予測性/長さ/動詞頻度/動詞反応時間とペアの一般表現の親密度/予測性/長さ/動詞頻度/動詞反応時間の間の差であり、独立変数は事前調査において得られた各慣用句の透明度 (平均値) であった。

(慣用句の親密度 - ペアとなる一般表現の親密度) ~ 透明度

	予測値	標準誤差	t 値	p 値
切片	1.09	0.67	1.62	0.12
透明度	0.01	0.14	0.05	0.96

(慣用句の予測性 - ペアとなる一般表現の予測性) ~ 透明度

	予測値	標準誤差	t 値	p 値
切片	0.05	0.04	1.35	0.19
透明度	-0.01	0.01	-0.97	0.34

(慣用句の長さ - ペアとなる一般表現の長さ) ~ 透明度

	予測値	標準誤差	t 値	p 値
切片	-0.32	0.34	-0.96	0.35
透明度	0.06	0.07	-0.89	0.38

(慣用句の動詞頻度 / ペアとなる一般表現の動詞頻度) ~ 透明度

	予測値	標準誤差	t 値	p 値
切片	-2.30	7.57	-0.30	0.76
透明度	1.31	1.61	0.82	0.42

(慣用句の動詞反応時間 - ペアとなる一般表現の動詞反応時間) ~ 透明度

	予測値	標準誤差	t 値	p 値
切片	86.99	226.49	0.384	0.70
透明度	-23.50	48.17	-0.488	0.63

以上の結果から、ペアとなる慣用句と一般表現の間の差には透明度が有意な影響を与えていなかったことが分かった。つまり、慣用句と一般表現の間の差は透明度によるものではないことが保証された。従って、以上の 32 ペアの項目は透明度の効果を検証する実験に相応しいと判断した。

## 6.4.2 本実験

### 6.4.2.1 協力者

本実験に参加した協力者は日本語母語話者 36 人と中国語を母語とする日本語上級学習者 33 人であった。日本語母語話者は関東地方の大学に在籍している学部生であった。日本語学習者は日本語能力試験 N1（または旧 1 級）に合格した上級学習者で、全員 6 ヶ月以上日本に滞在していた。

### 6.4.2.2 項目

本実験に使用した項目は 6.4.1 に行った事前調査の結果に基づいて選出した 32 ペアの慣用句と一般表現であった。本実験の項目については付録Ⅷ (p193) を参照されたい。

### 6.4.2.3 デザイン

32 ペアの項目をカウンターバランスが取れた 2 リストに分けた。1 つのリストは 16 個の慣用句と 16 個の一般表現を含んでいた。1 人の協力者は 1 つのリストしか見ないため、ペアとなる慣用句と一般表現のいずれかを見ることになる。フィラーとして、意味が自然な日本語表現（慣用句でない）を 32 個（例：映画を見る）作成し、更に意味が不自然な日本語表現 64 個（肝を丸める）を作成した。フィラーを入れた理由は 2 つあった。1 つ目は、協力者が実験中に見る全ての表現の中にある慣用句の割合を減らし、本実験の目的を隠すためであった。2 目は、自然さ判断タスクで協力者に「はい (○)」か「いいえ (×)」を選択してもらうが、回答の中の「はい」と「いいえ」の確率を 50% に統一するためであった。従って、最終的に 1 つのリストに 128 個の表現が含まれた。1 人の協力者は自然な表現 64 個、不自然な表現 64 個を見ることになり、その中に慣用句は 16 個しか入っていないため慣用句の割合は低いと見なした。

#### 6.4.2.4 手順

本実験は2018年2月5日～3月2日の期間において、大学の実験室内で実施した。協力者と筆者が1対1の環境において実験を行った場合もあれば、2名の協力者が同時に実験に参加する場合もあった。2名の協力者を対象にする際に、互いの影響を防ぐために、隣席に座らないように指示した。1人の協力者は順番に自然さ判断タスク、知識調査、親密度調査、透明度調査の4つの調査に参加した。全ての調査の説明文と画面表示は付録IX (p197) を参照されたい。

全てのタスクは実験室内のパソコンを用いて行った。自然さ判断タスクでは表現の理解過程の速さを測った。このタスクでは、協力者はスクリーンで提示された慣用句と一般表現を見て、意味的に自然であるか否かについて「はい (○)」か「いいえ (×)」で判断した。表現が現れた瞬間から、協力者が「はい」か「いいえ」を判断し、○ (F キー) / × (J キー) のいずれかのボタンを押した瞬間までの反応時間を測定した。慣用句の意味が抽出されなかった、また一般表現の意味が理解されていなかった場合、協力者は「はい」と判断することができなかったため、自然さ判断タスクのプロセスは、図 6-2 (p116) と図 6-3 (p117) に示した慣用句と一般表現の理解過程を含んでいると考えられ、反応時間の長さは慣用句の意味抽出、また一般表現の意味理解<sup>60</sup>の速さを表す指標として適切であると判断した。

自然さ判断タスクの手順は以下の通りであった。説明文が提示された後に、練習問題4問が提示され、練習が終わった後に実験項目が提示された。協力者は練習を通して実験に慣らされた。各項目が提示される際に、まずスクリーンの真ん中に大きな「\*\*\*\*」の記号が提示された。この記号は視覚に入っている前の情報をクリアするためのものであった。協力者がスペースバーを押すと、「\*\*\*\*」が消え、その直後に日本語表現が同じ場所に提示された。協力者はできるだけ速く提示されている表現が自然な日本語表現であるか否かを判断し、○ (F) / × (J) を押すよう指示された。○と×のラベルはそれぞれFキーとJキーの上に貼られていた。

自然さ判断タスクが終わった後に、慣用句の知識調査を行った。この調査の目的は、協力者が慣用句の意味を知っているか否かを確認することであった。母語話者は全ての慣用句を知っているとしても、学習者には慣用句の知識が少ない人もいるため、協力者それぞれを対象に知識調査を行う必要がある。協力者は画面で提示されている慣用句を見て、スペースバーを押すと、「あなたはこの表現の意味を知っていますか」の質問が出た。協力者は「はい (○)」または「いいえ (×)」を押して次へ進んだ。この

<sup>60</sup> 6.3 で述べたように、一般表現の意味は心内辞書に記録されていないため、理解過程において、意味は直接心内辞書から抽出されるわけではない。個々の単語の意味が抽出された後に、単語の意味が結合することによって表現全体の意味が理解される。

調査は対象となる慣用句の慣用的意味が協力者の心内辞書において記録されているか否かに重点を置いており、その意味がどの程度正確であるかについては見なかった。

次に、6.2.3の最後に述べたように、事前調査のみではなく、本実験に参加した協力者を対象に慣用句の親密度と透明度を調査する必要があるため、知識調査の後に、親密度調査と透明度調査を順番に行った。親密度調査は慣用句と一般表現の両方を対象とした。調査の際に、協力者は画面で提示されている表現を見て、スペースバーを押すと、「あなたはどれくらいの頻度でこの表現を見たり/聞いたりしますか」という質問が出た。協力者は「1 一度も見たり聞いたことがない」～「7 よく見聞きする」の7段階に基づいて判断した。第5章では、慣用句の産出を予測するために、親密度判断をただの見聞きする頻度からではなく、理解と産出の2つの側面から測る必要があると述べた。本章の目的は産出ではなく、慣用句の理解に与える要因を探ることであるため、表現のインプットの頻度を指標とする調査方法でも十分であると判断した。

親密度調査が終わった後に、透明度調査を行った。協力者はまず画面で提示されている慣用句表現、慣用句の文字通りの意味及び慣用句の意味を見た。スペースバーを押すと、「この表現の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性はどれくらいありますか」という質問が出た。協力者は「1 関連性が非常に低い」～「7 関連性が非常に高い」の7段階に基づいて判断した。

以上の調査が終わった後に、協力者に質問紙にプロフィールを記入してもらった。質問紙では、学習者は日本滞在習歴、日本語の熟達度などに関する質問に回答し、母語話者は方言の使用、言語学に関する専門知識の有無に関する質問に回答した。

## 6.5 結果

### 6.5.1 データの確認

まず、母語話者と学習者グループにおける自然さ判断タスクの正答率<sup>61</sup>を表6-2 (p129) にまとめる。正答率の計算は既知の慣用句を対象とした。知識調査における解答が「はい」で、かつ親密度調査において親密度が2以上の慣用句を既知の慣用句と見なした。よって、正答率を計算する前に、知識調査において「いいえ」と判断されたもの、また親密度調査で親密度が1となったものを排除することにした。

---

<sup>61</sup> 例えば、「口に出す」に関して、日本語として意味的に自然であるため、自然さ判断タスクにおいて協力者が「はい」と判断し、「OFキー」を押した場合は正答として見なし、「×Jキー」を押した場合は誤答として見なし。一般表現に関しても同様であった。

表 6-2 自然さ判断タスクの正答率

	慣用句 (32 個)	ペアの一般表現 (32 個)
母語話者 (36 人)	0.98	0.94
学習者 (33 人)	0.94	0.87

表 6-2 から分かるように、自然さ判断タスクにおける正答率は全体的に高かった。この結果から、協力者はタスクの指示通りに、日本語表現の自然さを判断することができたと考えられる。また、母語話者が学習者かにかかわらず、慣用句の正答率はペアとなる一般表現より高い傾向があり、慣用句か一般表現かにかかわらず、母語話者の正答率は学習者より高い傾向があることが分かった。

次に、個々の協力者また個々の項目に問題がないかを確認するために、協力者ごとの正答率と項目ごとの正答率を確認した。母語話者の場合、6.5.2 において慣用句と一般表現の両方を分析の対象とするため、32 ペアの項目を全て確認した。その結果、項目 15 番「時間を食う/時間を経る」と 25 番「涙を誘う/涙を滲む」のペアに関して、慣用句「時間を食う」の正答率は 100%であるのに対し、一般表現「時間を経る」の正答率は 60%より低く、慣用句「涙を誘う」の正答率は 80%以上であるのに対し、一般表現「涙を滲む」の正答率は 20%以下であったため、いずれも一般表現の正答率がはるかに低いと判断し<sup>62</sup>、6.5.2.1 の解析においてはこの 2 ペアの項目を排除した<sup>63</sup>。以上の 2 ペアの項目を排除した後に、協力者ごとの正答率を計算した結果、全ての協力者は慣用句と一般表現の両方において正答率が 70%を超えたため、協力者全員のデータを 6.5.2 の解析に使用した。

一方、学習者の場合、6.5.3 においては慣用句のみを分析対象とするため、32 ペアの中の慣用句を確認した。その結果、項目 10 番の慣用句「紙面を賑わす」の正答率は 50%であり、21 番の慣用句「血が騒ぐ」の正答率は 67%であり、いずれも 70%より低かったため、この 2 つの慣用句を 6.5.3 の分析対象から排除した。10 番と 21 番の慣用句を排除した後に、協力者ごとの正答率を計算した。2 番、5 番、27 番の協力者は慣用句の正答率が 70%以下であることが分かり、この 3 人のデータを 6.5.3 の解析に含めないことにした。また、学習者の親密度判断と透明度判断を確認した結果、22 番の協力者は親密度判断において 29 個の慣用句に対して親密度 7 を選択し、その中に 3 個の慣用句は知識調査において「いいえ」と判断していることが分かった。そのため、当該協力者は調査の際に指示に従っていないと判断し、6.5.3 の解析のデータから排除することにした。

<sup>62</sup> 他の 30 ペアの項目に関して、慣用句と一般表現の間の正答率の差は全部 20%以下となっている。

<sup>63</sup> 「涙を滲む」の場合、「涙を滲ませる」が元の表現であるが、NINJAL-LWP for BCCWJ において「涙を」の共起表現を調べた際に、「涙を滲む」が見出しであったため、筆者のミスによって「涙を滲む」を「涙を誘う」のペアとなる一般表現として使用した。

以上を踏まえ、6.5.2.1においては母語話者を対象に、Tabossi 他（2009）と同様の解析を用いて慣用句と一般表現について分析するため、項目 15 番「時間を食う/時間を経る」と 25 番「涙を誘う/涙を滲む」のペアを含めないことにした。6.5.2.2 と 6.5.3 においては母語話者と学習者それぞれを対象に、慣用句のみ（一般表現を含めない）について分析し、両グループの結果を比較するために、6.5.2.2 と 6.5.3 の解析においては項目 10 番の慣用句「紙面を賑わす」と 21 番の慣用句「血が騒ぐ」を除いた<sup>64</sup>。母語話者に関する解析は 36 人全てのデータを使用した。学習者に関する解析は協力者 2 番、5 番、22 番と 27 番のデータを排除し、最終的に 29 人のデータを使用した。

また、全ての協力者の反応時間の分布を確認した結果、母語話者の場合、3 秒以上のデータを外れ値とし、学習者の場合、10 秒以上のデータを外れ値とし、それらのデータポイントを解析から排除した。

## 6.5.2 日本語母語話者の解析

本章では透明度が慣用句の理解（反応時間）に影響を与えると予測したが、Tabossi 他（2009）は透明度と類似する概念である構成性が慣用句の理解に影響を与えないという結果を示した。6.2.3 に指摘したように、Tabossi 他（2009）は事前調査の結果を本実験の解析に用いたという点において再検討する余地があると考えられた。よって、6.5.2.1 では、まず Tabossi 他（2009）と同様の手法を用いて、慣用句とペアの一般表現を対象に、事前調査で得られた透明度のデータを基に解析を行い、それから本実験で得られた透明度のデータを使用して解析し、それぞれの解析結果を比較した。6.5.2.1 の結果から、本実験に行われた透明度調査の結果を解析に用いる必要性が明らかとなったため、6.5.2.2 では慣用句のみを対象に、本実験における透明度調査の結果を解析に用いて親密度と透明度の効果を検証した。

### 6.5.2.1 解析方法に関する検討

Tabossi 他（2009）は事前調査で調べた構成性の高低によって、慣用句を非構成的慣用句（平均=3.01、標準偏差=0.21）と構成的慣用句（平均=4.53、標準偏差=0.68）<sup>65</sup>に分類した。この研究と比較するために、まず事前調査で得られた透明度を基に、本実験の対象となる慣用句を透明度の高低によって分類することにした。6.4.1 で得られた 32 個の慣用句の透明度の中央値を基準に、全ての慣用句を 2 つのグ

<sup>64</sup> 6.5.2.2 と 6.5.3 では慣用句のみを分析対象とするため、ペアとなる一般表現に問題がある 15 番と 25 番の項目は排除する必要がなかった。

<sup>65</sup> 非構成的慣用句は構成性が低く、構成的慣用句は構成性が高いと考えられる。



グループに分ける場合、透明度低（平均=3.60、標準偏差=0.81）・高（平均=5.51、標準偏差=0.56）の2グループに分類することができる。ただし、Tabossi 他（2009）における非構成的・構成的慣用句の構成性の平均と比較すると、本論文の対象となる慣用句は透明度低・高のグループのいずれにおいても平均値が高かった。Tabossi 他（2009）と直接比較する場合、解析に用いる慣用句の性質は先行研究で使用された慣用句の性質と類似するほうがより妥当であるため、次では事前調査で得られた透明度を基に、全ての慣用句を透明度の高低によって、透明度低（平均=3.10、標準偏差=0.56）・中（平均=4.69、標準偏差=0.34）・高（平均=5.74、標準偏差=0.52）の3グループに分類した。各グループの透明度の平均と標準偏差から見れば、透明度低と透明度中の慣用句は Tabossi 他（2009）が用いた慣用句と性質がより類似していると考えられた。従って、本節では、3グループに分類した結果に基づいて、先行研究における慣用句の性質とより近い透明度低と透明度中の慣用句を対象に解析を行った。

Tabossi 他（2009）は表現の反応時間を従属変数とし、2つの解析を行った。1つ目は表現タイプ（慣用句・一般表現）と構成性を要因とし、表現タイプと構成性の主効果及び両者の交互作用について分析した。2つ目は1つ目の解析に親密度の主効果を要因として加えた分析であった。本節では、まず Tabossi 他（2009）と同様の方法を用いて、事前調査の結果に基づいて分類した透明度低と透明度中の慣用句を対象に、以上の2つの解析を行った。本章の解析には統計ソフト R ver-3.3.0（R Core Team 2016）を使用し、パッケージ lmerTest ver-2.0.32（Kuznetsova 他 2016）の lmer（ver-1.1.12）関数及び anova 関数を利用して、混合線形モデルを統計に用いた。考察に使用した統計のモデルは後退的選択法（backward selection）によって選定した最尤モデルであった。

本章の統計手法として混合線形モデルを用いた理由は3つあった。1つ目に、混合線形モデルの前提として従属変数が連続変数であることがある。本章における全ての解析の従属変数は自然さ判断タスクの反応時間であるため、混合線形モデルの前提条件を満たしている。2つ目に、分散分析はグループ間の差を検定するのに有効であり、つまり独立変数がカテゴリ変数でなければならないのに対し、混合線形モデルにおける独立変数はそのような制限がなく、カテゴリ変数も連続変数も要因とすることができる。6.5.2.2 と 6.5.3 の解析の際は連続変数を要因としたため、本章においては混合線形モデルを使用する必要があった。3つ目に、混合線形モデルはランダム要因に入れることによって、協力者の個人差と項目間の差を配慮することができる点において妥当性が高いと考えられる。

以下の混合線形モデルにおいて、従属変数は表現の反応時間であり、独立変数は表現タイプと慣用句の透明度であった。

```
model <- RT ~ expression type * transparency66 + (1 | subj) + (1 + exp type | item), data
```

反応時間 ~ 表現タイプ\*透明度 + ランダム要因, データ (36人)

表 6-3 表現タイプ\*透明度低・中 (事前調査)

従属変数 = 反応時間 (36人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値
切片 (=慣用句 透明度低)	896.40	40.54	42.67	22.11	<.001 ***
タイプ (一般表現)	48.61	27.46	16.53	1.77	.09
透明度 (中)	-54.32	34.46	18.24	-1.58	.13
タイプ*透明度	23.28	54.93	16.53	0.42	.68

p<.001 \*\*\*, p<.01 \*\*, p<.05 \*

Tabossi 他 (2009) と同様に、1つ目の解析では表現タイプ (慣用句・一般表現) と透明度 (事前調査) がどのように反応時間に影響するかを明らかにするために、表現タイプと透明度を要因とし、表現タイプと透明度の主効果及び両者の交互作用について分析した。1つ目の解析の結果を表 6-3 に示す。表 6-3 の切片は透明度低のグループの慣用句を表している。2行目は、透明度低のグループの慣用句とペアになる一般表現の結果を示している。一般表現は慣用句より反応時間が遅かったが、両者の差は有意傾向のみを示した ( $p=.09$ )。3行目は透明低のグループと比べ、透明度中のグループの慣用句は反応時間が速かった (-54.32ms) ことを示しているが、この差も有意でなかった。また、交互作用が有意でなかったことから、透明度中のグループにおいても一般表現と慣用句の間に差がなかったことが分かる。

次に、Tabossi 他 (2009) と同様に、2つ目の解析を行い、親密度の効果を明らかにするために親密度の主効果を要因に加えた。以下の混合線形モデルにおいて、従属変数は表現の反応時間であり、独立変数は表現タイプ、慣用句の透明度、表現の親密度であった。

```
model<-RT ~ expression type * transparency + familiarity67 + (1 | subj)+(1 + exp type | item), data
```

反応時間 ~ 表現タイプ\*透明度 + 親密度 + ランダム要因, データ (36人)

<sup>66</sup> 全ての解析において、透明度の要因をセンターリングした。

<sup>67</sup> 全ての解析において、親密度の要因をセンターリングした。

表 6-4 表現タイプ\*透明度低・中（事前調査）+親密度

従属変数 = 反応時間 (36人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片 (=慣用句 透明度低)	898.44	40.42	41.70	22.23	<.001	***
タイプ (一般表現)	47.39	26.87	16.80	1.76	.09	
透明度 (中)	-47.46	32.55	18.20	-1.46	.16	
親密度	-42.28	7.96	-5.31	-5.31	<.001	***
タイプ*透明度	38.47	53.54	22.40	16.60	.48	

p<.001 \*\*\*、 p<.01 \*\*、 p<.05 \*\*

表 6-4 と 6-3 の結果を比較し、つまり 2 つ目の解析結果を 1 つ目の解析結果と比較すると、透明度の主効果、また両者の相互作用は変わらず有意でなかった。また、表現タイプの主効果も有意傾向を示した ( $p=.09$ )。一方、親密度の主効果が有意であったことが分かった。4 行目の親密度はマイナスの値であるため、親密度が上がると反応時間が短くなることが分かった。

Tabossi 他 (2009) は 2 つの解析を行った結果、慣用句の構成性が慣用句の反応時間に有意な影響を与えず、慣用句の親密度のみが有意な効果を示すと主張している。表 6-3 と 6-4 が表すように、事前調査で得られた透明度の結果を解析に用いた場合、本章の結果も Tabossi 他 (2009) と一致し、透明度が慣用句の反応時間に有意な影響を与えなかった。一方、親密度が有意な効果を示し、親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より反応時間が短かった。

次は、本実験における透明度調査の結果を解析に用いる場合は同じ結果となるか否かについて分析した。このことを明らかにするために、まずは本実験で得られた協力者の透明度判断を低 (平均=3.32、標準偏差=0.46)・中 (平均=4.46、標準偏差=0.29)・高 (平均=5.76、標準偏差=0.51) の 3 グループに分類した。結果、透明度のデータ分布は事前調査で得られたデータと類似しているが、具体的に見ると、慣用句の中に、事前調査の判断と本実験の判断が一致するものもあれば、一致しないものもあった。「人目を盗む」は事前調査において透明度が高いと判断されていたが、本実験の分類においては透明度が低いと判断された。「口に出す/耳に障る/肩を落とす」は事前調査において透明度中のグループに入っていたが、本実験の分類においては透明度高のグループに分類された。また、「涙を誘う」は事前調査において透明度中のグループに分類されたが、本実験の分類においては透明度低のグループとなった。以下では、表現タイプ (慣用句・一般表現) と透明度 (本実験) がどのように反応時間に影響するかを明らかにするために、本実験に行われた透明度調査の結果を基に、透明度低と透明度中の慣用句を

対象とし、表現の反応時間を従属変数に 2 つの解析を行った。以下の混合線形モデルにおいて、独立変数は表現タイプ、慣用句の透明度であった。

```
model <- RT ~ expression type * transparency + (1 | subj) + (1 + exp type | item), data
      反応時間 ~ 表現タイプ*透明度 + ランダム要因, データ (36 人)
```

表 6-5 表現タイプ\*透明度低・中 (本実験)

従属変数 = 反応時間 (36 人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片 (=慣用句 透明度低)	895.18	38.68	40.45	23.14	<.001	***
タイプ (一般表現)	68.58	32.66	14.12	2.10	.05	.
透明度 (中)	-114.23	30.29	18.07	-3.77	<.01	**
タイプ*透明度	65.91	65.74	14.39	1.003	.33	

p<.001 \*\*\*\*、 p<.01 \*\*、 p<.05 \*\*

表 6-5 は 1 つ目の解析結果を示している。1 つ目の解析では表現タイプ (慣用句・一般表現) と透明度 (本実験) を要因とし、表現タイプと透明度の主効果及び両者の交互作用について分析した。表 6-5 の見方は表 6-3 (p132) と同様であるが、結果は異なった。1 行目の切片は透明度低のグループの慣用句を表している。2 行目は、透明度低のグループの慣用句とペアになる一般表現の結果を表し、一般表現は慣用句より反応時間が長いことが分かり、この差は 5%水準で有意差が認められた。3 行目は透明度のグループと比べ、透明度中のグループの慣用句は反応時間が速い (-114.23ms) ことを示しており、この差も有意であった。また、交互作用が有意でなかったことから、透明度中のグループにおいても慣用句より一般表現の反応時間が長いことが分かった。事前調査における透明度を用いた解析結果 (表 6-3) と異なり、本実験で得られた透明度の結果を要因に入れることによって、タイプと透明度の主効果が有意になった。

Tabossi 他 (2009) は、タイプの主効果、つまり慣用句と一般表現の間に反応時間の差があったとしても、それは親密度によって説明できると述べているため、以下では、2 つ目の解析を行い、親密度の要因を加えることによって、独立変数の透明度と表現タイプがどのように従属変数である反応時間に影響を与えるかについて分析した。2 つ目の解析結果を表 6-6 (p135) に示す。

表 6-6 が示すように、透明度の主効果は 1 つ目の解析と同様に有意であった。透明度が高くなると、慣用句の反応時間が短くなった。また、タイプの主効果に関して、2 つ目の解析では有意であった ( $p = .037$ )。慣用句と比べ、ペアとなる一般表現の反応時間はより長かった。更に、親密度の効果は表 6-4 の結果と同様に有意であり、親密度が高くなると表現の反応時間が短くなる (-49.13) ことが明らかになった。タイプと透明度の交互作用が有意でなかったことから、透明度の高低にかかわらず、一般表現は慣用句より反応時間が長いことが分かった。

```
model <- RT ~ expression type * transparency + familiarity + (1 | subj) + (1 + exp type | item), data
      反応時間 ~ 表現タイプ*透明度 + 親密度 + ランダム要因, データ (36 人)
```

表 6-6 表現タイプ\*透明度低・中 (本実験) + 親密度

従属変数 = 反応時間 (36 人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片 (=慣用句, 透明度低)	899.71	40.19	40.06	22.39	<.001	***
タイプ (一般表現)	65.31	28.75	16.19	2.27	=.037	*
透明度(中)	-113.29	33.82	25.19	-3.35	<.01	**
親密度	-49.13	12.22	36.79	-4.02	<.001	***
タイプ*透明度	59.52	57.68	16.16	1.03	.32	

$p < .001$  ‘\*\*\*’,  $p < .01$  ‘\*\*’,  $p < .05$  ‘\*’

以上をまとめると、表 6-3 (p132) と表 6-4 (p133) は Tabossi 他 (2009) と同様に、事前調査で得られた透明度を要因とした解析の結果を示しており、いずれの解析においても透明度の効果が有意でなかった。一方、表 6-5 (p134) と表 6-6 は本実験で得られた透明度を用いた解析の結果を示し、2 つの解析において透明度の効果は有意であった。よって、事前調査と本実験に参加する協力者が異なる場合、事前調査における協力者の判断ではなく、本実験における協力者が判断した透明度を解析する際の要因とする必要性が明らかとなった。

事前調査における透明度判断の結果と本実験における透明度判断の結果に違いが生じた理由は、本論文の第 4 章の結果によって裏付けられる。第 4 章では透明度判断の個人差に影響を与える要因について考察を行った。その結果、親密度は母語話者の透明度判断に影響を与え、親密度が高くなると、透明度

判断も上がることが明らかになった。つまり、1つの慣用句に関して、事前調査における協力者と本実験における協力者の慣用句の接触頻度が異なれば、その慣用句の親密度も異なり、結果として慣用句の透明度判断に違いが生じる可能性が考えられる。

更に、本実験に参加した協力者でも、透明度調査において1つの慣用句に対して異なる判断を行う可能性がある。表 6-5 (p134) と表 6-6 (p135) の解析のように、透明度を分類してカテゴリ要因として扱う際は、協力者間の違いを無視することになってしまう。具体的に言うと、本実験の結果を見れば、「人目を盗む」の透明度の平均は3.89であり(付録Ⅷ, p193)、分類の際は透明度低の慣用句とされたが、透明度調査においてこの慣用句の透明度を5と判断する協力者もいたため、その協力者の透明度判断を低群に分類することは妥当性が欠けていたと考えられる。従って、以下では、慣用句を事前に透明度によって分類せずに、本実験の協力者が判断した1~7の数値をそのまま変数として解析の際の要因とした。

### 6.5.2.2 慣用句の解析

6.5.2.1 では Tabossi 他 (2009) と比較するために、慣用句と一般表現の反応時間について分析を行った。その結果、本実験の協力者が判断した透明度を解析する際の要因とする必要性が明確になり、親密度だけでなく、透明度も慣用句の反応時間に影響を与えることが示唆された。

以下では、慣用句の理解における透明度と親密度の効果を更に検証するために、一般表現を除き、慣用句のみを対象に分析を行った。以下の解析では慣用句の反応時間を従属変数に、透明度と親密度の主効果、及び透明度と親密度の交互作用を固定要因とし、協力者と慣用句項目をランダム要因とした混合線形モデルを仮定し、最尤推定を行った。透明度は事前に分類せずに、協力者が判断した1~7の数値をそのまま変数として解析に用いた。以下の混合線形モデルにおいて、独立変数は慣用句の透明度と親密度であった。

```
model <- RT ~ transparency * familiarity + (1 + transparency | subj) + (1 + familiarity | item), data
慣用句の反応時間 ~ 透明度*親密度 + ランダム要因, データ (36人)
```

表 6-7 反応時間における親密度と透明度の影響 (母語話者)

従属変数 = 反応時間 (36人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片	890.40	34.51	37.74	25.80	<.001	***
透明度	-16.81	6.98	27.84	-2.41	.02	*
親密度	-36.21	12.04	41.53	-3.01	.004	**
透明度*親密度	-4.13	4.99	88.39	-0.83	.41	

p<.001 \*\*\*、 p<.01 \*\*、 p<.05 \*

表 6-7 の 2 行目は透明度の効果を示す。透明度が 1 点上がることによって、慣用句の反応時間が 16.81 ミリ秒短くなる。3 行目は親密度の効果を示す。親密度が 1 点上がることにつれ、慣用句の反応時間が約 36 ミリ秒ほど速くなる。透明度と親密度の効果はいずれも統計上有意であった (透明度:  $p<.05$ ; 親密度:  $p<.01$ )。一方、親密度と透明度の交互作用は有意でなかった<sup>68</sup>。これらの結果を踏まえ、親密度と透明度が高くなると、慣用句の反応時間も短くなるという表 6-6 の結果が更に検証されたと言える。

Tabossi 他 (2009) は慣用句のタイプ (構成性) が慣用句の理解に影響を与えないという結果を示したのに対し、表 6-6 と表 6-7 の結果が表すように、本章では慣用句のタイプ (透明度) による影響が見られ、母語話者の場合、慣用句の反応時間は親密度と透明度の両方に影響されることが明確になった。

### 6.5.3 日本語学習者の解析

6.5.2 の議論では、1) 事前調査における透明度判断の結果を本実験の解析に用いる、2) 透明度判断を事前に分類してカテゴリ変数とする、という分析方法に妥当性が欠けていることが分かったため、学習者分析では、6.5.2.2 と同様の解析方法を用いて、慣用句のみを対象に、親密度と透明度の効果について考察した。以下の解析では慣用句の反応時間を従属変数に、透明度と親密度の主効果、及び透明度と親密度の交互作用を固定要因とし、協力者と慣用句項目をランダム要因とした混合線形モデルを仮定し、最尤推定を行った。透明度は事前に分類せずに、協力者が判断した 1~7 の数値をそのまま変数として解析に用いた。以下の混合線形モデルにおいて、独立変数は表現タイプ、慣用句の透明度であった。

<sup>68</sup> 親密度と透明度の要因の間に多重共線性が発生しているか否かを確認するために、多重共線性が発生していることを判断する指標である VIF 値を算出した。その結果、親密度・透明度・親密度と透明度の交互作用のいずれの VIF 値も 2 以下であることが分かり (親密度=1.00; 透明度=1.01; 親密度\*透明度=1.01)、表 6-7 の解析では多重共線性が発生していないことが分かった。

```
model <- RT ~ transparency * familiarity + (1 + transparency | subj) + (1 + familiarity | item), data
慣用句の反応時間 ~ 透明度*親密度 + ランダム要因, データ (29人)
```

表 6-8 反応時間における透明度と親密度の影響 (学習者)

従属変数 = 反応時間 (29人)	予測値	標準誤差	自由度	t 値	p 値	
切片	1677.94	98.02	29.39	17.12	<.001	***
透明度	-14.11	27.76	216.36	-0.51	.61	
親密度	-212.78	62.58	14.61	-3.40	.004	**
透明度*親密度	-21.18	22.84	106.86	-0.93	.36	

p<.001 '\*\*\*'、p<.01 '\*\*'、p<.05 '\*'

表 6-8 が示すように、母語話者と同様に、慣用句の親密度は学習者の反応時間に影響することが明らかとなった。親密度が 1 点上がることによって、学習者の反応時間は 212.78 ミリ秒短くなる。そして、この効果は統計上有意であった。一方、母語話者の分析では透明度の効果が有意であったが、学習者の場合、透明度が 1 点高くなると、反応時間は 14.11 ミリ秒短くなるが、この効果は統計上有意な差を示さなかった。なお、透明度と親密度の交互作用も有意でなかった<sup>69</sup>。

## 6.6 考察

まず、本章の仮説①は、次の通りであった：母語話者の場合、親密度と透明度が反応時間に影響する。親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より理解が速く、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解が速い。親密度と透明度の間に交互作用はない。

表 6-4～表 6-7 の分析から言えるように、慣用句の親密度と透明度は母語話者の反応時間に影響し、親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より反応時間が短く、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より反応時間が短かった。親密度の効果に関して、本章の結果は Schweigert (1986) と Libben & Titone (2008) と一致している。Schweigert (1986) と Libben & Titone (2008) は慣用句を対象として実験

<sup>69</sup> 母語話者に関する解析と同様に、親密度と透明度の要因の間に多重共線性が発生しているか否かを確認するために、VIF 値を算出した。その結果、親密度・透明度・親密度と透明度の交互作用のいずれの VIF 値も 2 以下であることが分かり (親密度=1.04 ; 透明度=1.05 ; 親密度\*透明度=1.05)、表 6-8 の解析では多重共線性が発生していないことが明らかとなった。



を行い、単語の場合と同様に、親密度が慣用句の理解を促進させる結果を示している。この結果は、単語を対象とした Lewellen 他 (1993) の結果とも一致する。つまり、慣用句は単語と同様に、心内辞書においてまとまった意味が記録されているため、親密度が上がるにつれ、慣用句としての意味の抽出が速くなる。

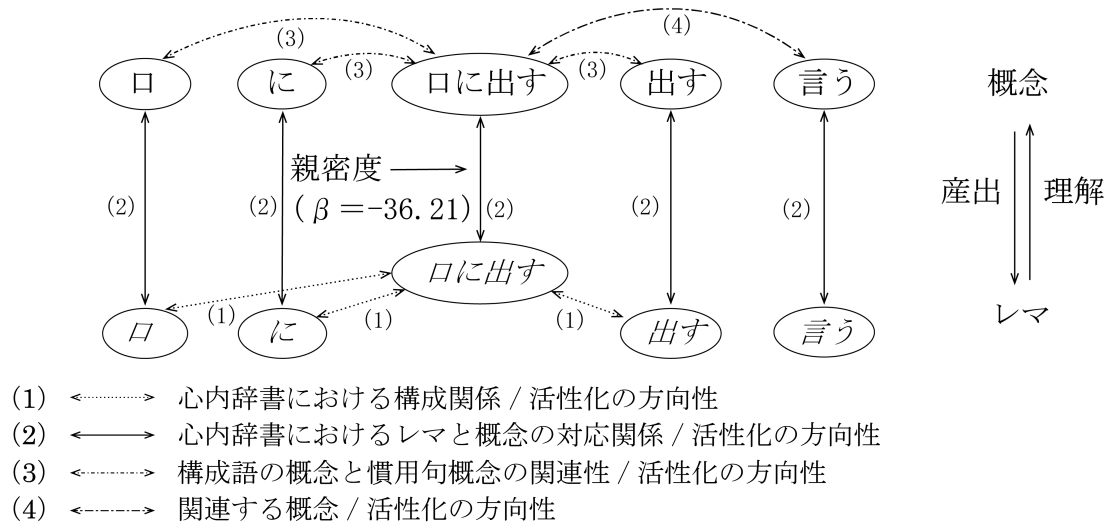


図 6-4 L1 慣用句「口に出す」と一般動詞「言う」の認知モデル (親密度低)

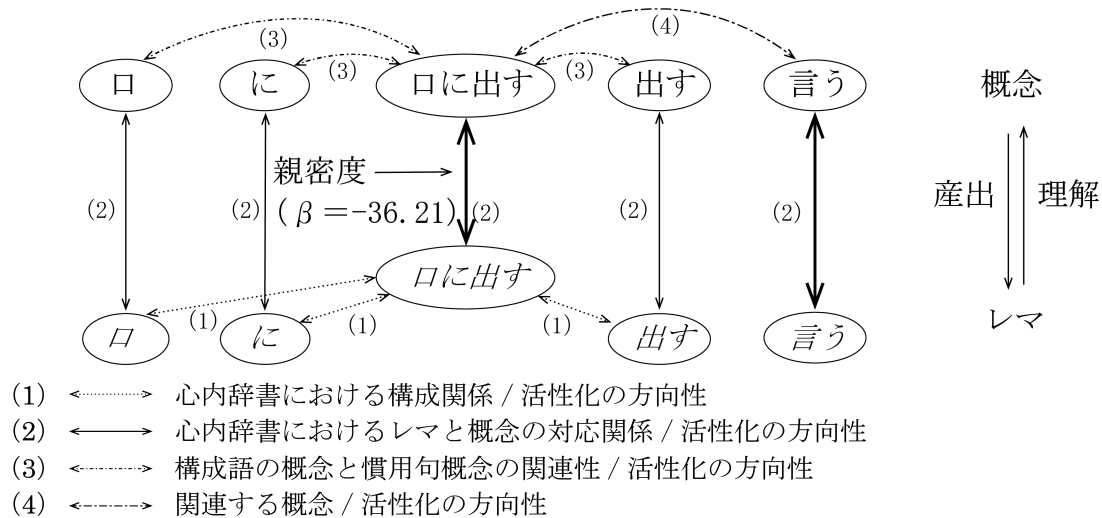


図 6-5 L1 慣用句「口に出す」と一般動詞「言う」の認知モデル (親密度高)

以上の図 6-4 と図 6-5 は心内辞書の構造に基づいた慣用句の理解過程を図示している。単語「言う」と同様に、慣用句「口に出す」の慣用的意味は概念階層において 1 つのまとまりとして記録されている。自然さ判断タスクにおいて、協力者はスクリーンに提示された「口に出す」を見た後に、脳内で認知処理が始まる。理解過程において、レマ階層における「口」、「に」、「出す」のレマ、また「口に出す」の

スーパーレマが先に活性化され、その際に (1) のリンクも活性化される。次に、レマ階層における「口に出す」は概念階層における「口に出す (言葉に出して言う)」の意味と概念のリンク (2) で連結されているため、リンク (2) を通して「口に出す」という慣用的意味が活性化され、最終的に心内辞書から抽出される。協力者は、心内辞書から慣用句の意味を抽出することによって慣用句の意味を理解することができ、「口に出す」が日本語として自然であるか否かを判断することができる。以上を踏まえ、自然さ判断タスクにおいて親密度が協力者の反応時間に影響するという事は、レマ階層が活性化されてから、概念階層が活性化されるまでの時間に影響する。つまり、リンク (2) に影響を与えると考えられる。

単語「言う」を例に挙げると、図 6-4 と図 6-5 を比較した場合、図 6-5 のほうはリンク (2) がより強く、親密度が高いことを表す。リンク (2) が強くなったことによって、レマ階層における「言う」が活性化された後に、概念階層における「言う (言葉に出す)」の意味はリンク (2) を通してより速く抽出される。慣用句に関しても同様である。図 6-4 と図 6-5 を比較した場合、図 6-5 の方は「口に出す」の概念とスーパーレマの間のリンク (2) がより強く、親密度が高いことを表す。図 6-4 と比べ、図 6-5 の場合は「口に出す」の慣用的意味の抽出がより速いと考えられる。なお、表 6-7 (p137) において、母語話者の場合、反応時間における親密度の効果の予測値は-36.21 である。

一方、透明度の効果について、母語話者の場合、透明度が反応時間に影響を与えることが明らかになった ( $\beta = -16.81$ )。透明度が高くなると、自然さ判断タスクにおける反応時間も短くなる。透明度と類似する構成性の効果に関して、先行研究は一致した結果を示していない。Idiom Decomposition Hypothesis によると、構成語の意味と慣用的意味の関連性は慣用句の処理に影響し、関連性の高い慣用句の理解が速く、関連性の低い慣用句の理解が遅い。それに対して、Configuration Hypothesis においては、慣用句処理の速さは、構成性よりも親密度と予測性によって説明される。これは、慣用句の処理が速いのは一般表現より親密度が高いためである。ただし、6.2.3 で指摘したように、以上の研究は項目を作成する際に、字義性、予測性及び動詞の反応時間といった要因の統一に揺れがあるため、直接に結果を比較することができない。更に、以上の研究は分析する際に、事前調査において得られた構成性の結果を本実験の分析に用いている点において妥当性が欠けており、事前調査と本実験の参加者グループにおいて構成性の判断に差がある可能性もある。

本章では Tabossi 他 (2009) が行った事前調査と同様の手順を採用し、事前調査において慣用句の親密度、透明度、字義性、予測性及び動詞の反応時間といった要因を全て統一した上で項目を作成したため、Tabossi 他 (2009) の結果と直接比較することができた。その結果、先行研究は事前調査における構成性判断の結果を本実験の解析に用いている点において妥当性が欠けていることが判明された。本章の結果から、慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高くなるにつれ、L1 慣用句の意味理

解が速くなることが分かった。言い換えれば、透明度はL1 慣用句の理解を促進させると言える。

本論文の第5章では、L2 学習者の慣用句産出に透明度が影響するという結果を示した。この結果に基づき、図6-6のように、L2 心内辞書の概念階層における「口に出す」の意味と慣用句を構成する要素「口」、「に」、「出す」それぞれの意味の間にリンク(3)が存在する可能性があると主張した。本章における透明度の調査方法は第5章と同様に、協力者に慣用句の文字通りと慣用的意味を提示した後に、両者の関連性について判断してもらった。そして、文字通りの意味を定義する際は、慣用句を構成する個々の語彙の意味を辞書において調べ、2つの意味を結合させた後の意味を使用した。つまり、本章の透明度調査において、慣用句の文字通りの意味は個々の構成語の意味を含んでいる。よって、本章において透明度が高いと判断された慣用句は透明度の低い慣用句より、文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性が高く、構成語の意味と慣用的意味の間の関連性も高かったと考えられる。本章における母語話者の結果を見れば、L1 の場合、透明度が慣用句の理解過程を促進させ、よって、L1 の心内辞書においてもリンク(3)が存在すると考えられる。

本実験における透明度調査の結果(付録Ⅷ, p193)を見ると、母語話者の場合、「口に出す」の透明度は平均で5.44であり、「猫を被る」の透明度は平均で2.56であった。このことから、「口に出す」と比べ、「猫を被る」は透明度が低く、構成語の意味と慣用的意味の間の関連性も低かったと考えられる。よって、図6-6におけるリンク(3)と比較すると、図6-7におけるリンク(3)ははるかに弱い。図6-6の場合、理解過程において、レマ階層における「口」、「に」、「出す」のレマ、また「口に出す」のスーパーレマが先に活性化される。Cacciari & Tabossi (1988)、Titone & Connine (1994a)は、慣用句の理解過程において、慣用句を構成する語彙の意味も同時に活性化されると述べている。この考えに基づくと、レマの活性化は、更にリンク(2)を通じて「口」、「に」、「出す」それぞれの概念を活性化させると考えられる。そして、「口」、「に」、「出す」それぞれの概念はまたリンク(3)を通じて「口に出す」の慣用的意味の活性化を促進させる。「猫を被る」は透明度が低いいため、概念階層における「猫(ネコ科の動物)」と「被る(頭から覆う)」それぞれの概念と、「猫を被る(本性を隠す)」という慣用句の概念の間のリンクが非常に弱いと考えられる。よって、もし親密度に差がない場合、「口に出す」と比べ、「猫を被る」の意味抽出を促進させるリンク(3)の効果が弱く、結果的に「猫を被る」の意味理解がより遅くなる。

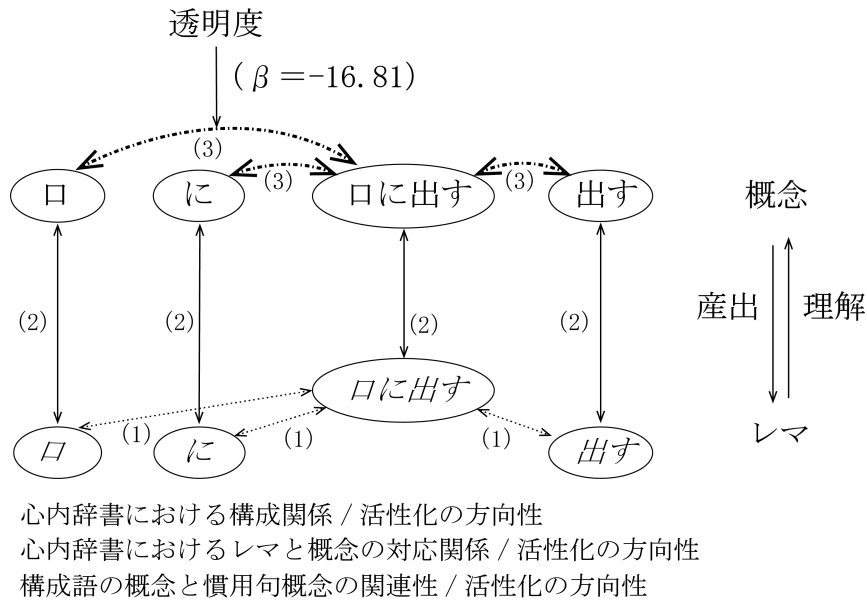


図 6-6 L1 慣用句「口に出す」の認知モデル (透明度高)

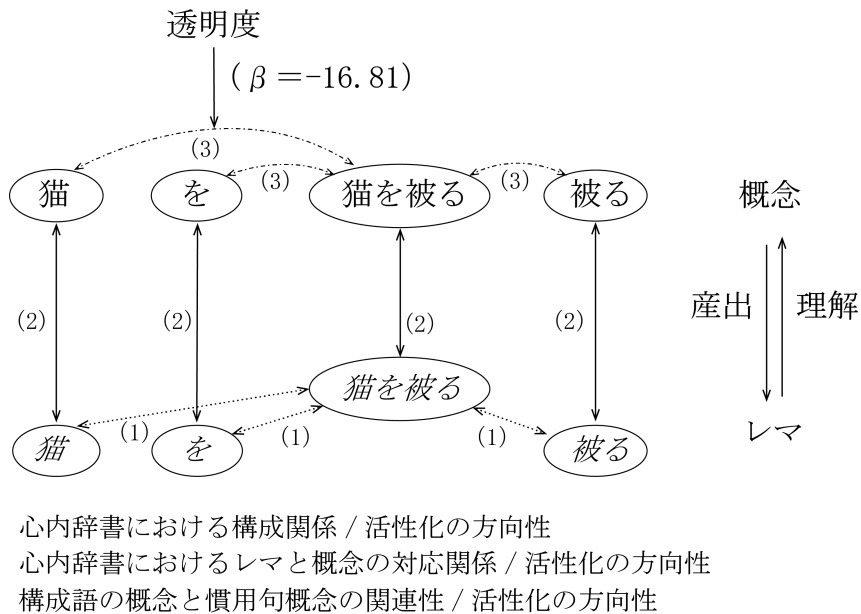


図 6-7 L1 慣用句「猫を被る」の認知モデル (透明度低)

Gibbs 他 (1989) によると、慣用句の構成語の意味と慣用的意味が関連している場合、構成語の指す意味は慣用的意味の抽出を促す。それに対し、構成語の意味と慣用的意味と完全に関連しない場合、慣用的意味の抽出が構成語の意味によって妨げられ、ペアとなる一般表現より意味理解が遅くなる。表 6-5 (p134) と表 6-6 (p135) から見れば、本章において、透明度の低い場合でも慣用句は一般表現より反応時間が短く、理解が速い。従って、Gibbs 他 (1989) の主張の前半は本章の結果と一致するが、後半

は本章の結果と一致しない。Gibbs 他 (1989) は Tabossi 他 (2009) と同様に、事前調査における構成性判断の結果を本実験の解析に用いている点において再検討する余地があると考えられる。

ところが、以上で考察した L1 慣用句の理解過程について、1 つ問題が残る。リンク (1) の活性化に関して、本章の自然さ判断タスクにおいて、慣用句は全体として一斉にスクリーンに現れるため、レマ階層における「口」、「に」、「出す」のレマ、また「口に出す」のスーパーレマのどちらが先に活性化するかが不明である。日常会話や読書を考える場合、単語が先に現れるため、「口」、「に」、「出す」のレマが先に活性化されると考えられる。しかし、本章の実験のように、句全体が同時に目に入る場合、構成要素のレマ、また慣用句のスーパーレマのどちらが先に活性化するかについては、更なる検討が必要である。

親密度と透明度の交互作用に関して、表 6-7 (p137) から分かるように、交互作用は有意でなかった。つまり、慣用句の透明度が低いか高いかにかかわらず、親密度の高い慣用句の意味は親密度の低い慣用句より理解しやすい。また、慣用句の親密度が低いか高いかにかかわらず、透明度の高い慣用句の意味は透明度低い慣用句より理解しやすい。

次に、本章の仮説②について考察を行った。本章の仮説②は、次の通りであった：学習者の場合、全体的に母語話者より反応時間が遅いが、L1 と L2 慣用句の心内構造が共通していると考えられるため、親密度と透明度は反応時間に影響する。親密度の高い慣用句は親密度の低い慣用句より理解が速く、透明度の高い慣用句は透明度の低い慣用句より理解が速い。親密度と透明度の交互作用はない。

表 6-7 (p137) と表 6-8 (p138) における母語話者と学習者の結果を比較すると、表 6-8 の切片の予測値は表 6-8 の 2 倍近くであることが分かった。このことから、学習者の反応時間は全体的に母語話者より遅かったことが分かる。学習者は第二言語の習得が遅く、言語知識及び言語能力は全体的に母語話者に劣っているため、慣用句の理解が母語話者より遅いと考えるのは妥当であると考えられる。

また、親密度に関して、学習者は母語話者と同じく、親密度の高い慣用句は反応時間も速いことが明らかとなった ( $\beta = -212.78$ )。つまり、L1 慣用句と同様に、親密度は L2 慣用句の理解を促進させ、親密度の高い慣用句は、心内辞書から慣用的意味が抽出される際のスピードが親密度の低い慣用句より速いと考えられる。図 6-8 が示しているように、学習者の場合、親密度は「口に出す」の概念とスーパーレマを繋げているリンク (2) に影響を与え、この慣用句に接触する頻度が増えると、親密度が高くなり、リンク (2) がより強いため、「口に出す」の理解過程が促進される。L1・L2 慣用句の理解モデルにおける慣用句の親密度の効果は類似している。

第 5 章では、親密度が L2 慣用句の産出過程を促進させることについて考察したが、本章では L2 慣用句の理解過程においても同じ結果が見られた。そのため、親密度は理解か産出かにかかわらず、L2 慣用

句の認知処理モデルに影響すると考えられる。更に、学習者の親密度判断と母語話者の親密度判断を比較すると、学習者の平均は4.70であり、母語話者の平均は5.65であった。親密度は心内辞書においてレマ階層と概念階層を繋げるリンク(2)に影響するため、学習者の反応時間が全体的に遅い理由の1つとして、母語話者より慣用句の親密度が低く、L2の心内辞書におけるレマと概念の間のリンク(2)がL1より弱いことが考えられる。

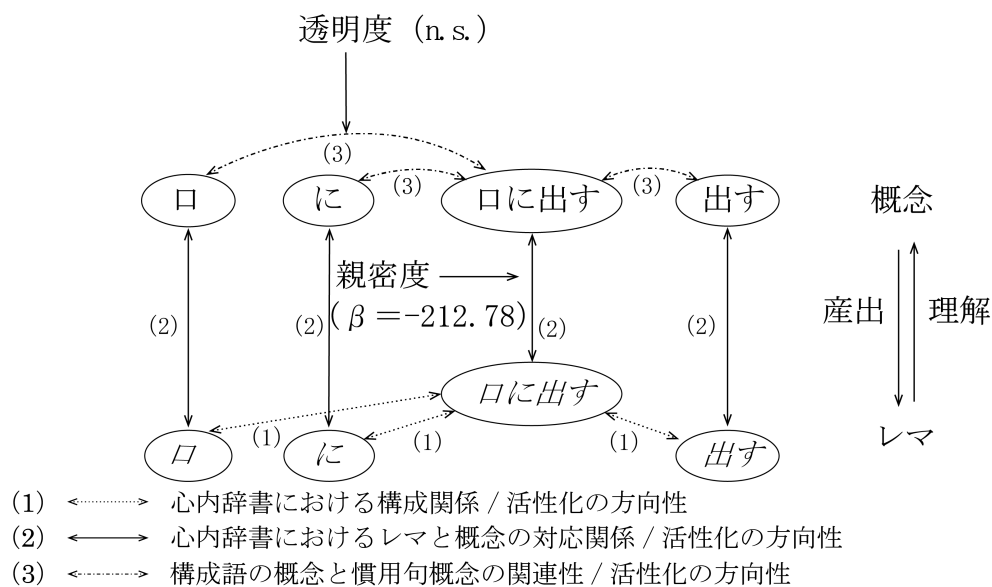


図 6-8 L2 慣用句「口に出す」の認知モデル

一方、学習者の解析において透明度の要因は有意でなかったため、透明度の効果は本章によって検証されなかった。その理由として、以下の3点が考えられる。1つ目に、本章はTabossi他(2009)と比較するために、事前調査の際は母語話者を対象に親密度、透明度、予測性、字義性、動詞の反応時間について調べ、それらの要因を統一した。しかし、学習者の場合、それらの要因が統一されていない可能性がある。ただし、本章は母語話者と学習者の両方を対象としたため、両グループにおいて全ての要因を統一することが非常に困難であった。2つ目に、慣用句の親密度判断と透明度判断を見れば、親密度判断は母語話者より低いのに、学習者による透明度判断は母語話者より高かった。母語話者の透明度判断の平均は4.44であり、学習者の平均は5.13であった。更に、cor.test関数を用いて学習者の解析に使用した慣用句の親密度と透明度の相関関係について分析した結果、親密度と透明度の間に相関があることが分かった( $r=.28^{***}$ )。それに対して、母語話者の場合、32個の慣用句の親密度と透明度の間には相関関係が見られなかった( $r=.04$ )。つまり、本章において選出された32個の慣用句は母語話者にとっ

ては透明度と親密度のバリエーションが豊富であったが、学習者にとっては透明度が偏っており、更には透明度の高い慣用句は比較的親密度も高い傾向があった。従って、学習者グループはデータ上のアンバランスによって、透明度の効果と密度の効果が重なり、結果的に親密度の要因のみが有意となり、透明度の要因が検証されなかった可能性がある。3つ目に、本実験に参加した学習者は33人であったが、その中の4人のデータは解析の際に排除されたため、実際の分析に用いた人数は29人であった。また、本実験の親密度調査と知識調査から得られた学習者の慣用句既知率<sup>70</sup>を見ると、学習者の既知率は母語話者よりはるかに低く、既知率が50%以上の慣用句は32個のうち21個しかなかった。学習者にとって既知でない慣用句は解析の対象から外さなければならないため、学習者の場合、解析に使用できるデータは少なかったと考えられる。Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989) 及び Tabossi 他 (2009) は36人~40人のデータを扱い、本章に参加した母語話者も36人に達した。このため、学習者を母語話者と比較するにはデータを増やす必要があると考えられる。

学習者に関しては透明度の効果は見られなかったが、1つ興味深い点がある。表 6-8 (p138) における透明度の結果を見ると、有意差は出ていなかったが、予測値はマイナスの値であるため、傾向は母語話者の結果と一致している。つまり、透明度が高くなると、学習者の反応もどちらかという、速くなる傾向にある。先に述べたように、L2 慣用句の理解過程における透明度の効果が検証されなかったが、それはL2 慣用句の性質が統一されていないことや透明度のアンバランスによる可能性がある。そのため、学習者を対象に、より性質が統一されている慣用句を用いることによって、L2 慣用句の理解過程において透明度の効果が見られると考えられる。更に、第5章では学習者の産出過程において透明度の効果が見られたため、L2 慣用句の心内構造における慣用句の構成語の概念と慣用句全体としての概念の間にリンク (3) が存在することが考えられることから、透明度が学習者の理解過程に影響する可能性も十分ある。

最後に、本論文の第4章では慣用句の透明度判断における親密度の影響について研究を行い、母語話者より学習者の方が親密度の効果が大きかったという結果を示したが、次は本章の本実験において得られた学習者と母語話者の親密度と透明度調査の結果を用いて第4章の結果を再検証した。解析の際に、第4章と同様に累積ロジット混合モデルという統計手法を用い、透明度判断における母語話者と学習者の差、また親密度の影響を明らかにした (Christensen 2015, Zheng 2014)。以下のモデルにおいて、従属変数は透明度判断の結果であり、独立変数は母語 (中/日) と親密度であった。

表 6-9 は解析のモデルにおいて推定された固定効果の回帰係数及び p 値をまとめた結果である。母語

---

<sup>70</sup> 知識調査における解答が「はい」で、かつ親密度調査において親密度が2以上の慣用句を既知の慣用句と見なした。

及び親密度の主効果は両方有意であり、母語\*親密度の交互作用も有意であった。1行目にある母語=日の主効果が示したように、学習者と比べ、日本語母語話者の透明度判断はより低い ( $\beta=-1.10$ )。2行目にある親密度は学習者の場合を表し、ある慣用句に対して、学習者の親密度が1点上がると、透明度判断において高い数値が選択される傾向がある ( $\beta=0.27$ )。更に、3行目の交互作用 ( $\beta=-0.16$ ) が示したように、日本語母語話者の場合、透明度判断における親密度の効果が下がる。つまり、母語話者の場合、親密度が透明度判断に影響するとしても、透明度判断の変化は小さい。この結果は第4章の結果と一致する。また、この結果は本章によって選出された32個の慣用句は母語話者において透明度のバランスが取れているのに対し、学習者においては透明度の高いものに偏っていたことの裏付けにもなる。

```
model <- transparency ~ familiarity first language + (1+familiarity | subj) + (1+first language *
familiarity | item), data
慣用句の透明度 ~ 親密度*母語 + ランダム要因, データ (69人)
```

表 6-9 透明度判断における親密度の効果 (母語話者と学習者の比較)

従属変数 = 透明度	(69人)				
	予測値	標準誤差	z 値	p 値	
母語 (=日)	-1.10	0.23	-4.76	<.001	***
親密度	0.27	0.04	6.42	<.001	***
親密度*母語日	-0.16	0.08	-3.24	<.01	**

p<.001 \*\*\*, p<.01 \*\*, p<.05 \*

表 6-9 の結果に基づき、透明度判断における親密度の効果と心内辞書における慣用句構造の関係を以下の図 6-9 (p147) のように示すことができる。親密度が上がることによって、心内辞書における慣用句の構成要素「口」、「に」、「出す」の概念と慣用句「口に出す」の慣用的概念の間のリンクが強くなると考えられる。なお、母語話者と比べ、学習者の場合、親密度の効果はより大きい。ただし、第4章の結果と比べ、本章における親密度の推定値 ( $\beta$ ) は比較的小さい。その理由として、第4章に用いた慣用句は学習者と母語話者の両方にとって親密度の低いものも含まれているのに対し、本章の本実験に用いた32個の慣用句は事前の親密度調査によって選出された母語話者にとって親密度の高いものであり、かつ学習者にとっても比較的親密度が高いものであったためである、ということが考えられる。



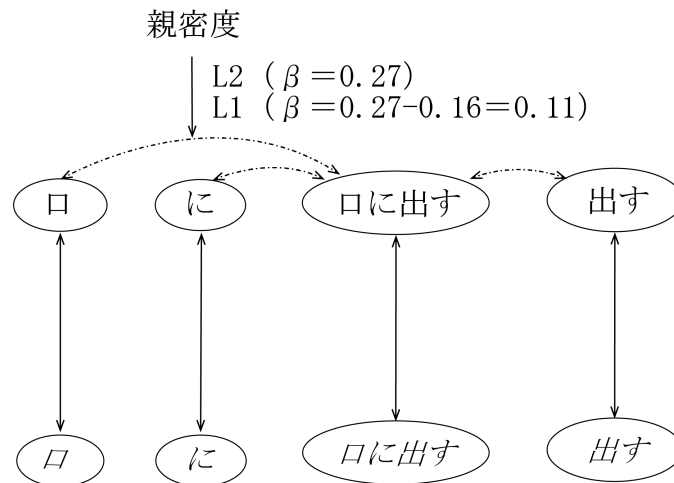


図 6-9 透明度判断における親密度の効果と慣用句の心内構造の関係

## 6.7 まとめと今後の課題

本章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解速度を測定する自然さ判断タスクを行った。母語話者と学習者の反応時間を比較することによって、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度及び透明度の効果について検討し、第 5 章で提案した慣用句の心内構造に基づく慣用句の理解モデルについて考察した。その結果、母語話者の場合、慣用句はペアとなる一般表現より反応時間が短く、慣用句の親密度と透明度が反応時間に影響し、親密度が高くなれば慣用句の理解が速くなり、透明度が高くなるにつれ、慣用句の理解も速くなった。Sprenger 他 (2006) が示した Superlemma Model では L1 慣用句の認知過程における透明度の効果が説明されないため、本章の結果から、図 6-6 (p142) と図 6-7 (p142) が示しているように、Superlemma Model にリンク (3) を加える必要があることが示唆された。一方、学習者の場合、親密度の効果のみが検証された。また、親密度が上がるにつれ、学習者の反応時間が短くなることが分かった。

学習者の場合は透明度の効果が有意でなかったため、今後の課題として更なる実験を行う必要がある。その際に、事前調査において学習者を対象に親密度、透明度、予測性、字義性、動詞の反応時間について調べ、可能な限りそれらの要因を統一することが望ましい。また、学習者の人数を増やすことと、透明度におけるバリエーションがより大きい慣用句項目を使用することを考慮に入れて実験デザインを行う必要があると考えられる。

## 第7章 本論文のまとめと今後の課題

### 7.1 本論文のまとめ

まず、第3章～第6章の結論と本論文における議論の流れを図示すると以下の図7-1になる。

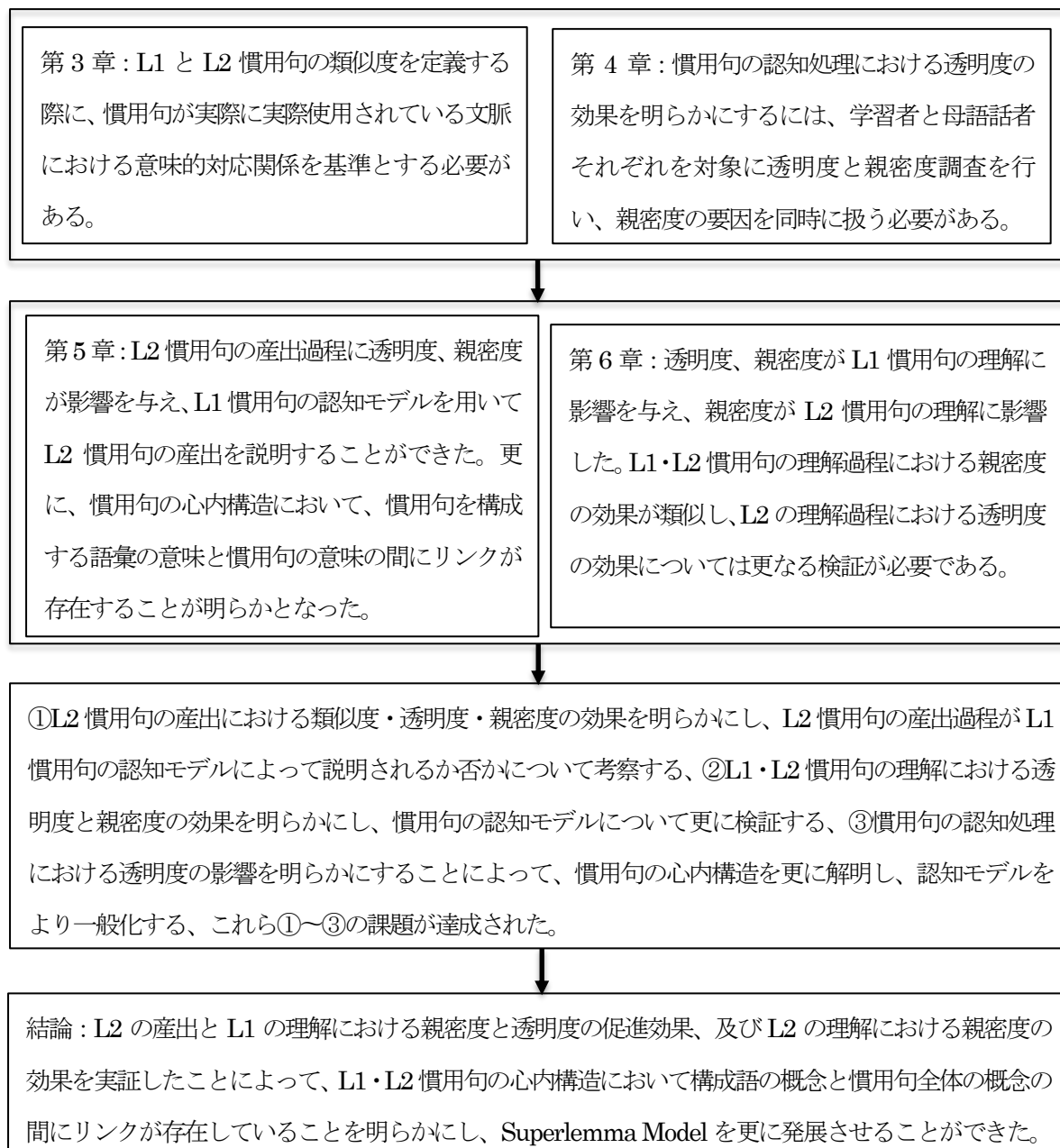


図 7-1 本論文における議論の流れと結論

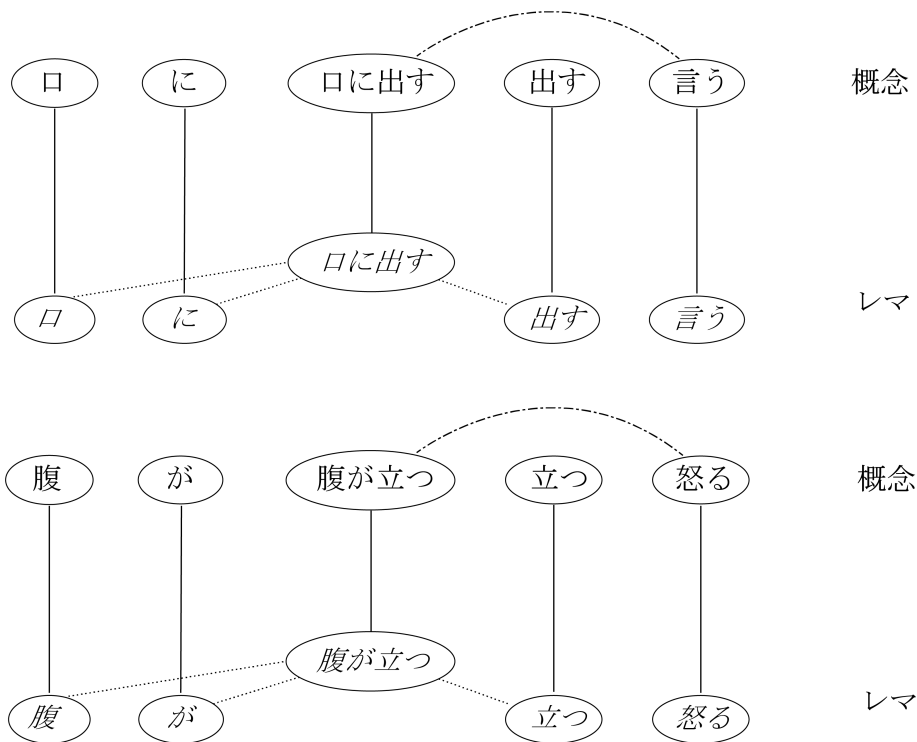
第3章では、課題①を達成するために、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度を判断する際の意味的基準について再検討する必要があることを指摘し、第5章において類似度を判断する際に、辞書における慣用句の定義ではなく、各実験文脈における慣用句の意味的対応関係を類似度の意味的基準とする必要があると主張した。

第4章では、慣用句の透明度判断は話者の親密度判断によって影響されることを指摘し、母語話者が学習者かにかかわらず、ある慣用句の親密度が上がることによって、その慣用句に対する透明度判断も高くなることと、学習者グループにおける親密度の効果は母語話者より顕著であることを明らかにした。なお、第5章と第6章において透明度の効果を明らかにするには母語話者と学習者それぞれを対象に親密度と透明度調査を行い、親密度の要因を解析に入れる必要があることを主張した。

第5章では、Irujo (1993) と Laufer (2000) を基に、2つの産出実験を行うことによって、透明度と親密度が L2 慣用句の産出過程を促進させることが分かった。また、親密度の効果は Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model によって説明できる一方、透明度の効果は元のモデルによって説明されないため、Superlemma Model に透明度の効果を加える必要があった。その結果、第5章は心内辞書における慣用句の概念と構成語の概念の間にリンクが存在し、透明度はそのリンクに影響を与えることによって慣用句の産出過程に影響すると主張した。

第6章では、Swinney & Cutler (1979)、Gibbs 他 (1989)、Tabossi 他 (2009) を基に、慣用句の理解速度を測定する自然さ判断タスクを行った。母語話者と学習者の反応時間を比較することによって、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度及び透明度の効果を明らかにした。その結果、L1・L2 慣用句の心内構造が類似し、L1・L2 慣用句の理解過程において親密度の効果が共通していることを明らかにした。更に、透明度も L1・L2 慣用句の理解過程において類似する効果を与える可能性があると主張した。

図7-2は Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model における慣用句の心内構造を日本語慣用句「口に出す」と「腹が立つ」で表した図である。第5章と第6章の考察に基づくと、慣用句の親密度は概念階層とレマ階層を繋げるリンクに影響を与えることによって、「口に出す」と「腹が立つ」の心内構造に影響を及ぼす。一方、このモデルでは、慣用句を構成する要素「口」、「に」、「出す」の概念、また慣用句が表す「口に出す」の概念、この4つの概念がそれぞれ独立しているため、親密度に差がない場合、透明度の低い慣用句「腹が立つ」と透明度の高い慣用句「口に出す」の心内構造は区別されない。しかし、第5章と第6章の結果が示唆するように、慣用句の透明度はL2 慣用句の産出過程とL1 慣用句の理解過程を促進させる。この結果は、図7-2が示している元の Superlemma Model によって説明することができない。よって、本論文は心内辞書において慣用句を構成する単語の概念と慣用句全体が表す概念の間にリンクが存在することを主張し、心内辞書の構造を図7-3 (p151) のように提案した。



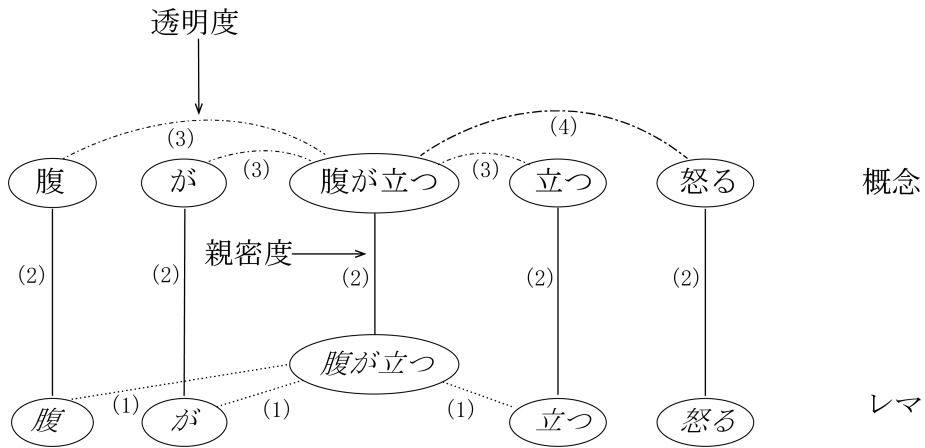
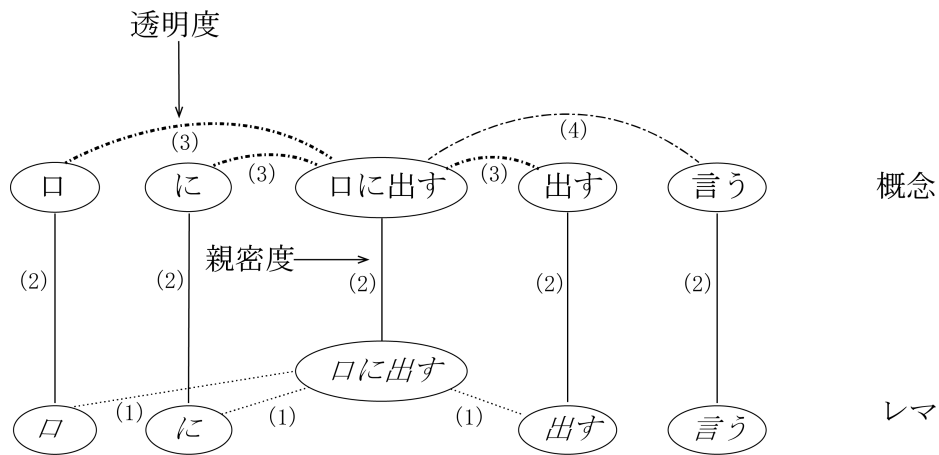
— : 意味の対応関係

..... : 構成する

- - - : 関連する概念

図 7-2 Sprenger 他 (2006) が提案した元の Superlemma Model における日本語表現の心内構造

図 7-3 (p151) の場合、リンク (1) は心内辞書のレマ階層における構成関係を示しており、「口に出す」という慣用句のスーパーレマは構成要素「口」、「に」、「出す」それぞれのレマによって構成されている。リンク (2) はレマ階層と概念階層の対応関係を表し、一般語彙「口」、「出す」、「言う」のレマはそれぞれ「口 (口部)」、「出す (外に移す)」、「言う (言葉に出す)」という概念と対応している。更に、「口に出す」のスーパーレマも「口に出す (言葉に表して言う)」というまとまった概念とリンク (2) と通して繋がっている。



- (1) ..... 心内辞書における構成関係
- (2) —— 心内辞書におけるレマと概念の対応関係
- (3) ..... 構成語の概念と慣用句概念の関連性
- (4) ..... 関連する概念

図 7-3 心内辞書における日本語表現の構造 (本論文による提案)

リンク (3) は「口に出す」の概念と「口」、「に」、「出す」の概念の間の関連性を表し、図 7-2 (p150) のモデルに加わった新しいリンクであり、本論文の実験から得られた知見に基づく提案である。リンク (4) は概念階層における類似概念の関係を表し、「口に出す」の慣用的意味「言葉に表して言う」は一般動詞「言う」の意味「言葉に出す」と類似しているため、リンク (4) を通して繋がっている。認知過程において、「口に出す」と「言う」の片方の概念が活性化される場合、もう一方の概念も同時に活性化されると考えられる。第 5 章と第 6 章の考察で述べたように、透明度の低い「腹が立つ」と比べ、透明度の高い「口に出す」の心内構造において、リンク (3) はより強く、慣用句の透明度はリンク (3) に

影響を与えることによって、慣用句の認知過程を促進させると考えられる。

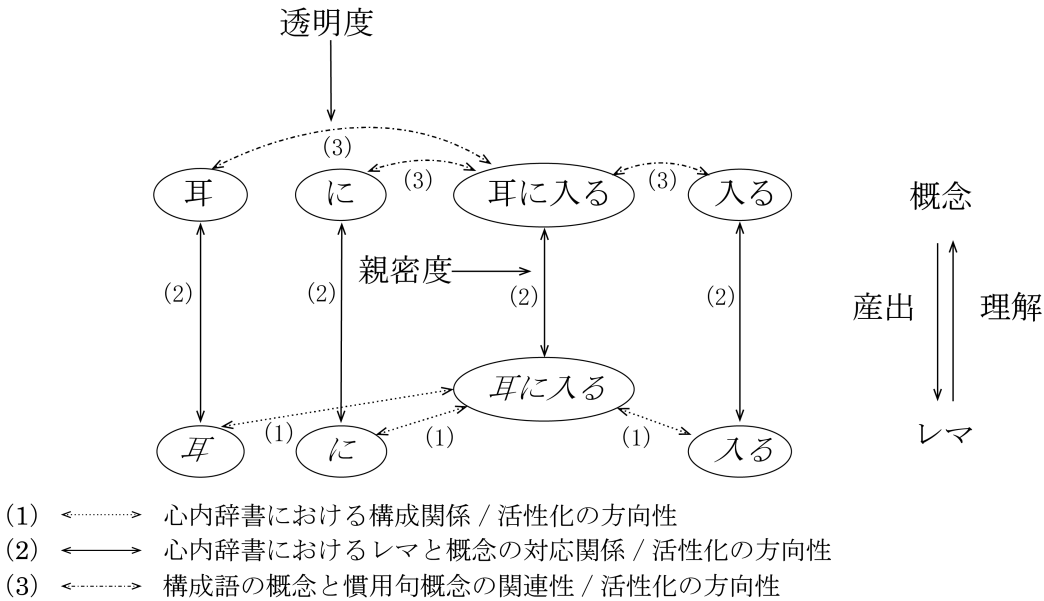


図 7-4 第 5 章の産出実験の結果に基づいた L2 慣用句「耳に入る」の認知モデル

本論文が提案した慣用句の心内構造に基づいて、L2 慣用句の産出を図 7-4 のモデルによって説明できる。産出過程において、概念階層における「耳に入る」の意味が最初に活性化され、その後、概念の活性化はレマ階層を活性化させ、「耳に入る」のスーパーレマがリンク (2) を通じて活性化される。スーパーレマが活性化されたことによって、「耳」、「に」、「入る」のレマがまたリンク (1) を通じて活性化される。この過程において、「耳に入る」の概念の活性化により、「耳」、「に」と「入る」それぞれの概念もリンク (3) を通じて活性化される。更に、「耳」、「に」と「入る」の概念が活性化されたことにより、それぞれの構成要素のレマが活性化される。よって、「耳」、「に」、「入る」のレマの活性化は、それぞれと連結しているリンク (2) とリンク (1) の両方を通して活性化されると考えられる。言語使用者は心内辞書における慣用句のスーパーレマと慣用句を構成する要素のレマが活性化されてから始めて慣用句「耳に入る」を産出することができる。

慣用句の親密度は「耳に入る」の概念とスーパーレマを繋げているリンク (2) に影響を与える。1 人の言語使用者は、「耳に入る」に接触する頻度が増えるにつれ、慣用句の親密度が高くなり、それによって心内辞書における「耳に入る」の概念とスーパーレマの間のリンク (2) がより強くなる。慣用句の産出過程はリンク (2) を経由するため、リンク (2) が強くなると「耳に入る」の産出プロセスが促進される。一方、透明度はリンク (3) に影響を与える。「腹が立つ」のような、透明度の低い慣用句と比べ、「耳に入る」のような透明度の高い慣用句は文字通りの意味と慣用句全体の意味の間の関連性がより高

いため、心内辞書におけるリンク (3) がより強いと考えられる。慣用句の産出過程において、最終的に「耳」、「に」、「入る」の形式を心内辞書から抽出するにはリンク (3) を通さねばならないため、透明度の高い「耳に入る」の産出プロセスはリンク (3) の活性化によって促進される。

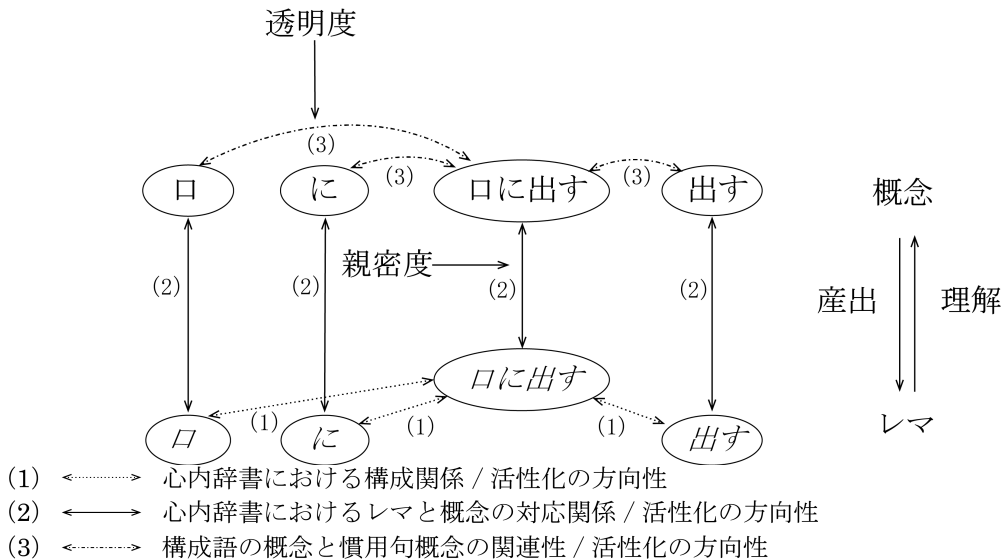


図 7-5 第 6 章の理解実験の結果に基づいた L1 慣用句「口に出す」の認知モデル

また、L1 慣用句の理解過程は、本論文が提案した慣用句の心内構造に基づいて考案された図 7-5 のモデルによって説明できる。言語使用者が「口に出す」を見た、聞いた際に、心内辞書が活性化し、レマ階層における「口」、「に」、「出す」のレマ、そして「口に出す」のスーパーレマが先に活性化される。その後、レマ階層の活性化は概念階層を活性化させ、「口」、「に」、「出す」と「口に出す」それぞれの概念がリンク (2) を通じて活性化される。更に、構成要素の概念はリンク (3) を通じて「口に出す」の概念の活性化を促進させる。言語使用者は心内辞書における「口に出す」の概念が高度に活性化されてからはじめてこの慣用句の意味を抽出でき、慣用句を理解することができる。産出過程と同様に、慣用句の親密度は「口に出す」の概念とスーパーレマを繋げているリンク (2) に影響を与える。一方、透明度はリンク (3) に影響を与えると考えられる。「猫を被る」のような、透明度の低い慣用句と比べ、「口に出す」のような透明度の高い慣用句は文字通り意味と慣用句全体の意味の間の関連性がより高い。透明度はリンク (3) に影響を与えることによって理解過程を促進させる。

一方、L2 慣用句の場合、第 6 章の理解実験では透明度の効果が検証されなかったため、L2 慣用句の理解過程は図 7-6 によって説明できると考えられる。親密度の効果に関して、L2 慣用句は L1 と類似し、「口に出す」の概念とスーパーレマを繋げているリンク (2) に影響を与えることによって理解過程を促

進させると考えられる。更に、このことは第 5 章の産出実験の結果からも示唆されたため、親密度の影響は L2 慣用句の理解・産出過程において共通していると考えられる。それに対し、透明度に関しては、第 5 章と第 6 章で結果が異なった。L2 の産出実験では透明度の効果が見られた一方、L2 の理解実験では透明度の効果が見られなかった。6.6 で述べたように、第 6 章の理解実験で L2 慣用句の透明度の結果が有意でなかったのは、L2 慣用句の性質が統一されていなかったことや透明度がアンバランスであった可能性があるためである。よって、透明度が L2 慣用句の理解に影響を及ぼすか否か、またどのように影響を及ぼすかについて、更なる検証が必要であると考えられる。学習者を対象に、より性質が統一されている慣用句を用いることによって、L2 慣用句の理解過程において透明度の効果が見られる可能性があると考えられる。

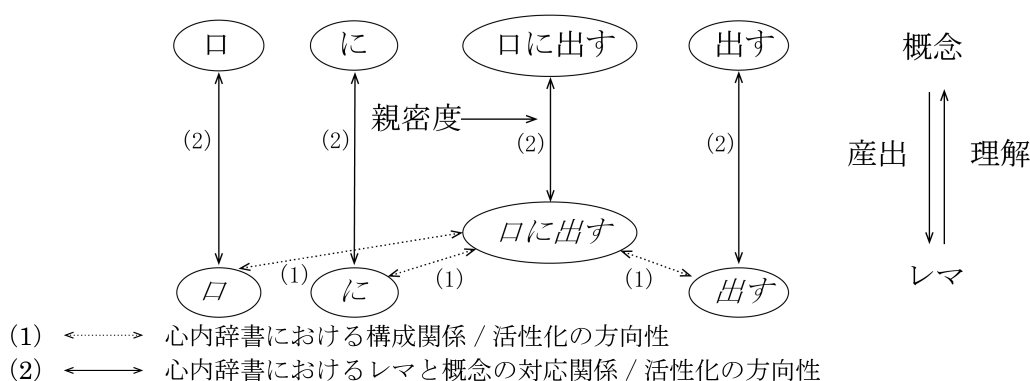


図 7-6 第 6 章の理解実験の結果に基づいた L2 慣用句「口に出す」の認知モデル

なお、本論文の第 4 章において慣用句の親密度が透明度判断に影響を与えることが明らかになったことから、図 7-4 (p152) と図 7-5 (p153) におけるリンク (3) は透明度の高低だけでなく、親密度にも影響を受けることが分かった。母語話者か学習者かを問わず、ある慣用句の親密度が高くなるにつれ、透明度判断も高くなる。つまり、慣用句の接触頻度が増えると、慣用句の構成語の意味と慣用句の意味の関連性が徐々に見出され、心内辞書におけるリンク (3) が次第に強くなる。従って、「腹が立つ」と「耳に入る」を比較する際に、必ずしも前者の処理が後者より遅いとは限らず、もし「腹が立つ」の親密度が「耳に入る」より高い場合、「腹が立つ」の処理がより速い可能性もある。図 7-3 (p151) におけるリンク (2) とリンク (3) は、言語使用者それぞれによって異なり、慣用句の接触経験に影響されると考えられる。

L1 と L2 の違いに関して、以下の 2 点が示唆された。1 つ目に、学習者は母語話者と比べ、概念階層とレマ階層を連結するリンク (2) が比較的弱いいため、L2 慣用句の理解と産出が L1 慣用句より困難である。また、学習者の心内辞書におけるリンク (2) が弱いと考えられる理由の 1 つは、学習者の慣用句の



親密度が母語話者より低いことである。2つ目に、第4章の結果から分かるように、透明度判断に与える親密度の影響は、母語話者より学習者のほうが顕著である。言い換えれば、学習者の場合、親密度の上昇がリンク(3)に与える影響はより大きい。更に、第4章から第6章までの結果が示したように、学習者は母語話者より、慣用句の透明度を高く判断する傾向がある。第6章において、学習者の場合、透明度の効果が有意でなかった理由の1つに、対象となる慣用句の中に、学習者にとって透明度の低い慣用句が殆どなかった、つまり、L2慣用句の透明度が非常に偏っていたことが挙げられる。

本論文の結果から、親密度と透明度はL2慣用句の産出過程とL1慣用句の理解過程において共通して影響を与えることが解明された。なお、親密度はL2慣用句の理解過程と産出過程の両方に影響を及ぼすことも明らかとなった。本論文の考察に基づくと、今後はL1・L2慣用句の心内構造と認知過程が共通している可能性について検討していく余地があると考えられる。もしL1・L2慣用句の心内構造と認知過程が共通している場合、慣用句の認知モデルは図7-7(下)のように示すことができると考えられる。Sprenger他(2006)が提案した元のSuperlemma Model(図7-7上)では透明度の効果が解釈できないのに対し、本論文の主張では、透明度の効果はリンク(3)によって現れ、リンク(3)の活性化を通して慣用句の認知過程を促進させる。また、元のSuperlemma Modelにおいて、親密度の効果がどのように現れるかは考察されていなかったが、本論文は親密度が認知過程のどの部分に影響するかを明らかにした。慣用句全体の親密度は、慣用句の概念とスーパーレマを繋げているリンク(2)に影響を与え、リンク(2)の活性化を通して認知過程を促進させるということが示唆された。更に、親密度は慣用句の透明度判断にも影響するため、図7-3(p151)の心内構造におけるリンク(3)の強さに影響を及ぼすことが解明された。最後に、Sprenger他(2006)はL1慣用句の産出のみを対象としているため、元のSuperlemma Modelを用いてL1慣用句の理解過程、またL2慣用句の理解・産出を解釈できるか否かは不明であった。本論文ではL1慣用句の理解過程、またL2慣用句の理解・産出について考察した結果、親密度は理解過程と産出過程において類似する効果があり、更に第一言語と第二言語に共通して慣用句の認知処理に影響を与えることを明らかにした。よって、本論文における認知モデルの提案はSprenger他(2006)が提案した元のSuperlemma Modelと比べ、解釈できる範囲がより広く、より一般化されていると考えられる。ただし、図7-7(下)のモデルがL1・L2慣用句の両方に適合するか否かを明らかにするためには、更なる実験を行って検証する必要がある。

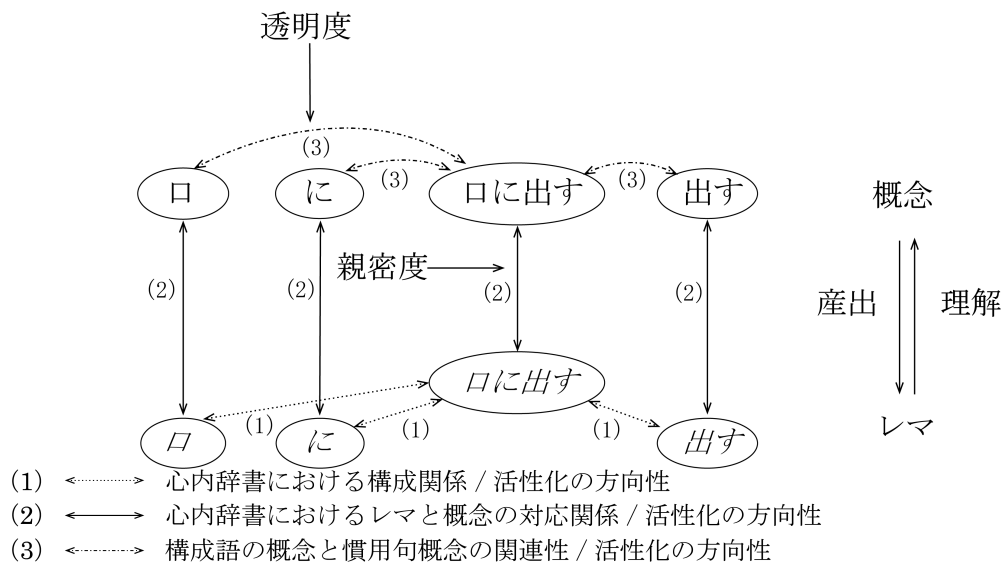
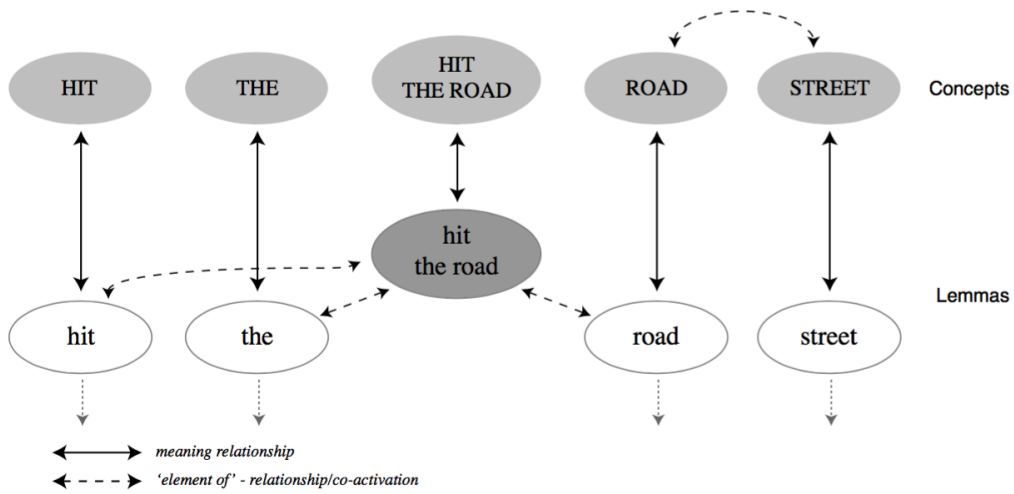


図 7-7 上 : Sprenger 他 (2006:176) による慣用句 hit the road の認知モデル

下 : 慣用句「口に出す」の認知モデル (展望)

## 7.2 本論文の意義と位置付け

本論文の最も大きな貢献は、慣用句の認知処理に関する議論に新たな視点を提供したことにある。L1・L2 を比較することによって、L2 慣用句の産出過程と L1 慣用句の理解過程における親密度と透明度の促進効果、及び L2 慣用句の理解過程における親密度の効果を実証した本論文は、Sprenger 他 (2006) が提案した Superlemma Model を更に発展させたものである。更に、L1・L2 慣用句の心内構造の観点から、言語使用者がどのように慣用句の文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性

を認識しているかが慣用句の認知処理に影響を与えることを明らかにした本論文の結果は、概念階層において構成語の意味と慣用句全体の慣用的意味の間にリンクが存在していることを裏付けるものである。

更に詳しく述べると、本論文の意義について以下の4点が考えられる。

第一に、これまで、心理言語学の手法を用いた日本語慣用句の研究は殆ど見られなかった。本論文はヨーロッパの慣用句研究を参考に実験を行い、先行研究の結果と照合させることによって、心内辞書における慣用句の構造が言語特有のものではないこと、及び慣用句の心内構造に基づいた慣用句の認知モデルには一般性があるということを示唆できた点において独創性がある。

第二に、本論文は、慣用句の透明度の効果を明らかにしたことによって、心内辞書における慣用句の概念と構成語の概念の間にリンクが存在することを推察でき、それに基づいて、Sprengrer 他 (2006) が提案した Superlemma Model を拡大し、慣用句の認知処理モデルをより一般化することができた点において学術的な意義がある。

第三に、本論文は実証的なデータを用いることによって、慣用句の透明度判断の個人差が慣用句の親密度に影響されることを明らかにし、更に、事前調査で得られた透明度を本実験の解析に用いることは妥当性が欠けており、本実験に参加した協力者を対象に透明度と親密度判断を行う必要があることを主張した。この知見は慣用句を対象とする今後の研究のためにより妥当性の高い研究手法を提示した点において進歩性がある。

第四に、慣用句の認知処理を促進させる透明度の効果を明らかにしたことによって、本論文は第二言語慣用句の教育に貢献した。具体的には、教育現場において学習者に慣用句の慣用的意味について分析させ、文字通りの意味との関連性について考えさせるという教育方法に理論的根拠を提供した。更に、透明度判断における親密度の影響が明らかとなった。このことから、慣用句のインプットを増やすことによって学習者の心内辞書における慣用句の概念と構成語の概念とを関連づけ、その上 L2 慣用句の認知処理を促進させることができると考えられる。

### 7.3 今後の課題

本論文の続きとして以下の課題が考えられる。

まず、本論文が提案した認知モデルが正確である否かを更に検証するために、L1 慣用句の産出過程に透明度が影響するか否かについて実験を行う必要がある。Sprengrer 他 (2006) は L1 慣用句の透明度が図 7-7 (上) のモデルに影響するか、またどのように影響するかを解明できなかったが、本論文の結果に

基づけば、透明度が L1 慣用句の産出にも影響を与えると予測することができる。Sprengrer 他 (2006) と同様に L1 慣用句の産出速度を測定する場合、透明度の高い L1 慣用句は透明度の低い慣用句より産出のスピードが速いと考えられる。

次に、第 6 章の理解実験では、学習者グループにおいて透明度の効果が検証されなかったため、今後は、学習者を対象に更に実験を行う必要がある。第 6 章では L1 慣用句を対象とする先行研究との比較が必要であったため、慣用句選出の際は母語話者を基準としていた。今後は事前調査において学習者を対象に親密度、透明度、予測性、字義性、動詞の反応時間について調べ、それらの要因を統一することが望ましい。また、学習者の人数を増やすことと、透明度におけるバリエーションがより大きい慣用句項目を使用することを考慮に入れて実験デザインを行うことが求められる。

また、本論文は L2 慣用句の産出率に透明度が影響することを明らかにしたが、L2 慣用句の産出モデルを更に検証するには産出率のみではなく、L2 慣用句の産出スピードを測定し、透明度が L2 慣用句の産出速度を促進させるか否かについて考察する必要がある。本論文の結論が正確であれば、透明度の高い L2 慣用句は透明度の低い慣用句より産出のスピードが速いと予測できる。なお、L2 慣用句の産出に関して、本論文では L1 慣用句との類似度の効果が検証されなかったが、全ての L2 慣用句の産出において L1 慣用句が影響しないかという点、そうでない可能性もある。Kellerman (1982) と Kellerman (1983) の心理的有標性理論によると、語彙の意味が中核の意味から離れる場合、転移が起こりにくい。慣用句は全体として慣用的意味が生じるため、構成語の意味が語彙の中核の意味から離れ、周辺的な意味とされるが、慣用句の透明度によって、構成語の意味が中核の意味に近い場合もある (p90 を参照)。よって、透明度の低い L1 慣用句と比べ、透明度の高い L1 慣用句のほうが転移されやすい可能性がある。ただ、L1 慣用句の透明度、L1 慣用句と L2 慣用句の類似度及び L2 慣用句の親密度を同時に要因として扱う場合、数多くの慣用句を使用する必要があると考えられる。

更に、本論文では透明度と構成性を類似する概念とし、両者は慣用句の認知過程において類似する効果があると捉えているため、透明度と構成性の両方を対象とせず、その中の 1 つである透明度のみを対象に研究を行ったが、今後は慣用句の認知過程における構成性の効果についても研究する必要がある。構成性は文字通りの意味ではなく、構成語の意味とその単語が慣用句の慣用的意味の中で担っている意味の間の関連性によって判断される。「腕を振るう」を例に挙げると、透明度を判断する際に、協力者は文字通りの意味（肩から手首までの部分を振り動かす）と慣用的意味（技術を発揮する）に基づいて判断する。一方、構成性を判断する際に、協力者は構成語「腕」と「振るう」の意味とそれぞれが「技術を発揮する」という慣用的意味の中で担っている意味との間の関連性に基づいて判断する。この場合、「腕」の意味は慣用的意味に含まれる「技術」の意味と関連すると考えられる。透明度と構成性は類似してい

るとはいえ、透明度の低い/高い慣用句は必ずしも構成性が低い/高いとは限らない。よって、今後は慣用句の認知処理における透明度と構成性の効果を比較し、両者の相違を明らかにすることによって、慣用句の心内構造と認知過程を更に解明することができると考えられる。

最後に、本論文は慣用句の親密度がどのように認知過程に影響するかを検証したが、実験協力者が慣用句の構成語をどの程度知っているか、また構成語の親密度については検討しなかった。慣用句の心内構造には構成語のレマと概念も含まれているため、構成語の親密度が慣用句の認知処理に影響する可能性も十分考えられる。よって、今後は慣用句全体の親密度だけではなく、慣用句を構成する単語それぞれの親密度を測定し、慣用句の認知処理に影響を与える要因について更に考察する必要があると考えられる。

【参考文献】

- 石田プリシラ (2000) 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」 『日本語科学』 7, pp. 24-43.
- 石田プリシラ (2003a) 「慣用句の意味を分析する方法」 『日本語と日本文学』 37, pp.13-26.
- 石田プリシラ (2003b) 「慣用句の意味分析--《驚き》を表す動詞慣用句・一般動詞を中心に」 『筑波応用言語学研究』 10, pp.1-16.
- 石田プリシラ (2004) 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法: 統語的操作を手段として」 『國語學』 55(4), pp.42-56.
- 伊藤眞 (1997) 「日独慣用句の具象性と意味機能 (瀧内楨雄教授退官特集号)」 *Rhodus: Zeitschrift für Germanistik* (13), pp.118-130.
- 伊藤眞 (1999) 「慣用句の意味の成立要因について (加藤慶二先生・洲崎惠三先生退官記念号)」 *Rhodus: Zeitschrift für Germanistik* (15), pp.185-197.
- 国広哲弥 (1985) 「慣用句論」 『日本語学』 4(1), pp.4-14.
- 小比田涼介・宮本エジソン正 (2014) 「Twitter 上でのシャイなユーザーの自己開示」 『電子情報通信学会技術研究報告』 113(440), pp.7-12.
- 陳雯 (2015) 「第二言語使用における慣用句の回避現象 — 第一言語慣用句との類似度に着目して—」 『言語学論叢』 オンライン版 8, pp.84-100.
- 陳雯 (2016) 「慣用句の透明度と親密度の関係について — 日本語母語話者と学習者判断の比較から—」 『筑波応用言語学研究』 23, pp.15-30.
- 水野りか・松井孝雄 (2014) 「日本語母語者における漢字表記語のメモリスパンに対する形態情報と音韻情報の影響」 『認知心理学研究』 11(2), pp.59-70.
- 宮地裕 (編) (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院
- 宮地裕 (1985) 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」 『日本語学』 4(1), pp.62-75.
- 戴丽 (2012) “有关‘笑壺に入る’与‘眉开眼笑’‘喜笑颜开’的对比研究(‘笑壺に入る’と‘眉开眼笑’‘喜笑颜开’に関する対照研究)” 《语文学刊》 7, pp.23-24.
- 刘春燕 (2015) “第二语言产出的心理语言学研究(第二言語産出に関する心理言語学研究)” 《解放军外国语学院学报》 38(2), pp.58-59.
- 李行健 (2002) “惯用语的研究和规范问题(慣用語の研究と規範の問題)” 《语言文字应用》 1(6), pp.55-60.
- 马国凡・高歌东 (1982) 《惯用语(慣用語)》 内蒙古人民出版社

- 孙维张 (1989) 《汉语熟语学(中国語熟語学)》 吉林教育出版社
- Abel, B. (2003). English idioms in the first language and second language lexicon: A dual representation approach. *Second Language Research*, 19(4), pp.329-358.
- Aljabri, S. S. (2013). EFL Students' Judgments of English Idiom Familiarity and Transparency. *Journal of Language Teaching and Research*, 4(4), pp.662-669.
- Baayen, R. H. (2008). Analyzing linguistic data: A practical introduction to statistics using R. Cambridge University Press.
- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of Memory and Language*, 59(4), pp.390-412.
- Bobrow, S. A., & Bell, S. M. (1973). On catching on to idiomatic expressions. *Memory & Cognition*, 1(3), pp.343-346.
- Cacciari, C., & Tabossi, P. (1988). The comprehension of idioms. *Journal of Memory and Language*, 27(6), pp.668-683.
- Christensen, R. H. B. (2015). Ordinal - Regression Models for Ordinal Data. R package version 2015.6-28. <http://www.cran.r-project.org/package=ordinal/>.
- Cieślicka, A. B. (2013). Second language learners' processing of idiomatic expressions: Does compositionality matter? In *Psycholinguistic and Sociolinguistic Perspectives on Second Language Learning and Teaching* (pp.115-136). Springer, Berlin, Heidelberg.
- Conklin, K., & Schmitt, N. (2008). Formulaic sequences: Are they processed more quickly than nonformulaic language by native and nonnative speakers? *Applied Linguistics*, 29(1), pp.72-89.
- Cooper, T. C. (1999). Processing of idioms by L2 learners of English. *TESOL Quarterly*, 33(2), pp.233-262.
- Cutting, J. C., & Bock, K. (1997). That's the way the cookie bounces: Syntactic and semantic components of experimentally elicited idiom blends. *Memory & Cognition*, 25(1), pp.57-71.
- Dobrovolskij, D., & Piirainen, E. (2005). On the Cross-linguistic Equivalence of Idioms. In *Figurative Language: Cross-cultural and Cross-linguistic Perspectives* (pp.55-78). Amsterdam: Elsevier.
- Gibbs, R. W. (1980). Spilling the beans on understanding and memory for idioms in conversation. *Memory & Cognition*, 8(2), pp.149-156.
- Gibbs, R. W. (1987). Linguistic factors in children's understanding of idioms. *Journal of Child*

- Language*, 14(3), pp.569-586.
- Gibbs, R. W. (1991). Semantic analyzability in children's understanding of idioms. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 34(3), pp.613-620.
- Gibbs, R. W., & Nayak, N. P. (1989). Psycholinguistic studies on the syntactic behavior of idioms. *Cognitive Psychology*, 21(1), pp.100-138.
- Gibbs, R. W., Nayak, N. P., & Cutting, C. (1989). How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing. *Journal of Memory and Language*, 28(5), pp.576-593.
- Grant, L., & Bauer, L. (2004). Criteria for Re-defining Idioms: Are we Barking up the Wrong Tree? *Applied Linguistics*, 25(1), pp.38-61.
- Hulstijn, J. H., & Marchena, E. (1989). Avoidance. *Studies in Second Language Acquisition*, 11(3), pp.241-255.
- Irujo, S. (1986). Don't put your leg in your mouth: Transfer in the acquisition of idioms in a second language. *TESOL Quarterly*, 20(2), pp.287-304.
- Irujo, S. (1993). Steering clear: Avoidance in the production of idioms. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 31(3), pp.205-220.
- Ishida, P. (2008a). Contrastive idiom analysis: The case of Japanese and English idioms of anger. In Granger, S. & F. Meunier (Eds.), *Phraseology: An interdisciplinary perspective* (pp.275-292). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Ishida, P. (2008b). The effect of context on L2 learner strategies for idiom interpretation. *Studies in Language and Literature. Language*, 54, pp.107-145.
- Ishida, P. (2009). The effect of transparency on L2 idiom interpretation. *Tsukuba Journal of Applied Linguistics*, 16, pp.15-30.
- Kamimoto, T., Shimura, A., & Kellerman, E. (1992). A second language classic reconsidered—the case of Schachter's avoidance. *Interlanguage Studies Bulletin (Utrecht)*, 8(3), pp.251-277.
- Kellerman, E. (1977). Towards a characterisation of the strategy of transfer in second language learning. *Interlanguage Studies Bulletin*, pp.58-145.
- Kellerman, E. (1982). Predicting transferability from semantic space: An investigation of translation preferences for a polysemous word. *Studia Anglica Posnaniensia*, 14, pp.197-219.
- Kellerman, E. (1983). Now you see it, now you don't. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language*



- Transfer in Language Learning* (pp.112-134). Rowley, MA: Newbury House.
- Keysar, B., & Bly, B. (1995). Intuitions of the transparency of idioms: Can one keep a secret by spilling the beans? *Journal of Memory and Language*, 34(1), pp.89-109.
- Kuznetsova, A., Brockhoff, P. B., & Christensen, R. H. B. (2016). lmerTest: Tests in Linear Mixed Effects Models. R package version 2.0-32. <https://CRAN.R-project.org/package=lmerTest>
- Laufer, B. (2000). Avoidance of idioms in a second language: The effect of L1-L2 degree of similarity. *Studia Linguistica*, 54(2), pp.186-196.
- Levorato, M. C., & Cacciari, C. (1995). The effects of different tasks on the comprehension and production of idioms in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60(2), pp.261-283.
- Lewellen, M. J., Goldinger, S. D., Pisoni, D. B., & Greene, B. G. (1993). Lexical familiarity and processing efficiency: Individual differences in naming, lexical decision, and semantic categorization. *Journal of Experimental Psychology: General*, 122(3), pp.316.
- Liao, Y. & Fukuya, Y. J. (2004). Avoidance of phrasal verbs: The case of Chinese learners of English. *Language Learning*, 54(2), pp.193-226.
- Libben, M. R., & Titone, D. A. (2008). The multidetermined nature of idiom processing. *Memory & Cognition*, 36(6), pp.1103-1121.
- Liu, D. (2008). *Idioms: Description, Comprehension, Acquisition, and Pedagogy*. Routledge.
- Nippold, M. A., & Rudzinski, M. (1993). Familiarity and transparency in idiom explanation: A developmental study of children and adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 36(4), pp.728-737.
- Nippold, M. A., & Taylor, C. L. (2002). Judgments of idiom familiarity and transparency: A comparison of children and adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 45(2), pp.384-391.
- Nunberg, G., Sag, I. A., & Wasow, T. (1994). Idioms. *Language*, 70(3), pp.491-538.
- R Core Team (2016). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Roelofs, A. (1993). Testing a non-decompositional theory of lemma retrieval in speaking: Retrieval of verbs. *Cognition*, 47, pp.59-87.
- Roelofs, A. (2003). Modeling the relation between the production and recognition of spoken word forms. In N. O. Schiller & A. S. Meyer (Eds.), *Phonetics and Phonology in Language*

- Comprehension and Production: Differences and Similarities* (pp.115-158). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Roelofs, A., Meyer, A. S., & Levelt, W. J. (1996). Interaction between semantic and orthographic factors in conceptually driven naming: Comment on Starreveld and La Heij (1995). *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 22(1), pp.246-251.
- Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in Language Teaching*. Ernst Klett Sprachen.
- Schmitt, N., & Underwood, G. (2004). Exploring the processing of formulaic sequences through a self-paced reading task. *Formulaic Sequences: Acquisition, Processing and Use*, pp.173-189.
- Schweigert, W. A. (1986). The comprehension of familiar and less familiar idioms. *Journal of Psycholinguistic Research*, 15(1), pp.33-45.
- Siyanova-Chanturia, A., Conklin, K., & Schmitt, N. (2011). Adding more fuel to the fire: An eye-tracking study of idiom processing by native and non-native speakers. *Second Language Research*, 27(2), pp.251-272.
- Sprenger, S. A., Levelt, W. J., & Kempen, G. (2006). Lexical access during the production of idiomatic phrases. *Journal of Memory and Language*, 54(2), pp.161-184.
- Swinney, D. A., & Cutler, A. (1979). The access and processing of idiomatic expressions. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18(5), pp.523-534.
- Tabossi, P., Fanari, R., & Wolf, K. (2009). Why are idioms recognized fast? *Memory & Cognition*, 37(4), pp.529-540.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1994a). Comprehension of idiomatic expressions: Effects of predictability and literality. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 20(5), pp.1126-1138.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1994b). Descriptive norms for 171 idiomatic expressions: Familiarity, compositionality, predictability, and literality. *Metaphor and Symbol*, 9(4), pp.247-270.
- Titone, D. A., & Connine, C. M. (1999). On the compositional and noncompositional nature of idiomatic expressions. *Journal of Pragmatics*, 31(12), pp.1655-1674.
- Titone, D. A., Columbus, G., Whitford, V., Mercier, J., & Libben, M. (2015). Contrasting bilingual and monolingual idiom processing. *Bilingual Figurative Language Processing*, pp.171-207.

Wesche, M., & Paribakht, T. S. (1996). Assessing Second Language Vocabulary Knowledge: Depth Versus Breadth. *Canadian Modern Language Review*, 53(1), pp.13-40.

Zheng, Z., Liu, Z., Liu, C., & Shiwakoti, N. (2014). Understanding public response to a congestion charge: A random-effects ordered logit approach. *Transportation Research Part A: Policy and Practice*, 70, pp.117-134.

#### 【参考辞書】

- 尾上兼英 (1992) 『成語林』 旺文社
- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第2版』 大修館書店
- 三省堂編修所 (編) (1983) 『広辞林 第六版』 三省堂
- 三省堂編修所 (編) (2010) 『三省堂 故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』 三省堂
- 東京書籍編集部 (2014) 『慣用句・故事ことわざ・四字熟語 使いさばき辞典』 東京書籍
- 宮地裕 (1982) 『慣用句の意味と用法―常用慣用句一覧』 明治書院
- 王理嘉・侯学超 (1985) 《分类成语词典》 广东人民出版社
- 王涛・曹勇庆 (2007) 《中国成语大辞典: 辞海版》 上海辞书出版社
- 温端政 (编者) (2011) 《中国惯用语大辞典》 上海辞书出版社
- 朱祖延 (编者) (1985) 《汉语成语大词典》 河南人民出版社

#### 【使用コーパス】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 中納言

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/login;jsessionid=0A7E5347B01E319BCD004E79EEFCCA67>

(最終閲覧日: 2018年8月5日)

国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL-LWP for BCCWJ』

<http://nlb.ninjal.ac.jp> (最終閲覧日: 2018年8月5日)

筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL-LWP for TWC』

<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info> (最終閲覧日: 2018年8月5日)

CCL 语料庫(CCL コーパス)

[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp?dir=xiandai](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

(最終閲覧日: 2018年8月5日)

## 【付録I 第4章—調査の説明文】

慣用句は文字通りの意味と慣用句としての意味を持つ。例えば、「力を尽くす」は「力があることのために全部使ってしまう」という文字通りの意味を持っている。この文字通りの意味は「精いっぱい努力する」という慣用句全体としての意味に似ていると感じられる。自分の力を全部使って努力すると考えられるためである。この場合、「力を尽くす」という慣用句表現の文字通りの意味と慣用句全体としての意味の関連性は非常に高いと言える。

一方、文字通りの意味と慣用句全体の意味の間に関連性が低いものもある。例えば、「頭に来る」という表現の文字通りの意味は「頭部に近づく」で、慣用句全体としては「怒る」の意味を表す。両者の間に関連性はあまり見られないと考えられる。

以下では45個の日本語慣用句表現について聞く。それぞれの表現に関して、慣用句の文字通りの意味、全体としての意味、またそれぞれ（慣用句として）が用いられている文脈が提示されている。あなたにとって、それぞれの慣用句の文字通りの意味と慣用句全体としての意味の間の関連性はどれくらいあると思われるかについて伺う。

関連性を1～5の数値で表す。数値が高いほど関連性の高いことを意味する。「1」は「関連性が非常に低い」ことを表し、「5」は「関連性が非常に高い」ことを表す。

また、それぞれの表現について、本調査を受ける前に、各表現を普段見た、または聞いたことがあるかどうかについて聞く。見た/聞いたことがあるというのは、日常生活の会話で聞いたり、使用したりすることや、テレビ、小説、新聞、映画などで見たり、聞いたりすることです。

それぞれの表現の接触頻度を1～7の数値で表す。数値が高いほど頻度の高いことを意味する。「1」は「一度も見た/聞いたことがない」ことを表し、「7」は「良く見る/聞く」ことを表す。

回答に正解はないが、上に書いてある説明文をよく読んで理解した上で、あなたの直感で判断してください。

## 【付録Ⅱ 第4章—調査の項目】

### 1. 耳に入る

文字通りの意味：

聴覚器官の中に移る。

慣用句としての意味：

うわさや情報などが、聞こうと思ったわけではないが、自然に聞こえてくる。

例文：

人込みの中を歩いていたとき、ふと懐かしい故郷のなまりが耳に入って来た。

### 2. 腕を振るう

文字通りの意味：

人間の肩から手首までの部分を振り動かす。

慣用句としての意味：

身につけた能力や技術を存分に発揮する。

例文：

大勢の来客に母は喜々として料理の腕を振るった。

### 3. 目がない

文字通りの意味：

視覚器官が存在しない。

慣用句としての意味：

それが好きで、それを見ると抑制が利かなくなる様子。

例文：

彼女は甘いものに目がない。

#### 4. 気をつける

文字通りの意味：

心の動きを付着させる。

慣用句としての意味：

見落とし・誤り・失敗がないように、よく注意する。

例文：

車に気を付けて道を渡りなさい。

#### 5. 声を殺す

文字通りの意味：

人の発声器官を使って出した音の命を絶つ。

慣用句としての意味：

他人に聞こえないように、声を低く抑えるようにする。

例文：

クラスメートにいじめられ、家に帰ると声を殺して泣いた。

#### 6. 畑が違う

文字通りの意味：

耕地が同じでない。

慣用句としての意味：

専門とする領域が違う。

例文：

理論物理学のことは畑が違うので、私には分からないことが多い。

## 7. 胸がいっぱいになる

文字通りの意味：

首と腹の間の部分があふれて満ちる状態になる。

慣用句としての意味：

こみ上げてくる喜びや悲しみなどを抑えきれず、我を忘れた状態になる。

例文：

優勝の感激で胸がいっぱいになる。

## 8. 泡を食う

文字通りの意味：

泡沫を食べる。

慣用句としての意味：

あまりにも突然の出来事に、ひどく驚き慌てる。

例文：

非常ベルの音に、侵入者は泡を食ってビルから逃げ出した。

## 9. 腹が立つ

文字通りの意味：

腹腔が縦になる。

慣用句としての意味：

許しがたいことに接し、怒りがこみ上げてくる。

例文：

恩を仇で返すようなことをされ、ひどく腹が立った。



## 10. 馬が合う

文字通りの意味：

馬が二つ以上集まって一つになる。

慣用句としての意味：

相手と気心が合い、お互い一緒にうまくやっていける。

例文：

新課長とは馬が合わないから、仕事がやりにくい。

## 11. 力を入れる

文字通りの意味：

人が自ら活動したり他の物を動かしたりする作用のもとになるものを枠の中へ移す。

慣用句全体としての意味：

力をこめる。(ほかのことよりも、特にそのことに)熱心に努力する。

例文：

この夏休みは、苦手な英語に力を入れて勉強することにした。

## 12. 肩を持つ

文字通りの意味：

腕が体に接続する部分の上部を手の中に入れて保つ。

慣用句としての意味：

その人に味方して、支持したりする。

例文：

彼は野党議員なのに、なぜか与党の肩を持つような発言をする。

### 13. 馬鹿にする

文字通りの意味：

愚かな人に動作を行う。

慣用句としての意味：

相手を能力のない者として見下したり、そのことを軽視したりしている気持ちを言動や態度に表す。

例文：

あんなやつに負けるわけがないと、馬鹿にしてかかったのが間違いだった。

### 14. 足が出る

文字通りの意味：

腰から下の二本に分かれ出ている部分が外に移る。

慣用句としての意味：

出費が多くなって、予定していた金額を超過する。

例文：

特別料理を頼んだために、予定より一万円足が出てしまった。

### 15. 気を配る

文字通りの意味：

心の動きを分けて与える。

慣用句としての意味：

間違いや失敗などがないように、細かいところにまで注意を払う。

例文：

我々売り場のマネージャーは、お客に失礼なことがないように、あれこれ気を配るのが仕事だ。

## 16. 油を売る

文字通りの意味：

水に溶けない可燃性の物質を代金と引き換えに相手に渡す。

慣用句としての意味：

仕事を途中でサボって、無駄話などをして時間を潰すこと。

例文：

そんなところで油を売っていないで、さっさと仕事を片付けなさい。

## 17. 首にする

文字通りの意味：

頭部と体をつないでいる部分に動作を行う。

慣用句としての意味：

免職にする。また、解雇する。

例文：

彼は社長の甥でなかったら、勤務態度が悪いので本当は首にしたいところなのだ。

## 18. 舌が肥える

文字通りの意味：

口中にある筋肉質の器官が太る。

慣用句としての意味：

味の良し悪しを識別する能力が高くなる。

例文：

あの人は舌が肥えているから、一般人が作った料理では満足しないだろう。

## 19. 弱音を吐く

文字通りの意味：

力のない物のいい方を口から外へ出す。

慣用句としての意味：

苦しさや困難に耐えかねて、意気地がないことを言う。

例文：

頑張り屋の彼女が弱音を吐くのを聞いたことがない。

## 20. 尻が長い

文字通りの意味：

臀部の両端の距離が大きい。

慣用句としての意味：

他人の家を訪問して話し込み、なかなか帰らない様子。

例文：

隣の奥さんが遊びに来ると尻が長くて困る。

## 21. 手に乗る

文字通りの意味：

上肢の上に上がる。

慣用句としての意味：

相手の計略に引っかかり、騙される。

例文：

みんなは、さんざん彼に騙されたので、さすがにもうその手に乗らない。

## 22. 影が薄い

文字通りの意味：

光の反対側にできる黒いものの厚さが小さい。

慣用句としての意味：

存在感が感じられない様子。

例文：

彼女はおとなしくて、会社でも影が薄い。

## 23. 身につける

文字通りの意味：

身体に付着させる。

慣用句としての意味：

必要に応じて活かせるように技術や学問などを習得する。

例文：

国際化社会に対応するには、語学力だけではなく、幅広い国際感覚を身につける必要がある。

## 24. 焼き餅を焼く

文字通りの意味：

焼いた餅を火で燃やす。

慣用句としての意味：

嫉妬する。

例文：

僕の課には若い女性が多いので、妻が焼き餅を焼いて困る。

## 25. 目を通す

文字通りの意味：

視覚器官が通れるようにする。

慣用句全体としての意味：

内容がだいたい分かる程度に、ざっと読む。おおざっぱに見る。

例文：

毎朝、新聞にはざっと目を通すことにしている。

## 26. 赤の他人

文字通りの意味：

赤色の自分以外の人。

慣用句としての意味：

縁もゆかりもないまったくの他人。

例文：

もう、今日からは君とは赤の他人だ、顔も見たくない。

## 27. 手を貸す

文字通りの意味：

上肢を他人に使わせる。

慣用句としての意味：

当事者ではないのに人の仕事を手伝う。

例文：

一人じゃ持てないから、ちょっと手を貸してくれないか。

## 28. 横になる

文字通りの意味：

水平の方向になる。

慣用句としての意味：

身を横たえて休む。

例文：

食べてすぐ横になるのは良くない。

## 29. 気が済む

文字通りの意味：

心の動きがきちんと終わる。

慣用句としての意味：

何かをすることによって、不満や苛立ちなどが治まり、気持ちが落ち着く。

例文：

僕の立場からすれば、君を殴ったぐらいで気が済むようなことではない。

## 30. 手を打つ

文字通りの意味：

上肢を強く叩く。

慣用句としての意味：

問題を解決するために対策を講じる。

例文：

今のうちに何か有効な手を打たないと事態はますます悪化する。

### 31. 面倒を見る

文字通りの意味：

解決が容易でないことを目でとらえる。

慣用句としての意味：

労をいとわずにいろいろと世話をする。

例文：

私が働きに出ると、家の年寄りの面倒を見てくれる人がいなくなる。

### 32. 泥を吐く

文字通りの意味：

水分を含んで柔らかくなった土を口から外へ出す。

慣用句としての意味：

厳しく追及され、隠していた悪事を白状する。

例文：

彼は警察で厳しい取り調べを受け、ついに泥を吐いた。

### 33. 気にする

文字通りの意味：

心の動きに動作を行う。

慣用句としての意味：

何かに不安や不快感を感じ、そのことに絶えずこだわっている。

例文：

あの人の言ったことなど、気にしなくてもいい。



### 34. 骨が折れる

文字通りの意味：

骨格を構成する堅い組織が曲がって切れる。

慣用句としての意味：

そのことをやり遂げるのが非常に困難で、労力を要する。

例文：

相手があればこれ注文をつけるので、交渉をまとめるのに骨が折れた。

### 35. 気が重い

文字通りの意味：

心の動きの重量が大きい。

慣用句としての意味：

好ましくない結果が予想されたり何かを負担に感じたりして、気持ちが沈む様子。

例文：

明日のテストのことを考えると気が重い。

### 36. 肩を入れる

文字通りの意味：

腕が体に接続する部分の上部を枠の中へ移す。

慣用句としての意味：

そのことに意義を認め、本気になって助力や支援をする。

例文：

彼は同郷の後輩なので、特に肩を入れるつもりだ。

### 37. 白を切る

文字通りの意味：

知らないことを刃物で断ち分ける。

慣用句としての意味：

自分を守るために、知っていることでも全く知らないというふりをする。

例文：

容疑者は最初のうちは白を切っていたが、厳しく追及されてとうとうお犯行を自供した。

### 38. 膝が笑う

文字通りの意味：

足の関節部が嬉しさなどで声を立てる。

慣用句としての意味：

歩き疲れたために、膝が小刻みに震え、力が入らなくなる。

例文：

山頂からの長い下りで膝が笑い出し、歩けなくなってしまった。

### 39. 気に入る

文字通りの意味：

心の動きの中に移る。

慣用句としての意味：

何かを好ましく感じ、積極的に受け入れようとする気持ちになる。

例文：

彼は誕生日に贈られたネクタイがよほど気に入ったのか、毎日のように締めている。

#### 40. 後味が悪い

文字通りの意味：

飲食した後に口に残る味が劣っている。

慣用句としての意味：

何かが終わった後に不快なしこりが残って、すっきりしない感じ。

例文：

彼の一言で座が白け、後味が悪い会になってしまった。

#### 41. 食が細い

文字通りの意味：

食べることの幅が小さい。

慣用句としての意味：

体質的にたくさん食べることができない様子。

例文：

この子は小さい時から食が細くて、いくつになっても太れない。

#### 42. 荷が勝つ

文字通りの意味：

荷物が勝ちを収める。

慣用句としての意味：

能力に比べて負担が大きすぎる。

例文：

病気の母親の世話は、まだ幼い娘には荷が勝つ仕事だ。

#### 43. 懐が寒い

文字通りの意味：

胸の内側の部分が温度を低く感じる。

慣用句としての意味：

お金がない。

例文：

いくら誘われても、今は懐が寒いから付き合いえない。

#### 44. 話に乗る

文字通りの意味：

声を出して相手に伝える内容の上に上がる。

慣用句としての意味：

人の相談事に応じる。

例文：

仕事のことで君に話に乗ってもらいたい。

#### 45. 口にする

文字通りの意味：

口部に動作を行う。

慣用句としての意味：

口に出して言う。

例文：

そんな下品な言葉を口にするな。

【付録Ⅲ 第4章の結果—学習者と母語話者による親密度判断及び透明度判断の平均】

	透明度		親密度	
	中国人日本語	日本語	中国人日本語	日本語
	学習者	母語話者	学習者	母語話者
1. 耳に入る	3.57	3.68	4.46	5.57
2. 腕を振るう	3.04	2.70	4.02	6.02
3. 目がない	2.48	1.62	3.93	5.89
4. 気をつける	3.93	3.53	5.87	6.81
5. 声を殺す	3.91	3.43	3.28	5.28
6. 畑が違う	3.61	3.00	2.24	4.96
7. 胸がいっぱいになる	3.76	3.51	4.22	5.89
8. 泡を食う	1.74	1.74	1.85	4.34
9. 腹が立つ	2.72	1.62	4.93	6.74
10.馬が合う	2.67	2.62	2.30	5.62
11.力を入れる	4.22	3.43	5.00	6.40
12.肩を持つ	3.52	2.53	3.93	5.85
13.馬鹿にする	4.15	3.21	5.28	6.57
14.足が出る	2.30	1.66	3.24	4.47
15.気を配る	3.54	3.49	4.67	6.38
16.油を売る	1.96	1.64	2.57	5.70
17.首にする	2.70	1.81	4.93	6.43
18.舌が肥える	2.96	2.38	3.30	5.55
19.弱音を吐く	3.43	3.57	3.24	6.28
20.尻が長い	2.41	1.62	2.35	2.26
21.手に乗る	2.50	2.02	3.28	4.96
22.影が薄い	3.91	3.09	3.24	6.04
23.身につける	3.93	3.74	5.98	6.55
24.焼き餅を焼く	1.74	1.40	2.93	6.40
25.目を通す	3.78	2.53	4.96	6.51

26.赤の他人	2.15	2.26	2.91	6.26
27.手を貸す	4.13	3.30	4.87	6.40
28.横になる	4.15	4.43	5.04	6.49
29.気が済む	3.24	4.00	4.15	6.28
30.手を打つ	2.46	1.96	3.59	5.66
31.面倒を見る	3.20	2.49	4.37	6.06
32.泥を吐く	2.70	2.13	2.26	3.45
33.気にする	3.63	2.96	5.78	6.62
34.骨が折れる	3.37	2.49	4.09	5.53
35.気が重い	3.98	3.36	4.96	6.06
36.肩を入れる	3.04	2.09	3.24	4.49
37.白を切る	2.15	2.00	2.00	5.51
38.膝が笑う	2.48	2.26	1.83	5.00
39.気に入る	3.72	3.13	5.41	6.53
40.後味が悪い	3.98	3.72	3.09	6.09
41.食が細い	3.54	3.74	2.98	5.79
42.荷が勝つ	3.28	2.47	2.35	2.45
43.懐が寒い	2.83	2.17	3.00	5.64
44.話に乗る	3.89	2.72	4.13	5.62
45.口にする	4.07	3.74	5.35	6.19
平均(Mean)	3.21	2.73	3.81	5.68
標準偏差(SD)	0.71	0.78	1.16	1.00
範囲(Range)	1.74-4.22	1.40-4.43	1.83-5.98	2.26-6.81

---

【付録IV 第5章—実験1における日中慣用句の分類】

	日本語	中国語
グループ1	全力を尽くす	竭尽全力(全力を尽くす)
	足を引っ張る	拖后腿(足を引っ張る)
	耳を傾ける	侧耳倾听(耳を傾けて聞く)
	首を長くして待つ	翘首以待(首を長くして待つ)
グループ2	目に入る	映入眼帘(見る)
	気が短い	沉不住气(短気)
	口を揃える	异口同声(口を揃える)
	大目に見る	睁一只眼闭一只眼(大目に見る)
グループ3	頭に来る	火冒三丈(怒る)
	首にする	炒鱿鱼(首にする)
	馬鹿にする	看不起(軽蔑する)
	腹が立つ	火冒三丈(怒る)
グループ4	気に入る	喜欢(好き)
	気が変わる	改变主意(考え方を变える)
	口にする	吃(食べる)
	気にする	在意(気にする)

## 【付録V 第5章—実験1に使用した説明文】

産出タスク：

以下には、34問の日本語問題があります。1～34で標記します。文脈をよく読んで理解した上で、A B C Dの四つの選択肢の中から、一つお選びください。すべての問題において、前後文脈に合う答えは一つに限りません。前後文脈に合うと思う選択肢の中から自分なら一番文脈に入りたいと思う選択肢を一つだけ選んでください。

親密度調査：

この調査では、日本語の慣用句を18個見てもらって、あなたが以前これらの慣用句を聞いたこと、または読んだことがあるかどうかを聞きます。慣用句の番号は1)～18)となっています。ご自分の経験について教えてください。「聞いたことがある」「読んだことがある」というのは、例えば映画やテレビ等で聞いたり、または新聞・雑誌や小説などで読んだりしたことがあるということを意味します。そのほか、日常生活で聞いたり、使ったり、授業で教わったことや試験で見たことのある場合も「聞いたことまたは読んだことがある」に含まれます。

以下の1～4はそれぞれの慣用句表現の接触頻度を4段階で表します。数値が高いほど、慣用句の接触頻度が高いことを表します。「1」は一番頻度が低く、「一回も聞いた/見たことがない」ことを意味し、「4」は一番頻度が高く、「よく聞く/見る」ことを意味します。

数値を選んだ後に、空欄のところに簡単な日本語で当該慣用句表現の意味について説明してください。もし一回も聞いたこと、見たことがなく、慣用句の意味が分からない場合は、空欄に「知らない」と書いてください。



【付録VI 第5章—実験2に使用した説明文】

産出タスク：

以下に、未完成である30文の日本語文があります。1~30で標記します。文脈をよく読んで理解した上で、空欄\_\_\_\_\_のところに文脈の意味に合う適切な日本語表現を入れて文を完成してください。

それぞれの文の最後に、ヒントとして英語の表現が書いてありますが、英語表現は空欄の部分が表す意味を提示しています。空欄の意味を推測できない時のみ、英語の表現を参照に文を完成してください。本調査は英語に関するテストではありません。英語表現を直接翻訳しないように注意してください。

文を完成する際に、二つ以上の表現を思いついた場合、自分なら最終的に使うと思う表現を①\_\_\_\_\_に、それ以外の表現を②\_\_\_\_\_に書いてください。一つの表現しか思いつかなかった場合は②を空欄のままにしてください。

親密度調査：

以下では、30個の日本語表現について聞きます。あなたはそれぞれの表現を見聞きしたこと、または使用したことがあるかどうかについてお伺いします。1) ~6)の中から、一つだけを選んで、番号に○を付けてください。3) ~6)を選んだ場合、その表現の意味を日本語で簡単に説明してください。

透明度調査：

慣用句は文字通りの意味と慣用句としての意味を持つ。例えば、「力を尽くす」は「力があることのために全部使ってしまう」という文字通りの意味を持っている。この文字通りの意味は「精いっぱい努力する」という慣用句全体としての意味に似ていると感じられる。自分の力を全部使って努力すると考えられるためである。この場合、「力を尽くす」という慣用句表現の文字通りの意味と慣用句全体としての意味の関連性は非常に高いと言える。

一方、文字通りの意味と慣用句全体の意味の間に関連性が低いものもある。例えば、「舌が肥える」という表現の文字通りの意味は「舌が太る」で、慣用句全体としては「いろいろなものを食べて、味のよしあしがよくわかるようになる」の意味を表す。両者の間に関連性はあまり見られないと考えられる。

以下では30個の日本語慣用句表現について聞く。それぞれの表現に関して、慣用句の文字通りの意味、全体としての意味、またそれぞれ(慣用句として)が用いられている文脈が提示されている。あなたにとって、それぞれの慣用句の文字通りの意味と慣用句全体としての意味の間の関連性はどれぐらいあると思われるかについて伺う。

関連性を1～5の数値で表す。数値が高いほど関連性の高いことを意味する。「1」は「関連性が非常に低い」ことを表し、「5」は「関連性が非常に高い」ことを表す。

回答に正解はないが、上に書いてある説明文をよく読んで理解した上で、あなたの直感で判断してください。

## 【付録Ⅶ 第6章—事前調査の説明文】

### 【親密度調査】

日本語には以下のような、文字通りの意味と慣用句的な意味を持つ表現があります。

「足を引っ張る」

慣用句的な意味 — 「人の邪魔をする」

文字通りの意味 — 「人の下肢を自分のほうへ引き寄せる」

本調査は、各表現を慣用句として、どれぐらいの頻度で見たり聞いたりするかについて判断してもらうものです。判断する時は、以下の3点に基づいて判断してください。

1) 慣用句として見たり聞いたりしているかどうか。

全ての表現について、慣用句としての意味が提示されていますので、その意味に基づいて判断してください。文字通りの意味はわかるものの、慣用句としての使い方を一度も見たり聞いたりしていない場合、「一度も見た/聞いたことがない」とします。

2) 見たり聞いたりするというのは日常生活で見たり聞いたりすることや、自分で使ったりすることを含みます。

3) 各表現の接触頻度を1～7の数値で表します。数値が高いほど頻度の高いことを意味します。「1」は「一度も見た/聞いたことがない」ことを表し、「7」は「よく見る/聞く」ことを表す。

項目は全部で43個ですが、慣用句の意味をよく読んだ上で、1つの項目にあまり時間をかけずに、直感で判断してください。

## 【透明度調査】

日本語には以下の1と2のような、文字通りの意味と慣用句的な意味を持つ表現があります。その中に、文字通りの意味と慣用句的な意味の間に、高い関連性が感じるものもあれば、あまり関連性が感じないものもあります。

### 1. 「食が細かい」

慣用句的な意味 — 「体質的にたくさん食べることができない様子。」

文字通りの意味 — 「食べることの幅が小さい。」

1の例において、文字通りの意味は慣用句全体としての意味に似ていると感じられます。「食べることの幅が小さい」は「たくさん食べることができない」と関連しているためです。この場合、「食が細かい」という慣用句表現の文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性は非常に高いと言えます。

### 2. 「泡を食う」

慣用句的な意味 — 「驚きあわてる。」

文字通りの意味 — 「液体が空気を包んでできた玉を食べる。」

2の例において、文字通りの意味は慣用句全体としての意味と関連性が感じにくく、両者の間に関連性はあまり見られないと考えられます。

以下では30個の日本語慣用句を提示し、それぞれの表現について、文字通りの意味と慣用句的な意味の間に関連性がどれくらいあると思われるかについて判断してもらいます。提示されている慣用句の文字通りの意味及び慣用句的な意味を読んだ上で、判断してください。

関連性を1～7の数値で表します。数値が高いほど関連性の高いことを意味します。「1」は「関連性が非常に低い」ことを表し、「7」は「関連性が非常に高い」ことを表します。

回答に正解はありませんが、上に書いてある説明文をよく読んで理解した上で、あなたの直感で判断してください。

### 【予測性調査】

この調査は、調査協力者のみなさんに、与えられた語句を使って自由に続きを書いていただくものです。あまり深く考えず、与えられた語句から最初に頭に浮かんだ自然な続きを記入するようにしてください。

例えば、「花が\_\_\_\_\_」が提示されたとします。もし、最初に思い浮かんだのは「花が咲く」でしたら、空欄に「咲く」と記入してください。

気になるものもあるかと思いますが、解答した後は前に戻らず次の項目に進んで下さい。一つの項目にあまり時間をかけずに、最初に頭に浮かんだ続きの表現を記入して進めて下さい。

答えに正解、不正解はありません。

## 【字義性調査】

以下では 42 個の日本語表現を提示しています。すべての表現は慣用的意味を有します。ただし、その中の一部の表現のみが文字通りの意味を有します。

例えば、以下の 1) のように、「油を売る」は「仕事を怠ける」という慣用的意味と、「他人に油を販売する」という文字通りの意味を有します。一方、2) の「鯖を読む」には「数をごまかす」という慣用的意味がありますが、明確な文字通りの意味がありません。

### 1) 「油を売る」

慣用的意味：仕事を怠ける。

文字通りの意味：他人に油を販売する。

### 2) 「鯖を読む」

慣用的意味：数をごまかす。

文字通りの意味：無。

本調査では、それぞれの表現について、提示されている慣用的意味以外の意味、つまり文字通りの意味があるか否かについて判断してもらいます。もし文字通りの意味があると思われる場合、その意味を空欄に書いてもらいます。文字通りの意味がない場合、空欄には「無い」と記入してください。

【付録Ⅷ 第6章—本実験に使用された項目】

項目番号	名詞	慣用句 動詞	コントロール	透明度 (事前 調査)	慣用句親密 度(事前調 査)	慣用句予 測性(事 前調査)	慣用句動詞 頻度(事前調 査)	コントロール 動詞頻度(事 前調査)	コントロール 親密度(事前 調査)	コントロール 予測性(事前 調査)
ITEM001	足を	運ぶ	挫く	5.60	6.57	0.07	49183	821	4.72	0.07
ITEM002	頭に	入れる	被る	5.45	6.46	0.00	321535	22640	5.52	0.00
ITEM003	顔を	立てる	撫でる	2.60	6.39	0.00	76385	6123	5.12	0.00
ITEM004	顔が	売れる	痩せる	4.05	6.50	0.00	33226	20690	4.76	0.00
ITEM005	肩を	落とす	回す	4.15	6.09	0.09	48003	29301	5.84	0.05
ITEM006	口に	出す	入れる	4.19	6.77	0.24	324518	321535	6.56	0.24
ITEM007	体を	壊す	洗う	5.86	6.65	0.04	19727	29515	6.36	0.10
ITEM008	言葉を	濁す	探す	4.85	6.16	0.08	1244	126422	4.64	0.12
ITEM009	口を	揃える	抑える	5.15	6.50	0.02	21639	50987	5.44	0.01
ITEM010	紙面を	賑わす	広げる	5.40	6.50	0.17	788	47335	5.08	0.04
ITEM011	群を	抜く	成す	5.15	6.70	0.54	35785	14306	4.96	0.42
ITEM012	芝居を	打つ	する	2.90	6.04	0.19	108542	6636525	6.36	0.19
ITEM013	声が	潰れる	高ぶる	5.95	6.20	0.00	5190	1585	5.56	0.00
ITEM014	手が	込む	つる	2.95	6.64	0.00	6501	23016	4.88	0.00
ITEM015	時間を	食う	経る	2.95	6.90	0.00	25973	60677	4.48	0.00

ITEM016	手を	貸す	拭く	5.04	6.55	0.02	26775	7840	6.52	0.01
ITEM017	神経が	高ぶる	痛む	6.61	6.35	0.07	1585	14310	5.28	0.11
ITEM018	名を	連ねる	冠する	6.38	6.30	0.00	3567	2309	3.36	0.00
ITEM019	席を	外す	譲る	4.67	6.65	0.24	37817	13642	6.60	0.14
ITEM020	猫を	被る	拾う	2.13	6.13	0.00	22640	16206	5.24	0.00
ITEM021	血が	騒ぐ	止まる	3.39	6.35	0.15	8950	84973	5.68	0.12
ITEM022	話が	弾む	尽きる	5.10	6.75	0.20	3975	12452	6.16	0.06
ITEM023	名が	売れる	変わる	4.62	6.10	0.08	33226	302051	4.88	0.04
ITEM024	人目を	盗む	避ける	5.27	6.55	0.07	11112	80640	6.56	0.14
ITEM025	涙を	誘う	滲む	4.90	6.60	0.00	23911	3447	3.24	0.00
ITEM026	火を	通す	放つ	5.05	6.43	0.00	41092	22663	5.48	0.00
ITEM027	耳を	貸す	かく	4.35	6.50	0.04	26775	26762	5.44	0.04
ITEM028	本音を	吐く	聞く	6.35	6.30	0.13	16528	526547	6.20	0.21
ITEM029	胸に	刻む	飾る	3.00	6.05	0.21	16159	20797	3.48	0.04
ITEM030	耳に	障る	響く	4.65	6.13	0.01	1430	17048	5.28	0.02
ITEM031	目が	肥える	腫れる	3.10	6.04	0.00	1235	5207	6.00	0.01
ITEM032	目を	配る	洗う	3.90	6.44	0.02	20526	29515	5.36	0.02



項目番号	コントロール		慣用句動詞		コントロール		透明度		親密度	
	慣用句	動詞	動詞	動詞	慣用句動詞	動詞	慣用句動詞	動詞	慣用句動詞	動詞
ITEM001	足を運ぶ	足を運ぶ	控く	控く	623.78	1787.00	4.67	6.56	5.63	6.69
ITEM002	頭にを入れる	頭にを入れる	被る	被る	705.33	904.22	5.94	6.61	6.00	6.06
ITEM003	顔を立てる	顔を立てる	撫でる	撫でる	760.44	824.11	2.39	5.22	4.06	4.56
ITEM004	顔が売れる	顔が売れる	痩せる	痩せる	755.00	758.22	3.33	5.56	4.94	4.47
ITEM005	肩を落とす	肩を落とす	回す	回す	654.78	680.89	5.50	6.00	4.06	3.69
ITEM006	口に出す	口に出す	入れる	入れる	744.67	705.33	5.44	6.61	5.94	6.76
ITEM007	体を壊す	体を壊す	洗う	洗う	672.56	781.67	5.11	6.78	6.88	6.63
ITEM008	言葉を濁す	言葉を濁す	探す	探す	826.22	780.89	5.17	6.22	5.41	4.71
ITEM009	口を揃える	口を揃える	抑える	抑える	985.00	858.00	4.61	6.11	5.38	5.00
ITEM010	紙面を賑わす	紙面を賑わす	広げる	広げる	1339.12	730.78	5.39	6.00	5.12	1.59
ITEM011	群を抜く	群を抜く	成す	成す	707.00	835.67	4.11	5.61	5.38	4.13
ITEM012	芝居を打つ	芝居を打つ	する	する	752.78	831.56	3.17	5.00	4.65	2.35
ITEM013	声が潰れる	声が潰れる	高ぶる	高ぶる	1077.38	824.63	4.83	5.44	5.81	3.56
ITEM014	手が込む	手が込む	つる	つる	1379.83	931.89	3.11	6.11	3.88	3.18
ITEM015	時間を食う	時間を食う	経る	経る	749.00	961.56	3.33	6.33	4.38	3.50

ITEM016	手を	貸す	拭く	non	788.67	991.11	4.83	6.50	5.94	6.47
ITEM017	神経が	高ぶる	痛む	non	824.63	673.50	6.61	4.94	6.56	3.19
ITEM018	名を	連ねる	冠する	non	876.56	970.80	5.89	5.56	5.24	2.41
ITEM019	席を	外す	譲る	non	937.33	718.78	4.11	6.61	6.25	7.00
ITEM020	猫を	被る	拾う	non	904.22	692.33	2.56	6.33	2.53	2.94
ITEM021	血が	騒ぐ	止まる	non	744.56	707.22	4.17	5.89	4.50	3.00
ITEM022	話が	弾む	尽きる	non	744.63	751.00	4.61	6.83	4.94	4.06
ITEM023	名が	売れる	変わる	non	755.00	661.89	4.61	5.61	5.50	5.00
ITEM024	人目を	盗む	避ける	non	731.11	682.67	3.89	5.67	4.94	3.41
ITEM025	涙を	誘う	滲む	non	662.33	1377.88	3.72	5.94	5.19	3.19
ITEM026	火を	通す	放つ	non	811.22	738.89	4.44	6.78	5.12	3.94
ITEM027	耳を	貸す	かく	non	788.67	837.67	3.67	5.72	4.50	5.63
ITEM028	本音を	吐く	聞く	non	710.89	758.33	6.39	5.78	6.41	6.41
ITEM029	胸に	刻む	飾る	non	747.50	881.11	3.39	6.22	5.50	6.19
ITEM030	耳に	障る	響く	non	1203.11	742.67	6.11	5.33	4.06	4.71
ITEM031	目が	肥える	腫れる	non	873.50	1001.00	3.00	5.28	2.75	3.56
ITEM032	目を	配る	洗う	non	687.44	781.67	4.11	6.11	5.18	4.24

【付録IX 第6章一本実験に使用された説明文と実験中の画面表示】

自然さ判断タスクの説明文：

この実験は、日本語の表現を見て、その表現の自然さを判断していただくものです。  
手順は以下のとおりです。

- (1) スペースキーを押すと、画面の中心に \*\*\*\* が表示されます。
- (2) スペースキーをもう一回押すと、\*\*\*\* の位置に日本語の表現がすぐに現れます。
- (3) その表現が日本語の表現として自然かどうかを判断してください。

自然だと思う場合は○を選択し、不自然だと思う場合は×を選択して答えてください。判断は、できるだけ速く且つ正確に行ってください。

上記の(1)～(3)の動作が繰り返されます。

途中で休みたくなった場合は、一つの表現の判断を終えた後にお願いいたします。

表現が提示されている間は、絶対に休まないで下さい。

\*\*\* 表現が提示されてから判断するまでの時間を測定しています。 \*\*\*  
\*\*\* そのため、できるだけ素早く正しく答えられるように集中してください。 \*\*\*

(例1) 名前を消す

以上の例では、○を選択する人が多いでしょう。

(例2) 雨を倒す

一方、(例2)は日本語として不自然な表現です。×を選択する人が多いでしょう。

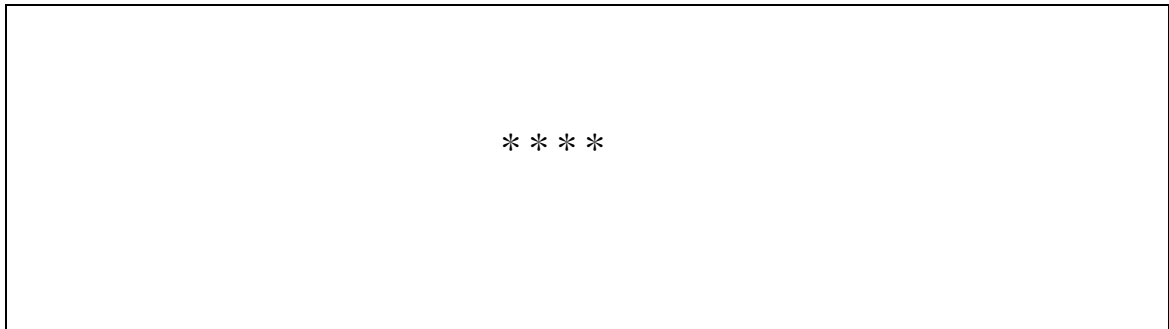
何か質問がありましたら、係りの者をお呼びください。

調査の前に練習問題を行います。

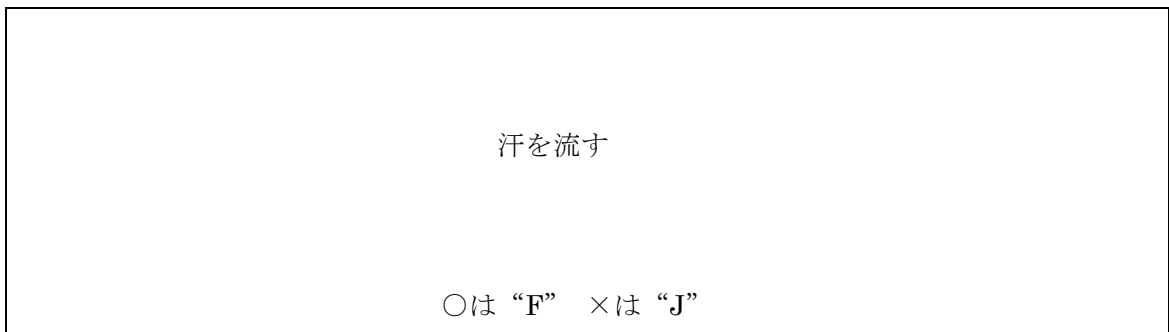
始める用意が出来ましたら、スペースキーを押してください。

自然さ判断タスクの画面表示：

スペースキーを押すと、以下の画面が出る。



もう一回スペースキーを押すと、以下の画面が出る。



知識確認調査の説明文：

本調査は、日本語の慣用句を知っているかどうかについて判断してもらうものです。

手順は以下のとおりです。

- (1) まず、画面に日本語の慣用句が表示されます。
- (2) スペースキーを押し、この慣用句の意味を知っているかどうかについて○×で判断してください。

馴染みとは関係なく、つまり、表現を見たり聞いたりした経験とは関係なく、意味を思い出せない場合は×を選択してください。

何か質問がありましたら、係りの者をお呼びください。  
調査の前に練習問題を行います。

始める用意が出来ましたら、スペースキーを押してください。

知識確認調査の画面表示：

スペースキーを押すと、以下の画面が出る。

油を売る

もう一回スペースキーを押すと、以下の画面が出る。

この慣用句の意味を知っていますか。

○は“F” ×は“J”

親密度調査の説明文：

本調査は、日本語表現をどれぐらいの頻度で見たり聞いたりするかについて判断してもらうものです。

見たり聞いたりするというのは日常生活で見たり聞いたりすることや、自分で使ったりすることを含みます。

各表現の頻度を 7 段階で評価していただきます。数値が高いほど頻度の高いことを意味します。

「1」は「一度も見た/聞いたことがない」ことを表し、「7」は「良く見る/聞く」ことを表します。

手順は以下のとおりです。

(1) 画面に日本語表現が現れます。

(2) スペースキーを押すと、1～7の数値が現れます。

(3) 前画面で表示されていた日本語表現を見た、または聞いたことがあるかどうかについて判断してください。

上記の(1)～(3)の動作が繰り返されます。

一つの項目にあまり時間をかけずに、直感でお答えください。

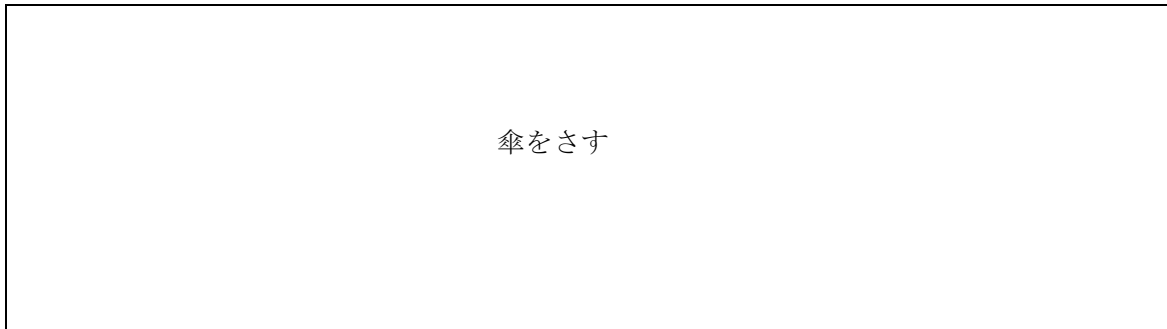
何か質問がありましたら、係りの者をお呼びください。

調査の前に練習問題を行います。

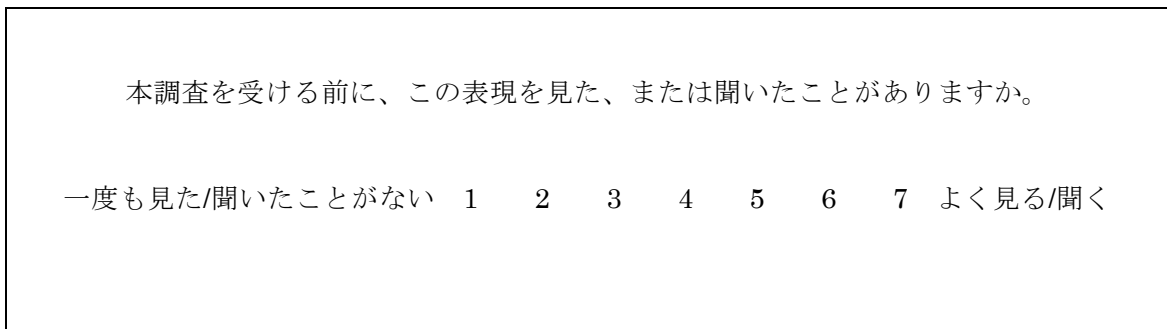
始める用意が出来ましたら、スペースキーを押してください。

親密度調査の画面表示：

スペースキーを押すと、以下の画面が出る。



もう一回スペースキーを押すと、以下の画面が出る。





透明度調査の説明文：

日本語には、文字通りの意味と慣用句的な意味を持つ表現があります。  
そのような表現には、文字通りの意味と慣用句的な意味の間に、高い関連性を感じるものもあれば、あまり関連性を感じないものもあります。

(例 1) 「力を入れる」

A 文字通りの意味: 「力を枠の中へ移す。」

B 慣用句的な意味: 「他のことはひとまずおいても、そのことを特に努力して行なう。」

例 1 において、文字通りの A の意味は慣用句の B の意味に似ていると感じられるため、この場合、「力を入れる」という慣用句表現について、文字通りの意味と慣用句的な意味の関連性を非常に高いと判断する人が多いでしょう。

(例 2) 「腹が立つ」

A 文字通りの意味: 「胸から腰までの間の前部が縦になる。」

B 慣用句的な意味: 「許しがたいことに接し、怒りがこみ上げてくる。」

例 2 において、文字通りの A の意味は慣用句の B の意味と関連性が感じにくく、両者の間の関連性を低いと判断する人が多いでしょう。

この調査では、(I)慣用句、(II)慣用句の文字通りの意味、(III)慣用句的な意味を提示します。  
(II)と(III)をよく読んだ上で、その間の関連性について判断してください。

関連性は1～7の数値で表します。数値が高いほど関連性が高いことを意味します。

「1」は「関連性が非常に低い」を、「7」は「関連性が非常に高い」を表します。

手順は以下のとおりです。

(1) まず、画面に日本語慣用句、その慣用句の文字通りの意味、及び慣用句としての意味が表示されます。

(2) スペースキーを押すと、1～7の数値が現れます。

(3) 前画面で提示されていた慣用句の文字通りの意味及び慣用句としての意味に基づいて、関連性を判断してください。

上記の(1)～(3)の動作が繰り返されます。

何か質問がありましたら、係りの者をお呼びください。

調査の前に練習問題を行います。

始める用意が出来ましたら、スペースキーを押してください。

透明度調査の画面表示：

スペースキーを押すと、以下の画面が出る。

油を売る

文字通りの意味：

水に溶けない可燃性の物質を代金と引き換えに相手に渡す。

慣用句的な意味：

仕事を途中でサボって、無駄話などをして時間を潰すこと。

もう一回スペースキーを押すと、以下の画面が出る。

この表現の文字通りの意味と慣用句的な意味の間の関連性はどれくらいありますか。

関連性が非常に低い 1 2 3 4 5 6 7 関連性が非常に高い

【各章と既発表論文、学会発表との関係】

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究の概観と本論文の位置付け

新規執筆

第3章 L1 慣用句と L2 慣用句の類似度判断基準について

－ 驚きを表す日中慣用句の意味的対応関係を中心に －

陳雯 (2013) 「『驚き』を表す日中慣用句の意味分析」《第五届汉日对比语言学研讨会资料集》，pp.56-57.

陳雯 (2014) 「日中慣用句の対照研究 —感情を表す慣用句の意味分析を中心に—」

筑波大学 人文社会科学研究所 文芸・言語専攻 中間評価論文の一部

第4章 慣用句の透明度判断における親密度の影響

－ 母語話者と学習者の比較から －

陳雯 (2016) 「慣用句の透明度と親密度の関係について —日本語母語話者と学習者判断の比較から—」『筑波応用言語学研究』23, pp.15-30.

[https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=40077&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=83](https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=40077&item_no=1&page_id=13&block_id=83)

第5章 第二言語慣用句の産出に影響する要因について

－ 類似度・親密度・透明度を中心に －

陳雯 (2015) 「第二言語使用における慣用句の回避現象 —第一言語慣用句との類似度に注目して—」『言語学論叢』オンライン版8, pp.84-100.

[https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=39978&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=83](https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39978&item_no=1&page_id=13&block_id=83)

陳雯 (2016) 「第二言語産出における慣用句の回避現象 —認知度と透明度に着目して—」『2016年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.164-169.

第6章 L1・L2 慣用句の理解に影響する要因について — 親密度・透明度を中心に —

陳雯 「日本語慣用句の記述的規範 —300個の動詞慣用句の親密度・透明度・予測性—」

『言語学論叢』オンライン版11 (採用決定2018年11月14日) .

第7章 本論文のまとめと今後の課題

新規執筆